

南山大学大学院
博士（宗教思想）論文

エイレナイオスの聖霊神学の解明と今日の牧会への応用

平成 29 年 1 月 19 日

人間文化研究科宗教思想専攻

D2013HR001

大庭 貴宣

目次

序論	vi
1. 本論文の目的・課題	vi
2. 関連する先行研究	vi
3. エイレナイオスの生涯と著作・研究資料	viii
第1部 エイレナイオスにおける神と人間の理解	1
第1章 エイレナイオスにおける「神の両手」の置き換えの思想	
—— 「御言葉と知恵」から「御子と聖霊」へ ——	1
1. 「神の両手」のモチーフの源流	
—— アンティオケイアのアナキメニオスの影響を中心に ——	1
2. 『アウトリュコス』2章18節から19節と『異端反駁』3巻21章10節との比較	3
3. エイレナイオスにおける「御言葉と知恵」の「御子と聖霊」への置き換えの目的	6
4. 「御子と聖霊」の置き換えと『ソロモンの知恵』との関係性	8
5. エイレナイオスにおける箴言の「知恵」の「聖霊」への置き換え	9
6. 「御言葉と知恵」の「御子と聖霊」への置き換えの目的	12
6.1. グノーシス主義における「肉の軽視」への反論	12
6.2. 『異端反駁』第4巻7章4節におけるアルメニア語での「両手」の表記	14
6.3. グノーシス主義の人間理解への反論——エイレナイオスにおける「かたち」と「類似性」を有した「完全な人間」理解——	18
6.4. 『異端反駁』第4巻20章1節から4節における「神の優位性」の保持	20
7. まとめ	22
第2章 エイレナイオスにおける人間の成長と神化	23
1. エイレナイオスにおける神観——善いものを与える神——	24
1.1. エイレナイオスはなぜ人間の成長の思想を持ったのか	24
1.2. 「強制しない神」と「自立性」を持つものとして造られた人間	25
1.3. 神の「好意」(benignitas) ——人間に善を与える神——	27
1.4. 『異端反駁』第4巻37章1節から4節における神の「助言」	28
1.5. 『異端反駁』第4巻37章6節から7節における「善」の訓練と第4巻39章1節にあ	

る「二重の知覚」——神から「助言」を与えられた人間の応答——	32
1.6. 『異端反駁』第4巻38章1節から2節における「父の霊」の享受	37
1.7. 『異端反駁』第4巻38章3節から『異端反駁』第4巻39章3節における「神の両手」と人間の成長——人間の成長を不断に見守る神——	40
1.8. まとめ	45
2. 人間の成長としての「神化」	46
2.1. 「神の子ら」として造られた人間——本性における「神の子ら」について——	49
2.2. 「神化」の過程における人間の墮罪	50
2.3. 御子の受肉と「神化」	55
2.4. 教会の時代における聖霊の働きと「神化」	58
2.5. 神の「養子」とされる恵みと「神化」	60
2.6. 御国における「神化」の完成——神との「類似性」の完全な回復——	63
2.7. まとめ	65
3. 「御子」と「聖霊」による「肉」と「魂」への混合と一致——不滅性と不死性の回復——	65
3.1. 御言葉の受肉による混合と一致と「不滅性」の回復の関係性	67
3.2. 聖霊が降ることによる混合と一致と「不滅性」の回復の関係性	69
3.3. 『異端反駁』第3巻17章1節における聖霊が降る「形成物」とは何を指しているか	71
3.4. 『異端反駁』第3巻17章1節における「形成物」と第3巻17章2節における「霊」の働きの関係性	81
3.5. まとめ	82
第2部 エイレナイオスの聖霊神学と牧会への応用	83
第3章 エイレナイオスにおける聖霊の人間への臨在	83
1. 創造における聖霊の臨在	84
2. 旧約の時代における聖霊の臨在	86
3. 御子の受肉における聖霊の臨在——「御子の受肉」の意味と「聖霊の人間への臨在」の関連性——	88
4. 御子の受肉における聖霊の臨在——御子の洗礼における聖霊の臨在——	90
5. 御子の受肉における聖霊の臨在——『異端反駁』第4巻33章15節に見る「転換の契機」としての「終わりの時」——	92
6. 教会の時代における聖霊の臨在	96

7. 教会の時代における「聖霊の人間への臨在」は「信者のみ」であるか	98
8. まとめ	101
第4章 聖霊の内在による信者の刷新	104
1. 人間の内側から「助言」を与える聖霊の内在	104
1.1. 『使徒たちの使信の説明』第9章における聖霊の存在における7つの方法	104
1.2.70人訳聖書と『異端反駁』におけるイザヤ書11章2節と3節のラテン語訳	105
1.3. 創造における「助言」の聖霊	106
1.4. 旧約の時代における「助言」の聖霊	107
1.5. 御子の受肉における「助言」の聖霊	109
1.6. 教会の時代における「助言」の聖霊	112
1.7. まとめ	114
2. 聖霊の内在は「父の意志」を行わせ、「一致の確立」と「結実の確立」を与えること	115
2.1. 神の形成物と聖霊の一致により、人間が行う父の意志とは何か	116
2.2. 『異端反駁』第3巻に見る「神への生まれ変わり」と『異端反駁』第5巻と『証明』に見る「子とされること」、「神への従順」の関連性	119
2.3. 『異端反駁』第3巻17章2節における聖霊の内在が与える「一致」	121
2.4. まとめ	126
第5章 エイレナイオス神学における救済史的観点の人間の成長と自立への応用	127
1. エイレナイオス神学の司牧的側面	128
1.1. 司牧者に与えられた使徒的権限	130
1.2. 一つの聖霊によって記された聖書	131
2. 洗礼志願者への司牧	135
3. 信者への司牧	138
4. 現代の牧会における問題解決のためのエイレナイオス神学の応用	144
4.1. 思い悩む者に対して	144
4.1.1. 神の寛大さにおける弱さの受容	145
4.1.2. 神の牧会的配慮としての御子の顕現	148
4.2. 罪を犯した者に対して	150
4.2.1. アダムとエバが墮罪をした理由	150
4.2.2. 墮罪後のアダムとエバの反応	152
4.2.3. 人間の回復のための「罰の期間」	154

4.2.4. 人間を教育する神——人間に「罰の期間」を与えた理由——	155
4.2.5. 教育から回復へ——御子の受肉——	159
4.2.6 実際に罪を犯した者への牧会的適応	162
5. まとめ	163
結論	165
参考文献	172

序論

1. 本論文の目的・課題

本論文の目的は、エイレナイオスの聖霊理解を浮き彫りにし、今日の牧会に応用することにある。そこで、第 1 部エイレナイオスにおける神と人間の理解において、エイレナイオスの聖霊理解において代表的な考えである「神の両手」の理解について言及し、さらにエイレナイオスの神観、また人間の神化の過程における聖霊の理解について順に触れていきたい。

続く第 2 部では、エイレナイオスの聖霊神学と牧会への応用を見たい。第 2 部においては、検討すべき課題が二つある。第一は、「エイレナイオスは信者にのみ聖霊が臨在する」と考えたか、あるいは全人類にか」ということである。これを第 1 章で論じる。そして、その考察を踏まえて、第 2 章では「聖霊を受けた者はどのように生きるか」ということを論じたい。そして第二は「エイレナイオスの神学を実際の牧会に適応させること」である。エイレナイオスの「司牧者」としての一面を捉え、エイレナイオス神学を現代の牧会に適応させることを目的としている。

2. 関連する先行研究

先行研究として、アンソニー・ブリッグマン (Anthony Briggman) とジョン・ベアー (John Behr) の両者の立場について概観しておきたい。

「聖霊は信者にのみ臨在する」との立場を取る学者としてアンソニー・ブリッグマン (Anthony Briggman) を挙げることができる。それに対して「聖霊は全人類に臨在する」との立場を取る学者としてジョン・ベアー (John Behr) を挙げることができる。ブリッグマンは彼の著書である *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, Oxford University Press, 2012. の中でベアーの著書である *Asceticism and Anthropology in Irenaeus and Clement*, Oxford University Press, 2000. での論説を取り上げ、彼の主張への反論を試みている。その反論において、特にブリッグマンが批判する中心的な主題は、ベアーが「エイレナイオスは『現世』と『永遠』の生命の両方が、聖霊の臨在によっている」と述べている点にある。なぜなら、この主張が意味することは「人間が神との関係があるかないかに関わらず、すべての人間のうちに聖霊が臨在していること」を主張することになるからである。このベアーの見解に対して、ブリッグマンの主張は「エイレナイオ

スは、聖霊は『信者のみ』、すなわち、『神との正しい関係』を持っている者だけに聖霊の臨在がある」というものである。

ブリッグマンは、ベアーが「聖霊は全人類に臨在する」とする立場から、「聖霊が人間に断続的に養う臨在」として全人類に及ぶことを支持する箇所として(1). 『異端反駁』第4巻33章1節、(2). 第4巻33章7節、(3). 第4巻33章15節、(4). 第5巻1章3節、(5). 第5巻28章4節の5つの箇所を提示しているとし、それらの箇所の検討をしている¹。ブリッグマンはこれらの箇所を吟味した結果、結論として次のように述べる。まず『異端反駁』第5巻1章3節、第5巻28章4節は、聖霊の臨在について全く言及されていないとしており、また『異端反駁』第4巻33章1節と『異端反駁』第4巻33章15節は「信者のみ」の間に臨在する聖霊の臨在と働きについてのみ言及がされていると指摘している。『異端反駁』第4巻33章7節は、ギリシア語翻訳を採用するならば、すべての人間への聖霊の臨在に言及しているとも解釈できるかもしれないが、ラテン語翻訳に従うならば、教会に限定された聖霊の臨在と理解するべきであるとしている²。従って、ベアーが読んでいるように、人類すべてのうちにある聖霊の臨在ということをサポートすることはできず、むしろ、神との関係のうちにあると読むべきであるというのがブリッグマンの主張である。

けれども、このブリッグマンの主張は注意して読まねばならない。というのもブリッグマンが吟味した5つの箇所は、ベアーがただ脚注において言及しているに過ぎず³、ベアーは、ブリッグマンが行ったようなテキスト批判を目的として記したのではなかった。また『異端反駁』第4巻33章7節のギリシア語翻訳は Johannes Damascenus の *Sacra Parallela* からの引用であると思われるが (Rousseau, A. et al, *Irénée de Lyon Contre les hérésies Livre IV, SC, 818*.参照)、ブリッグマンはこの出典を明らかにはしていない。このような点からしても、ブリッグマンのベアーへの反論には、不十分さが残っている。筆者としては、「聖霊は信者にのみ臨在する」とするブリッグマンの立場も、また「聖霊は全人類に臨在する」とするベアーの立場も支持していない。加えて言及すれば、本論文において、聖霊の臨在は「全人類」か「信者のみ」かという点を取り扱うが、筆者としては、エイレナイオスが『異端反駁』において主張しているのは、「教会に聖霊が与えられた」ということであると考えられる。そのため、本論文において、この点を扱うのは、あくまでも先行研究が取り扱っているからである。これらのことを踏まえた上で、筆者の立場を明確にすることを目的としている。

¹ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, Oxford University Press, 2012.153.

² Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 157.

³ John Behr, *Asceticism and Anthropology in Irenaeus and Clement*, Oxford University Press, 2000, 98. 脚注44を参照。

3. エイレナイオスの生涯と著作・研究資料

エイレナイオスの生涯については、不明な点も多い⁴。けれども、エイレナイオス自身が180年代にギリシア語で著した『偽りのグノーシスの暴露と反駁』⁵〔通常『異端反駁』(*Adversus Haereses*)と呼ばれている。〕の第3巻3章4節でスミュルナの司教であるポリュカルポスについて触れ、「そしてまたアジアにおいて、使徒たちによってスミュルナの教会の司教に任命されたこの人(ポリュカルポス)を、私たちは幼い頃に見たことがある⁶。」と記している⁷。この記述を受けて、大貫隆は「従って、スミュルナが彼の生地であったか否かは別としても、その地で幼少期を過ごしたことは確かと思われる。その生年について

⁴ エイレナイオスの生涯と著作については、John Behr, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity*, Oxford University Press, 2013. 66-71.を参照。

⁵ エイレナイオスは『異端反駁』を一度に書き上げたのではない。各々の巻が著された年代を特定することは困難である。Dominic J. Ungerによれば第1巻と第2巻は180年以前であり、『異端反駁』全5巻がすべて記されたのは180年頃であるとされている。St. Irenaeus of Lyons, *Against the Heresies Book I*, Dominic J. Unger and John J. Dillon (eds.), ACW., 55, New York, 1992, 4. 大貫隆はグノーシス主義について知ることができる書物に言及し、『異端反駁』の内容を次のように紹介している。「われわれが読むことができる最も古い、しかも分量的にも最大の著作は、2世紀の後半にガリアのルグドゥヌム(現フランスのリヨン)の司教であったエイレナイオスが著したもので、正式には『偽りのグノーシス(知識)の暴露と反駁』、通称では『異端反駁』と呼ばれる著作である。これは全体で5巻から成り、第3巻以降では著者エイレナイオスが積極的に自分自身の神学を披瀝する。その核心は、さまざまなグノーシス主義教派が旧約聖書の神を無知蒙昧な造物神に貶める一方、その造物神の支配から人間を救い出す救済神をそれとは別に立てたのに対して、創造神と救済神が同一の神であるべきことを、壮大な『歴史の神学』を構想して論駁することにある。神の創造の業は太古の天地創造の業一つで終わったのではなく、その後の旧約聖書が語る歴史、新約聖書が語る神の独り子の派遣(受肉)と来るべき世界の終末を経て、新しい天と地が成る時まで、万物の歴史、すなわち普遍史の全過程を貫いて続くというのである。このような自説を開陳するに先立って、エイレナイオスは彼が知り得た限りでのグノーシス主義のさまざまな教派の所説、特に救済神話を前記の著作の第1巻にまとめて収録し、続く第2巻でその個々の主題を論駁、あるいは矛盾を暴露していく。その第1巻には、ヴァレンティノス派(その中でも特にプトレマイオス派)やバシリデーヌ派を筆頭に、大小さまざまな教派の神話が、原典からの抜粋とエイレナイオス自身の論評がないまぜになる形で報告されているのである。」大貫隆『グノーシスの神話』(講談社学術文庫、2014年)、34-35頁。

⁶ AH3.3.4: sed etiam ab apostolic in Asia in ea quae est Smyrnis Ecclesia constitutus episcopus, quem et nos uidimus in prima nostra aetate. ラテン語テキストは A. Rousseau/L. Doutreleau, *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre I* (SChr 263 et 264), Paris, 1979, A. Rousseau/L. Doutreleau, *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre II* (SChr 293 et 294), Paris, 1982, A. Rousseau/L. Doutreleau, *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre III* (SChr 210 et 211), Paris, 1974, A. Rousseau/B. Hemmerdinger/L. Doutreleau/C. Mercier, *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre IV* (SChr 100/1 et 100/2), Paris, 1965, A. Rousseau/L. Doutreleau/C. Mercier, *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre V* (SChr 152 et 153), Paris, 1969. を用いている。

⁷ またエイレナイオス自身がポリュカルポスとの交わりについて「すなわち、〔神に〕祝福されたポリュカルポスが座って説教した場所や、彼がどのように出入りしたか、彼の暮らしぶり、彼の容貌、彼が人びとにした説教、ヨハネや、主を見たその他の人たちとの交わりを彼がどのように伝えたか、どのように彼がその人たちの言葉を想起したか、彼がその人たちから聞いた主に関することはどんなことか、主の奇蹟について、〔主の〕教えについて、そしてポリュカルポスがどのようにして生命の御言の証人〔ヨハネの第1の手紙一1-2、ルカー二参照〕から〔それらのことを〕受け継ぎ、〔聖なる〕文書に違うことなく伝えたか、等々です。わたしはそのときわたしに与えられた神の憐れみのおかげで、それらのことを熱心に聞き入り、紙の上ではなく心の中に書きとめました。そして、神の恩寵のおかげで、わたしは絶えずそれらを忠実に反芻しております。」秦剛平訳『エウセビオス「教会史」(上)』(講談社学術文庫、2010年)、337-338頁。

の諸説あるが、ポリュカルポスの殉教年（通常 155-156 年とされる）やその他の関連から推して、140 年から遡ることそう遠くない頃と考えるのが妥当ではないかと思われる⁸。」と記している。

そして、リヨンの司教ポテイノス (Poteinos 177/178 年没) の殉教の後に、後継者として司教となり、皇帝セウエルス (Lucius Septimius Severus 在位 193 年—211 年) の迫害時 (202 年) に殉教したと伝えられている⁹。

また彼の著作は、現存するものとしては、『異端反駁』(全 5 巻) と『使徒たちの使信の説明』¹⁰ (以下、本論文では『証明』と略記する) があり、散逸してしまった著作はエウセビオスの証言から知ることができる。

『知識について¹¹』と題された簡潔ではあるがきわめて説得力のあるギリシア人論駁

の文書や、兄弟のマルキアヌスに献呈した『使徒の教えの証左』と題するもの、そして、さまざまな説教の小冊子などである¹²。

そのため、本論文では『異端反駁』と『証明』の二作品が研究資料となる。この両著作を読み解きながらエイレナイオスの抱いていた思想を明らかにしていきたい。また本論文

⁸ 大貫隆『ロゴスとソフィア ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』(教文館、2001 年)、157 頁。

⁹ 鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』(南山大学教材版、2004 年)、11-12 頁。

¹⁰ 鳥巢義文は『使徒的宣教の証明』について次のようにまとめている。「エイレナイオスの著作としては、よく知られた『偽りのグノーシスの暴露と反駁』(通称『異端反駁』(Adversus haereses) 全 5 巻があるが、本論文で扱う『使徒的宣教の証明』(Epideixis tou apostolikou kerygmatos) に関しては、20 世紀初頭に至までの長い間、カイサレイアのエウセビオスによって 3 世紀末から 4 世紀初頭にかけて著された『教会史』(Historia ecclesiastica) 第 5 巻 26 章に言及された著作名称、すなわち、『使徒的宣教の証明』(Eis epideixin tou apostolikou kerygmatos) のみが知られていた。本書は 1904 年に K・テルーメケルチアン他により 13 世紀のアルメニア語訳写本中に『異端反駁』の第 4 巻、第 5 巻と一緒に発見された。それは 6 世紀後半頃に成立したと推定されるギリシア語原典からのアルメニア語訳であるが、1907 年に A・ハルナックによって章分けされ、発見者のドイツ語訳と共に出版されている。その折に、後書と注を著わしたハルナックは、エウセビオスが残した著作表題に基づきながらも、そのままの形でそれが表題であったとは認め難いとし、本書の内容に鑑みて、『聖書(預言)による使徒的宣教の真理性(確実性)の証明』(Erweis der Wahrheit [Zuverlässigkeit] der apostolischen Verkündigung aus den heiligen Schriften [der Prophetie]) という補足的表題を提案している。) 鳥巢義文「神の救済史的啓示 —エイレナイオス『使徒的宣教の証明』を中心にして—」『南山神学』第 23 号(1999 年)、81-82 頁。また、Johannes Quasten, *Patrology*. vol. I, Utrecht: Spectrum; Westminster, MD: Newman Press, 1950, 292-293 を参照。

¹¹ 大貫隆はこの著作について次のような意見を述べている。「一方、後にやはりエウセビオス(『教会史』V・26) がエイレナイオスの著作としてその名を伝えているものの中に、ギリシア人宛てに書かれたと言う『知識について』という論文が見出される。この論文は現存しないので、その内容を知ることはできないが、実際にそのような論文が書かれたとすれば、ギリシア哲学の世界に向かってキリスト教の真理性を弁証してゆくという、ユスティノスやタティアノスらの護教論者が担った課題は、エイレナイオスにおいてもなお継続していたということを意味するであろう。」大貫隆、『ロゴスとソフィア』、158 頁。

¹² 秦剛平訳『エウセビオス「教会史」(上)』、347-348 頁。

においては全5巻から構成される『異端反駁』のうち、第3巻、第4巻、第5巻に重点をおいて研究を進めていきたい¹³。その理由としては『異端反駁』の第1巻と第2巻は、特にエイレナイオスが反駁の対象としていた「グノーシス主義のヴァレンティノス派¹⁴」の誤謬を記すことが目的であったため、エイレナイオスの神学的な内容は第3巻以降に多く見出すことができるからである。そのためエイレナイオスの聖霊理解を考察するために、『異端反駁』第3巻、第4巻、第5巻から多く引用を取り上げることにする。またエイレナイオスの著したもので現存する『証明』からも引用していきたい。

¹³ 『異端反駁』の各巻の構成については、John Behr, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity*, 73-120. を参照。

¹⁴ 荒井献・大貫隆・小林稔訳『ナグ・ハマディ文書 I 救済神話』を参照。

第1部 エイレナイオスにおける神と人間の理解

第1章 エイレナイオスにおける「神の両手」の置き換えの思想——「御言葉と知恵」から「御子と聖霊」へ——

エイレナイオスの聖霊神学を論ずるにあたり、欠かすことの出来ない重要な神学的トピックに「神の両手」による働きがある。エイレナイオスの「神の両手」の理解における固有性をあらかじめ述べるならば、神の両手である「御言葉と知恵」を、「御子と聖霊」として同一視し、それらを置き換えたことにある。本章において、エイレナイオスが「神の両手」という神学的モチーフをどこから得たのかを明らかにし、神の両手としての「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と置き換えたことの目的を考察したい。

1. 「神の両手」のモチーフの源流—— アンティオケイアのテオフィロス¹の影響を中心に——

エイレナイオスにおける「御言葉と知恵」の「御子と聖霊」への置き換えの1つの事例として『異端反駁』第4巻20章1節をあげたい。そこには、次のように記されている。

神は地の泥を取り、人を形造り、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。それ故、私たちが造ったのも、私たちが形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもとの予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の両手を持っていないかのように、これら（天使たち）を必要としたのでもない。神の側には常に御言葉と知恵、御子と聖霊（がおり）、（御言葉と知恵）によって、また、（御言葉と知恵）のうちに、また自発性を持って万物を造り、（御言葉と知恵）に向かって語り、「私たちがかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と言ったのであり、ご自身で創造されたものの存在と、造られたものと、世にある美しいものの型²をご自身から取ったのである³。（下線筆者。以下の引用においても同様）

¹ テオフィロスは「アンティオケイアの司教。エウセビオスによれば6代目の司教（『教会史』4・20）。残された著作の文面から次のことが知られる。ティグリス・ユーフラテス川に近い地で生まれ、両親は異教徒で、ヘレニズムの教育を受け、恐らく結婚したものと思われ、ユダヤ人キリスト者と出会ったことで、旧約聖書に接することになり、聖書を長い間研究した後、キリスト教に改宗したものと思われる。エウセビオスの『年代記』によると、169年に司教に就任した。」小高毅編『原典 古代キリスト教思想史-1 初期キリスト教思想家-』（教文館、1999年）、83頁を参照。

² 小林稔訳ではアルメニア語に従って「[整えられた]ものの型」と訳されている。『エイレナイオス「異

このように、エイレナイオスは神の両手としての「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と同一視し置き換えをする。では「神の両手」という表現自体は、エイレナイオス独特のものであるかと言えば、そうではない⁴。例えば、エイレナイオス以前の、「神の両手」という表現を用いている著作として知られている『クレメンスの手紙—コリントのキリスト者へ(1)』33章4節から5節には次のように記されている。

とりわけ、その聖なる、非の打ちどころなき御手で以て、創造物中最も傑出した、また最も偉大なるもの——人間を、御自分の似姿に形どって造られた。なぜなら、神はこのように言われる、「我々は、我々の肖像通りに人間を造ろう」と。そして神は人間を造られた。人間を男と女とに作られた(創世1・26-27)⁵。

確かに『クレメンスの手紙』は「聖なる、非の打ちどころなき御手」による人の創造を述べている。けれども、ここでは御手を「御言葉と知恵」とし、それをさらに「御子と聖霊」とする置き換えはされていない。それでは、エイレナイオスはどこから「御言葉と知恵」としての神の両手のモチーフを得たのであろうか。

エイレナイオスの「神の両手」のモチーフの源流について、ブリッグマン (Briggman) は、「御子と聖霊、あるいは御言葉と知恵としてエイレナイオスが識別した神の2つの手の教えは、ルーフス (Loofs) が、エイレナイオスによって発展した小アジアからの伝統に属するモチーフであると示唆して以来、しばしばエイレナイオスの神学の一部と取り扱われ

端反駁」第4巻』、70頁。

³ AH.4.20.1: “Et plasmavit Deus hominem, limum terrae accipiens, et insuffavit in faciem ejus flatum vitae. Non ergo angeli fecerunt nos neque plasmaverunt nos, neque enim angeli poterant imaginem facere Dei, neque alius quis praeter verum Deum, neque virtus Longe absistens a Patre universorum. Neque enim indigebat horum Deus ad faciendum quae ipse apud se praefinierat fieri, quasi ipse suas non haberet manus. Adest enim ei semper Verbum et Sapientia, Filius et Spiritus, per quos et in quibus Omnia libere et sponte fecit, ad quos et loquitur, dicens: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostrum, ipse a semetipso substantiam creaturarum et exemplum factorum et figuram in mundo ornamentorum accipiens.”

⁴ この点に関して、鳥巢義文は「旧約聖書に遡ってみれば、『神の手(ないし、両手)』という表現は珍しいものではない。それは大体において、創造の業や救いの業をとおして自己を力強く示す神の活動との関連で用いられている。例えば、『わが手はすべてこれらの物を造った』(イザヤ書66・2)とか、『あなたの手はわたしをかたどり、わたしを造った』(ヨブ記10・8)といった創造の業と関連したものがある。また、『強い手と伸ばした腕とをもって、これを救い出された者に感謝せよ』(詩編136・12)という救いの業に結びつくもの、そして『主の手が彼に臨んで』(列王記下3・15) 預言者は神の言葉を語り始めるといった具合に、その用例を指摘することができよう。ところが、ヘレニズム・ユダヤ教やラビ文学においては、『神の手』というあたかも神の肢体の部分について語るかのような表現は嫌われた。用例は自ずと減少し、『神の力』とか『掲げられた手』といった表現が見出されるようになる。新約聖書では、『神の手』は旧約聖書からの引用やその適用として、わずかの箇所で見られるだけである。」と説明している。鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、60-61頁。

⁵ 荒井献[編]『使徒教父文書』(講談社文芸文庫、1998年)、109頁。

てきた⁶。」と紹介し、これまでも様々な研究が成されてきたことを述べている⁷。それらの研究を整理した上で、ブリッグマンは、エイレナイオスが、アンティオケイアのテオフィロスから「神の両手」のモチーフを得たことを示唆している⁸。また、ミンズ (Minns) もエイレナイオスが「神の両手」として説明する神の御言葉と知恵の描写がテオフィロスに由来しているように思われると記している⁹。ブリッグマンやミンズをはじめ、他の先行研究から考えても、エイレナイオスがテオフィロスから「神の両手」のモチーフを得たことについては、既に一定の評価が与えられていると思われる。そのため、エイレナイオスは「神の両手」のモチーフを、アンティオケイアのテオフィロスから得たと結論づけることができよう¹⁰。

2. 『アウトリュコス』第2章18節から19節と『異端反駁』第3巻21章10節との比較

エイレナイオスが「神の両手」のモチーフを得たテオフィロスの記述は、『アウトリュコ

⁶ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 104.

⁷ これまでの「神の両手」のモチーフに関するどのような先行研究が行われてきたのかということは、Anthony Briggman, 104-119 に詳しく論じられているが、Briggman が導入部分 (pp.104-107.) で記していることを簡単にまとめて紹介したい。「Friedrich Loofs が「神の両手」のモチーフは、小アジアからの伝統に属するというを示唆し、J. Armitage Robinson は、エイレナイオスの立場とアウトリュコス 2.18 における箇所、テオフィロスが、人間の創造が彼の言葉と知恵としての、神の両手の唯一の価値であると述べたことの類似性を強調した。さらに、Jules Lebreton は、両手のエイレナイオスの神学は旧約聖書における手や神の両手のいくつかの言及の直接の発展の結果であると示唆し、また Michel Rene Barnes は、エイレナイオスの両手のモチーフを議論した最も新しい研究において、両手の比喩のエイレナイオスの発展の理由のために創世記 1:26 を取り上げ、彼は決して両手それ自体を支持するために御言葉からのテキストは用いないとしている。結果として、御言葉からのこの比喩のエイレナイオスの発展のこれまでの議論は、根拠がなくなる。このような先行研究を受けて Briggman 自身は、「両手」のモチーフはユダヤ教的であるということを強調し、この「両手」という言葉は、2世紀後半に書かれたテオフィロスやエイレナイオスの書物の前にも後に書かれた広い範囲のユダヤ教の文書に表れることを述べている。テオフィロスがどこからこの「両手の伝統」を持って来たか、その引用もについて確信的な議論を彼が聞いたわけではないとしながらも、テオフィロスがユダヤ思想に傾倒していたことは明らかであるとしている。そして、テオフィロスがどのような文献を引用していたにせよ、アンティオケという場所にいたことは、小アジアからきた情報源、もしくは伝統によっていたと考えることもできるだろうと結論づけている。これらのことに加えて、Briggman はエイレナイオスが『アウトリュコス』を持っていたことが、「御言葉と知恵」という描写につながり、「御子と聖霊」につながり、神の両手としての表現につながったと考えている。」

⁸ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 119.

⁹ Denis Minns, *Irenaeus an introduction*, T&T Clark International, 2010, 64.

¹⁰ Jackson Lashier もこの点には同意している。彼は『異端反駁』第1巻22章1節でエイレナイオスが御言葉と知恵を同等に扱っていること、また『異端反駁』第2巻30章9節では御言葉と知恵はどちらも fecit (造る) を用いて説明されており、御言葉は「基礎付け、創造した」(founded and made) また知恵は「適合させ、整える」(fitted and arranged) というような区別が成されていない点を指摘している。けれども『異端反駁』第3巻24章2節では、2つの動詞を使い、御言葉と知恵の創造の働きの区別をしている。その動詞は confirmare (確立する) と compingere (調和させる) であり、『異端反駁』第3巻以降では知恵としての聖霊論が展開されている。そのため、第2巻以降にテオフィロスの『アウトリュコスに送る』を読んだと記している。Jackson Lashier, *Irenaeus on the Trinity, Supplement to Vigiliae Christianae* Volume 127, Brill Leiden Boston, 2014, 168-169.

ス』第2巻18節であろう。その箇所ではテオフィロスは次のように述べている。

人間の創造に関して言えば、造られたことは人間によっては語りえないが、神の書物はそれに簡単に触れている。つまり神が「われわれにかたどり、われわれに似せて、人間を造ろう」〔創1:26〕と言ったことで、それはまず人間の価値を明らかにしている。というのは、すべてを言葉によって造った神はすべてを付随物とみなしているが、人間の創造だけは自分の〔両〕¹¹手にふさわしい作品と考えているのだから。しかも神はあたかも助け手が必要であるかのように「われわれは〔われわれに〕似せて、人間を造ろう」と言っているのが見られる。しかし神はほかの何かに向かってではなく、まさに自分自身の言葉と自分自身の知恵に向かって「われわれは造ろう」と言ったのである。人間を造り、殖えて地に満ちるように祝福して、神は万物を人間の下に僕として置き、人間に最初から地の実と種と草と果樹から食物を摂るように命じ、動物たちにも人間と同じものを食物とし、地のすべての種から食べるように命じたのである¹²。(下線筆者)

続けて『アウトリュコスに送る』第2巻19節では、次のように述べられている。

「これは天地創造の由来である。神が天と地を造られたとき、野のあらゆる木はまだ生じておらず、野のあらゆる草はまだ生じていなかった。というのは、神が地に雨を降らせず、地を耕す人もいなかったからである」〔創2:4-5〕。こうして聖なる書物は、かの時には全地が神的な泉によって潤され、地はそれを耕す人間を必要とせず、地は神の命令によって自動的にすべてのものを生じさせ、人間が地を耕して倦むことはなかったということをわれわれに告知させたのである

¹³。

¹¹ アンティオケイアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』「中世思想原典集成1 初期ギリシア教父」(編訳・監修、上智大学中世思想研究所、小高毅、平凡社、1995年)、136頁で、訳者は「手」と翻訳している。しかし原文では、Πάντα γὰρ λόγῳ χρόνῳ ποιήσας ὁ θεός, καὶ τὰ πάντα πάρεργα ἡγησάμενος, μόνον ἰδίων ἰσχυρῶν χειρῶν ἄξιον ἡγείται τὴν ποιήσιν τοῦ ἀνθρώπου. となっているため〔両〕を加えた。英訳では“*For God having made all things by His Word, and having reckoned them all mere by-works, reckons the creation of man to be the only work worthy of His own hands.*”と記されている。それぞれ Theophilus Antiochenus Episcopus, *Ad Autolyicum*, 18 (Migne: PG 6, 1081) また Phillip Schaff, *The Ante-Nicene Fathers Volume 2*, translation of The Rev. Alexander Roberts, D.D., and James Donaldson, LL.D., editors, 1988, 101 を参照。

¹² アンティオケイアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、136頁。

¹³ アンティオケイアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、137頁。

ブリッグマンは、エイレナイオスが初めて「神の手」と「御言葉」を同一視した箇所として『異端反駁』第3巻21章10節¹⁴を挙げ、「エイレナイオスの、神の手としての御言葉の初めの同一視は、テオフィロスのこれらの箇所に従っている¹⁵。」との見方を示し、『異端反駁』第3巻21章10節と『アウトリュコス』第2章18節から19節を関連づけて考えた。エイレナイオスは次のように述べている。

ちょうど、最初に造られた人であるアダムは、「まだ神が雨を降らさず、人が地を耕していなかった」未開墾の地、そして処女〔地〕から存在を得て、そして、神の手、すなわち、神の御言葉によって形造られた。「すべてのものが彼によって造られ〔ヨハネ1:3参照〕、そして、主は地からちりを取り、そして人を形造られた¹⁶。」(下線筆者)

エイレナイオスが『アウトリュコス』を参照し、「神の両手」のモチーフを得たことの確証を得るために、以下に両者の共通点をいくつか挙げて比較したい。

(1) どちらもヨハネ福音書1章3節を用いている。

A: テオフィロスは「すべてを言葉によって造った神」と述べている。

¹⁴ ここでは「神の両手」ではなく、「神の手」としての「御言葉」のみの言及に留まっている。Briggmanは、ここで「御言葉」のみが語られていることの原因として、『異端反駁』第3巻21章10節においては、神の手としての聖霊の同一性は、余分であり、おそらく『異端反駁』第3巻21章10節の議論においては有害でさえあった」と記している。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 119.

また『異端反駁』第3巻21章10節より前の箇所である『異端反駁』第2巻30章9節では、「御言葉」と「知恵」による創造が述べている。彼は父であり、彼は神であり、彼は創始者であり、彼は制作者であり、彼は創造主であり、彼によってこれらのものは造られた。すなわち、彼のことはと知恵によって。」(hic Pater, hic Deus, hic Conditor, hic Factor, hic Fabricator, qui fecit ea per semetipsum, hoc est per Verbum et per Sapientiam suam,) Briggmanは、『異端反駁』第2巻30章9節のこの箇所において、エイレナイオスは初めて「神-御言葉-知恵」の3つを組として用いていること、そして、それがエイレナイオスの思想のうちにテオフィロスの影響のしるしが前もって示されていると述べている。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, p.127. また Jackson Lashier, *Irenaeus on the Trinity*, 169を参照。

¹⁵ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 112. では、テオフィロスはどこから「神の両手」のモチーフを得たのかという疑問が生じるが、Briggmanは「両手の用語は、2世紀後半に書かれたテオフィロスやエイレナイオスの書物の前にも後に書かれた広い範囲のユダヤ教の文書に表れている。」と記し、また「起源は小アジアにあって、テオフィロスの引用元はユダヤ教であったということで十分である。」と述べている。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 106-107.

¹⁶ AH3.21.10: Et quemadmodum protoplastus ille Adam de rudi terra et de adhuc uirgine – nondum enim pluerat Deus et homo non erat operates terram – habuit substantiam et plasmatus est manu Dei, id est Verbo Dei – omnia enim per ipsum facta sunt, et sumpsit Dominus limum a terra et plasmauit hominem –

B: エイレナイオスは「すべてのものが彼によって造られ」と述べている。

(2) どちらも人の創造について言及している。

A: テオフィロスは「人間の創造に関して言えば、造られたことは人間によっては語りえないが、神の書物はそれに簡単に触れている。つまり神が『われわれにかたどり、われわれに似せて、人間を造ろう』〔創1:26〕と言ったことで、それはまず人間の価値を明らかにしている。」

B: エイレナイオスは「未開墾の地、そして処女「地」から存在を得て」とアダムの存在するようになった描写をしている。

(3) どちらも創世記2章5節¹⁷からの引用を用いている。

A: テオフィロスは「神が天と地を造られたとき、野のあらゆる木はまだ生じておらず、野のあらゆる草はまだ生じていなかった。というのは、神が地に雨を降らせず、地を耕す人もいなかったからである」〔創2:4-5〕と引用している。

B: エイレナイオスは「まだ神が雨を降さず、人が地を耕していなかった」と引用している。

以上の共通性を考慮した場合、これを単なる偶然の一致と見るのではなく、エイレナイオスの「神の両手」のモチーフの源流は、テオフィロスの『アウトリュコス』であり、特に第2章18節から19節を参照していると結論づけることができる。そして、その影響が『異端反駁』第3巻21章10節に表れていると考えるのが妥当である¹⁸。

3. エイレナイオスにおける「御言葉と知恵」の「御子と聖霊」への置き換えの目的¹⁹

¹⁷ 新共同訳聖書には「地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。」と記されている。

¹⁸ この点の詳細に関しては、Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 111-119を参照。

¹⁹ エイレナイオスは『異端反駁』において7回、また『証明』において2回、「知恵」として「聖霊」を同一視している。『異端反駁』では、第2巻30章9節、第3巻24章2節、第4巻7章4節、第4巻20章1節、第4巻20章2節、第4巻20章3節、第4巻20章4節において取り扱い、『証明』では、第5

先に見た『異端反駁』第3巻21章10節においては「神の手」としての「御言葉」の働きに限定されていたが、『異端反駁』第4巻序4節において、これまでとは異なった展開を見ることが出来る。すなわち、次のように述べられている。

事実、人は魂と肉の結合であり、人は神の類似性に従って造られ、そして彼の両手によって、すなわち、子と霊によって形成され、彼は彼らに「人を造ろう」と語った²⁰。(下線筆者)

このように、エイレナイオスはこの箇所ですべて「神の両手」を「子と霊」と言い換えている²¹。エイレナイオスが「神の両手」を「御子と聖霊」と置き換えたことについて、鳥巢義文は次のように記している。

ここでテオフィロスは、明らかに『神の両手』を神の『ことば』と『知恵』として理解している。そして、創世記第1章26節において神が語ったとされている相手こそ、この『ことば』と『知恵』であると捉えている。さて、こうしたテオフィロスの理解と、われわれが先に指摘したエイレナイオスの用語の置き換えの傾向、すなわち『ことば』と『知恵』を『子』と『霊』へと置き換える傾向とを比べるならば、われわれは、この操作自体は、エイレナイオス自身の発想によるものと考えることができるのではなかろうか²²。

章、第10章に記されている。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 128.

²⁰ 小林稔訳では「人間は魂と肉との結合であり、[肉]は神に似せて形造られ、その手によって、すなわち子と霊によって形成された。[父なる神はこの子と霊]に「人間を造ろう」と言ったのである。」と記されている。『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、6-7頁)。Rousseau, A. et al, *Irénée de Lyon Contre les hérésies* では、Homo est enim temperatio animae et carnis, qui secundum similitudinem Dei formatus est et per manus ejus plasmatus est, hoc est per Filium et Spiritum, quibus et dixit: Faciamus hominem となっており、qui が homo に掛けられている。また英訳では、Now man is a mixed organization of soul and flesh, who was formed after the likeness of God, and moulded by His hands, that is, by the Son and Holy Spirit, to whom also He said, “Let Us make man,” (Saint Irenaeus of Lyons, *Against Heresies*, 395) と訳されており、やはりここでも「肉」ではなく「人」と捉えられている。この点について小林稔は「関係代名詞や分詞の性の問題で、ラテン語は「人は」の意で訳しているが、アルメニア語は『肉』ととっている。後者の方が lectio difficilior であり、第V巻6.1でエイレナイオスが後者の見解をとっており、また論敵への反発という点から、アルメニア訳の読み方をとりたい。ルソー、別冊、198頁参照。」と脚注で説明を加えている。

²¹ けれども、それはエイレナイオスが『異端反駁』第4巻に入るまで、「知恵」と「聖霊」を同一視していなかったということを意味してはいない。また、第4巻以前に「知恵」の働きについてエイレナイオスが言及していないということではない。脚注19参照。

²² 鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、64頁。

また、鳥巢義文は次のようにも記している。

その『両手』とは、『ことば』と『知恵』であり、エイレナイオスは、それらをことさら『子』と『霊』に交換している。この置き換えはどう理解されるべきであろうか。果たして、ここには明白な神学的意図が作用しているのであろうか。われわれとしては、この置き換えの内に、既にエイレナイオス固有の聖霊論が表現されていると考えることができよう²³。

先に述べたように『アウトリュコス』第2章18節において、テオフィロスは神の両手を「自分自身の言葉と自分自身の知恵」と記していた²⁴。ここからして、確かにテオフィロスは「神の両手」としての「御言葉」と「知恵」という概念を持っていた。しかし、テオフィロスは「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」というように置き換えをしていないことから考えて、テオフィロスが置き換えの直接の影響をエイレナイオスに与えたということは考えにくい。そのため、エイレナイオスは他の著作から置き換えの影響を受け、そして、テオフィロスの「神の両手」のモチーフとつなぎあわせて、「御言葉」が「御子」であり、「知恵」が「聖霊」であると置き換えたと考えることができる。

4. 「御子と聖霊」の置き換えと『ソロモンの知恵』との関係性

エイレナイオスが「御子と聖霊」の置き換えの発想をどこから得たのかを見ていくために『異端反駁』の2つの箇所注目したい。それらは第3巻11章8節の「*Verbum, qui sedit super Cherubim et continet omnia,*」（「御言葉、ケルビムの上に座して、すべてを保持している方」）と第5巻2章3節の「*Spiritum Dei qui continet omnia,*」（「すべてを保持している神の聖霊」）であり、注目すべきは、この2つの文章にある「*continet omnia*」という表現である。Sources Chrétiennesの脚注では、この部分に当たるギリシア語を「*καὶ τὸ συνέχον τὰ πάντα*」と記している。そして、この文章の引用元の第3巻11章8節でも、また第5巻2章3節においても、どちらも『ソロモンの知恵』としている。その引用は、『ソロモンの知恵』の1章7節である。そこには、「ὅτι πνεῦμα Κυρίου πεπλήρωκε τὴν οἰκουμένην, καὶ τὸ συνέχον τὰ πάντα γινώσιν ἔχει φωνῆς。」と記されており、おそらくエ

²³ 鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、58-59頁。

²⁴ 但し、テオフィロスには「知恵としての御言葉」の同一視も見られる。2.22には「しかし神がそれによって万物を造ったという神の言葉は、神の力と知恵であり〔1コリ1:24〕、宇宙万物の父である主の姿をとるのであって、この言葉が神の姿で園に現れ、アダムと話したのである。」と記されている。アンティオケアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、139頁。

イレナイオスは『ソロモンの知恵』を読み、そして、この文章から第3巻11章8節、また第5巻2章3節の表現を引用していると私は考える²⁵。

注目すべきはこの引用の前に記されている文章である。『ソロモンの知恵』1章7節の前の1章6節には次のように記されている。

知恵は人間を慈しむ霊である。しかし、神を汚すものを赦さない。神は人の思いを知り、心を正しく見抜き、人の言葉をすべて聞いておられる²⁶。

ここに「知恵は人間をいつくしむ霊」という記述があり、「知恵」を「聖霊」に言い換えている。エイレナイオスが、この箇所を読み、『ソロモンの知恵』から引用していることを考えると、「知恵」を「聖霊」と解釈し、置き換えたことは自然のここのように思われる。

5. エイレナイオスにおける箴言の「知恵」の「聖霊」への置き換え

以上に加えてエイレナイオスは、『アウトリュコス』においてテオフィロスが引用している聖書箇所にも別の解釈を施し、「知恵」を「聖霊」へと置き換えていると考えられる。その1つの例として『異端反駁』第4巻20章3節を挙げる。この箇所の冒頭には、次のように記されている。

さて、御言葉、すなわち、御子が常に父と共にいたということは、多くの箇所でも指摘した。知恵、すなわち、聖霊も全てが形造られるよりも前に共にいたことは、ソロモンを通して言っている²⁷。(下線筆者)

エイレナイオスは、まず「御言葉」である「御子」が常に父と共にいたのと同様に、「知

²⁵ エウセビオスは『教会史』第5巻26章において、エイレナイオスがさまざまな説教や小冊子などを残していたことに言及し、次のように記している。「この小冊子は『ヘブル人への書簡』や『ソロモンの知恵』と呼ばれているものに言及し、それらから幾つかの章句を引いている。」エウセビオス、前掲書、348頁。この証言からも分かるように、エイレナイオスは『ソロモンの知恵』に慣れ親しんでいたと考えることができる。

²⁶ The Book of Wisdom 1:6: φιλόανθρωπον γὰρ πνεῦμα σοφία καὶ οὐκ ἀθωώσει βλάσφημον ἀπὸ χειλέων αὐτοῦ· ὅτι τῶν νεφρῶν αὐτοῦ μάρτυς ὁ Θεὸς καὶ τῆς καρδίας αὐτοῦ ἐπίσκοπος ἀληθῆς καὶ τῆς γλώσσης ἀκουστής· ギリシア語テキストについては William J. Deane, *The Book of Wisdom the Greek text, the Latin Vulgate and the Authorised English Version with an Introduction, Critical Apparatus and a Commentary*, 1881, Oxford, 46 を参照。

²⁷ AH4.20.3 : Et quoniam Verbum, hoc est Filius, semper cum Patre erat, per multa demonstravimus. Quoniam autem et Sapientia, quae est Spiritus, erat apud eum ante omnem constitutionem, per Salomonem ait :

恵」である「聖霊」も常に父と共にいたことを示している。その根拠として、まず箴言 3 章 19 節から 20 節を引用する。

神は知恵で地を基礎付け、思慮分別によって天を整えた。その知覚で深淵は現れ、雲が露を滴らせた²⁸。

この引用により、「地を基礎付けた」のは、知恵の働きであることを示している。そして、続けて箴言 8 章 22 節から 25 節、及び 27 節から 31 節から引用する。

主は彼の御業において、自分の道の初めに私を造った。世々の前に、初めに私を据え、地を造る前、深淵を造る前、水の泉が現れる前、すべての丘の前に、私を生んだ²⁹。そしてまた、「天を整えているとき、私は共にいた。また深淵の泉をしっかりと造ったとき、地の基を強く造ったとき、私は神のもとで調和させた。世界を完成させて楽しみ、人の子らを喜びとしたとき、私は楽しんでいた者であり、すべてのときにおいて、彼の御顔の前にあつて、楽しんでいた³⁰。(下線筆者)

この箴言 8 章において、下線で強調した「私」が行なっていることは、箴言 3 章からの引用で示した「知恵で地を基礎付け」ること、「思慮分別によって天を整え」ること、また「知覚で深淵は現れ、雲が露を滴らせ」ることと同様の内容が含まれている。そのため、箴言 8 章の引用に登場する「私」は、箴言 3 章の引用に記されていた「知恵」であることを示し、さらに『異端反駁』第 4 巻 20 章 3 節の冒頭で「知恵、すなわち、聖霊」と記していたように、箴言 8 章の引用の「私」は「知恵」を指し、さらに「知恵」は「聖霊」に置き換えられている。

このように、エイレナイオスは『異端反駁』第 4 巻 20 章 3 節において、箴言 3 章 19 節から 20 節と箴言 8 章 22 節から 25 節および箴言 8 章 27 節から 31 節からの 3 つの引用をし、箴言の「知恵」を「聖霊」と解釈している。エイレナイオスは、これら箴言の引用を

²⁸ AH.4.20.3 : Deus sapientia fundavit terram, paravit autem caelum prudentia ; sensu ejus abyssi eruperunt, nubes autem manaverunt ros. 箴言 3 章 19 節から 20 節からの引用。

²⁹ AH4.20.3 : Dominus creavit me principium viarum suarum in opera sua, ante saecula fundavit me in initio antequam terram faceret, priusquam abyssos constitueret, priusquam procederent fontes aquarum, antequam montes confirmarentur : ante omnes autem colles genuit me. 箴言 8 章 22 節から 25 節からの引用。

³⁰ AH4.20.3 : Cum pararet caelum, eram cum illo, et cum firmos faceret fontes abyssi, quando fortia faciebat fundamenta terrae, eram apud eum aptans. Ego eram cui adgaudebat, quotidie autem laetabar ante faciem ejus in omni tempore, cum laetaretur orbe perfecto et jucundabatur in filius hominum. 箴言 8 章 27 節 a、28 節 b、29 節から 31 節からの引用。

テオフィロスの『アウトリュコス』の2つの箇所から取ったと考えられる。まず1つ目の『アウトリュコス』第1章7節には次のように記されている。

神はその言葉と知恵によって万物を造った。なぜなら、その言葉によって天が、またその霊によって天のすべての力が堅くされたからである〔詩 33:6〕。彼の知恵は最も力強い。神は知恵によって地の基を置き、叡智によって天を備え、知識によって深淵を分かたれ、雲は露を滴らせたのである〔箴 3:19-20〕³¹。

そして2つ目の『アウトリュコス』第2章10節には次のように記されている。

世界が造られたとき、預言者はいなかったのであって、神の内にある神の知恵と神の許に常にいる神の聖なる言葉があったのであるから。よって、知恵は預言者ソロモンを通じて次のように言っている。「主が天を備えたとき、私は主の許にいた。そして主が大地の基を強くしたとき、私は匠のように主の許にいた」〔箴 8:27、8:29、8:30〕³²。

おそらくエイレナイオスは『異端反駁』第4巻20章3節を記すにあたり、『アウトリュコス』第1章7節と第2章10節を参照していたと考えることができる。けれども、テオフィロスとエイレナイオスが箴言を引用し、それによって示そうとしたことの目的は異なっている。まず、テオフィロスがそうしたのは「神の内にある神の知恵」が万物の創造に関与したことを示すためである。それに対してエイレナイオスは、「御父の優位性」を示すために箴言を引用している。つまり「知恵」すなわち「聖霊」が、三位一体の神の内存在としての「御子」と同じように常に御父と共に存在していることを示しているのである。それは、あたかもひとりの人が自らの両手を使って活動するのと同じように、御父が御子と聖霊に向かって「人を造ろう」と語られ³³、協同の活動を遂行するようなイメージとして捉えられている。この点を更に詳しく述べるならば、エイレナイオスは三位一体における御父の優位性を強調するためにも、「神の両手」としての「御子」だけではなく「聖霊」の協同の活動を示したとも言うことができる³⁴。

³¹ アンティオケイアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、110頁。

³² アンティオケイアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、128頁。

³³ 『異端反駁』第4巻序4節を参照。

³⁴ この御父の優位性について、鳥巢義文は次のように述べている。「この御父の優位性は、まず、創造に際して御父が万物の起源であることを表す *a semetipso*、また、御父が三位一体的な創造の主体であることを示す *per semetipsum* などのエイレナイオスの用語法に読み取ることができる。すなわち、万物を無から存在させる御父の創造のわざは、被造物の存在根拠が御父自身にあることを示す *a semetipso* という

このように、エイレナイオスはテオフィロスから受けた「神の両手」のモチーフに加えて、『ソロモンの知恵』から「知恵」が「聖霊」であるという概念を得ており、さらにエイレナイオスはテオフィロスが『アウトリュコス』第1章7節に引いた詩編33篇6節と、『アウトリュコス』第2章10節において「万物の創造」のために引用した3つの箴言の箇所を『異端反駁』第4巻20章3節に引用し、「御父と永遠から共にいる知恵としての聖霊」という別の解釈をし、「知恵」を「聖霊」とする置き換えを行っているのである。この「神の両手」の置き換えについて、H.J.マルクスは次のように述べている。

アンティオケアのテオフィロスは『神の両手』を神のことばと知恵として理解しており、『われわれ』という表現の中に含まれる『ことばと知恵』を神の対話の相手として考える。この解釈過程の終着点とも言うべきがエイレナイオスである。かれはテオフィロスから、詩編33・6の解釈を受け継いで、神のことばを「子」と呼び、知恵を「霊」に置き換えて、言う。『人間は初めに神の両手、すなわち、子と霊によって造られ、神の映像と神との類似性に従って造られた。』その場合、子は人間における映像を確立する機能を果たすのであり、そして、霊は神との類似性へと人間を導き、かつ成長させる機能をもつ。こうした思想様式こそ、教父神学の全体を貫く根本思想となるのである³⁵。

6. 「御言葉と知恵」の「御子と聖霊」への置き換えの目的

6.1. グノーシス主義における「肉の軽視」への反論

それでは、エイレナイオスが、「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と置き換えた上で「神の両手」による創造を語る理由は何であろうか。ブリッグマンは、エイレナイオスがこの箇所で「神の両手」つまり「御子と聖霊」による人の創造を語っていること理由を次のように述べている。

グノーシス主義の「肉の救いの軽視」に対する反論であることは明白であり、エイ

表現によっており、その場合には創造のわざはあたかも唯一神論的創造のような色彩を帯びる。しかし、この創造のわざが御子と聖霊によって遂行されることを示す *per semetipsum* という表現によって補完されて、創造は御父が御子と聖霊によって行う三位一体の神のわざであることが明らかにされる。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、22頁。また「神の優位性」については、6.4において詳しく論じる。

³⁵ H.J.マルクス「われらを悪より救い給え—東方神学から見直された原罪論—(その2)」『アカデミア(第36号)』、(1982年)、10-11頁。

レナイオスは、「肉」が人の一部であり、不完全なデーミウルゴス³⁶による創造ではなく、唯一の創造主である「神の両手」によって造られたものであることを示している³⁷。

このグノーシス主義の「肉の救いの軽視」に対する反駁こそ、まさにエイレナイオスの目的であり、そのために『異端反駁』第4巻において、「神の両手」の働きを、「御言葉と知恵」を「子と霊」に置き換え、人が「神の両手」である「子と霊」によって「肉体」を含めたものとして造られたことを明示しようとしたのである。

このエイレナイオスの人間理解は『異端反駁』第5巻9章1節に見ることが出来る。そこには次のように記されている。

私たちが示したように、完全な人とは、肉、魂、そして霊の3つのものから成ることを理解していないからである。そして、そのうちの1つは救いを形づくるものである。それは聖霊である。別のものは、救われ、そして、造られるものである。それは肉である。もう1つは、前の2つの間にある。それは魂である³⁸。

つまりエイレナイオスは「肉」と「魂」と「霊」の3つから成るものが「完全な人」であると考えている。「肉」は神が造られたものであるので、当然、完全な人間の要素となるのである。このように、エイレナイオスは、「神の両手」による人の創造を考え、それを主張しており、そのことが、エイレナイオスの聖霊の神学を発展させたとも言うことが出来るであろう。なぜなら、テオフィロスにおいては「知恵としての聖霊」という言及だけで

³⁶ グノーシス主義におけるデーミウルゴスの理解のために、次の文章を引用した。「リヨンのエイレナイオス（135頃-2世紀末頃）は『異端反駁』の第1巻の冒頭においてプロトレマイオス派の教説を取り上げ、彼らの誤謬を指摘している（『異端反駁』 *praefatio*-1.11.1）。その記述によると、原初の父ビュトスや最も若いソフィアを含む30を超える神的存在（アイオーン）から成る創成神話をプロトレマイオス派は掲げたとされている。30を超える神的存在は、原父ビュトスとその配偶者シゲー、もしくはエンノイアから流出した。これらの神的存在のうち最も若いアイオーンがソフィアであって、原父を知りたいという彼女の情動が、意図せずして心魂的性質と物質的性質を生み出す結果となる。物質的世界を造り出し、自らは心魂的性質をもつ、デーミウルゴスと呼ばれる造物主の誕生は、このソフィアの過失に起因するとされる。」津田謙治『マルキオン思想の多元論的構造-プロトレマイオスおよびヌメニオスの思想との比較において』（一麦出版社、2013年）、28頁。

³⁷ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 119.

³⁸ AH5.9.1: “non conscientes quia sunt tria ex quibus, quemadmodum ostendimus, perfectus homo constat, carne, anima, et spiritu, et altero quidem salvante et figurante, qui est Spiritus, altero quod salvatur et formatur, quod est caro, altero quod inter haec est duo, quod est anima” さらに John Behr は次のように説明している。「完全な、また完成した人は、肉体、魂、そして聖霊がキリストの到来で保たれたように、救われる。いずれの性質も個々に人と呼ぶことが出来る。けれども、肉体と魂は、人の『一部』と呼ばれ、聖霊はそのようではない。なぜなら聖霊は人ではなく、神であるからである。」John Behr, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity*, 158.

はなく、「知恵としての御言葉」との言及もある³⁹ことから、エイレナイオスはテオフィロスから「神の両手」のモチーフの影響は受けたけれども、テオフィロスとは異なった聖霊の働きの理解、すなわち、「神の知恵」としての「聖霊」の働きを形成させ、「神の両手」の「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と置き換えることに至った。

6.2. 『異端反駁』第4巻7章4節におけるアルメニア語での「両手」の表記

『異端反駁』第4巻序4節の次に「神の両手」としての「御言葉」と「聖霊」の働きを確認できる箇所は『異端反駁』第4巻7章4節である。ただし『異端反駁』第4巻7章4節は議論の余地が残されている箇所である。その議論を明確にするためにも、まず、この箇所のラテン語訳からの邦訳を記す。

彼（父）から生じたものと彼（父）の〔似〕姿、すなわち、御子と聖霊、御言葉と知恵とが、すべての点で父に仕えているからで、天使たちはすべて下に置かれ、仕えているのである⁴⁰。（下線筆者）

このように、ラテン語訳には、直接「両手」という言葉は見当たらない。それにもかかわらず、この箇所を取り上げたのは、下線を引いた「彼（父）の〔似〕姿」という部分を、アルメニア語の写本で読んだ場合にのみ「彼の両手」となっているという理由に基づいている。元々、エイレナイオスが著したギリシア語のテキストが失われてしまっているため、元の言葉が何であったのかを知ることはできない。そのため、ブリッグマンは、次のように述べる。

³⁹ 脚注 24 参照。

⁴⁰ Rousseau, A. et al, *Irenée de Lyon Contre les hérésies* では、*ministrat enim ei ad omnia sua progenies et figuratio sua, hoc est Filius et Spiritus, Verbum et Sapientia, quibus serviunt et subjecti sunt omnes angeli.* となっている。そのためラテン語訳では「彼から生じたものと彼（父）の〔似〕姿」と訳すことができる。小林稔訳では「その生んだものとその「手」とが、すなわち子と霊、みことと知恵とが万事に際して〔父〕に仕えているからで、天使たちは皆、〔この二者〕の下働きをし、〔彼らに〕服しているのである。」と訳し、「手」の部分に付されている脚注 252 では「アルメニア語による。ラテン訳によれば『その姿』」と言及している。小林稔訳『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、キリスト教教父著作集 3/II、教文館、2000年、26頁、185頁。ただし、小林訳では「手」と訳されているだけであり、「両手」とされているのではない。Rousseau は、SChr100,464,vv.69-70において、アルメニア語では、*figuratio sua* ではなく、*suae manus* であることを記している、また Briggman は *The Armenian has 'his Hands' instead of 'his likeness'* と説明し、この部分がアルメニア語では「両手」であることを示している。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 122.

また英訳では「His offspring and His similitude」となっている。Saint Irenaeus of Lyons, *Against Heresies*, The complete English translation from the First Volume of The Ante Nicene Fathers, edited by Alexander Roberts, D.D. & James Donaldson, LL.D. and with occasional notes by A. Cleveland Coxe, D.D., Ex Fontibus Co, 2010, 414.

この箇所では「彼（父）の〔似〕姿」であるのか、それとも「彼の両手」であるのかという点においては、『異端反駁』第4巻序4節と、この後に見る『異端反駁』第4巻20章1節との関連で考えるべきである⁴¹。

そこで、第4巻20章1節に目を向けてみたい。『異端反駁』第4巻20章1節においても、エイレナイオスは「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」に言い換えている。けれども、ここに至ると、ただの言い換えを行っているだけではなく、父なる神が、「御子」と「聖霊」に向かって「私たちがかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と語ったと記されている。すなわち、神が何か他の力や、神ご自身から独立した何かによって、人を造られたのではなく、あたかも「2つの手を持っている人の姿」のように、神と共にいる「御子」そして「聖霊」とによって、人の創造が行われたことへと発展している⁴²。『異端反駁』第4巻20章1節には次のように記されている。

神は地の泥を取り、人を形造り、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。それ故、私たちが造ったのも、私たちが形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもて予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の両手を持っていないかのように、これら（天使たち）を必要としたのでもない。神の側には常に御言葉と知恵、御子と聖霊（がおり）、（御言葉と知恵）によって、また、（御言葉と知恵）のうちに、また自発性⁴³を持って万物を

⁴¹ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 123.

⁴² この「神の両手」としての父なる神、御子、聖霊は三位一体なる神の働きを示しているように思われる。この点についてフスト・ゴンザレスは「神は2つの『御手』によって世界を創造し、統治する。御子と聖霊である。エイレナイオスによる三位一体への言及はあまりに短いため、そこから三位一体の教理を導き出すのは困難である。エイレナイオスは三位一体の教理に関する緻密な議論を展開することはせず、単にそのままを受け入れている。おそらくエイレナイオスは、3つの間の関係について議論することなしに、父なる神、御子、聖霊という定式を信仰的に受け継いだのであろう。」と記している。フスト・ゴンザレス『キリスト教思想史Ⅰキリスト教の成立からカルケドン公会議まで』石田学訳、（新教出版社、2010年）、189頁。ここで「エイレナイオスは三位一体の教理に関する緻密な議論を展開することはせず」と記されているけれども、エイレナイオスの時代、つまりニカイア前の時代にあつては、現代において理解されているような「三位一体」という定義はまだされていなかった。また続けて「3つの間の関係について議論することなしに」と記しているが、これこそまさにエイレナイオスの神学において重要な位置を占めている「神の両手」が扱っている事柄である。また Denis Minns はこの「神の両手」の隠喩が、唯一の神による救いの経綸の強調を与えたことを示している。Denis Minns, *Irenaeus an introduction*, 64. 大貫隆は「ユスティノスの救済史的『歴史神学』とくらべた場合、このエイレナイオスの神学の方が救済史をより明確に『三位一体論的』に、すなわち、終始同一不変の神と『神の両手』（御子と霊）が不断に働き導く場としてとらえていること（「経綸的三位一体論」）は明らかであろう。」と記している。大貫隆『ロゴスとソフィア』、163頁。

⁴³ 小林稔訳では「自律性をもって」と訳されており、その脚注には「アルメニア語による。ラテン語訳に

造り、(御言葉と知恵) に向かって語り、「私たちのかたち (似像) ⁴⁴に、また類似性に人を造ろう」⁴⁵と言ったのであり、ご自身で創造されたものの存在と、造られたものと、世にある美しいものの型をご自身から取ったのである⁴⁶。(下線筆者)

エイレナイオスは『異端反駁』第4巻において「神の両手」としての「御言葉」と「知恵」を登場させ、これを「御子」と「聖霊」に置き換えている。エイレナイオスが「神の両手」としての「御言葉」と「知恵」を「御子」と「聖霊」に置き換えて示そうとしたのは、創造の業は唯一の神のみによるということである。エイレナイオスは「唯一の神による創造」ということを強調する⁴⁷。このことは、創造主である神の一員としての聖霊の「永遠性」をも証明しているものである⁴⁸。

『異端反駁』第4巻20章1節の記述のうちにも「私たちが形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもつて予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の手を持っていないかのように、これら(天使たち)を必要としたのでもない。」と記している。

ここで、エイレナイオスは、(1) 天使たち、(2) 真の神のほかの他の者、(3) 万物の父から遠く離れた力などによって人間が造られたとの思想を退けている。その代わりに、父なる神と常に共にいる「御言葉と知恵」すなわち、「御子と聖霊」がすべてのものを造られたことを主張している。父なる神と常に共にいる「御子」と「聖霊」が人間を造ったことをエイレナイオスは主張し、その創造の仕方として創世記1章26節を引用している。それが「私たちの似像に、また類似性に人を造ろう」と言ったということである。以上のことを踏まえて、『異端反駁』第4巻7章4節では、「彼(父)の〔似〕姿」がふさわしい言

よれば『自らすすんで』と記されている。『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、216頁。

⁴⁴ この言葉は基本的に「表象」「像」(image)を示している。R. Laird Harris, Editor, Gleason L. Archer, Jr., Associate Editor, Bruce K. Waltke, Associate Editor, *Theological Wordbook of the Old Testament Volume 2*, Moody Press, Chicago, 1981, 767.

⁴⁵ H.D.Preuss, “demuth” in: *Theological Dictionary of the Old Testament* vol.III, Edited by G. Johannes Botterweck and Helmer Ringgren, Translators: John T. Willis and Geoffrey W. Bromiley, David E. Green, 1975, 259.

⁴⁶ AH.4.20.1: Et plasmavit Deus hominem, limum terrae accipiens, et insuffavit in faciem ejus flatum vitae. Non ergo angeli fecerunt nos neque plasmaverunt nos, neque enim angeli poterant imaginem facere Dei, neque alius quis praeter verum Deum, neque virtus Longe absistens a Patre universorum. Neque enim indigebat horum Deus ad faciendum quae ipse apud se praefinierat fieri, quasi ipse suas non haberet manus. Adest enim ei semper Verbum et Sapientia, Filius et Spiritus, per quos et in quibus Omnia libere et sponte fecit, ad quos et loquitur, dicens: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostrum, ipse a semetipso substantiam creaturarum et exemplum factorum et figuram in mundo ornamentorum accipiens.

⁴⁷ John Lawson, *The Biblical Theology of Saint Irenaeus*, London: Epworth Press, 1948, 121.

⁴⁸ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 129.

葉であるか、それとも「彼の両手」であるかを検討したい。

『異端反駁』第4巻20章1節では、人の創造に関して「天使たちの助けを必要としていない」ことが明らかにされている。同様に、『異端反駁』第4巻7章4節においても、天使たちは御子と聖霊、御言葉と知恵の下に置かれている存在であることが明らかにされ区別されている。そして、「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と言い換えていることは、『異端反駁』第4巻序4節、そして『異端反駁』第4巻20章1節においても「神の両手」との関連で成されている。このような類似点からだけで考えると、『異端反駁』第4巻7章4節においても、『異端反駁』第4巻序4節と『異端反駁』第4巻20章1節と同様に、「御言葉と知恵」から「御子と聖霊」という言い換えが成されているため、ラテン語訳の「彼（父）の〔似〕姿」よりも、直接、「両手」と表記されているアルメニア語訳の「彼の両手」の方が適当であると捉えられる可能性がある。

けれども、アルメニア語訳の「彼の両手」を採用した場合にいくつかの問題が生じる。まず、ラテン語訳中の*figuratio*は単数として記されているが、「彼の両手」(*suae manus*)と考えた場合には「複数」となる。また、ラテン語訳*figuratio sua*ではなく、アルメニア語「彼の両手」(*suae manus*)を採用し、「彼の両手」としての「御子と聖霊」そして「御言葉と知恵」とするならば、*sua progenies*の部分だけが切り離されてしまう⁴⁹。このように、アルメニア語訳では突然「両手」が介入するのでラテン語訳で示されている対応関係の理解が難しくなる。ラテン語訳の対応関係とは、すなわち、「彼（父）から生じたもの」とは「御子」であり、「御言葉」となる。また、「〔似〕姿」とは「聖霊」であり、「知恵」となる。このように「御子」と「聖霊」に対応する用語配置をラテン語に即して理解するならば、「御言葉」と「知恵」となる。

このように対応関係が記されていることを考えれば、『異端反駁』第4巻7章4節のラテン語訳を採用した場合、アルメニア語が示す「両手」という言葉こそないが、やはり「神の両手」である「御子」と「聖霊」が他の何物かの助けを必要とはせず、人間の創造に関わっていることが記されていることは明白である。

さらに、この対応関係が発展し、『異端反駁』第5巻28章4節に「人は初めに、神の両手によって、すなわち、御子と聖霊によって造られ、神のかたちと類似性に従って造られた」と記されているように、「彼（父）から生じたもの」を「かたち」と捉え、また「〔似〕姿」を「類似性」と捉えることによって、御子が「かたち」を与え、聖霊が「類似性」を与えたと理解することとのつながりを理解することができる⁵⁰。そのため筆者としては、ラ

⁴⁹ J. Armitage Robinson, *Note on the Armenian Version of Irenaeus ADV. HAERESSES IV, V*, *Journal of Theological Studies* 32, 1932, 156-7.

⁵⁰ この点は『異端反駁』第5巻28章4節において、明確に示されている。

テン語訳の対応関係を優先するため、それを難しくするアルメニア語訳は採用しない⁵¹。しかし、いずれにしても、エイレナイオスは『異端反駁』第4巻序4節、第4巻7章4節、第4巻20章1節の3箇所において、神はご自身の「両手」に向かって語りかけ、他の何物の助けも必要とせずに人を創造した主張していることに変わりはない。

6.3. グノーシス主義の人間理解への反論——エイレナイオスにおける「かたち」と「類似性」を有した「完全な人間」理解——

エイレナイオスにおいて、父なる神のみが、ご自身の両手である「御子」と「聖霊」に語りかけ、人を創造したということは非常に重要な意味を持つ。なぜなら、エイレナイオスの論敵であったグノーシス主義もまた、創世記1章26節を解釈しつつ、人の創造について言及しているからである。『異端反駁』第1巻5章5節では、次のように述べられている。

さて、(デーミウールゴスは) この世を造ったとき、この乾いた大地からではなく、不可視の存在から、(すなわち) 物質の(中の) 流れ出る液状(の部分) からとって⁵²泥的人間を造り、これに心魂的な人を吹き込んだと言明する。そして、これが『(模) 像と類似性に基づいて』生じた人である⁵³。(模) 像に基づいて(生じたの) が物質的な人⁵⁴であり、(これは) 似てはいても神と同質のものではない。他方、類似性に基づいて(生じたの) が心魂的な人であり、このゆえに『生命の霊』とも言われている⁵⁵。その存在が霊的溢出に由来するからである。その後、(デーミウールゴスは) 彼に『皮の衣』をまとわせたという。そして、これが感覚可能な肉体であると主張するのである⁵⁶。

この引用からも分かるように、エイレナイオスが「私たちがたち(似像)に、また類

⁵¹ J. Armitage Robinson もアルメニア語訳ではなく、ラテン語訳の *figuratio* を採用する立場をとっている。J. Armitage Robinson, *Note on the Armenian Version of Irenaeus ADV. HAERESSES IV, V*, 157.

⁵² エイレナイオスは早い段階から、このグノーシス主義の創造に関して反駁している。例えば、『異端反駁』第2巻10章4節では、神が「無から」創造したことを述べている。「一方、人は確かに無から何かを造ることはできず、すでに存在している質料から(しか造れない)。けれども、神は、それまで存在しなかった質料を、創造のときに自分で造り出すという点において、人より優っているのである。」(AH2.10.4: *quoniam homines quidem de nihilo non possunt aliquid facere sed de material subiacenti, Deus autem quam homines hoc primo melior eo quod materiam fabricationis suae cum ante non esset ipse adinuenit.*)

⁵³ AH1.5.5: *Et hunc esse secundum imaginem et similitudinem factum*

⁵⁴ AH1.5.5: *secundum imaginem quidem hylicum esse*

⁵⁵ AH1.5.5: *secundum similitudinem uero psychicum, unde et spiritum uitae substantiam eius dictam*

⁵⁶ 荒井献・大貫隆・小林稔訳『ナグ・ハマディ文書I 救済神話』(岩波書店、1997年)、232頁。

似性に人を造ろう」と『異端反駁』第4巻20章1節において述べていること自体が、グノーシス主義に対する反駁の意味を持っているのである。なぜなら、第1巻5章5節で示されていたグノーシス主義の主張する「かたち」と「類似性」による人の創造の場合、そこには(1)「(模)像に基づいて(生じたの)が物質的な人であり、(これは)似てはいても神と同質のものではない。」とされる人が創造され、(2)「他方、類似性に基づいて(生じたの)が心魂的な人であり、このゆえに『生命の霊』とも言われている。」と言われている人の創造も語られているからである。

これに対し、エイレナイオスは「かたち」と「類似性」に従って造られた人は、2種類の人が存在するのではなく、「肉」と「魂」と「霊」が備えられた完全な人として造られると考えているのである。さらにエイレナイオスにおいては、この「かたち」と「類似性」を、「神の両手」である「御子」と「聖霊」にも結びつけて考えている。『異端反駁』第5巻28章4節には、次のように記されている。

人は初めに、神の両手によって、すなわち、御子と聖霊によって造られ、神のかたちと類似性に従って造られた⁵⁷。

まず「神の両手」が「御子」と「聖霊」であるとの言い換えがあり、加えて、「御子と神のかたち」、そして「聖霊と類似性」がそれぞれ関係づけられていることが示されている。これは、文字通り「御子」が「かたち」を与え、そして「聖霊」が「類似性」を与えたことを明らかにしている。このようにして造られた人は「完全な人」(perfectus homo)と呼ばれ、人を形造る要素としての「肉」「魂」そして「霊」に加えて、「神のかたち」と「神の類似性」を有するものである。このことが『異端反駁』第5巻6章1節において次のように語られている。

もし、誰かが形成物である肉の実体を取り除き、そして、自分が全く霊のみを理解するとしても、もはや、そのような霊的な人ではなく、人の霊、もしくは神の霊(である)。しかし、魂と混合した聖霊が形成物に一体となるとき、聖霊の流出の故に、人は霊的、そして、完全になるのである。そして、それが神のかたちと類似性に従って造られたものである⁵⁸。(下線筆者)

⁵⁷ AH5.28.4 :plasmatus in initio homo per manus Dei, hoc est Filii et Spiritus, fit secundum imaginem et similitudinem Dei,

⁵⁸ AH5.6.1 :Si enim substantiam tollat aliquis carnis, id est plasmatis, et nude ipsum solum spiritum intellegat, jam non spiritalis homo est quod est tale, sed spiritus hominis aut Spiritus Dei. Cum autem Spiritus hic commixtus animae unitur plasmati, propter effusionem Spiritus spiritalis et perfectus

つまり「聖霊の流出」が「肉」と一体となるときに、「完全な人」となり、それが「神のかたち」と「神の類似性」に従って造られた人の姿であることが語られている。この「神のかたち」と「神の類似性」を与えるものこそ、「御子と聖霊」に他ならないのである。

6.4. 『異端反駁』第4巻20章1節から4節における「神の優位性」の保持

『異端反駁』のなかで、「神の両手」との関連性において「知恵」としての聖霊の役割がまとめられて記されているのは、第4巻20章1節から4節においてである。そのため、この箇所を見ることによって、なぜエイレナイオスが「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と置き換えているのか、その目的を知ることができる。第4巻20章1節の1つ前の箇所である第4巻19章3節には、グノーシス主義の神についての思想が問題とされている。そこには、次のように記されている。

彼らはまるで、既に計測し、そして見通し、そして完全に彼を〔神を〕論じたかのように、彼の〔神の〕上に、別のアイオーンのプレーローマの存在と、別の父を捏造する⁵⁹。

このグノーシス主義の思想を受けて、エイレナイオスは第4巻20章1節では「神の側には常に御言葉と知恵、御子と聖霊（がおり）、（御言葉と知恵）によって、また、（御言葉と知恵）のうちに、また自発性を持って万物を造り」と記し、神の両手である「御子と聖霊」（御言葉と知恵）が常に神と共にいることと、万物は、その「御子と聖霊」（御言葉と知恵）によって造られたことの2つを示している。すなわち、エイレナイオスはこの箇所で、創造とは唯一の神の業によるものであって、他の何かの助けを必要としたのでも、また別の神も存在しないということを強調している。

そして、第4巻20章2節においては、その唯一の神による創造を強調するために、3つの聖書箇所を引用して説明を加えている。1つは旧約聖書のマラキ書からの引用である。そこには「唯一の神が、私たちが造ったのではないか。私たち全ての者の父は唯一ではないか⁶⁰。」と記されている。もう1つは、新約聖書の使徒（パウロ）からの引用である。「唯

homo factus est : et hic est qui secundum imaginem et similitudinem factus est Dei.

⁵⁹ AH4.19.3 : Quem quasi jam mensi sint et perspexerint et universum eum decurrerint, super eum esse aliud Pleroma Aeonum confingunt et alterum Patrem.

⁶⁰ AH4.20.2 : Nonne unus Deus qui constituit nos? Nonne Pater unus est omnium nostrum? マラキ2章10a節からの引用。

一の神、すなわち、父は万物の上であり、また私たち全ての者のうちにある⁶¹。」さらに、主の「万物は私の父から私に委ねられた⁶²。」という引用で結んでいる⁶³。このように、エイレナイオスは旧約聖書からも、また新約聖書からも引用をし、自らの主張する「唯一の神による創造」が聖書に基づいていることを証明しようとしている。

第4巻20章3節においては、知恵である聖霊が、創造の以前から父なる神と共にいたことを示す。第4巻20章3節では、次のように述べられている。

さて、御言葉、すなわち、御子が常に父と共にいたということは、多くの箇所指摘した。知恵、すなわち、聖霊も全てが形造られるよりも前に共にいたことは、ソロモンを通して言っている⁶⁴。「神は知恵で地を基礎付け、思慮分別によって天を整えた。その知覚で深淵は現れ、雲が露を滴らせた⁶⁵。」そしてまた、「主は彼の御業において、自分の道の初めに私を造った。世々の前に、初めに私を据え、地を造る前、深淵を造る前、水の泉が現れる前、すべての丘の前に、私を生んだ⁶⁶。」そしてまた、「天を整えているとき、私は共にいた。また深淵の泉をしっかりと造ったとき、地の基を強く造ったとき、私は神のもとで調和させた。世界を完成させて楽しみ、人の子らを喜びとしたとき、私は楽しんでいた者であり、すべてのときにおいて、彼の御顔の前にあって、楽しんでいた⁶⁷。」

⁶¹ AH4.20.2 : *Unus Deus, inquit, Pater, qui super omnes et in omnibus nobis.* エフェソ 4 章 6 節からの引用。小林稔は「ひとりの神すなわち父は、万物の上であり、[万物を通して] [働き]、私たち皆のうちにある方」と訳し、その説明として「ただし、『万物の父』の『万物が落ち、最後に『私たち』が加えられている。なお、『万物を通して』はラテン訳にはないが、アルメニア訳によって補う。」としている。『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、70頁、216頁、訳注722参照。

⁶² マタイ 11:27 からの引用。AH4.20.2 : *Omnia, inquit, mihi tradita sunt a Patre meo.*

⁶³ 鳥巢義文は「教父エイレナイオスは、新約の書を旧約の書と同様に聖なる『書』(graphe)と呼んだ。これは、今日キリスト者が旧約と新約の両書を1まとめにしてそう呼ぶ『聖書』の始まりである。また、4つの福音書を1つの霊に掌握された『4つの姿の1つの福音』とみなし、その数を減らすマルキオン派や、逆にそれを増やすとみえるグノーシス派の両者を退けた。」と記している。鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、13頁。

⁶⁴ AH.4.20.3 : *Et quoniam Verbum, hoc est Filius, semper cum Patre erat, per multa demonstravimus. Quoniam autem et Sapientia, quae est Spiritus, erat apud eum ante omnem constitutionem, per Salomonem ait :*

⁶⁵ AH.4.20.3 : *Deus sapientia fundavit terram, paravit autem caelum prudentia ; sensu ejus abyssi eruperunt, nubes autem manaverunt ros.* 箴言 3 章 19 節から 20 節の引用。

⁶⁶ AH.4.20.3 : *Dominus creavit me principium viarum suarum in opera sua, ante saecula fundavit me in initio antequam terram faceret, priusquam abyssos constitueret, priusquam procederent fontes aquarum, antequam montes confirmarentur : ante omnes autem colles genuit me.* 箴言 8 章 22 節から 25 節の引用。

⁶⁷ AH.4.20.3 : *Cum pararet caelum, eram cum illo, et cum firmos faceret fontes abyssi, quando fortia faciebat fundamenta terrae, eram apud eum aptans. Ego eram cui adgaudebat, quotidie autem laetabar ante faciem ejus in omni tempore, cum laetaretur orbe perfecto et jucundabatur in filius hominum.* 箴言 8 章 27 節から 31 節の引用。

ここではまず箴言 3 章 19 節から 20 節の引用において、創造における知恵の役割を描き、聖霊の永遠性を支持している。続く箴言 8 章 22 節から 25 節と箴言 8 章 27 節から 31 節の引用では、万物の創造のとき以前にも、知恵としての聖霊が存在したことを明記することによって、唯一の神と常に共にいる聖霊の永遠性を支持している⁶⁸。

そして、第 4 卷 20 章 4 節において、「従って、御言葉と知恵によって万物を造り、調和させた神は唯一である⁶⁹。」と結んでいる。このように、エイレナイオスが『異端反駁』第 4 卷 20 章 1 節から 4 節において、「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と置き換えて示したことは、他の何かの助けを必要としない唯一の神による万物の創造である。神の両手である「御言葉と知恵」すなわち「御子と聖霊」は、あくまでも父なる神から創造において「語られた存在」であり、父なる神の働きとして、神の両手が万物を造り、神が最後にそれらを調和させたということが示されているのである。

7. まとめ

「神の両手」の思想は、エイレナイオス固有のものではなかった。けれどもエイレナイオスが「神の両手」を「御言葉と知恵」と位置づけ、さらに「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」と置き換え、自身の思想を展開していくことに独自性を見出すことができる。その「置き換え」をしたことの目的は、エイレナイオスの論敵であったグノーシス主義の誤りを論駁するためであったと考える。本論文においては、グノーシス主義の 2 つの問題点を取り上げた。1 つは、グノーシス主義の「肉の救いの軽視」であり、もう 1 つは「御父以外の別の神の存在を主張する」ことである。エイレナイオスは、このどちらの誤りに対しても、「御子と聖霊」への置き換えを持って反論を加えている。「肉の救いの軽視」に対しては、「神のかたち」と「神の類似性」を与える「御子と聖霊」の働きによって、そして「御父以外の別の神を主張する」ことに対しては、御父と常に共に存在し、御父の「両手」として働く「御子と聖霊」を描くことにより、「御父の優位性」を示しているのである。

⁶⁸ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 131.

⁶⁹ AH.4.20.4 : Unus igitur Deus, qui Verbo et Sapientia fecit et aptavit omnia.

第2章 エイレナイオスにおける人間の成長と神化

エイレナイオスは神を「善き神」(bonus Deus)と呼ぶ。この呼称はエイレナイオスが思い描いていた神観を一言で言い表したものであろう⁷⁰。この章の目的は、第1に、エイレナイオスが「善き神」と表現した神の特質が何であるかを明らかにすることであり、また、その神がどのように人間の成長に関わるのかを考察することにある⁷¹。第2に、エイレナイオスにおける、「人間が神となる」(dii facti sumus⁷²)という視点から、人間の成長がどのようなものかを明らかにすることにある。

そのため、エイレナイオスにおける人間の成長の思想を次の2点に整理したい。(1) 幼児のような状態として造られた人間が、何が善であり、何が悪であるかを学ぶことにより成熟した大人へと成長すること⁷³。(2) 本性として「神の子ら」として造られた人間が、墮罪、御子の受肉、保証としての聖霊が与えられることにより、再び「神との類似性(similitudo)」が与えられ、「完全な人間」として「神となる」(dii facti sumus)成長のこと⁷⁴。

⁷⁰ エイレナイオスは『証明』第8章において、神観を次のように述べている。「神は、慈悲深く、同情してくださる方であり、きわめて柔和な方、善なる方、義なる方であり、すべての者の神、つまりユダヤ人と異邦人、また信じる人々の神である。しかし、信じる者にとっては神は父のような方である。『時の終わりにあたって』神は養子にする契約を開いて下さっているからである。」これは確かにエイレナイオスが思い描いていた神観ではあるが、人間との関わりにおける「神観」を言い表したというよりは、むしろ神観の全体像であると考えることができる。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』小林稔／小林玲子訳『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』(平凡社、1995年)、209頁。

⁷¹ この点において「寛大さ」と訳される magnanimitas は、頻繁に取り上げられるエイレナイオス特有の神観である。本論文においても、この神観については取り扱うが、エイレナイオスの神観を表す場合、この「寛大さ」(magnanimitas)にだけ注目されてきたのではないかとの問題意識がある。勿論、この「寛大さ」(magnanimitas)はエイレナイオスの神観を代表するものであることは疑いようもないことであるが、本論文においては、「寛大さ」(magnanimitas)以外の神観にも注目することが一つの狙いである。

⁷² 『異端反駁』第4巻38章4節を参照。

⁷³ この「幼児のような状態として造られた人間が、何が善であり、何が悪であるかを学ぶことにより成熟した大人へと成長すること」は「幼児のような状態として造られた人間が、何が善であり、何が悪であるかを学ぶことにより『神のようになる』こと」とも表現することが可能であると思われる。けれども(2)の「本性として『神の子ら』として造られた人間が、成長し『神となる』(dii facti sumus)こと」と区別をするために、最初に創造された人間の成長について語り、次いで、「神となること」について言及をしていきたい。Ben C. Blackwell, *Christosis: Pauline Soteriology in Light of Deification in Irenaeus and Cyril of Alexandria*, Mohr Siebeck, 2011, 40-41. また Gustaf Wingren, *Man and the Incarnation. A Study in the Biblical Theology of Irenaeus* (translated by Ross Mackenzie), Wipf and Stock Publishers, 1959, 35-38. を参照。

⁷⁴ エイレナイオスが人間の成長の思想を語る背景には、グノーシス主義の人間理解が関係している。『異端反駁』第1巻5章5節から第1巻7章5節において、グノーシス主義の人間理解が詳細に紹介されている。その中の第1巻6章1節から引用したい。「そういうわけで、(人間には)3つのものがある、(そのうち)左のものとも呼ばれる物質的なものは、不滅性の息吹を全く受け入れないゆえ、必然的に滅びゆく。他方、右のものとも称される心魂的なものは、霊的なものと物質なものとの中間にあるゆえに、どちらかに傾きをなせばそちらの方へ行く。そして、霊的なものは、この世で心魂的なものと対をなしてかたちづくられ、帰還においてこれと共に訓育されるよう遣わされているというのである。』『ナグ・ハマディ文書I 救済神話』、234頁。このようにグノーシス主義においては、人間には3つの種類があることになる。Christopher T. Bounds, *Competing Doctrines of Perfection: The Primary Issue in Irenaeus' Refutation*

この章では、まず（１）幼児のような状態として造られた人間が、何が善であり、何が悪であるかを学ぶことにより成熟した大人へと成長することと、「善き神」との関わりを中心に据えて考察したい。その方法として『異端反駁』のなかでも、神がどのように人間と関わりを持つか、また、人間がどのように成長するかについて、まとめて記述されている『異端反駁』第４巻 37 章 1 節から 39 章 4 節に基づき、エイレナイオスの思い描いていた神観と人間の成長との関係性を考察したい。その後、（２）本性として「神の子ら」として造られた人間が、墮罪、御子の受肉、保証としての聖霊が与えられることにより、再び「神との類似性 (similitudo)」が与えられ、「完全な人間」として「神となる」(dii facti sumus) 成長のことを論じていきたい。

1. エイレナイオスにおける神観——善いものを与える神——

1.1. エイレナイオスはなぜ人間の成長の思想を持ったのか

エイレナイオスにおける人間の成長の思想を考察するにあたり、私たちはまず「エイレナイオスはなぜ人間の成長の思想を持ったのか」という点を確認する必要があるであろう。そこで人間の成長について記されている箇所のひとつである『異端反駁』第４巻 11 章 1 節に目を向けたい。

唯一の同じ神が、常に御言葉を通して、信じる者たちにすべてを啓示し、明らかにすることなしに、聖書もどのように彼について証するであろうか。ある時は自ら形造った〔者〕と語り、ある時は律法を与え、ある時は非難し、ある時は励まし、そしてまた奴隷を自由にして子とし、相応しい時に不滅性という相続財産を与えて、人間を完成させるのである。神が人間を形造ったのは、聖書が「増えよ〔Crescite⁷⁵〕、そして、増加せよ」と言っている通りに、増加と増大のためであった⁷⁶。

of Gnosticism, *Studia Patristica* XLV, 2010, 404 を参照。これに対しエイレナイオスはそのような区別をせず、幼児の状態に造られた人間が成長し、神のようになるという人間論を展開しているのである。また、エイレナイオスは成長のなかで肉体と魂としての人間、そして聖霊を与えられた状態での人間の完成を描いている。

⁷⁵ 70 人訳聖書では「Αὐξάνεσθε καὶ πληθύνεσθε」と記されている。この Αὐξάνεσθε の原形である αὐξάνω には「成長する」という意味がある。 *The New International Dictionary of New Testament Theology*, Zondervan, 1967, 128.

⁷⁶ AH4.11.1 : Quomodo autem Scripturae testificantur de eo, nisi ab uno et eodem Deo omnia semper per Verbum revelata et ostensa fuissent credentibus, aliquando quidem colloquente eo cum suo plasmate, aliquando autem dante legem, aliquando vero exprobrante, aliquando vero exhortante, ac deinceps liberante servum et adoptante in filium, et apto tempore incorruptelae hereditatem praestante ad perfectionem hominis? Plasmavit enim eum in augmentum et in incrementum,

この箇所では創世記 1 章 28 節が引用されており、ラテン語の *crescite* は通常「増えよ」と訳される。けれども、この *crescite* の原形である *cresco* には「成長する」という意味が含まれており、仮にその意味として訳すならば「成長し、増加せよ」となる。そのためエイレナイオスは、創世記 1 章 28 節を解釈し「人間の成長」という概念を得たと考えることができよう。

1.2. 「強制しない神」と「自立性」を持つものとして造られた人間

それでは、私たちはエイレナイオスの神観と人間の成長の両方を同時に見ていくために『異端反駁』第 4 卷 37 章 1 節を取り上げたい。そこには次のように記されている。

なぜなら神は、人間が初めから自分の魂を持つと同じように、自立性⁷⁷を持つように、人間を自由なものに造った。それは神の意志を、彼〔神〕に強制されてではなく、自発的に行なわれたことを示すためである。と言うのも、〔物質的な〕力は、神に属するものではない。神の側に常にあるのは、善い意志⁷⁸なのである⁷⁹。

この箇所には、エイレナイオスの神観において重要な点が語られている。それは神が人間に「強制をしない」ということである。ここでエイレナイオスは、神が強制しないことの理由を 2 つ挙げている。

第 1 は、神が人間を「自立性」を持つ存在として造ったため。

第 2 は、人間が神の意志を自発的に行うため。

quemadmodum Scriptura dicit : Crescite et multiplicamini.

⁷⁷ ここでは *suam potestatem* を「自立性」と訳している。その理由として次のことに言及したい。AH1.6.1 では『異端反駁』を最初にラテン語に翻訳した者が *αὐτεξουσίον ἔστιν* を *suae potestatis est* と訳している。この言葉を含めた『異端反駁』第 1 卷 6 章 1 節を小林稔も次のように訳している。「すなわち、(心魂的なものは) 自律的であるゆえ、その (心魂的なもの) を救うためであったという。』『ナグ・ハマディ文書 I 救済神話』、234 頁。このように小林稔は「自律性」との訳を採用している。このことを踏まえた上で AH4.37.1 に目を向けた。この箇所で Rousseau は *suam potestatem* を *ἰδίαν ἐξουσίαν* と想定している。けれども、先に記したように AH1.6.1 では *αὐτεξουσίον ἔστιν* を *suae potestatis est* と訳していることから、本論文において *sua potestas* は「自立性」という訳語を用いることにしたい。尚、小林稔は「自律性」と訳しているが、筆者の思いつきとして、ひとり人間が、自らの足で立ち上がり、成長し、歩んでいくというニュアンスを込め、本論文においては「自律性」ではなく、「自立性」の漢字を用いることにしたい。

⁷⁸ 小林稔は「よい勧め」と訳している。エイレナイオス『エイレナイオス 4 異端反駁 IV』小林稔訳『キリスト教教父著作集 3/II』(教文館、2000 年)、148 頁。

⁷⁹ AH4.37.1 : *quia liberum eum Deus fecit, ab initio habentem suam potestatem sicut et suam animam, ad utendum sententia Dei voluntarie, et non coactum ab eo. Vis enim a Deo non fit, sed bona sententia adest illi semper.*

まず第1の「人間が自立性を持つ存在として造られた」ことに注目してみよう。私たちは「なぜ神が人間を自立性のある存在として造ったか」を問う必要がある。このために『異端反駁』第4巻4章3節と『異端反駁』第4巻37章4節の2つの箇所を確認したい。まず『異端反駁』第4巻4章3節には次のように記されている。

人間は理性的であり、この故に神と似ており、判断に関して自由なもの、また自立的なものとして造られている⁸⁰。

『異端反駁』第4巻37章4節には次のように記されている。

けれども、人間は初めから自由な判断をする者であった。それは〔人間が〕似せて造られた神が、自由な判断をするからである⁸¹。

これらの箇所に記されているように、神が人間を自立性のある存在としたのは、神が自立的であり、その神に似せて造られたからである。つまり、神は自身の「善い意志」によって自らの行為を判断するものであり、誰からも、また何によっても「強制される」ことのない自由な存在である。同様に、その神によって造られた人間もまた自由であり、自らの判断によって行動するものとされたのである。そのため、神は人間に「自立性」を与えた。この「自立性」という能力こそ、人間が絶えず成熟した大人へと成長するために、必要不可欠な能力である⁸²。

⁸⁰ AH4.37.1 : homo vero rationabilis, et secundum hoc similis Deo, liber in arbitrio factus et suae potestatis.

⁸¹ AH4.37.4 : Sed quoniam liberae sententiae ab initio est homo, et liberae sententiae est Deus cujus ad similitudinem factus est. また神の両手による人間の創造と、自立性の両方について『証明』第11章に明確に記されている。「しかし人間の場合、神は土の最も純粹で細かいところを取って、ちょうどよい割合に自分自身の力と土とを混ぜ合わせ、自らの手で形づくった。人間が形づくられ、地に置かれたのは、神の似姿としてであったから、見える外観も神のようなものであるべきだと、神が人間の身体に自身の外形を与えたのであった。また人が生きるようになるため、『神はその顔に生命の息吹を吹き込んだ』〔創2 : 7〕。その結果、人間は身体においてばかりでなく、息吹に関しても神に似たものとなった。それで、神により、地上のすべてのものの主人であるようにと造られたので、人は自由であり、自律的であった。神が人間を形づくる前に神によって準備されたこの被造世界は、その中にある、ありとあらゆるものとともに、人間にその支配領域として与えられた〔創1 : 28 参照〕。支配領域の中では、〔他の神ではなく〕すべてを形づくったあの神の僕たちが仕事のためにいた。そしてこの支配領域は、僕仲間の上に立てられた筆頭管理者によって司られていた。僕たちとは天使であり、筆頭管理者とは天使長であった。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、211 頁。

⁸² 『異端反駁』第4巻11章2節には「神が常に同じであるように、神のうちにある人間は、神に向かって常に前進して行くであろう。」と記されている。(AH4.11.2 : Quemadmodum enim Deus semper idem est, sic et homo in Deo inventus semper proficiet ad Deum.)

この能力としての「自立性」が、「神が人間に強制をしない」ことの第2の理由である「人間が神の意志を自発的に行うため」ということと深く関係している。『異端反駁』第4巻37章1節において、「神の側に常にあるのは、善い意志なのである」と記されていたように、「神の意志」とは、「善の意志」と言い換えることができるであろう。つまり「善き神」は人間に「善い意志」をも与えるのである。人間は、「自立性」を有していることにより、その能力を用いて、神の意志である「善」を行うことで成長することができるのである。

1.3. 神の「好意」(benignitas) ——人間に善を与える神——

それでは、人間は自らに与えられた「自立性」を用いて、どのように神の意志である「善」を行うことができるのであろうか。ここで先に引用した『異端反駁』第4巻37章1節の続きに目を向けたい。

そして、この故に〔神は〕よい判断をすべての人に与えた。人間のうちには選択の力を置いた。——天使たちも理性的であるので——天使たちのうちにも〔置いた〕ように。事実、聞き従う者たちが、正しく善を持つ者となるためであった。与えたのは神であるが、守るのは彼ら自身の方であり、聞き従わなかった者たちは、善とともにないことが分かり、そして当然の罰を受け取るようになるのである。なぜなら、神は好意をもって善を与えた⁸³が、彼らはそれを慎重に重んじることも、価値あるものと思うこともせず、卓越した慈愛を無視したからである。それ故、善を投げ捨て、まるで吐き出す者たちには、すべての者が、当然、神の正しい裁きへと陥るであろう⁸⁴。

⁸³ 『異端反駁』第3巻25章4節には次のように記されている。「それ故、すべての者たちに好意により自分の太陽を昇らせ、義人の上にも、不正な者たちの上にも雨を降らせる神は、同等にその好意を得させ、同様に、その与えられた地位に従って行動することなく、(神)の好意に反して、享樂と放縱を保ち続けている(者たち)、自らにこれほど慈悲深くして下さった方をまだ冒瀆している者たちを裁くであろう。」

AH3.25.4: Qui igitur solem suum oriri facit omnibus benigne Deus, et pluet super iustos et iniustos, iudicabit eos qui ex aequo benignitatem eius percipientes, non similiter secundum dignationem munerationis eius conuersati sunt, sed in deliciis et luxoriis uersati sunt aduersus beniuolentiam eius, adhuc et blasphemantes eum qui tanta beneficia in eos fecerit.

⁸⁴ AH4.37.1: Et propter hoc consilium quidem bonum dat omnibus; posuit autem in homine potestatem electionis, quemadmodum et in angelis – etenim angeli rationabiles –, uti hi quidem qui obaudissent iuste bonum sint possidentes, datum quidem a Deo, sarvatum vero ab ipsis; qui autem non obaudierunt iuste non inuenientur cum bono et meritam poenam percipient, quoniam Deus quidem debet benigne bonum, ipsi vero non custodierunt diligenter illud neque pretiosum arbitrati sunt, sed supereminentiam bonitatis contempserant. Abjicientes igitur bonum et quasi respuentes, merito omnes <in> justum iudicium incident Dei.

この引用の中で、特に重要となるのが「神は好意 (benignitas) をもって善を与えた」という部分である。すなわち、神は「好意」を持って、人間に「善」を与える方であり、人間はそれを受ける者である。この神が「好意」(benignitas) 的に人間と関わることも、エイレナイオスにおける重要な神観のひとつとすることができるだろう。

このように、エイレナイオスにおける「善き神」は、どこまでも「好意」を持って人間に接するのであり、そこに「分け隔て」のようなものはない。けれども、人間の側はそうではない。エイレナイオスは、神から「好意」(benignitas) をよって「善」を与えられた人間の2つの態度を記している。それは、一方である者は「神に聴き従い善を持つ者」となり、また他方である者は、「善を行うことを無視した者」となるという2つである。この人間の2つの態度は、エイレナイオスの神観と密接に関係する。それは、先の引用のなかに、次のように記されていたことから理解することができる。

聞き従わなかった者たちは、善とともにないことが分かり、そして当然の罰を受け取るようになるのである。なぜなら、神は好意をもって善を与えたが、彼らはそれを慎重に重んじることも、価値あるものと思うこともせず、卓越した慈愛を無視したからである。

一見、「善」を行わない者に、「罰を与える」ことは「分け隔て」があるように感じる。けれども、あくまでも「善い神」は、すべての人間に「好意的」に接し「善」を与えるのである。その神に応えることをしないことによって与えられる「罰」は、やはり人間の側に「責任」があるのである。この「責任」とは、与えられた「自立性」を神に従うことのために用いる「責任」である。その「責任」を放棄した者たちは、「自らの選択」によって、神の好意による「善」を「慎重に重んじることも、価値あるものと思うこともせず、卓越した慈愛を無視した」ことにより、「罰」が与えられるのであるから、決して神が人間を「分け隔て」しているのでも「無慈悲」になっているのでもない。

そして、まさに、このような違いが生じることも、その根底には「神が強制をしない」ということがある。これはまた「与えたのは神であるが、守るのは彼ら自身の方」であると語られていることの中にも示されている。つまり、神が人間を自由な存在として造り「自立性」を与えたのは、その「自立性」を用いて、神に強制されてではなく、人間自らが「善」を選び取り、成長していくためであったと理解することができる。

1.4. 『異端反駁』第4巻37章1節から4節における神の「助言」

次いで、私たちは次のことを問わねばならないだろう。それは『善き神』は人間に自立性という能力を与え、人間に好意的に接し、善を与えたが、その後、人間はすべてにおいて自らの責任のもとで生きるしかないのか」という点である。その答えとして、神は『強制しない』存在であるが、人間を創造し、『自立性』を与えた状態で、放任したわけではない」ということができる。その理由の確証となる箇所に向けたい。エイレナイオスは『異端反駁』第4巻37章2節のなかで、次のように述べている。

そして、この故に、預言者たちは義を行い、善のために働くように人々を促した。私たちが多くのことで明らかにしたように、これが私たちのうちにあり、また、私たちは、多くの不注意のために忘れてしまい、また善い助言に欠けるようになっていからである。善い神は、預言者たちを通して、善い助言を与えようとしていたのである⁸⁵。(下線筆者)

このように、神は旧約の時代にあつて、預言者たちを通して、「善の方向」へと進むように「助言」(consilium)をして促していたことが分かる⁸⁶。更に、『異端反駁』第4巻37章3節では次のように加えられている。

そして、この故に主も「あなたたちの光が、人々の前で輝くように。あなたたちの善い行ないを見て、天におられるあなたたちの父を輝かせるためである」と言ったのである。また「あなたたちは、酩酊や不節制や世俗の心配で心を煩わせないように気をつけなさい」。そして「あなたたちは、腰に帯を締め、灯火をともしなさい。そして、あなたたちは、自分たちの主人が婚宴から戻り、戸を叩くなら、彼のために開けようと待っている人々のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、そのようにしているのを見るしもべは幸いである。また言われた。「自分の主人の意志を知らながら、行わなかったしもべは、多く鞭で打たれるであろう。また「私に『主よ、主よ』』と言いながら、あなたはなぜ行わないのか」と言っている。そしてまた「もし、しもべが彼の心の中で、私の主人は遅れると言い、仲間のしもべを殴ったり、大食をしたり、飲んだり、酔ったりし始めるなら、彼の主人は予期しない日に

⁸⁵ AH4.37.2 : Et ideo prophetae [bonum quoque] hortabantur homines justitiam agere bonumque operari, sicut per multa ostendimus, quia in nobis sit hoc et propter multam negligentiam in oblivionem incidimus et consilio egeamus bono: propter quod bonus Deus praestabat bonum consilium per prophetas.

⁸⁶ Eric Osborn, *Irenaeus of Lyons*, Cambridge, 2001, 232-233. 但し、人間がこの段階で「神の助言」により「善」を選択することができるのは、後に『異端反駁』第4巻39章1節に記されている「善」と「悪」を知る知識としての「二重の知覚」とは区別されるものである。

来て、彼を切り離し、また偽善者たちと同じ一員とみなすであろう」。そして、このようにことはすべて人間の自由と自立性と、神が助言を与える方であることを明らかにしている。〔神は〕自分に服従するように、私たちに勧告し、不信から引き離そうとはするが、厳しく強制はしない〔方〕である⁸⁷。(下線筆者)

ここでエイレナイオスは、イエスの教えを引用し、旧約の時代の預言者たちだけではなく、イエスもまた、人々が善を行うように「助言」を与えていたことを明らかにしている。この引用においては、神が「強制をしない」方であることに加えて、「助言」「勧告」を与える方であることが強調されている。エイレナイオスはイエスの教えに続けて、教会の時代のパウロを引用し、また他の新約聖書からも引用をする。『異端反駁』第4巻37章4節には、次のように記されている。

事実、福音そのものも、もし〔人が〕これについて行きたくないと望むなら、事実それは許されているが、役に立たないことである。神への不従順と善の喪失は、人間の能力に属することであるが、しかし、それほど多く引き起こすことではなく、危害と損失〔をもたらす〕。そして、この故にパウロは「すべてのことは許されている。しかし、すべてが益になるのではない」と言った。そして、人間の自由を述べ、神が人間に強制をしないので、それ故、すべてが益となり、また、彼が「無益」を明らかにしようとしたのは、私たちが自由を、悪徳を覆うために悪用しないためであって、これが無益なことである。そして、また「あなたがたは、それぞれ自分の隣人に真実を語りなさい」。また「すべての悪意ある会話や、卑劣な、あるいは無駄話、あるいは狡猾な〔会話〕ではなく、むしろ多くの感謝が、あなたたちの口から出るように」と言った。また、「あなたたちは、以前は暗闇であったが、今は、主にあって光である。あなたたちは、宴会、また酩酊、淫乱と情欲のうちにはなく、また怒りと嫉妬をやめ、光の子らしく立派に歩みなさい」。「確かに、このような者

⁸⁷ AH4.37.3 : Propter hoc autem et Dominus : Luceat lumen uestrum, dicebat, coram hominibus, ut videant bona facta vestra et clarificent Patrem vestrum qui in caelis est. Et : Attendite vobis, ne forte grauentur corda vestra in crapula et ebrietate et sollicitudinibus saecularibus. Et : Sint lumbi vestri praecincti et lucernae ardentes, et vos similes hominibus expectantibus dominum suum, quando revertatur a nuptiis, ut cum venerit et pulsaverit aperiunt ei. Beatus servus ille quem, cum venerit dominus, invenerit ita facientem. Et iterum : Servus qui scit voluntatem domini sui et non facit vapulabit multas. Et : Quid mihi dicitis : Domine, Domine, et non facitis quae dico? Et iterum : Si autem dicat servus in corde suo : Tardat dominus meus, et incipiat caedere conservos et manducare et bibere et inebriari, veniet dominus ejus in die qua non sperat, et dividet eum et partem ejus cum hypocritis ponet. Et omnia talia quae liberum et suae potestatis ostendunt hominem et quia consilio instruat Deus, adhortans nos ad subjectionem sibi et avertens ab incredulitate, non tamen de violentia cogens.

もいたが、しかし、私たちは主の名によって洗われ、聖なる者とされた」。それ故、もし、これらのことを行うこと、もしくは、行わないことが、私たちのうちにあるなら、使徒、また、それ以上に主自身は、どのような理由があり、あることを行うように、あることを避けるように、助言を与えたのであろうか⁸⁸。(下線筆者)

これまで見たように、神は旧約の時代では預言者を通して、「自立性」を持つ人間が「善」を行うことができるように「助言」し、その後はイエスによって、更にパウロと教会の時代でも、続けて人間に「助言」を与えていた。エイレナイオスにおける重要な神観として「強制しない神」を挙げることができるが、神は「強制しない方である」と言うとき、それは人間に全く関わろうとはしないことを意味してはいない。確かに神は「強制」はしないが、むしろ、歴史の全体を通して、「自立性」を有する人間が、「善」から離れないように「助言」(consilium)を与え続けているのである。この助言を与える神もまた、エイレナイオスにおける重要な神観のひとつである。この「助言」が与えられるからこそ、人間は、神から与えられた「善」を保持することができる。『異端反駁』第4巻37章4節の最後の部分に注目したい。

けれども、人間は初めから自由な判断をする者であった。それは〔人間が〕似せて造られた神が、自由な判断をするからである。善を保持することを、常に彼に助言し、(この善は)神に対する従順によって全うされるものである⁸⁹。(下線筆者)

続く『異端反駁』第4巻37章5節において、エイレナイオスは、人間の自立性は「行ない」に限定されたものではなく、「信仰」においても自立的であることについて言及している。

⁸⁸ AH4.37.4 : Etenim ipsum Evangelium si noluerit quis sequi, licet quidem ei, non tamen expedit. Inobaudientia enim Dei et amissio boni est quidem in hominis potestate, laesionem autem et damnum non quamlibet infert. Et propter hoc Paulus ait : Omnia licent, sed non omnia expediunt, et libertatem referens hominis, quapropter et omnia licent, non congruente eum Deo, et id 'non expedit' ostendens, ut non ad velamen malitiae abutamur libertate : non enim hoc expedit. Et iterum ait : Loquimini veritatem unusquisque cum proximo suo. Et : Omnis sermo malus de ore vestro non exeat, aut turpitudinis, aut vaniloquium, aut scurrilitas, quae ad rem non pertinet, sed magis gratiarum actio. Et : Eratis enim aliquando tenebrae, nunc autem lumen in Domino : quasi filii lucis honeste ambulate, non in comessationibus et ebrietatibus, non in cubilibus et in libidinibus, non in ira et zelo. Et haec quidam fuistis, sed abluti estis, sed sanctificati estis in nomine Domini nostri. Si igitur non in nobis esset facere haec aut non facere, quam causam habebat Apostolus, et multo prius ipse Dominus, consilium dare quaedam quidem facere, a quibusdam vero abstinere?

⁸⁹ AH4.37.4 : Sed quoniam liberae sententiae ab initio est homo, et liberae sententiae est Deus cujus ad similitudinem factus est, semper consilium datur ei continere bonum, quod perficitur ex ea quae est ad Deum obaudientia.

そして、行ないにおいてだけではなく、信仰においても、主は人間が自由で自立性があるように、「あなたの信仰の通りに、あなたになるように」と言って、人間が自分の考えを持っていないために、自分の信仰を明らかにしたのである。「信じる者には、すべてが可能である」。また「行きなさい。あなたの信じるようになるように」〔と言った〕。そして、このようなことはすべて、人間が信仰に〔おいて〕自立的であることを明らかにしているのである⁹⁰。

『異端反駁』第4巻37章1節でも示されていたように「神は好意をもって善を与えた」のであって、「善そのもの」を人間が造り出すのではない。あくまでも人間には、神から与えられた「自立性」を用いて、「善」を「保持すること」が求められていた。そのために、神が人間に「助言」を与え、その「助言」に従って、神に服従するときに、人間は「善」を全うすることができるのである。また神が人間に与えた「善」の最も中心にあることは、「神に対する従順」であり、「神に対する服従」を保持することが、そのまま人間の生命を保持する条件であった⁹¹。

このように神が人間に「強制しない」方であり、さらに「好意を持って」接し、それだけでなく「助言」を与え続けるように人間と接するので、人間は「善」を行ない、それを「保持」することができるのである。それでは、神がそのように人間に接することには、どのような目的があるのであろうか。私たちは次章において、この点を取り扱うことにしたい。

1.5. 『異端反駁』第4巻37章6節から7節における「善」の訓練と第4巻39章1節にある「二重の知覚」——神から「助言」を与えられた人間の応答——

私たちは、旧約の時代においても、またイエス・キリスト、使徒、そして教会の時代においても、神が人間に「助言」(consilium)を与え続けていることを確認した。人間は、神から与えられる「助言」に従い、「自立性」を用いて何が「善」であるかを判断し、自らの歩み方を決定づける必要があった。それでは「助言」を与えられた人間は、それに対して、

⁹⁰ AH4.37.5 : Et non tantum in operibus sed etiam in fide liberum et suae potestatis arbitrium hominis servavit Dominus, dicens : Secundum fidem tuam fiat tibi, propriam fidem hominis ostendens, quoniam propriam suam habet sententiam. Et iterum : Omnia possibilia credenti. Et : Vade, sicut credidisti fiat tibi. Et omnia talia suae potestatis secundum fidem ostendunt hominem.

⁹¹ これについては『証明』第15章でも述べられている。「そして、神は人にある条件を課した。人が神の命令を守ったなら、そのとき、人は自分が置かれていた状態、つまり不死のままでいつまでもとどまることができる。しかし守らなかったなら、死すべきものとなり、自分の身体がとられた地の中に溶け去ってしまう。〔このような条件を課されたのであった〕〔創2：7、3：19参照〕。『園にあるすべての木からあなたは確かに食べてよい。しかし善と悪の知識の元になる木からだけは食べてはならない。食べる日にはあなたは確かに死ぬであろうから』〔創2：16-17参照〕。これがその命令であった。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、213頁。

どのように応答をするべきであろうか。結論から言えば、神から与えられた「助言」に対して、人間は「善」を保持することに加えて、「善」を行うことを「訓練」をすることが求められている。つまり、神から「助言」が与えられ、「善」に留まることができたとしても、すなわち、「保持する」ことができたとしても、それは常に「自らが善を選び取っていけるようになる」という意味での成長にはならない。そのため、「善」を保持することに加えて、エイレナイオスは『異端反駁』第4巻37章6節と7節において、人間が善を選び取っていくことを「訓練」のように描いている。エイレナイオスは、このことを示すために「反対の意見」を紹介することから始めている。

彼が言うには、天使たちを背くことができるようなものとして造ったはずがないし、人間もすぐに〔主に〕感謝をしないものとして生じたのではない。なぜなら、彼らは理性的なもの、また審査するもの、判断を下すものとして造られたのであって、非理性的なもの、あるいは、自分の意志で決して行うことができず、必然性や力によって善へと引かれる、生命のないもののように、ひとつの考えやひとつのやり方があり、柔軟性がなく、また判断のないもの、造られた以外のものではあり得ないものであるから〔と言うのである〕⁹²。

この引用のなかに「自分の意志で決して行うことができず、必然性や力によって善へと引かれる」とあるように、人間が何が「善」であるかを自ら判断し、「善」に向かって歩むことを否定する者に対して、エイレナイオスは、「もし自らのうちに『善』を持っており、またもし仮に、自らのうちから『善』が生じて来るのであれば、どのようにして人間は、それが『善』であるかを知ることができるか」との反論を次のように述べている。

なぜなら、無知である者に、一体どのような善の享受があるだろうか。それを得ようと努めることがない人々に、この栄光があるだろうか。戦いにおいて、栄冠を得たのではない人々に、何の勝利があるだろうか⁹³。

さらにエイレナイオスは『異端反駁』第4巻37章7節において、次のように語っている。

⁹² AH4.37.6 : Sed oportebat, inquit, eum neque angelos tales fecisse ut possent transgredi, neque homines qui statim ingrati existerent in eum, quoniam tationabiles et examinatores et judiciales facti sunt, et non, quemadmodum irrationabilia sive inanimalia quae sua voluntate nihil possunt facere sed cum necessitate et vi ad bonum trahuntur, in quibus unus sensus et unus mos, inflexibiles et sine iudicio, qui nihil aliud esse possunt praeterquam quod facti sunt.

⁹³ AH4.37.6 : Quae enim fruitio boni apud eos qui ignorant? Quae autem gloria his qui non studuerunt illud? Quae autem corona his qui non eam, ut victores in certamine, consecuti sunt?

それ故、よい戦士が不滅性への戦いへと、栄冠を受け、その栄冠を貴重なものもの
であると考えるように、私たちを励ましているのである。なぜなら、確かに戦いを
通して私たちにもたらされるものであり、自発的に生じてくるものではないからで
ある。また、戦いを通してもたらされるために、それだけより尊いものであり、よ
り尊いので、私たちは常にこれをくさらに>愛するのである⁹⁴。

エイレナイオスは、この箇所でも「善」を得ることを「戦い」に例えている。これは人
間にとって「善」を選び取っていくことの困難さを表現したものに他ならない。けれども、
その困難な戦いを通して「善」を得るからこそ、人間は神に従う「善」の尊さを知り、「善」
を、すなわち、神を愛することへと繋がっていくのである。更に、エイレナイオスは次の
ような説明も加える。

また別〔の観点〕に、確かに私たちの善が訓練されていないものであるとすれば、
それは無分別のものであったであろう⁹⁵。

このようにエイレナイオスは人間が「訓練」として、またあるときには「戦い」として、
「善」を追い求めて行くことの必要性を記している。この「善」を追い求めるということ
こそが、神の「助言」に対する応答である⁹⁶。

このように人間が、神から与えられた「助言」に従って「善」を追い求めているときに、
神はどのように人間を見ているのだろうか。まず『異端反駁』第4巻37章7節の次の引用
を見たい。

それ故、神は私たちのために、これら全てを耐え忍んだ。それは私たちがすべての
ことを通して教えられ、すべてのことに注意するようになり、理性的に神を愛する
ことを徹底的に教わり、すべてにおいて神の愛のうちに留まるためであった。事実、
神は人間の背信への寛大さを保ち、人間はそれ〔背信〕を通して、教育されるので
あり、それは預言者も「お前の背教が、お前を教育した」と言っている通りである。

⁹⁴ AH4.37.7: Bonus igitur agonista ad incorruptelae agonem adhortatur nos, uti coronamur et pretiosam arbitremur coronam, videlicet quae per agonem nobis acquiritur, sed non ultro coalitam; et quanto per agonem nobis advenit, tanto est pretiosior; quanto autem pretiosior, tanto <magis> semper eam diligamus.

⁹⁵ AH4.37.7: Et alias autem esset videlicet nostrum insensatum bonum, quod esset inexercitatum.

⁹⁶ 『異端反駁』第4巻37章7節において、エイレナイオスは「善」を行うことと、「神を愛する」ことを言い換えて記しているように思われる。

神は人間の完成のため、また〔神の〕配剤⁹⁷の効果的現れのために全てのことを予め定めたのであり、それは善が明らかにされ、そして義が全うされ、そして教会が神の御子のかたちの姿へと結合され、人間がいつかついに神を見て、そして把握するまでに成熟するほどのものとなるためであった⁹⁸。

このように、神は人間が「訓練」あるいは「戦い」を通して「善」を追い求めているときに、その人間の失敗をも通して、成長することを望み、耐え忍んでいるのである。それでは、私たちは、果たしてこの観点からどのように「墮罪」を考えればよいのであろうか。ここで重要なエイレナイオスの神観が語られる。それが神の「寛大さ」(magnanimitatem)である。なぜ重要であるかと言えば、確かに「墮罪」した人間に対して、神は「寛大さ」を持ち、人間の「墮罪」もしくは「失敗」を忍耐してくださっているということである⁹⁹。

それでは神が人間の「墮罪」や「失敗」を「寛大」に忍耐してくださることの理由はなんであろうか。それは、人間が「神の前に人間が誇ることがないように」ということを学ぶ必要があったからである。このことの故に、人間は、罰せられるというようなことはなく、むしろ、「墮罪」を含めた様々な失敗を通して、何が「善」であり、どのように神を愛するのかを学んでいくのである。このように「墮罪」は、人間が犯す失敗のひとつとして取り上げられる。それはまた「人間の教育」のためであったことも記されている。人間が「失敗」をも通して成長するというとき、それは「不従順の悪いこと」が何であるのか、人間が理解する必要があったことが示されている。つまり「失敗」が文字通り、単なる「失敗」であるのではなく、「何をして失敗」をしたのかという理解が、人間の成長にとっては必要不可欠な要素なのである。この「失敗」という「教育」によって、幼児であった人間は、成熟した大人へと成長していくのである。「墮罪」の出来事は、アダムの後全人類に共通したものであり、すべての人間は神に背教した¹⁰⁰。エイレナイオスは「墮罪」をした人

⁹⁷ ここに神の経緯を意味する *dispositio* が使われている。翻訳上では「配剤」と訳した。

⁹⁸ AH4.37.7: *Pro nobis igitur omnia haec sustinuit Deus, uti per omnia eruditi in omnibus in futurum simus cauti et perseveremus in omni ejus dilectione rationabiliter edocti diligere Deum, Deo quidem magnanimitatem praestante in apostasia hominis, homine autem erudito per eam, quemadmodum et propheta ait: Emendabit te abscessio tua, praefiniente Deo omnia ad hominis perfectionem et ad efficaciam et manifestationem dispositionum, uti et bonitas ostendatur et justitia perficiatur et Ecclesia ad figuram imaginis Filii ejus coaptetur, et tandem aliquando maturus fiat homo, in tantis maturescens ad videndum et capiendum Deum.*

⁹⁹ けれども、それは神のうちに「怒り」が全くないということではない。「人はこの命令を守らないで、神に背いた。天使に道を誤らせられたのである。この天使は人を妬むようになり、神が人に与えた多くの好意のゆえに羨望をもって人を見るようになり、神の命令に背くようにと人を説き〔創3:1-6、知2:24参照〕、こうして自らを破滅させ、また人を罪人としたのであった。このようにして、その天使はその嘘によって〔ヨハ8:44参照〕罪の頭また源泉となり、神を怒らせて自ら撃たれたものとなり、人が楽とから追放される原因となったのであった。』『使徒たちの使信の説明』、213頁。

¹⁰⁰ ここで「神に背教した」ということは、アウグスティヌスによって教理化された「原罪」の教理とは異なるものである。この点に関しては「2.2.『神化』の過程における人間の墮罪」の項目において後述したい。

間の成長をあたかも一人の人間が幼児として生まれ、それから様々な経験を通して大人へと成長していくように捉えているのである。

このことをより良く理解するために、『異端反駁』第4巻37章7節に後続する箇所である『異端反駁』第4巻39章1節に目を向けたい。

人間は善と悪の知識を受け取った。神に従うことは善であり、そして、神に信頼し、また、神の命令を守ること、これが人間の生命である。神に従わないことが悪であるように、これが死である¹⁰¹。

このように第4巻39章1節の冒頭でエイレナイオスは、人間の生命は神に従うことであり、その反対に、人間にとっての悪は神に従わないことだと述べる。続いてエイレナイオスは次のように述べる。

それ故、神が寛大さを示してくださったので、人間は従順の善と、不従順の悪を知り、そのため、心の目が、両方からの試みを受けるとき、判断を下して、よりよい方を選び、決して神の命令に対して、無気力や無視するものとならず、また、自分の生命を取り去ることが、すなわち、神に従わないことが悪であることを試みによって学び、いつか、それに触れることをせず、自分の生命を保護すること、〔すなわち〕神に従うことが善であると知り、十分な細心の注意をもって守るためであった。この故に、両方の知識を持つ二重の知覚を〔人間は〕持っている。〔それは〕よりよいものの選択を行うためであった¹⁰²。(下線筆者)

この箇所にある「二重の知覚」は、まさしく「善」と「悪」の理解と言い換えることができるであろう。エイレナイオスは、人間が神への従順によって「善」を学び、反対に、不従順によって「悪」を知ることを述べている。そして、何が善であり、何が悪であるかを知っていくなかで、「善」は自分の生命を守るものであり、「悪」は自分の生命を取り去

特に脚注142を参照。

¹⁰¹ AH4.39.1 : *Agnitionem autem accepit homo boni et mali. Bonum est autem obaudire Deo et credere ei et custodire ejus praeceptum, et hoc est vita hominis, quemadmodum non obaudire Deo malum, et hoc est mors ejus.*

¹⁰² AH4.39.1 : *Magnanimitatem igitur praestante Deo, cognovit homo et bonum obaudientiae et malum inobaudientiae, uti oculus mentis utrorumque accipiens experimentum electionem meliorum cum judicio faciat, et nunquam segniter neque negligens praecepti fiat Dei ; et id quod aufert ab eo vitam, hoc est non obaudire Deo, experimento discens quoniam malum est, neque temptet quidem illud unquam, quod autem conservatorium vitae ejus est, obaudire Deo, sciens quoniam bonum est, cum omni intentione diligenter custodiat. Propter hoc et duplices habuit sensus utrorumque agnitionem habentes, ut electionem meliorum cum disciplina faciat.*

るものであることを学び、それを理解していく。このことを繰り返すうちに、人間は「よりよいもの」を選択するように成長し、「悪」に触れないようにさらに成長を続ける。そのようにして、人間は「二重の知覚」を得るに至るのである。幼児の状態として造られた人間は、その創造された時点においては、まだ「二重の知覚」を有してはいない¹⁰³。

もし、神が人間を自身の思うように「強制的に」動かし、人間に対して「好意」を持たず無関心であり、「失敗」をすぐに断罪するような神であったとしたら、どうであつたらうか。そうであれば、人間は何が「善」であり、何が「悪」であるかの知識には至らないのである。神は義しい神であるので、本来、罪に対しては「怒り」を持つのであるが¹⁰⁴、神は人間が成長することを望んでくださっているが故に、人間の「失敗」に対して「寛大さ」を持って「好意的」に人間に接する神なのである。

このような神に守られつつ人間が、この「二重の知覚」を有することができたとき、人間は神に至る成長のプロセスにおいて、ひとつ段階を昇ったということができるとであろう。

1.6. 『異端反駁』第4巻38章1節から2節における「父の霊」の享受

エイレナイオスの抱いていた神観が「強制せず」、「好意を持って善を与え」、「絶えず助言し」、「寛大さ」を持ちつつ、人間が成長するために、人間と関わりを持つ神であるので、人間が「二重の知覚」を有するようになることが可能となったことは以上に見た通りである。

次いで「二重の知覚」を有した人間が、どのような成長のプロセスを通るのかを考察していきたい。『異端反駁』第4巻38章1節において、エイレナイオスは「なぜ神は人間を初めから完全なものとして造らなかったのか」という問題についての考察を始めている。

ちょうど母親が幼児に完全な食物を与えることができても、〔幼児は〕まだ堅い

¹⁰³ 『異端反駁』第4巻41章2節には、次のように記されている。「それ故、言うなれば、本性に従えば、すなわち、創造に従えば、私たちは皆、神の子らである。私たちは皆、神によって造られたのであるから。けれども、従順と教えに従えば、すべての者が神の子らではなく、神を信じ、神の意志を行う者である。しかし、信じることもなく、神の意志を行うこともしない者たちは、悪魔の業を行っているので、悪魔の子ら、また使いである。」(AH4.41.2: *Secundum igitur naturam, quae est secundum conditionem, ut ita dicam, omnes Dei filii sumus, propter quod ab eo omnes facti sumus. Secundum autem dictoaudientiam et doctrinam, non omnes filii Dei sunt, sed qui credunt ei et faciunt voluntatem ejus. Qui autem non credunt et non faciunt ejus voluntatem filii et angeli sunt diaboli, secundum id quod opera diaboli faciunt.*) このように「二重の知覚」を有するに至った人間は、本性として与えられていた「神の子ら」としての在り方に加えて、「教えによって」神の子らとされる。このようにエイレナイオスにおいては2つの「神の子ら」としての人間の在り方が語られている。第1には、人間が造られたときに与えられた「本性」としての「神の子ら」であり、第2には、「神の子ら」という本性が与えられた人間が、成長し、神の教えに従順に従うことによって与えられる「神の子ら」としての在り方である。

¹⁰⁴ 脚注100を参照。

食物を受け取ることができず、同様に、神自身も初めから人に完全さを与えることはできたが、人がそれを受け取ることができなかつたのである。つまり幼児であった〔からである〕¹⁰⁵。

このように、人間が初めから完全なものとして造られなかつたのは、神の側に問題があるのではなく、むしろ、造られる人間の側が神から与えられる「完全さ」を受け取ることができなかつたためであることが示されている¹⁰⁶。それでは、どのようにすれば神から与えられる「完全さ」を人間は受け取ることができるようになるだろうか。エイレナイオスは、ここで2つの方法を語っている。

まず1つ目は『異端反駁』第4巻38章1節において取り扱われていることである。それは、「神が御子を人間として私たちに与えた」ということである。『異端反駁』第4巻38章1節には、次のように記されている。

そして、この故に、父の完全なパンは、まるで幼子に対するように、彼自身を私たちに乳として与えた。すなわち、人間として来たことであるが、彼の肉という、言わば乳房によって養育され、そして、このような授乳を通して、神の御言葉を食べ、また飲むことに慣れて、また、このようにして不滅性のパン、すなわち、父の聖霊を自分自身のうちに保つことができる〔ようになる〕ためである¹⁰⁷。

このように父なる神が、御子を人間として私たちに与え、人間が神の御言葉を食べ、飲むということに慣れることによって、「不死性のパン」すなわち「父の聖霊」を自分のうちに保つことができるようになるということが、まず初めにある¹⁰⁸。

そして2つ目は、「弱いものであつた人間が訓練を受けることによって」ということである。『異端反駁』第4巻38章2節には、次のように記されている。

¹⁰⁵ AH4.38.1 : *Quemadmodum enim mater potest quidem praestare perfectam escam infanti, ille autem adhuc non potest robustiorem se percipere escam, sic et Deus ipse quidem potens fuit homini praestare ab initio perfectionem, homo autem impotens percipere illam : infans enim fuit.*

¹⁰⁶ 神は人間を初めから完全なものとしては造らなかつたが、人間が完全さに至るために「自由な意志」を与えていた。またアダムとエバには成長と発展を通して完全な神のかたちに至る可能性が造られた状態で備えられていた。Christopher T. Bounds, *Competing Doctrines of Perfection*, 406. James G.M. Purves, *The Spirit and the Imago Dei : Reviewing the Anthropology of Irenaeus of Lyons*, *The Evangelical Quarterly* 68, 1996, 106.

¹⁰⁷ AH4.38.1 : *Et propter hoc, quasi infantibus, ille qui erat panis perfectus Patris lac nobis semetipsum praetavit, quod erat secundum nomen ejus adventus, ut, quasi a mamilla carnis ejus nutriti et per talem lactationem assueti manducare et bibere Verbum Dei, et eum qui est immortalitatis panis, qui est Spiritus Patris, in nobis ipsis continere possimus.*

¹⁰⁸ Gustaf Wingren, *Man and the Incarnation*, 70.

そして、この故にパウロはコリント人に「私はあなたたちに乳を飲ませて、食物は与えなかった。まだ食物を得ることができなかったからである。」と言っている。即ち、「あなたたちは、主が人間となって来たことを学んだが、あなたたちの弱さのために、父の聖霊はまだ、あなたたちの上に休息してはいない。なぜなら、あなたたちのうちに、妬み、不和、そして不一致があるなら、あなたたちは肉的であって、人間に従って歩んでいる」と言っている。すなわち、彼らの不完全さと振る舞いの弱さのために、父の聖霊は、まだ彼らと共にいなかった。それ故、使徒は食物を与えることができた。使徒たちが手を置いた人々は誰でも、聖霊、すなわち、生命の食物を受けたのであるが、彼らの方で、神に向かう振る舞いを持つには、感覚がまだ弱く、訓練されていないために、それを受けることができなかったのである¹⁰⁹。

つまり、エイレナイオスは「すでに使徒たちが父の聖霊を受けることができたのは、人間として成長していたからである¹¹⁰」と説明する。使徒以外の人間、すなわち、まだ弱く「訓練」が必要な者たちは、「善」を求めることにおいて「訓練」を重ねることによって、「父の聖霊」を受けることができるのである。これまでのところを短くまとめるならば、神は人間に「善」が何であるかを示した。また、単に示しただけではなく、人間が誤った方向に進むのではなく、「善」を選び、「善」を保持することができるように「助言」(consilium)を与え続けた。人間にとっては、この「助言」に従って歩むことは「訓練」であり、また「戦い」である。もしくは、これを人間が神から受ける「教育」と言い換えることもできるであろう。人間は、神からの教育を受け、成長し、そして「父の霊」である聖霊を受ける存在として、初めの段階においては「幼児のような存在」として創造されたのである。

¹⁰⁹ AH4.38.2 : Et propter hoc Paulus Corinthiis ait : Lac vobis potum dedi non escam, nondum enim poteratis escam percipere, hoc est eum quidem adventum Domini qui est secundum hominem didicistis, nondum autem Patris Spiritus requiescit super vos propter vestram infirmitatem. Ubi enim zelus et discordia, ait, in vobis et dissensiones, nonne carnales estis et secundum hominem ambulatis? hoc est quoniam nondum Spiritus Patris erat cum ipsis propter imperfectionem eorum et infirmitatem conversationis. Quemadmodum igitur Apostolus quidem poterat dare escam-, quibuscumque enim imponebant Apostoli manus accipiebant Spiritum sanctum, qui est esca vitae-, illi autem non poterant accipere illud quoniam infirmum adhuc et inexercitabilem sensum erga Deum conversationis habebant.

¹¹⁰ エイレナイオスは使徒たちが成長したことも、やはり聖霊が与えられたからである。この点について、エイレナイオスは『異端反駁』第3巻1章1節において、次のように記している。「(使徒たちは) 私たちの主が死者からよみがえり、そして聖霊が上に降ったときに、高みからの力をまとい、すべてについて満たされ、完全な知識を持ち、その後、神からの私たちにあって善いことを告げ知らせながら、また天的な平和を人々に告げながら、地の果てにまで出て行ったのである。彼らは皆が共に、そして、彼らの各々が、神の福音を持って (出て行ったのである)。AH3.1.1 : Postea enim quam surrexit Dominus noster a mortuis, et iuduti sunt superueniente Spiritu Sancto uirtutem ex alto, de omnibus adimpleti sunt et habuerunt perfectam agnitionem ; exierunt in fines terrae, ea quae a Deo nobis bona sunt euangelizantes et caelestem pacem hominibus adnuntiantes, qui quidem et omnes pariter et singuli eorum habentes Euangelium Dei.

その後、教育のためである「訓練」によって、何が「善」であり、何が「悪」であるのかを学んで行くことによって、人間は「父の聖霊」を受けられることができるように整えられ、成長していくのである。特筆すべきであるのは、エイレナイオスにおいて「何が善であり、何が悪であるのか」を人間が知ることができるために、御子が十字架にかかり、「悪」の知識を滅ぼし、「善」の知識を人々に与えたと考えられていることである。エイレナイオスは『証明』第34章において、御子の十字架による死を取り上げている。

そして、木を通して仕上げられた罪は、〔十字架の〕木の従順、つまり〔人の子の〕神への従順によって打ち砕かれたのであった。人の子が十字架に釘づけにされて悪の知識を滅ぼし、善の知識をもたらして〔人々に〕与えたからである。悪とは神への不従順であり、神への従順こそが善なのである¹¹¹。

御子の十字架上での死は、「悪の知識」を滅ぼし、「善の知識」をもたらすことと語られている。ここで「神への従順こそが善」とあるように、御子の十字架の死により、人間に「神への従順としての善」を与えることで、人間は再び神に向かって成長することができるのである。

1.7. 『異端反駁』第4巻38章3節から『異端反駁』第4巻39章3節における「神の両手」と人間の成長——人間の成長を不断に見守る神——

これまでエイレナイオスは、人間がどのように成長をして「父の霊」である聖霊を受けらるに至るかという視点、すなわち、人間の方に焦点を当ててきたと考える。けれども『異端反駁』第4巻38章3節の冒頭には、次のように記されており、人間の方に当てられていた焦点が、神の側から見た人間の成長に移ったと考えることができる。

神の周りには、力と知恵と善が同時に示され、力と善は、まだ存在しないものを、自発的に創造し、また作成する。知恵は生じたものを確かに備え付け、調和したもののうちに〔示される〕。それらのものは、神の並外れた好意の故に、成長を受け取り、そして長い期間、持続して、造られざる方の栄光を得ること〔になっている〕。〔それは〕神が悪意なしに善を与えるからである¹¹²。

¹¹¹ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、225頁。

¹¹² AH4.38.3: Circa Deum virtus simul et sapientia et bonitas ostenditur, virtus quidem et bonitas in eo quod ea quae nondum erant voluntarie constituerit et fecerit, sapientia vero in eo quod apta et

ここでエイレナイオスは「神の両手」という言葉こそ使っていないものの、神の周りに存在する「力と善」としての御子と、「知恵」としての聖霊のことを述べていることは、確かであると思われる。これと類似した箇所である『異端反駁』第4巻20章1節には次のように記されている。

神は地の泥を取り、人を形造り、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。それ故、私たちが造ったのも、私たちが形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもて予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の両手を持っていないかのように、これら〔天使たち〕を必要としたのでもない。神の側には常に御言葉と知恵、御子と聖霊〔がおり〕、〔御言葉と知恵〕によって、また、〔御言葉と知恵〕のうちに、また自発性を持って万物を造り、〔御言葉と知恵〕に向かって語り、「私たちがかたち〔似像〕に、また類似性に人を造ろう」と言ったのであり、ご自身で創造されたものの存在と、造られたものと、世にある美しいものの型をご自身から取ったのである¹¹³。(下線筆者)

このようにエイレナイオスは、「神の寛大さ」に与りつつ成長をしていく人間は、そもそも「神の両手」の片方の手である「力と善」としての御子と、また、もう片方の手である「知恵」としての聖霊の働きによって、創造され、常に支えられていたことを明記している。さらに、この点について第4巻以外の箇所であるが『異端反駁』第5巻28章4節には、次のように記されている。

初めに、人間は、神の両手、すなわち、御子と聖霊によって造られ、すべての時において神のかたちと類似性に従って造られた¹¹⁴。(下線筆者)

consonantia quae sunt fecerit, quae quidem propter immensan ejus benignitatem augmentum accipientia et in multum temporis perseverantia infecti gloriam referunt, Deo sine invidia donante quod est bonum.

¹¹³ AH.4.20.1 : Et plasmavit Deus hominem, limum terrae accipiens, et insuffavit in faciem ejus flatum vitae. Non ergo angeli fecerunt nos neque plasmaverunt nos, neque enim angeli poterant imaginem facere Dei, neque alius quis praeter verum Deum, neque virtus Longe absistens a Patre universorum. Neque enim indigebat horum Deus ad faciendum quae ipse apud se praefinierat fieri, quasi ipse suas non haberet manus. Adest enim ei semper Verbum et Sapientia, Filius et Spiritus, per quos et in quibus Omnia libere et sponte fecit, ad quos et loquitur, dicens: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostrum, ipse a semetipso substantiam creaturarum et exemplum factorum et figuram in mundo ornamentorum accipiens.

¹¹⁴ AH5.28.4 : Et propter hoc in omni tempore, plasmatus in initio homo per manus Dei, hoc est Filii et Spiritus, fit secundum imaginem et similitudinem Dei.

この箇所からも理解できるように、神は人間をただ創造し、その後、人間を放り出したのでも、また人間が神から離れて、自らの判断のみに従って成長していくように仕向けたのでもない。あくまでも御父が自分の両手である「御子」と「聖霊」に語りかけ、人間を創造し、同じく「神の両手」が人間の成長を不断に見守っているのである。だからこそ、エイレナイオスは、人間に、「自分を造った『神の両手』が自らを成長させてくれることを期待するように」と勧めているのである。『異端反駁』第4巻39章2節を読むと、「神の両手」による「人間の創造」とは、人間が形造られたときだけではなく、それ以後、人間が完成に向けて成長していくすべての過程をも含んでいることを理解できる。

それ故、もしあなたが神の業であるなら、あなたの創造者がすべて時宜にかなう時に行う手に期待しなさい。時宜にかなう時というのは、彼〔神〕がもたらし、あなたに及ぶ時である。そして、堅くなり、彼の指の跡を失わないように湿り気を持ちつつ、あなたの柔らかく、また扱いやすい心を保ち、また創造者があなたを形造った〔その〕姿を守りなさい。結合を保ちつつ、完成へと昇って行くでしょう。あなたのうちの粘度は、神の技術によって隠されているのである。実体は、彼〔神〕の手が製作し、あなたの内側にも、外側にも純金と銀を塗り、王自身があなたの美しさを熱望するほどにあなたを飾るであろう。しかし、もしあなたがたちまち頑になり、彼の性質を吐き出し、そして自分が人間として造られていることで、彼に対して感謝をしない者となるのであれば、あなたは神に対し感謝をしない者となり、彼の性質と生命を同時に失ったのである。なぜなら、行うことは神の好意に固有のものであり、行われることは、人間の本性に固有のことである。従って、もしあなたが自分のもの、すなわち、神に対する信仰と服従を引き渡すなら、あなたはその技術を受けて、神の完全な作品となるであろう¹¹⁵。(下線筆者)

さらに『異端反駁』第4巻39章3節の冒頭には、「神の両手」に期待しない者について

¹¹⁵ AH4.39.2 :Si ergo opera Dei es, manum artificis tui exspecta opportune omnia facientem, oppotune autem quantum ad te attinet qui efficeris. Praesta autem ei cor tuum molle et tractabile et custodi figuram qua te figuravit artifex, habens in temetipso humorem, ne induratus amittas vestigia digitorum ejus. Custodiens autem compaginationem ascendes ad perfectum ; ab artificio enim Dei absconditur quod est in te lutum. Fabricavit substantiam in te manus ejus ; liniet te ab intus et a foris auro puro et argento, et in tantum ornabit te, ut et ipse Rex concupiscat speciem tuam. Si vero statim obduratus respuas artem ejus et ingratus exsistas in eum quoniam homo factus es, ingratus Deo factus, simul et artem ejus et vitam amisisti. Facere enim proprium est benignitatis Dei, fieri autem proprium est hominis naturae. Si igitur tradideris ei quod est tuum, hoc est fidem in eum et subjectionem, percipies artem ejus et eris perfectum opus Dei.

も言及されている。

しかし、もし彼〔神〕を信頼せず、彼〔神〕の手を逃れるなら、未完成なものの原因は、従わなかったあなたのうちにあるのであって、招いた彼〔神〕のうちにあるのではない¹¹⁶。

このように、父なる神を信頼する者は、「神の両手」である御子と聖霊の働きによって、完成へと導かれていく。一方、「神の両手」から逃げようとする者は「未完成」のままとなるのである。「未完成」となった原因は、神にあるのではなく、あくまでも父なる神に従おうとしなかったその者のうちに帰されるのである。『異端反駁』第4巻39章2節では、「未完成」の状態にあることを「彼の性質と生命を同時に失った」と表現されている。この「生命」とは、「神との類似性」を指しているに他ならない。

さらに「御子」そして「聖霊」としての「神の両手」を持つ御父が、どのように人間を成長させるかということについて、『異端反駁』第4巻38章3節には次のように記されている。

神はすべてのもののうちで第一のものとなるであろう。なぜなら、神のみが造られざるものであり、また、すべてのものに勝り、すべてのものが存在する原因だからである。これに対し、他のすべてのものは、神への服従のうちに留まる。そして、神への服従は、不滅性であり、また不滅性の堅持は造られざる方の栄光である。従って、この秩序と、このような調和、及び、このような導きにより、造られ、また生じたものである人間は、造られざる神にかたどられたもの、また類似したものとなる。御父が良いと見て命じ、御子が奉仕をして実際に形造り、聖霊が実際に育て豊かにする。人間は前進し、完全性に達する。すなわち、生まれざる方に近い者となる。というのも、生まれざる方が完全であり、それは神である。そして、人間はまず生じ、生じてから成長し、成長してから強くなり、強くなってから増加し、増加してから力を増し、力を増してから栄光を受け、栄光を受けてから自分の主を見ることになっていた。つまり見られることになっているのは神であり、神を見ることは不滅性をもたらし、不滅性は神に近くさせる¹¹⁷のである¹¹⁸。

¹¹⁶ AH4.39.3 : Si autem non credideris ei et fugeris manus ejus, erit causa imperfectionis in te qui non obaudisti, sed non in illo qui vocavit.

¹¹⁷ 知恵の書6章19節「不滅は人を神に近づける。」の引用。

¹¹⁸ AH4.38.3 : Et sic pricipalitatem quidem habebit in omnibus Deus, quoniam et solus infectus et prior omnium et omnibus ut sint ipse est causa, reliqua vero omnia in subjectione manent Dei.

この箇所からも明らかなように、人間は神への服従によって「不滅性」を与えられる。そして「不滅性」を有することにおいてのみ、人間は「造られざる神にかたどられたもの」、また「類似したもの」とされるのである。神が「両手」である御子と聖霊によって、「自立性」が与えられた人間の成長を不断に見守り、その成長過程において、「強制せず」、「好意を持って善を与え」、「絶えず助言し」、「寛大さ」を持ちつつ、人間と関わりを持つ神であるので、人間は「神への服従」によって再び「不滅性」を得るまでに導かれ、回復するのである。「神の両手」が不断に見守るといふとき、人間の成長の過程において、三位一体なる神がすべてにおいて関わっていることを意味している。すなわち、御父が命じ、御子が形造り、聖霊が育てるといふそれぞれの役割によってである。この人間の成長については『異端反駁』第4巻38章4節の最後でもう一度繰り返し記される。

まず本性が現れ、後に死すべきものが不死性に、滅びるべきものが不滅性に勝利し、飲み込まれ、そして善と悪の知識を得て、神のかたちと類似性に従って人間となることになっていたのである¹¹⁹。

エイレナイオスは『異端反駁』第4巻39章4節で、「神の両手」を信頼し、また神に服従し完成へと導かれていく人間と、他方、「神の両手」から逃れ、神に感謝することを忘れ、未完成な状態となる人間の2つの結果を「住居」に例えて語っている。

そして、神はすべてのことを予め知っていたので、それぞれに適した住居を準備した。不滅性の光を求めて、これに走って戻る者たちには、彼らの渴望する光を寛大に与え、他方、これを侮り、それから離れ、逃げ去り、まるで自分を盲目にする者たちには、光に〔から〕離れる者たちに適した暗闇を用意し、また〔神への〕服従

Subjectio autem Dei incorruptela, <et> perseverantia [est] incorruptelae [autem] gloria infecti. Per hanc igitur ordinationem et hujusmodi convenientiam et tali ductu factus et plasmatus homo secundum imaginem et similitudinem constituitur infecti Dei, Patre quidem bene sentiente et jubente, Filio vero ministrante et formante, Spiritu vero nutriente et augente, homine vero paulatim proficiente et perveniente ad perfectum, hoc est proximum infecto fieri : perfectus enim est infectus, hic autem est Deus. Oportuerat autem hominem primo fieri, et factum augeri, et auctum corroborari, et corroboratum multiplicari, et multiplicatum convalescere, convalescentem vero glorificari, et glorificatum videre suum Dominum: Deus enim est qui habet videri, visio autem Dei efficax est incorruptelae, incorruptela vero proximum facit esse Deo. 異端反駁第4巻11章1節には、「相応しい時に不滅性という相続財産を与えて、人間を完成させるのである。」と記されていた。この「相応しい時」とは、「神を見る」ときであると考えら、これが人間の完成の最後のときである。

¹¹⁹ AH4.38.4 : Oportuerat autem primo naturam apparere, post deinde vinci, et absorbi mortale ab immortalitate et corruptibile ab incorruptibilitate, et fieri hominem secundum imaginem et similitudinem Dei, agnitione accepta boni et mali.

そのものを逃れる者たちに相応しい罰を据えた。神への服従は、永遠の休息である。その結果、光を逃れる者たちは、自分の逃避に相応しい場所を持ち、永遠の休息を逃れる者たちは、自分の逃避に相応しい住居を持つことになる。なぜなら、すべての善が神と共にあるので、自らの判断で神を避ける者たちは、すべての善を自分からだまし取り、神にあるすべての善をだまし取られるなら、公正な結果として、神の裁きに陥ることになるからである。休息を避ける者たちが、罰のなかに住むことになるのは、正当であり、光を避ける者たちが、暗闇に暮らすのは、正当なことである¹²⁰。

このように、「神の両手」を信頼し、神に服従して生きる者たちには「彼らの渴望する光を寛大に与える」ことをし、また、「神への服従は、永遠の休息である」とあるように、永遠の休息が与えられる。他方、「神の両手」から離れて、神に感謝をせず生きる者たちには、「暗闇」と「神の裁き」が待っている。これは自らが選んだことの結果であり、エイレナイオスは、神に従わなかった者たちに裁きが備えられていることは、「公正」であり、「正当」なことであると主張しているのである。

以上のことが「幼児のような状態として造られた人間が、何が善であり、何が悪であるかを学ぶことにより成熟した大人へと成長する」ことの流れである。次いで、私たちは「本性として「神の子ら」として造られた人間が、成長し「神となる」(dii facti sumus) こと」ことの考察へと進むとしよう。

1.8. まとめ

エイレナイオスにおいて「善き神」と表現された神は、人間を「自立性」を持つ者として創造した。人間は、神から与えられた「自立性」に基づいて、神に服従する道を選ぶことが求められた。この神に服従し続ける道こそ、人間の成長に他ならない。人間は「自立性」を用いて、何が「善」であり、何が「悪」であるかを学び、その結果「二重の知覚」

¹²⁰ AH4.39.4 : Deus autem omnia praesciens utrisque aptas praeparavit habitationes, eis quidem qui inquirunt lumen incorruptibilitatis et ad id recurrunt benigne donans hoc quod concupiscunt lumen, aliis vero id contemnentibus et avertentibus se ab eo et id fugientibus et quasi semetipsos excaecantibus, congruentes lumini adversantibus praeparavit tenebras et his qui fugiunt ei esse subjecti convenientem subdidit poenam. Subjectio autem Dei requietio est aeterna, ut hi qui fugiunt lumen dignum fugae suae habeant locum, et qui fugiunt aeternam requiem congruentem fugae suae habeant habitationem. Cum enim apud Deum omnia sint bona, qui ex sua sententia fugiunt Deum semetipsos ab omnibus fraudant bonis; fraudati autem omnibus erga Deum bonis, consequenter in Dei justum iudicium incident. Qui enim fugiunt requiem juste in poena conversabuntur, et qui fugerunt lumen juste inhabitant tenebras.

を有するようになる。それにより、人間は「神の両手」から離れず、神に従う道を選び続けて行くのである。一方、神の側は、人間を「自立的」に造ったため「強制的に」自らに従わせようとはしない。けれども、これは「善き神」が人間に関わらないことを意味してはいない。むしろ「善き神」は、人間の成長を「寛大に」(magnanimitas) 見守り、「好意」(benignitas) を持って善を与え、人間が神に従うことができるよう「助言」(consilium) を与えるのである。また「神の両手」である御子と聖霊が不断に人間の成長を見守るのである。以上のことから言えることは、人間の成長は、「善き神」からの人間への働きかけと、それに人間自身が応えることによって成し遂げられるのである。神は常に人間が成長するように望んでいる。人間もまた、この「善き神」に「感謝を持って」応えることが求められているのである。

2. 人間の成長としての「神化」

これまで「幼児のような状態として造られた人間が、何が善であり、何が悪であるかを学ぶことにより成熟した大人へと成長すること」という観点から、エイレナイオスにおける神観と人間の成長の両方を同時に考察した。続けて、私たちは本性として「神の子ら」として造られた人間が成長し「神となる」(dii facti sumus¹²¹) という観点から、人間の成長を考えていきたい。

まず初めに、エイレナイオスがどこから人間が成長し「神となる」との思想を得たかについて整理することをしたい。エイレナイオスが「神の両手」の思想を得たのは、アンテオケアのテオフィロスからであった。同様に、人間が「神となる」との思想もテオフィ

¹²¹ ここで議論となるのはエイレナイオスが「神化」という言葉を使っていないということであろう。Johannes Quasten は、「エイレナイオスは『神化』という用語を避けて、「神の栄光に参与する」等の表現を用いていることを指摘している。Johannes Quasten, *Patrology*. vol. I, 311. この点について鳥巢義文は次のように述べている。「一般にいわれているように、エイレナイオスの残存する著作において theopoiesis とか theopoiein という用語が見出されないからという理由で、エイレナイオスが『神化』の主張を控えていると述べる必要はないと思われる。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、125 頁。また Norman Russell は「エイレナイオスは『神化』という専門用語をいかなる場合でも使っておらず、『神々』という場合でさえも、詩篇 82 篇の釈義においてのみ適用させている。」と述べている。Norman Russell, *The Doctrine of Deification in the Greek Patristic Tradition*, Oxford, 2004, 105.

またエイレナイオスの「神化」思想は、詩篇 82 篇から導き出されたものである。特に詩篇 82 篇 6 節「わたしは言った。『あなたたちは神々なのか皆、いと高き方の子らなのか』と」が重要な箇所とされている。エイレナイオスは『異端反駁』第 3 卷 6 章 1 節と第 3 卷 19 章 1 節と第 4 卷 38 章 4 節の 3 箇所詩篇 82 篇 6 節から引用をしている。ibid., 105. また『異端反駁』第 3 卷 6 章 1 節と第 3 卷 19 章 1 節と第 4 卷 38 章 4 節において、エイレナイオスがどのように詩篇 82 篇を引用したかについては、Ben C. Blackwell, *Christosis*, 45-54、また Carl Mosser, *The Earliest Patristic Interpretations of Psalm 82, Jewish Antecedents, and the Origin of Christian Deification*, *Journal of Theological Studies*, 2005, 41-54 を参照。

ロスから影響を受けたと考えることができる¹²²。ここにテオフィロスが著した『アウトリュコスに送る』第2巻24章、第2巻25章、第2巻27章3箇所を引用したい。第2巻24章には次のように記されている。

われわれが先に語ったように、神は園を耕し、守るために人間を園に置いたが、神は彼にあらゆる果実から食べるように命じた。明らかに生命の木からでもあって、ただ知識の木からは味わうなと彼に命じた。神は彼をその造られた地から園へと移し、成長する機会を与えた¹²³。それは人間が大きく完全になり、さらに神を受け入れることで天へと挙げられて（というのも、人間は中間のものとして造られたのであって、完全に死すべき者でもなく、また完全に不死なる者でもなく、二つのうちのどちらをも受容しうる者なのである。同様に園という場所も美に関してはこの世と天とのあいだの中間のものとして造られた）永遠性をもつようになるためである。¹²⁴。（下線筆者）

また続く第2巻25章において、次のように記されている。

年齢から言えば、アダムは子供であった。それゆえ、知識をふさわしくもつことはまだできなかった¹²⁵。というのも、今でも子供が生まれときには、まだパンを食べることができず、まず乳によって育てられ、後に長ずるに従って固い食物へと進むのである¹²⁶。（下線筆者）

そして第2巻27章には、次のように記されている。

人間は本性上死すべき者あるいは不死なる者として造られたのではない。というのは、もし神が人間を初めから不死なる者として造ったならば、人間を神として造ったであろう。また死すべき者として造ったならば、神は人間の死に責任があると思われるであろう。すると神は人間を不死なる者あるいは死すべき者として造ったの

¹²² John Behr, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity*, 167.

¹²³ 原文では δὲ αὐτὸν ὁ θεὸς ἐκ τῆς γῆς, ἐξ ἧς ἐγεγόνει. と記されている。Theophilus Antiochenus Episcopus, *Ad Autolyicum*, II, 18 (Migne : PG 6, 1089).

¹²⁴ アンティオケアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、141頁。

¹²⁵ ὁ Ἀδὰμ ἐτὶ νήπιος ἦν· διὸ οὐπω ἠδύνατο τὴν γνῶσιν κατ' ἀξίαν χωρεῖν. Theophilus Antiochenus Episcopus, *Ad Autolyicum*, II, 18 (Migne : PG 6, 1092).

¹²⁶ アンティオケアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、141頁。

ではなく、われわれが先に言ったように、両者を受容しうる者として造ったのである。もし人間が神の掟を守って不死なる者へと向かうならば、人間は神から報酬として不死を受け取り、神になるであろう¹²⁷が、神に従わずに死の事柄へと向かうならば、人間自身が自らの死に責任があるということになるであろう。というのは、神は人間を自由でかつ自己を支配する者として造ったからである¹²⁸。(下線筆者)

ここでテオフィロスにおいても示されている子供として造られた人間が成長し「神となる」ということは、特に東方の神学においては「神化」と表現される。そのため私たちが注意すべき点を先に記そう。それは、この「神化」という用語から「人間が神そのものになる」という誤解を与えてしまいかねないということである。けれども、エイレナイオスが著作のなかで明らかにしている「神化」の思想は、もちろんそのようなことではない。『異端反駁』第4巻11章2節には、神と人間は全く区別されることが記されている。

そして神は人間と異なっている。というのは、神は造り、人間は生じるのである。また造る方は常に同じであるが、生じるものは、初めと真中と増加を受けなければならぬ。また神は善いことを行い、そして人間は善いことをなされる。また神はすべてにおいて完全な方、自分自らと等しく、また同様であり、全体として光であり、また全体として知性、全体として本性であり、すべての善いものの泉であるが、人間は神に向かって進歩と増加を受ける¹²⁹。

この箇所を示されているように、神は造る方であり、人間は造られたもの、すなわち、被造物である。神は被造物とは完全に区別される存在である¹³⁰。これは当然のことではあるが、人間が永遠に成長を続けたとしても、「神と同等になる」ということは全く不可能であるし、エイレナイオスもそのような思想を抱いていたわけではない。それでは、エイレナイオスにおける「神化」とは、一体どのような思想であろうか。私たちは、エイレナイオスが思い描いていたであろう「神化」のプロセスを順に追って、示して行く作業に取り

¹²⁷ ἵνα ῥέψῃ ἐπὶ τὰ τῆς ἀθανασίας τηρήσας τὴν ἐντολὴν τοῦ θεοῦ, μισθὸν κομίσηται παρ' αὐτοῦ τὴν ἀθανασίαν καὶ γένηται θεός. Theophilus Antiochenus Episcopus, *Ad Autolyicum*, II, 18 (Migne : PG 6, 1096).

¹²⁸ アンティオケアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』、141頁。

¹²⁹ AH4.11.2 : Et hoc Deus ab homine differt, quoniam Deus quidem facit, homo autem fit. Et quidem qui facit semper idem est, quod autem fit et initium fit et medietatem et adjectionem et augmentum accipere debet. Et deus quidem bene facit, bene autem fit homini. Et Deus quidem perfectus in omnibus, ipse sibi aequalis et similis, totus cum sit lumen et totus mens et totus substantia et fons omnium bonorum, homo vero profectum percipiens et augmentum ad Deum.

¹³⁰ 『異端反駁』第4巻11章2節も参照。

かかりたい。そのための足がかりとして、まず1つの問いから出発したい。それは創造者である神によって造られた人間が「神となる」という成長を進んで行くことができるための前提条件は何であるかということである。

2.1. 「神の子ら」として造られた人間——本性における「神の子ら」について——

私は、エイレナイオスがその前提条件を、神が人間を創造において「神の子ら」として造ったことのうちに見出していると考える。すなわち、人間は神に造られた最初の状態で既に「神の子ら」であり¹³¹、人間が成長をし完成に至って初めて「神の子ら」となるわけではない。『異端反駁』第4巻41章2節には、次のように記されている。

それ故、言うなれば、〔人間は〕本性に従えば、すなわち、創造に従えば、私たちは皆、神の子らである¹³²。(下線筆者)

この箇所について、小林稔は脚注で「ラテン語訳にはこの後に『すなわち創造に基づくなら』とあるが、アルメニア訳に従う¹³³。」と説明をした上で、「したがって、言ってみれば、本性によるなら、私たちは皆〔神〕によってできたのであるゆえ、皆が神の子らである¹³⁴。」と訳し「即ち、創造に従えば」という文章を省いている。けれども、この箇所において、「即ち、創造に従えば」というラテン語訳に残されている文章は、重要な意味を持っている。なぜなら、先述したように神が人間を創造したときに、人間は既に「神の子ら」であるからである。そして、創造において神が人間をどのように造ったかを知ることによって、私たちは人間が「神の子ら」と呼ばれる理由を知ることができる。そこで『異端反駁』第5巻28章4節に目を向けたい。

初めに、人間は、神の両手、すなわち、御子と聖霊によって造られ、すべての時において神のかたちと類似性に従って造られた¹³⁵。

つまり、エイレナイオスが「私たちは皆、神の子らである」と語る時、人間には「神

¹³¹ 人間は神に造られた状態で既に「神の子ら」であったので、これを人間の「本性」と考えている。

¹³² AH4.41.2: *Secundum igitur naturam, quae est secundum conditionem, ut ita dicam, omnes Dei filii sumus.*

¹³³ 『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、282頁。

¹³⁴ 『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、166頁。

¹³⁵ AH5.28.4: *Et propter hoc in omni tempore, plasmatum in initio homo per manus Dei, hoc est Filii et Spiritus, fit secundum imaginem et similitudinem Dei.*

の両手」である御子と聖霊によって、「神のかたち」と「神との類似性」を与えられた存在として創造された。この神の「かたち」(imago)と「類似性」(similitudo)が与えられているので、人間は他の被造物と区別され、創造された状態にして「神の子ら」としての本性が与えられている¹³⁶。そして、この本性が人間に与えられていることこそ、エイレナイオスが描く「人間の成長」における、まさに出発点であると言うことができよう。すなわち、「神の子ら」としての本性が人間に与えられたために、人間は神に向かって前進し、成長できるのである。また、「神の両手」である御子と聖霊が、人間の創造に関わり、人間を「神のかたち」と「神との類似性」として創造したのであれば、人間の「神化」においても「神の両手」である御子と聖霊に関わりを持っていることになる。

2.2. 「神化」の過程における人間の墮罪

創造において、「神の子ら」として造られた人間であったが、しかしその一方で、幼児のような存在として造られたことにより、人間は「墮罪」を引き起こした¹³⁷。

しかし、人は小さな者であって、その識別能力はまだ未発達であり、そのため欺く者によって誤った道に導かれるのもたやすかった¹³⁸。

このように人間は、「神化」の過程において、常に正しい「善」を選び取ることができたわけではなかった。そのひとつの「失敗」として、エイレナイオスは「墮罪」を扱っている¹³⁹。それでは、エイレナイオスにおいて「墮罪」がもたらした結果とは、何であろうか。

¹³⁶ エイレナイオスはおそらくテオフィロスから「神化」の思想を受け継いだと思われるが、両者の差異は、エイレナイオスが「神化」の思想と創世記1章26節の神の「かたち」と「類似性」を結びつけたことにあるだろう。Norman Russell, *The Doctrine of Deification in the Greek Patristic Tradition*, 107.

¹³⁷ Ben C. Blackwell は、エイレナイオスは様々な方法で罪の結果について言及している。それらは「死／死を免れないこと、神との交わりを失ったこと、裁きと向き合うこと、奴隷／捕われの身、神への負債者、死への負債者」と記されている。Ben C. Blackwell, *Chrisosis*, 41.

¹³⁸ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、212頁。また『異端反駁』第4巻38章1節には、次のように記されている。「そして、この故に、父の完全なパンは、まるで幼子に対するように、彼自身を私たちに乳として与えた。すなわち、人間として来たことであるが、彼の肉という、言わば乳房によって養育され、そして、このような授乳を通して、神の御言葉を食べ、また飲むことに慣れて、また、このようにして不滅性のパン、すなわち、父の聖霊を自分自身のうちに保つことができる〔ようになる〕ためである。」

(AH4.38.1 : Et propter hoc, quasi infantibus, ille qui erat panis perfectus Patris lac nobis semetipsum praetavit, quod erat secundum nominem ejus adventus, ut, quasi a mammilla carnis ejus nutriti et per talem lactationem assueti manducare et bibere Verbum Dei, et eum qui est immortalitatis panis, qui est Spiritus Patris, in nobis ipsis continere possimus.)

¹³⁹ R.L. ウィルケン は次のように説明をしている。「アダムは子どもであったのであり、十分な完成に至るために成熟した大人へ成長する必要があった。エイレナイオスの視点では墮落は成熟へ成長するために必要な段階であって、人間の歴史全体は幼児から成熟した大人へと至る長い過程なのである。」R.L. ウィルケン『古代キリスト教思想の精神』(教文館、2014年)、78頁。

西方神学においては、アウグスティヌスがペラギウス主義との論争を繰り広げて以来¹⁴⁰、人間は墮罪によって「原罪」が人間のうちに入ったと考えられてきた¹⁴¹。

けれども、アウグスティヌス以前のエイレナイオスはいわゆる「原罪論」のようなことは考えてはいない¹⁴²。エイレナイオスが考えるのは、神との「類似性」を失ったことからくる「死」である。『異端反駁』第5巻16章2節には、次のように記されている。

¹⁴⁰ ペラギウスの弟子とされるカエレスティウスの神学的誤謬は以下のものを挙げることができる。(1). アダムは死すべきものとして創造されたので、たとえ罪を犯さなくても死んだであろう。(2). アダムの罪はただ彼だけを傷つけたのであって、人類には及ばない。(3). 生まれたばかりの幼児は墮罪以前のアダムと同じ状態にある。(4). 全人類はアダムの罪と死によって死なず、キリストの復活によって甦らない。(5). モーセ律法は福音と同じく天国へ導く効力がある。(6). キリストが来られる以前にも罪のない人がいた。1. Adam mortalem factum, qui siue peccaret siue non peccaret, moriturus fuisset; 2. quoniam peccatum Adae ipsum solum laesit et non genus humanum; 3. quoniam paruuli qui nascuntur, in eo statu sunt, in quo Adam fuit ante praeuaricationem; 4. quoniam neque per mortem uel praeuaricationem Adae omne genus hominum moriatur neque per resurrectionem Christi omne genus hominum resurgat; 5. quoniam lex sic mittit ad regnum caelorum quomodo et euangelium; 6. quoniam et ante aduentum domini fuerunt homines inpeccabiles, id est sine peccato. Marius Mercator, *Commonitorium Super Nomine Caelestii* 1, 1 (ACO I/5, p. 66). ペラギウス主義についての詳しい説明は、大庭貴宣「アウグスティヌスのペラギウス主義反駁説教：当時の信者への説明」(南山大学大学院・人間文化研究化キリスト教思想、修士論文、2011年)を参照。また大庭貴宣「アウグスティヌスのペラギウス主義反駁説教——説教294と348Aの翻訳と注解——」『南山神学別冊』第27号(2012年)を参照。

¹⁴¹ 418年のカルタゴ会議での決議文第2条には次のように宣言された。「母体から生まれたばかりの幼児に洗礼を受けることを拒否する者、または罪の赦しのために洗礼を受けるのであって、再生の水洗いによって清めなければならないアダムの原罪は少しも残っていない、そのため「罪の赦しのため」という洗礼の形相はまちがいであって正しくないと言う者は排斥される。「一人の人間によって罪がこの世にはいり、(また罪によって死が世にはいつて)、すべての人が罪を犯したので、死がみんなの上に及んだ」(ローマ5・12参照)と使徒が言っていることを、全世界に広まっているカトリック教会が理解してきた通りに解釈すべきである。この信仰基準に従って、自分の罪を犯すことができない幼児も、罪の赦しのために、そしてこの再生によって出生によって受けついで汚れから清められるために洗礼を受けるのである。」これについてH・デンツィンガー『カトリック教会文書資料集』(エンデルレ書店、1974年)、50頁参照。

¹⁴² アウグスティヌスをはじめ、西方の神学においては、「墮落」からくる「原罪論」の場合、「完全であったアダムが「完全さ」を失ったことを強調する。けれどもエイレナイオスにおいては、もともと人は「幼児」であり「完成」に向かい成長する必要がある。そのため、「墮落」という出来事は「完全さ」の喪失ではなく、「成長」が妨げられたと考えられている。Gustaf Wingren, *Man and the Incarnation*, 50-63参照。またアウグスティヌスの言う「原罪論」がないとすれば、「なぜアダムから生まれた者たちが、再び罪を犯したのか」と問われるであろう。これについてエイレナイオスは『証明』第17章で、次のように記している。「叛逆の天使、これは人を不従順へと導き、罪人とし、人が園から追い出される原因となった天使〔と同一人物〕であるが、〔この天使〕はあの最初の悪で満足せず、この兄弟たちのあいだに第二の悪をもたらした。カインを自分の精神で満たし、弟殺しとしたのである。」また続く第18章では「邪悪がきわめて長く続き、広範囲に拡がって、人類全体を覆った。そしてついに、彼らのなかにはごくわずかな正義の種子しかないというような状態になってしまった。不法な結合が地上で行われていたからである。天使たちが自ら人の娘たちの子孫と交わり、人の娘たちは天使のために息子を産んだ。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、214-215頁。これについて鳥巢義文は、次のように記している。「第17章と第18章では、人類史に神への不従順や邪悪が蔓延ようになったのは、園の人間を神への背きに導いた叛逆の天使がその後も人々に悪をもたらしたからであると説明されている。その第二の悪はそそのかされたカインのアベル殺害であり、その後も叛逆の天使は人の娘たちと交わり、彼女たちに神に憎まれるあらゆる悪を教えたと言われる。」鳥巢義文「神の救済史的啓示—エイレナイオス『使徒的宣教の証明』を中心に—」、96頁。このようにエイレナイオスはアダムの「墮罪」後も人間が罪を犯し続けたのは、叛逆した天使たちの働きに他ならないことを説明している。また Ernst Klebba は、エイレナイオスにおいても原罪論を確認できるとの立場を取る。Ernst Klebba, *Die Anthropologie des hl. Irenaeus, eine dogmengeschichtliche Studie*, Munster i. W. 1894, 80-81.

かつて、事実、人は神のかたちに従って造られたと言われていたが、示されてはいなかった。人が神のかたちに従って造られた御言葉は、不可視であった。そのため、類似性も容易に失ってしまった¹⁴³。

このように「神の両手」の片方である「御子」が受肉するまえには、人間は自らが「神のかたち」に造られたことを示されていなかった。更に、神に与えられた自立性を、「神への従順」に用いるべきであったが、「幼児の状態」であったために、容易に蛇に欺かれ、神との「類似性」を失ったのである。これが「死」である。

以上のように、エイレナイオスにおいては、人間が起こした墮罪という出来事そのものが、人間のうちに「罪」をもたらしたということや、そこから「死」が生じたことではないと理解できる。むしろエイレナイオスにおいては、神との「類似性」の喪失が最大の関心事となっている。また『異端反駁』第3巻23章5節には、次のように記されている。

すなわち、彼は言う。「聖霊から受けた聖なる衣を、不従順によって喪失しました。そして、今、私は決して喜びをもたらさず、身体を傷つけ、貫くこのような上着が相応しいことを知っています¹⁴⁴」。

ここでエイレナイオスは、人間が墮罪によって喪失した「類似性」を「聖なる衣」と言い換えている。この「聖なる衣」は、聖霊によって与えられたものであった。つまり、人間は「聖霊」によって与えられた「類似性」を喪失したことによって、不滅性を喪失したのである。換言すれば人間のうちに聖霊が再び与えられることによって、「不滅生」を取り戻すことができる。このことは、エイレナイオスが「救い」をどのように捉えていたかを知るによって更に理解を深めることができる。塩谷惇子は次のように述べている。

不完全な人間は、その「肉」において不滅へと成就するよう定められているゆえに、言いかえれば、人間に与えられている「救いの計画」により、万物の主と定められた。エイレナイオスは「救い」を単に罪からの救い、解放と理解するのではなく、肉において、時間的存在として、内に様々な可能性を秘めながらも、弱きものとして造られた人間が、次第に成熟し、ついには不朽不滅の霊をまとい神のようになる

¹⁴³ AH5.16.2 : In praeteritis enim temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur ; adhuc enim invisibile erat Verbum, cujus secundum imaginem homo factus fuerat ; propter hoc autem et similitudinem facile amisit.

¹⁴⁴ AH3.23.5 : Quoniam, inquit, eam quam habui ab Spiritu sanctitatis stolam smisi per inobaudientiam, et nunc cognosco quod sim dignus tali tegimento quod delectationem quidem nullam praestat, mordet autem et pungit corpus.

ことを意味する¹⁴⁵。

このように、エイレナイオスにおける「救い」とは「罪」もしくは「死」からの「救い」ということではなく、「弱きものとして造られた人間が、次第に成熟し、ついには不朽不滅の霊をまとい神のようになること」と語られている。まさに人間の「神化」をも含めた「救済史」全体が、人間に与えられた救いであると言える。このような救いを目指す人間に、神が与えられた「教育」の1つとして「墮罪」がある¹⁴⁶。この点に関して、大貫隆は次のように説明をしている。

アダムの墮罪においてさえも、神の両手はこのアダムから離れることがなかったのである。(『反駁』V・1・3)。ここでは、墮罪はひとつの目的論的な思考によって相対化され、合理化される。すなわちそれは究極のところ、神がその両手であることば(ロゴス)と霊を用いて、人類を「試験」(『反駁』III・23・1)し、「準備」(IV・20・8)し、そして「改善」(III・23・1)してゆく連続的で段階的な過程、つまり救済史を始動させるきっかけの役割を果たしている。救済史は全体として人類に対する神の教育の過程となる。この意味で、エイレナイオスはエレミヤ書2章19節を引用しつつ、こう断言することができる。「あなたの背信があなたをより良い者にするだろう」(『反駁』IV・37・7)¹⁴⁷。

それでは神は、教育としての「墮罪」を通して人間に何を教えたのであろうか。このことを知るために『異端反駁』第3巻20章1節と2節に目を向けてみたい。まず『異端反駁』第3巻20章1節には、次のように記されている。

肉が、主の目の前で誇るものがないためであり、自分に自らの不滅性が本性としてあると思い、神について反対の考えを決して持たないため、また、真理を保つことをせず、虚しい高慢により、本性において神に似ていると自慢することのないため

¹⁴⁵ 塩谷惇子「エイレナイオスにおける人間の創造」『清泉女子大学人文科学研究紀要IX』(1987年)、47頁。

¹⁴⁶ エイレナイオスによれば人間の完全性(これは同時に創造主の偉大さを示す)は創造主のロボットであるよりも自由意志をもつ独立な存在者たることにある。すなわち自由意志は一切の自動的必然性に頼るような自己完成を目指すのではなく、様々な悪や誘惑に直面してなおも善を選択でき、次第に神のすがたを自己に実現してゆく。だから悪を善に転じつつ宇宙を統率するために自由に対して寛容な神は、最初から完全な世界を創造してロボットを操る神よりも偉大な存在なのである。この自由における人間の自己実現という考えに基づいて原罪(神からの離反)もやさしさに満ちて解釈される。V.ロースキエ『キリスト教東方の神秘思想』宮本久雄訳(勁草書房、1986年)、9頁。

¹⁴⁷ 大貫隆、『ロゴスとソフィア』、233-234頁。

である。〔人間は〕自分を造った方に、むしろ感謝をせず、神の人間への愛に暗くなり、自らの感覚が盲目になり、神について相応しいことを考えられず、自分を神と同等とみなすようになってしまった¹⁴⁸。

次に『異端反駁』第3巻20章2節には、次のように記されている。

人間がすべてを通り抜け、死の知識を得て、それから死者の復活に達し、どこから自由にされたかを経験で学び、主から受けた不滅性という賜物を常に感謝するようになるのは、神の度量の大きさである。多く赦されたものは、多く愛するため、〔神を〕愛するため、自分自身は死すべき、また弱い者であることを知り、神が死すべき者に不死性を、また、一時的な者に永遠を与えるほど力ある方であると理解し、〔神が〕ご自身で示した力をすべて知り、教えられ、神について、神が如何に偉大なお方か気がつくようになった¹⁴⁹。

これらの箇所にあるように、神が「墮罪」を通して人間に教えたことは、まず第1に、神に対して高慢になってはならないということであり¹⁵⁰、第2に、死すべき存在である人間に、永遠の生命を与える神の偉大さを教えるためであった。『異端反駁』第5巻1章3節には次のように記されている。

初めに私たちがアダムにおいて形造られた (*initio plasmationis nostrae in Adam*) とき、神によって吹き込まれた生命の息が、先に形成されたものと一致して人間を生かし、理性的心魂¹⁵¹として現存させたこと、また終わりのときには、御父の御言

¹⁴⁸ AH3.20.1 : *ut non gloriatur in conspectu Domini omnis caro, nec umquam de Deo contrarium sensum accipiat homo, propriam naturaliter arbitrans eam quae circa se esset incorruptelam, et non tenens ueritatem inani supercilio iactaretur quasi naturaliter similis esset Deo. Ingratum enim magis eum hoc ei qui eum fecerat perficiens, et dilectionem quam habebat Deus in hominem obfuscabat et excaecabat sensum suum ad non sentiendum quod sit de Deo dignum, comparans et aequalem se iudicans Deo.*

¹⁴⁹ AH3.20.2 : *Haec ergo fuit magnanimitas Dei, ut per omnia pertransiens homo et mortis agnitionem percipiens, dehinc ueniens ad resurrectionem quae est a mortis et experimento discens unde liberatus est, semper gratus existat Domino, munus incorruptelae consecutus ab eo, ut plus diligeret eum, cui enim plus dimittitur plus diligit, cognoscat autem semetipsum quoniam mortalis et infirmus est, intellegat autem et Deum quoniam in tantum immortalis et potens est uti et mortali immortalitatem et temporali aeternitatem donet, intellegat autem et reliquas virtutes Dei omnes in semetipsum ostensas, per quas edoctus sentiat de Deo quantus est Deus.*

¹⁵⁰ 人間は、自らは神々ではなく、ただの被造物に過ぎず、神との「類似性」も、神からの賜物であることを知る必要があった。Denis Minns, *Irenaeus An Introduction*, p.76.

¹⁵¹ 「生魂的」あるいは「動物的」と翻訳している *animalis* は、「靈的 *spilitualis* と対峙する。人間を考えるときの根本は、エイレナイオスにとって、何よりも“*plasma*”「形造られたもの」である。塩屋惇子、「エイレナイオスにおける人間の創造 (その二)」、133頁。

葉と神の霊が、アダムの古い創造と実体を結ばせて、人間を生きた完全なものとし、完全な父を受け取り、私たちすべてが心魂的において死んだように、すべての者が霊的において生かされるのである。また神の両手は、かつてアダムから離れたことはなく、父は（御言葉と知恵）に向かって語り、「私たちのかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と言ったのである。それ故に、神の両手は時の終わりにあって、肉の欲によらず、また人の欲によらず、父の欲することに従い、人間を生きるものへと完成し、アダムが神のかたちに、また似たものとなるようにされたのである¹⁵²。

それでは「墮罪」が神からの教育であったとしても、これによって人間の「神化」は妨げられて終わったのであろうか。結論から言えば、人間の「神化」は、墮罪によって終わることなく、むしろ、何が善で、何が悪であるかを学び、続けて進められて行くのである。

そこで私たちは「神の子ら」としての本性を有する人間は、次いでどのような「神化」の道を辿ることができるかに進もう。

2.3. 御子の受肉と「神化」

創造において「神の子ら」として造られた人間の「神化」の過程を支える重要な出来事として、御子の「受肉」、すなわち、「神の御子が人間の子となったこと」を挙げなければならない¹⁵³。私たちは、神の御子が人間となったことと、人間が神の子らとしての成長を続けていくことに何の関係性があるかと問うであろう。というのも、御子の受肉は、「人間の救済のために、罪なき者が、罪を持つ人間と同じようになる必要があった」という「救済」の観点から語られる場合が多いからである¹⁵⁴。その問いを解決するために、「神の子ら」としての本性を持つ人間の「神化」と「神が人となった」ことに関する重要な箇所を見る

¹⁵² AH5.1.3: quemadmodum ab initio plasmationis nostrae in Adam ea quae fuit a Deo aspiratio vitae unita plasmati animavit hominem et animal rationabile ostendit, sic in fine Verbum Patris et Spiritus Dei adunitus antiquae aubstantiae plasmationis Adae viventem et perfectum effecit hominem, capientem perfectum Patrem, ut, quemadmodum in animali omnes mortui sumus, sic in spiritali omnes vivificemur. Non enim effugit aliquando Adam manus Dei, ad quas Pater loquens dicit: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram. Et propter hoc in fine non ex voluntate carnis neque ex voluntate viri sed ex placito Patris manus ejus vivum perfecerunt hominem, uti fiat Adam secundum imaginem et similitudinem Dei.

¹⁵³ 神の言が人間の地平に真理として現われ、人間を担ったのは、この人間の自己実現（神化）のためであった。すなわちロゴスは第一の人間が神に背いて失った人間神化の事業を、人間そのものを担い振り（受肉）、これと共に十字架における神への帰順を通じてふたたび可能とした。だからキリストは第二のアダムであってその人間性に万人は摂取されている限り万人が父なる真理にいたる途は回復されたといえる。V. ロースキィ『キリスト教東方の神秘思想』、10頁。

¹⁵⁴ 特に「再統合理論」はこの観点から語られてきたと考える。

ことにしたい。『異端反駁』第3巻19章1節には次のように記されている。

このため、神の御言葉が人間となった。すなわち、神の子が、人の子となったのである。〔それは人間が〕神の御言葉と結合され、養子とされることを受けて、神の子となるためであった。私たちは、不滅性と不死性とひとつに結ばれるのでなければ、他の方法で不滅性と不死性を得ることはできなかつたからである¹⁵⁵。

この箇所からも明らかなように、人間が完全に「神化」に至るためには、「不滅性」と「不死性」を得ることが必要不可欠である。そして、それらを保持するためには、人間は「神のかたち」と「神との類似性」を再び得る必要があった。そのために、人間は受肉をした御子と「結合され¹⁵⁶」、それにより神の「養子」とされることによって、「不滅性」と「不死性」の両方を得ることができる。

ここで「再び得る必要があった」と記すのは、先に記したように、人間が神に背いた結果、「神との類似性」を失ったためである。この「神との類似性」なしに、人間は完全に「神化」へと至ることができない。そのためエイレナイオスは、人間に「神のかたち」と「神との類似性」を取り戻させるために御子が「受肉」をしたと述べる。つまりキリストの受肉は、人間の「神化」の途上において、重要な意味を持っている。『異端反駁』第3巻18章1節には、次のように記されている。

彼が受肉し、人間となったとき、彼は人間の長い歴史を自らのうちに再統合した。集約〔した形〕で、私たちに救いを与えたのである。それは、私たちがアダムにおいて失ったもの、すなわち、神のかたちと類似性に従って〔造られた〕ものであること、これをキリスト・イエスにおいて取り戻すためである¹⁵⁷。

¹⁵⁵ AH3.19.1 : Propter hoc enim Verbum Dei homo, et qui Filius Dei est Filius hominis factus est, < ut homo >, commixtus Verbo Dei et adoptionem percipiens, fiat filius Dei. Non enim poteramus aliter percipere incorruptelam et immortalitatem nisi aduniti fuissetus incorruptelae et immortalitati.

¹⁵⁶ この commixtus という言葉は「混ぜ合わせ」とも訳される。

¹⁵⁷ AH3.18.1 : sed quand incarnatus et homo factus, longam hominum expositionem in seipso recapitulavit, in compendio nobis salutem praestans, ut quod perdideramus in Adam, id est secundum imaginem et similitudinem esse Dei, hoc in Christo Iesu reciperemus. 大貫隆は『異端反駁』第3巻18章1節について次のように言及している。「もちろん、『反駁』を精読すると明らかであるが、エイレナイオスが『神のかたち』も『神類似性』と共に墮罪によって喪失された、と考えているように読める箇所も存在する（特にⅢ・18・1）。この点で、彼の人間観がなお曖昧さを残していることは否定できず、この問題についての研究者の意見も大きく分かれている。」大貫隆『ロゴスとソフィア』、225頁。実際に『異端反駁』第5巻16章2節では、「類似性」のみが失われたと記述されている。また「神のかたち」と「神との類似性」について、園部不二夫は次のように説明している。「イレネウスの一カ所が初めて両者を分けて考察したところから、イマゴは人間と動物と相違する理性的な人間性 (humanum) そのものであるが、シミリチュードは神との根源的相似性、即ち原義 (justitia originalis) であり、前者は墮罪によって失われないが、後者は失われたという後代のカトリック的二元的人間観が生じて来たのである。』『園部不二夫

御子の「受肉」は、神が人間に「神との類似性」を回復させるためにも成した働きであった。御子が「受肉」をし、人間に可視的状态になったことにより、人間は自らが「神のかたち」に従って造られた存在であることを思い出すのである。『異端反駁』第5巻16章2節には、このことを示している箇所がある。そこには、次のように記されている。

かつて、確かに人間は神のかたちに従って造られたものと言われていたが、示されてはいなかった。つまり、人間がそのかたちに従って造られた御言葉は、まだ不可視であった。このために、類似性を容易に喪失した。しかし、神の御言葉が肉となったとき、〔2つの〕いずれも確かなものにした。すなわち、彼のかたちであったものになることで、真のかたちを明らかにし、また人間を目に見える御言葉によって、目に見えない父に似たものとするので、類似性をも強固にもと通りにしたのである¹⁵⁸。

エイレナイオスは、人間が「神との類似性」を回復するためには「御子の類似性を見ること」が必要不可欠であることを『異端反駁』第4巻33章4節においても次のように記している。

けれども、神の類似性に従って造られた人よりもすぐれた者、そして、卓越した者、〔それは〕神の子以外の他の誰であろうか。人はこの類似性に造られた。そして、この故に、終わりの時に、神の子が人となり、昔の創造を自らのうちに受け入れ、類似性を見せたのである。私たちが、これよりも前の巻で見ているように¹⁵⁹。

著作集第三巻』（キリスト新聞社、1980年）、94頁。この点に関して、鳥巢義文は次のように述べている。「エイレナイオスはその箇所『神のかたちと類似性による存在』(secundum imaginem et similitudinem esse Dei) が失われたと述べているのであり、これは言い換えれば、『かたち』と『類似性』の統合された人間のあるべき状態が喪失されたと言うことである。従って、この箇所をもって『かたち』と『類似性』の双方の喪失を考える必要はない。むしろ、『類似性』の喪失により、双方の統合状態が失われたと理解するのが適当であろう。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、116頁。

¹⁵⁸ AH5.16. 2: In praeteritis enim temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur: adhuc enim invisibile erat Verbum, cujus secundum imaginem homo factus fuerat; propter hoc autem et similitudinem facile amisit. Quando autem caro Verbum Dei factum est, utraque confirmavit: et imaginem enim ostendit veram, ipse hoc fiens quod erat imago ejus, et similitudinem firmans restituit, consimilem faciens hominem invisibili Patri per visibile Verbum.

¹⁵⁹ AH4.33.4: Et propter hoc in fine ipse ostendit similitudinem Filius Dei, homo factus, antiquam plasmationem in semetipsum suscipiens, quemadmodum ostendimus in eo libro qui est hoc superior.

このことから、人間は自らが「神との類似性」に従って造られた存在であることを、「神の両手」の片手である「御子」のうちに見出すのである。すなわち、「御子」を「見ること」によって、人間は「神との類似性」を受ける可能性を取り戻すのである。

また『異端反駁』第3巻10章2節には、エイレナイオスは御子が受肉し人間となったことの目的は、人間が「神の子」とされるためでもあったと説明している。

崇高な神の御子、自らの救いを肉〔なる人〕すべてに見えるものとするを、律法と預言者を通して約束した方であり、彼は人の子となった。それは人間も神の子となるためであった¹⁶⁰。

つまり「墮罪」によって、神との「類似性」を失った人間は、受肉した御子を見ることによって、自分〔人間〕が、神のかたちと類似性として造られた存在であることを思い出すのである。そして人間は、御子の受肉によって、「神の子〔ら〕」となる更なる「神化」へと進むのである。

2.4. 教会の時代における聖霊の働きと「神化」

御子が受肉し、人間となった後に、神は「神の両手」のもう片方である聖霊を人々に与えた。では御子の受肉以前に、聖霊は人間と関わっていなかったのかといえば、そうではない。『異端反駁』第5巻1章3節には、「墮罪後も、神の両手がアダムから離れなかったこと¹⁶¹」が記されており、また『異端反駁』第4巻20章5節には、受肉以前に、聖霊がどのように働いていたかが記されている。

神はすべてにおいて力があり、ある時は霊によって預言的に現われ、また子を通して養子として現われたが、天の国においては父として現れるであろう。霊は神の子

¹⁶⁰ AH3.10. 2: *Filius Dei Altissimi qui per legem et prophetas promisit Salutarem suum suum facturum se omni carni uisibilem, ut fieret Filius hominis ad hoc ut et homo fieret filius Dei?* また鳥巢義文はこれを「聖なる交換」と呼び、次のように説明する。「さて、エイレナイオスは著書のなかで、神のみことばは人間を自分のように完全なものにするために、人間と同じものになったと論じ、また、みことばが人の子となったのは、人間も神の子となるためでもあったとも説明している。これらの内容は、人類の神化が神のみことばの受肉の目標であることを表している。しかし、エイレナイオスは神化という救いの完成状態を受肉という御子の救いの営みからのみ導き出される帰結と理解しているわけではない。それというのも、そのような表現を用いながらも、エイレナイオスは人類の神化をみことばの受肉において完結してしまった救いの状態とは考えておらず、むしろ、神化を受肉以降も継続している神の救いの歴史の中で、聖霊の導きのもとにある人類の成長を待って、次第に完成して行くものとみなしているからである。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、110-111頁。

¹⁶¹ 『異端反駁』第5巻1章3節には、*Non enim effugit aliquando Adam manus Dei* と記されている。

に人間を整え、また子は父に導き、父は不滅性と永遠の生命を与えるのであるが、この生命は、神を見ることによって、それぞれの人間に生じるのである¹⁶²。

このように御子の受肉以前は、聖霊は預言によって現われ、御子を示す働きをしていた。それでは、御子の受肉後の時代においては、聖霊はどのように働いているのであろうか。『異端反駁』第3巻24章1節には、次のように記されている。

そして〔教会〕のなかには、キリストの交わりが、すなわち、不死性の保証¹⁶³、私たちの信仰の確証、神への上昇のはしごである聖霊が委託されている¹⁶⁴。神は使徒と預言者と教師たち、その他あらゆる働きを教会に置いたと言っている。教会に集わない者たちは、皆、〔聖霊に〕与るものではなく、悪い説と最悪の業によって自らを欺き、生命から〔遠ざけている〕のである。教会のあるところに、神の聖霊もあり、神の聖霊のあるところには、教会とすべての恵みがある。そして聖霊は真理である¹⁶⁵。

このように神は御子の受肉後に、教会に聖霊を与えたのである。ここで「教会」と言われているのは、教会としての「建物」に集う人々ではない。エイレナイオスの言う「教会」とは、キリストに従う者たちの集まりである。そのため、上述した引用において「教会に集わない者たちは、皆、〔聖霊に〕与るものではなく、悪い説と最悪の業によって自らを欺き、生命から〔遠ざけている〕のである。」と記されている。次いで私たちは、キリストに従う者たちの集いである「教会」に聖霊が与えられることによって、どのような「神化」の発展をもたらすかを確認していきたい。

¹⁶² AH4.20.5 : potens est enim in omnibus Deus, visus quidem tunc per Spiritum propheticæ, visus autem et per Filium adoptivæ, videbitur autem et in regno caelorum paternaliter, Spiritu quidem praeeparante ad Patrem, Patre autem incorruptelam donante in aeternam vitam, quae unicuique evenit ex eo quod videat Deum.

¹⁶³ エフェソ1章14節、第二コリント1章22節を参照。

¹⁶⁴ 鳥巢義文は、これについて次のように記している。「教会にある『霊』は『不滅性の手付』、すなわち、『保証』と言われているばかりでなく、『神への上昇のはしご』とさえ言われている。これが『神化』を表現するものでなければ一体何であらうか。エイレナイオスにとって、『不滅性の保証』である『霊』は、実に教会の中で、人間を神へと導くものなのである。しかも、『キリストとの交わり』とも言われているように、『霊』はいつも『子』と共に働きながらそうするのである。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、109頁。

¹⁶⁵ AH3.24.1 : et in eo deposita est communicatio Christi, id est Spiritus sanctus, arrha incorruptelae et confirmatio fidei nostrae et scala ascensionis ad Deum. In Ecclesia enim, inquit, posuit Deus apostolos, prophetas, doctores, et uniuersam reliquam operationem Spiritus, cuius non sunt participes omnes qui non concurrunt ad Ecclesiam, sed semetipsos fraudant a uita per sententiam malam et operationem pessimam. Vbi enim Ecclesia, ibi et Spiritus Dei ; et ubi Spiritus Dei, illic Ecclesia et omnis gratia : Spiritus autem Veritas.

2.5. 神の「養子」とされる恵みと「神化」

神から「不死性の保証」である聖霊を与えられた人間は、神の「養子」とされる恵みを受けたとすることができよう¹⁶⁶。『異端反駁』第3巻6章1節には次のように記されている。

また、神は神々の集いに立ち、その真中で神々への裁きを行う。ここで父と子と、そして養子とされた者たちについて言っている。これは教会であり、神の集いであって、これは神、すなわち、御子が自ら自分自身で集めたのである¹⁶⁷。(中略) 神々

¹⁶⁶ 人間は洗礼時に「神の養子」とする聖霊を受けたと考えられる。『異端反駁』第3巻17章1節には、次のように記されている。「また主の霊が私の上にある。私に注油するために。その霊は主が『語るのとはあなたたちではなく、あなたたちのうちで語る、あなたたちの父の霊である。』と言ったのである。また神へと生まれ変わらせる権限を弟子たちに与えたとき、『あなたたちは行って、すべての民族を弟子としなさい。父と子と聖霊の名において、彼らに洗礼を授けなさい。』と彼らに言った。しもべとはしために預言させるために、終わりの時に、彼らの上にこの〔霊〕を注ぐであろうと、預言者を通して約束したのである。そこで〔聖霊〕は人の子となった神の子にも降った。それは彼と共に人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住むということに慣れさせるためであった。そのなかで父の意志を行い、そして彼らを古さから新しさへと新たにするのである。」(AH: 3.17.1: Et iterum : Spiritus Domini super me, propter quod unxit me, iste Spiritus de quo ait Dominus : Non enim uos estis qui loquimini, sed Spiritus Patris uestri qui loquitur in uobis. Et iterum potestatem regenerationis in Deum dans discipulis dicebat eis : Euntes docete omnes gentes, baptizantes eos in nomine Patris et Filii et Spiritus sancti. Hunc enim promisit per prophetas effundere se in nouissimis temporibus super seruos et ancillas ut prophetent ; unde et in Filium Dei Filium hominis factum descendit, cum ipso adsuescens habitare in genere humano et requiescere in hominibus et habitare in plasmate Dei, uoluntatem Patris operans in ipsis et renouans eos a uetustate in nouitatem Christi.) また続く『異端反駁』第3巻17章2節には、次のように記されており。「私たちの身体は、洗いによって、魂は霊によって不滅性にまで至る一致を受けたのである。」(AH3.17.2: Corpora enim nostra per lauacrum illam quae est ad incorruptionem unitatem acceperunt, animae autem per Spiritum.) 『異端反駁』第3巻17章3節においても「主に降った神の霊であって、知恵と悟りの霊、深淵と力の霊、知恵と敬虔の霊、神への畏れの霊である。これを〔主は〕教会に与えた。また擁護者を天から全地に遣わしたのである。」(AH3.17.3: quod est Spiritus Dei, qui descendit in Dominum, Spiritus sapientiae et intellectus, Spiritus consilii et uirtutis, Spiritus scientiae et pietatis, Spiritus timoris Dei, quem ipsum iterum dedit Ecclesiae, in omnem terram mittens de caelis Paraclitum.) これらの箇所を合わせて読むと、エイレナイオスが洗礼において、人間が神から聖霊を受けると語っていると考えることができる。また『証明』第7章には、「洗礼は、子を通して、聖霊の内に、父なる神への再生をわれわれにもたらすのである。なぜなら、神の霊を保持する人々が御言葉、すなわち子へと導かれ、子はこの人々を父の許へと連れて行って引き合わせ、父は不朽性を授けるからである。それゆえ、霊によらないでは神の御言葉を見ることはできず、子によらないでは父に近づくことはできない。子は父の知識であり、子の知識は聖霊を仲介とするからである。しかし、子は、父が望むように、自分の望む人々に、役務に応じて霊を与える。それが父の心に適うことだからである。」と記されている。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、208頁。これについて鳥巢義文は次のように記している。「父と子と聖霊の救いのわざは、父なる神の意志のもとに御子と聖霊が協働することによって営まれていることが要約されている。しかも、この救いの営みは父の御旨から出て、御子により聖霊の内に行われ、再び、聖霊から御子を経て父へと向かう救いの筋道を辿っているのである。これをもう少し視覚的に表現すれば、次のような救いの協働のラインが説かれている。①父の救いの御旨→御子が知り→聖霊を介して人々に示される。②聖霊を保持する人々→御子を知る→御子はその人々を父へ導く→父は不朽性を与える。」鳥巢義文「神の救済史的啓示 —エイレナイオス『使徒的宣教の証明』を中心に—」、94頁。

¹⁶⁷ AH3.6.1 : Et iterum : Deus stetit in synagoga deorum, in medio autem deos discernit. De Patre et Filio et de his qui adoptionem perceperunt dicit ; hi autem sunt Ecclesia : haec enim est synagoga Dei, quam Deus, hoc est Filius, ipse per semetipsum collegit.

とはどんなものか？「私は言った。あなたたちは神々であり、また、皆、崇高なものの子らである。〔すなわち〕養子にする恵み¹⁶⁸を受けた人々に言っている〔のであって〕これによって私たちは「アバ、父よ」と呼ぶのである¹⁶⁹。

この「養子とする恵み」は、まさに聖霊の働きに他ならない。御子の受肉後に、人間は「神の養子」とされ、あたかも本当の子供であるかのように、父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶことができるのである¹⁷⁰。ここで忘れてはならないことは、人間の「神化」はただ一方的な「聖霊」の働きだけではないということである。確かに、「神の養子」とし、「アバ、父よ」と呼ぶことができるように働くのは聖霊であるが、同時に、人間は「何が善であり、何が悪であるか」を判断しつつ、自らに与えられた「自立性」に従って成長する必要がある。幼児として造られた人間が、その成長の過程において、神に従い、「不死性の保証」である聖霊を受けるのである。この「不死性の保証」について記されている『異端反駁』の重要な箇所をもう1つ見たい。その箇所は『異端反駁』第5巻8章1節である。

今、私たちは完成と不滅性のために神の聖霊の部分を受け取っている。私たちは次第に神を捉え、担うことに慣れ親しんでいくのである。そして使徒は、これを保証と言っている。すなわち、神が私たちに約束された自身の栄誉の部分である。彼はエフェソへの手紙で言っている。「彼において、また、あなたがたも、真理の言葉、

¹⁶⁸ 『異端反駁』第4巻1章1節では、「子とする霊を受けた人々」(qui adoptionis Spiritum accipiunt)と記されている。

¹⁶⁹ AH3.6.1 : Quorum autem deorum? Quibus dicit : Ego dixi : Dii estis et filii Altissimi omnes, his scilicet qui adoptionis gratiam adepti sunt, per quam clamamus : Abba Pater. また『証明』第5章には「父は『すべてのものを超えて』いるが、すべてのものが父によって造られたのは子を通してであったから、御言葉は『すべてのものと共にあり』、そして『アッバ、父よ』と叫び〔ガラ4:6〕、人を神と似たものへと形づくる霊は、『われわれ皆の内に』いる。」と記されている。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、207頁。これについて鳥巢義文は次のように記している。「神の『両手』の営みの特徴を述べれば、みことばである御子は主に『存在』を与え、聖霊は造られたものに『装い』を与える。本章のエイレナイオスの解説はあまり明快ではないが、このような御子と聖霊の役割分担は、『霊が種々な「力」を配分し、形を造るのに対し、御言葉は「据える」、つまり物質に働きかけて、存在を与える』という箇所に確認できる。聖霊の与える装いとは、人間の場合は聖霊が与えるカリスマに基づくものであり、更に聖霊の内在によって人間は神を『アッバ、父よ』と呼ぶようになり、また御子イエスを『主』と公言することが可能となる。他方、御子は自らが据えたものに指針を与え、旧約、新約の時代を通して聖霊に鼓舞されて語られたこと、証言された出来事を統合し、遂には信仰者を父との交わりへと導く役目を担っているのである。」鳥巢義文「神の救済史的啓示 —エイレナイオス『使徒的宣教の証明』を中心に—」、93頁。

¹⁷⁰ 園部不二夫は「誤解してならないことは、人間の神の子化というのは、決して異教的な人間神化ではなく、パウロのいう『子とせられること』(huiiothesia ローマ8・15、9・4その他)の意であり、救済(salus, soteria)の意であることである。」と説明している。『園部不二夫著作集第3巻』、94頁。本論文で論じているように、エイレナイオスの思い描く「神化」の過程において、「子とされる」ことは含まれているが、それで神化が成し遂げられたことにはならない。あくまでも人間が完成に至るまで成長することと、「神を見ること」によって、神との「類似性」を回復し、不滅性を有するまでがエイレナイオスの言う「神化」であると筆者は考える。

あなたの救いの福音、また信じて約束された聖霊で証印をされたのであり、これは私たちが相続する保証である。従って、もしこの保証が、私たちのうちに宿っているのであれば、既に、霊的なものであり、また死すべきものは、不死性によって呑み込まれているのである。——なぜなら、もしあなたたちのうちに神の霊が宿っているのであれば、あなたたちは肉にいるのではなく、霊のうちにいるのである。——と言っている。しかし、このことは肉を捨てることによるのではなく、霊と一致することでなされる。——つまり、肉を持たない者たちに書いたのではなく、神の霊を受け取った者たちにてあり、この〔霊〕によって、「アバ、父よ」と呼ぶのである。——従って、もし今、保証を持っている私たちが、「アバ、父よ」と呼ぶのであれば、私たちがよみがえり、顔と顔を合わせて父を見るであろう時には、〔また〕すべての者たちが絶え間なく勝利の賛美を捧げ、死から彼らを起し、永遠の生命を与えるであろう者はどれ程、神を讃えるであろうか？もし、人を自らのうちに包んでいる保証が、すでに「アバ、父よ」と言わせているとすれば、神から人々に与えられるであろう霊の完全な恵みは何をなすであろうか？〔それは〕私たちが神に似たものとし、父の意志を完成するであろう。なぜなら、人間を神のかたちと類似性に従って造るであろうから¹⁷¹。

この箇所から明らかなように、「不死性の保証」としての聖霊は、そのすべてが人間の成長の過程において与えられているのではない。与えられているのは、「部分的」なものに過ぎず、あくまでも人間が完全な成長に至って、初めて人間は「不死性」すなわち、神との「類似性」を手にすることができるのである。けれども、この「部分的」な保証によって、人間は「既に、霊的なものであり、また死すべきものは、不死性によって呑み込まれている」状態とされているのである。このように人間は、たとえ「部分的」ではあっても「保証」としての聖霊を受けることにより、神の「養子」とされ、父なる神を「アバ、父よ」

¹⁷¹ AH5.8.1: Nunc autem partem aliquando a Spiritu ejus sumimus ad perfectionem et praeparationem incorruptelae, paulatim assuescentes capere et portare Deum : quod et pignus dixit Apostolus, hoc est pars ejus honoris qui a Deo nobis promissus est, in epistola quae ad Ephesios est dicens : In quo et vos, audito verbo ueritatis, Evangelio saltis uestrae, in quo credentes signati estis Spiritus promissionis sancto, qui est pignus hereditatis nostrae. Si ergo pignus hoc habitans in nobis jam spirituales efficit et absorbetur mortale ab immortalitate—Vos enim, ait, non estis in carne sed in Spiritu, siguidem Spiritus Dei, habitat in uobis—, hoc autem non secundum jacturam carnis sed secundum communionem Spiritus fit—non enim erant sine carne quibus scribebat, sed qui assumpserant Spiritum Dei, in quo clamamus : Abba Pater, si igitur nunc pignus habentes clamamus : Abba, Pater, quid fiet quando resurgentes facie ad faciem uidebimus eum, quando omnia membra affluenter exultationis hymnum protulerint, glorificantia eum qui suscitauerit ea ex mortuis et aeternam vitam donauerit? Si enim pignus complectens hominem in semetipsum jam facit dicere : Abba, Pater, quid faciet uersa Spiritus gratia quae hominibus dabitur a Deo? similes nos ei efficiet et perficiet uoluntatem Patris : efficiet enim hominem secundum imaginem et similitudinem Dei.

と呼ぶことのできる存在となるのである。次いで、神の「養子」とされた人間が、どのように「神化」の完成に至るかについて論じていきたい。

2.6. 御国における「神化」の完成——神との「類似性」の完全な回復——

これまで見て来たように、幼児として造られた人間が、神の導きにもとで成長し、完成に至る点については『異端反駁』第4巻38章4節を引用し確認をした。そこには次のように記されていた。

まず本性が現れ、後に死すべきものが不死性に、滅びるべきものが不滅性に勝利し、飲み込まれ、そして善と悪の知識を得て、神のかたちと類似性に従って人間となることになっていたのである¹⁷²。

エイレナイオスが語る「神化」の完成については、人間が完成に至るまで成長していくことに加えて、エイレナイオスにおける人間の完成において重要な点として「父なる神を見ること」を挙げることを忘れてはならない。そこで、もう一度『異端反駁』第4巻20章5節に目を向けたい。

神はすべてにおいて力があり、ある時は霊によって預言的に現われ、また子を通して養子として現われたが、天の国においては父として現れるであろう。霊は神の子に人間を整え、また子は父に導き、父は不滅性と永遠の生命を与えるのであるが、この生命は、神を見ることによって、それぞれの人間に生じるのである¹⁷³。(下線筆者)

創造において、神に服従する限りにおいて人間に与えられていた「不滅性」は、墮罪によって失われた。この「不滅性」とは、神との「類似性」によって与えられていた。人間は墮罪によって、「神との類似性」を失ったために、自らに与えられていた「不滅性」を失

¹⁷² AH4.38.4 : Oportuerat autem primo naturam apparere, post deinde vinci, et absorbi mortale ab immortalitate et corruptibile ab incorruptibilitate, et fieri hominem secundum imaginem et similitudinem Dei, agnitione accepta boni et mali.

¹⁷³ AH4.20.5 : potens est enim in omnibus Deus, visus quidem tunc per Spiritum propheticæ, visus autem et per Filium adoptivæ, videbitur autem et in regno caelorum paternaliter, Spiritu quidem præparante ad Patrem, Patre autem incorruptelam donante in æternam vitam, quæ unicuique evenit ex eo quod videat Deum.

うことになったのである¹⁷⁴。そのため、人間の「神化」の完成とは、御国において実際に「神を見て」初めの状態において与えられていた「神との類似性」を再び得ることに他ならない。この「神との類似性」を回復するということこそ、「聖霊」を受けることを意味している。それにより、聖霊を受けた人間は、「完全な人間」となる。『異端反駁』第5巻6章1節には、次のように記されている。

父の両手によって、すなわち、御子と聖霊によって、人は神の類似性に従って成るけれども、人の一部ではない。また、魂と聖霊は、人の一部になることができるが、決して人ではない。けれども、完全な人とは、父の霊を受け取る魂と、神のかたちに従って造られた肉体とが混合し、結合した〔人である〕¹⁷⁵。(中略)もし、誰かが形成物である肉の実体を取り除き、そして、自らを純粹に全く霊だけのものとしてを理解するとしても、もはや、そのようなものは霊的な人間ではなく、むしろ、人間の霊、あるいは、神の霊〔である〕。しかし、魂と混合した聖霊が形成物に一致するとき、聖霊の流出の故に、人間は霊的なもの、また、完全なものとなる。そして、これこそが神のかたちと類似性に従って造られたものである¹⁷⁶。

ここで記されている「魂と混合した聖霊が形成物に一致するとき、聖霊の流出の故に、人間は霊的なもの、また、完全なものとなる」ことと、『神の両手』、すなわち、『御子』と『聖霊』によって造られた人は、すべてのときにおいて、神のかたちと神の類似性に造られる」ことを合わせて考えたとき、聖霊が「肉と魂」である人間の存在に注がれることによって、「神との類似性」もまた与えられるということを理解することができる。つまり人間の「神化」の完成は、「神の両手」の片方である受肉した「御子」を「見た」人間が、「父なる神」を実際に「見る」ことで、もう片方の手である「知恵」としての聖霊を通して、「神との類似性」を回復させられることにより最終的に成り立つのである¹⁷⁷。これは「神の両手」によって造られた人が、その創造のときから、完成のときに至るまで、常に父な

¹⁷⁴ この神への従順は、一時的な「不滅性」を保証したものであった。鳥巢義文は「人間は、条件付きではあっても聖霊による『類似性』つまり『不滅性』を与えられており、それによって死をまぬがれていたものであった。」と記している。鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、118頁。

¹⁷⁵ AH5.6.1: Per manus enim Patris, hoc est per Filium et Spiritum, fit homo secundum similitudinem Dei, sed non pars hominis. Anima autem et Spiritus pars hominis esse possunt, homo autem nequaquam : perfectus autem homo commixtio et adunitio est animae assumptis Spiritum Patris et admixtae ei carni quae est plasmata secundum imaginem Dei.

¹⁷⁶ AH5.6.1: Si enim substantiam tollat aliquis carnis, id est plasmatis, et nude ipsum solum spiritum intellegat, jam non spiritalis homo est in quod est tale, sed spiritus hominis aut Spiritus Dei. Cum autem Spiritus hic commixtus animae unitur plasmati, propter effusionem Spiritus spiritalis et perfectus homo factus est : et hic est qui secundum imaginem et similitudinem factus est Dei.

¹⁷⁷ John Behr, *Asceticism and Anthropology in Irenaeus and Clemnt*, 99.参照。

る神の「両手」に支えられているという神の救済の歴史¹⁷⁸に他ならない。

以上のように、人間は御国において「父なる神を見ること」によって、「神との類似性」を完全に回復する¹⁷⁹。人間は、この回復に至るまで成長を続ける必要があるが、まず神が人間に「神の子ら」としての本性が与え、「墮罪」を通して、尚、人間を導き、御子の受肉、教会に聖霊を与え、人間に「不死性の保証」としての聖霊を与える。その神の導きのもとで人間は継続的に成長し、最終的に人間に聖霊を与えることで「類似性」を回復させ、原初において創造した人間の状態を取り戻らせ、さらに人間が「神となる」(dii facti sumus)まで導くのである。

2.7. まとめ

神は人間を「神となる」(dii facti sumus)ように創造した。それは人間が創造された原初から人間は「神の子ら」として造られていたことを意味する。人間は蛇に誘惑され「墮罪」をしたことにより、神から与えられていた一時的な「不滅性」を喪失してしまう。けれども、やはり「善き神」は人間を預言による聖霊の働きにより導き、時が満ちて御子を受肉させ、自らが「神のかたち」として造られていたことを思い出させる。これにより「神との類似性」を回復する道をも開かれるのである。御子の受肉後は聖霊を教会に与え、さらに人間のうちに聖霊を宿らせ、「不死性の保証」を人間に与えつつ、完成へと導くのである。そして御国において「神を見ること」によって聖霊を与え、神との「類似性」を回復し、「肉体」と「魂」と「聖霊」から成る「完全な人間」としての「神となる」(dii facti sumus)ことへと導くのである。

3. 「御子」と「聖霊」による「肉」と「魂」への混合と一致——不滅性と不死性の回復——

幼児の状態として造られた人間は、神に従うことで「不滅性」と「不死性」を保持することが可能とされていた。けれども、蛇によって唆され、墮罪したことにより「不滅性」と「不死性」である「神との類似性」を喪失し、代わりに人間のうちに死が入り込んだの

¹⁷⁸ 鳥巢義文は「エイレナイオスの救済史神学において、人間の完成という神の創造のわざは、ただ単に『人類史の始まりとしての創造の段階』に留まらず、墮罪した人類の贖いと救いの成就という、いわば『その後の』神の救いの営みに全体的に重なる射程を持つものと見なされている。神は人類を『大人』に成長させようとして、その『両手』をもって絶えず彼らに同伴する。それは、人をより完全に神の似姿へと仕上げる営みとして歴史上に明らかにされる。神は限りない恵みを施し、人類はそれを享受する。従って、ちょうど『子供』であるかのような人類は神の言葉に学び『大人』へと成長しなければならない。」と記している。鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、29-30頁。

¹⁷⁹ Gustaf Wingren は、神化は人間が復活し、御国に至り聖霊を受け、神の「かたち」と「類似性」が完全に回復することによって至ると説明している。Gustaf Wingren, *Man and the Incarnation*, 209-212.

である。エイレナイオスによれば、「神との類似性」は「御子」、すなわち受肉した「御言葉」を「見ること」によって回復への道の第一歩が開かれる。と言うのも、幼児の状態として人間が造られたときには、未だ「御言葉」である御子を見ることができなかったがために、容易に「類似性」を失ってしまったというのが、エイレナイオスの考える墮罪の理由であるからである。この点に関して、『異端反駁』第5巻16章2節には、次のように記されている。

かつて、確かに人間は神のかたちに従って造られたものと言われていたが、示されてはいなかった。つまり、人間がそのかたちに従って造られた御言葉は、まだ不可視であった。このために、類似性を容易に喪失した。しかし、神の御言葉が肉となったとき、〔2つの〕いずれも確かなものにした。すなわち、彼のかたちであったものになることで、真のかたちを明らかにし、また人間を目に見える御言葉によって、目に見えない父に似たものとするので、類似性をも強固にもと通りにしたのである¹⁸⁰。

この箇所に記載されているように、墮罪をした人間は受肉した御言葉である御子を「見ること」により「神のかたち」と「神との類似性」として、自らが創造されたことを思い出す。また「御言葉」の受肉により、目に見えない「父なる神」もまた人間に示された。これにより人間は、再び「不滅性」と「不死性」へと至る可能性が開かれたのである。すなわち、人間の目に見えるかたちとして表れた「御言葉」の受肉は、人間を完全に「不滅」に、また「不死」にするのではなく、幼児として人間が造られた当初に与えられていた「不滅性」と「不死性」に至る可能性を開いたのである。このことは、受肉した「御言葉」を墮罪した人間が「見ること」だけでは、完全な「不滅性」と「不死性」が即座に与えられるわけではないということの意味している。あくまでも、その可能性が開かれた人間が、再び、「神に従うこと」を通して、また神から与えられる「助言」に従い「善」を選ぶことを通して、聖霊を保持し続けることができ、そして、最終的に父なる神を「見ること」によって、完全に回復されるのである。

このことを踏まえた上で、私たちは次のことを考察したい。それは(1) 御言葉の受肉と「不滅性」の回復の関係性。(2) 聖霊が与えられることと「不滅性」の回復の関係性の2

¹⁸⁰ AH5.16.2: In praeteritis enim temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur: adhuc enim invisibile erat Verbum, cujus secundum imaginem homo factus fuerat; propter hoc autem et similitudinem facile amisit. Quando autem caro Verbum Dei factum est, utraque confirmavit: et imaginem enim ostendit veram, ipse hoc fiens quod erat imago ejus, et similitudinem firmans restituit, consimilem faciens hominem invisibili Patri per visibile Verbum.

点である。まず (1) 御言葉の受肉と「不滅性」の回復の関係性について論じていきたい。

3.1. 御言葉の受肉による混合と一致と「不滅性」の回復の関係性

永遠の「御言葉」が受肉し、人々の間に現されたことと、人間の「不滅性」の回復には、一体どのような関係性があるだろうか。まず 1 つの問題提起を記したい。それは、人間の「不滅性」の回復が語られる際、「御言葉」の受肉による人間との混合と一致という観点よりは、むしろ「聖霊による混合と一致」の働きの方に重きが置かれて来たのではないだろうか。けれども、私は、エイレナイオスは「御言葉」の受肉と人間の混合と一致、また、その結果である「不滅性」の回復について、聖霊の働きと同様、重要な位置づけをしていると考える。そのことを明らかにするために『異端反駁』第 3 卷 19 章 1 節に目を向けたい。

確かに、彼らは処女から〔生まれる〕インマヌエルを知らないので、その賜物、つまり永遠の命から不滅性〔を持つ〕御言葉を受け入れないので、死すべき肉のうちに留まっており、生命の〔ための〕解毒剤を受けないので、死の負債者である。御言葉は、その恵みの賜物のことを語った際、この人々に向かって言った。私は言った。あなたたちは皆、神々であり、至高の者の子らであると。養子とする賜物を受け入れず、神の御言葉の汚れのない出生という受肉を侮辱し、人間から神に向かっていくことを騙し取り、自分たちのために肉となった神の御言葉に感謝をしない態度を取る。このため、神の御言葉が人間となった。すなわち、神の子が、人の子となったのである。〔それは人間が〕神の御言葉と結合され、養子とされることを受けて、神の子となるためであった。私たちは、不滅性と不死性とひとつに結ばれるのでなければ、他の方法で不滅性と不死性を得ることはできなかったからである¹⁸¹。

(下線筆者)

まず、私たちはこの箇所、エイレナイオスが論じている主題を明らかにしなければならぬ。ここでは「神の子」である御子、すなわち、御言葉が人間のために「肉」を取り、「人の子」となったこと、つまり、御子の「受肉」について語られている箇所である。そのため、当然、この箇所、エイレナイオスが論じている主題は「御子について」というこ

¹⁸¹ AH3.19.1 : Ignorantes enim eum qui ex Virgine est Emmanuel, priuantur munere eius quod est uita aeterna ; non recipientes autem Verbum incorruptionis, perseuerant in carne mortali et sunt debitorum mortis, antidotum uitae non accipientes. Ad quos Verbum Propter hoc enim Verbum Dei homo, et qui Filius Dei est Filius hominis factus est, < ut homo >, commixtus Verbo Dei et adoptionem percipiens, fiat filius Dei. Non enim poteramus aliter percipere incorruptelam et immortalitatem nisi aduniti fuisset incorruptelae et immortalitati.

とになる。その御子がどのような存在であるかと言えば、「永遠の命から不滅性〔を持つ〕御言葉」と語られており、御言葉である「御子」の「不滅性」が示されている。そして「不滅性」である御言葉が、私たちのために「肉」となり、神の御言葉と私たちが「結合」(commixtus Verbo Dei)されたことが語られている。その結果として、「私たちは、不滅性と不死性とひとつに結ばれるのでなければ、他の方法で不滅性と不死性を得ることはできなかつた」と締めくくられている。とするならば、このように語られていることの主語は、「養子とされること」という聖霊の働きだけではなく¹⁸²、やはり、その前にある「神の御言葉と結合され」という部分を含んでいると考えることの方が妥当であろう。ここから、墮罪によって「神との類似性」を喪失したことにより、神への服従という条件の下ではあったものの、原初において与えられていた「不滅性」と「不死性」は、「神の両手」の片方である「御言葉」の受肉によって、人間が御子と「結合」(commixtus)することにより、回復へと至る道が与えられていると理解することができる。

別の箇所でも、「御言葉」の受肉である御子と人間の結合と一致が語られている。その箇所として『異端反駁』第4巻20章4節に目を向けたい。

この方は、神の御言葉、私たちの主イエス・キリストであり、終わりを初めに、即ち、人間を神に結び合わせるため、終わりのときに人々のうちに人間となったのである。そして、この故に、預言者たちは、同じ御言葉から預言の賜物を受けて、その肉が来ることを予め伝えた。父の意にかない、それに基づき、神と人間との混合と一致〔がなり〕、神が人々に見られ、地上で彼らと交際し、語り合い、自らが形造った〔人間〕と共にいるようになること、それらを救い、また認知され、「私たちが憎むすべての手から」すなわち、神に背いたすべての霊から、私たちが自由にし、私たちが毎日、「聖性と義のうちに〔神に〕仕える」ようにし、こうして人間が神の霊に包含され、父の栄光に進むようになるであろうことは、神の御言葉が、初めから予め告げていたことである¹⁸³。(下線筆者)

¹⁸² 『異端反駁』第5巻8章1節を参照。

¹⁸³ AH4.20.4: Est autem hic Verbum ejus, Dominus noster Jesus Christus, qui in novissimis temporibus homo in hominibus factus est, ut finem conjungeret principio, hoc est hominem Deo. Et propter prophetas, ab eodem Verbo propheticum accipientes charisma, praedicaverunt ejus secundum carnem adventum, per quem commixtio et communio Dei et hominis secundum placitum Patris facta est, ab initio praenuntiante Verbo Dei quoniam videbitur Deus ab hominibus et conversabitur cum eis super terram et colloqueretur et adfuturus esset suo plasmati, salvans illud, et perceptibilis ab eo, et liberans nos de manibus omnium odientium nos, hoc est ab universo transgressionis spiritu, et faciens nos servire sibi in sanctitate et justitia omnes dies nostros, uti complexus homo Spiritum Dei in gloriam cedat Patris.

この箇所においても、やはり「神の御言葉」について語られており、「人間を神に結び合わせるため、終わりのときに人々のうちに人間となった」と記されている。その「肉」として来られた神の「御言葉」が、「人間との混合と一致」(commixtio et communio Dei et hominis) が成されたことが言及されている。

これらの箇所を参考に考えると、神と人間に「結合と一致」をもたらすのは、「聖霊」によるだけではないと判断することができる。人間が墮罪によって喪失した「不滅性」は、「永遠の生命である御言葉」としての御子の受肉を通して、人間と結合し、また一致することにより回復に至る可能性が開かれたとすることができるであろう。そして、この「御言葉の受肉」は、文字通り「肉」への働きであり、「肉」を持つ人間の「不滅性」の回復の一側面であると言えよう。

3.2. 聖霊が降ることによる混合と一致と「不滅性」の回復の関係性

次いで、私たちは聖霊が人間に降ることによる混合と一致と、「不滅性」の回復について論じていきたい。これを取り扱うにあたり、私たちは受肉した「御言葉」に、どのように聖霊が降ったかについて記されている『異端反駁』第3巻17章1節を取り上げることから始めていきたい。

彼らは真にそうであったことを語った。すなわちイザヤが彼の上に留まって休むと言ったあの神の霊が、鳩のように彼に降った。それは私たちがすでに述べた通りである。また「主の霊が私の上にある。私に注油するためである」[と言っている。] その霊は主が「語るのはあなたがたではなく、あなたがたのうちで語る、あなたたちの父の霊である」と言ったのである。また神のうちに再び生まれ変わらせる力を弟子たちに与えたとき、「あなたたちは行って、すべての民族を弟子にしなさい。父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」と彼らに言った。しもべとはしたために預言させるため、終わりの時に彼らの上にこの〔霊〕を注ぐであろうと、預言者を通して約束したのである。そこで〔聖霊〕は、人の子となった神の子にも降った。それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住む (habitare in plasmate Dei) ということに慣れさせるためであった。そのなかで父の意志を行い、そして彼らを古さからキリストの新しさへと新たにするのである¹⁸⁴。(下線筆者)

¹⁸⁴ AH3.17.1 : Quod autem erat, hoc et dixerunt, Spiritum Dei sicut columbam descendisse in eum, hunc Spiritum de quo ab Esaia dictum est : Et requiescet super eum Spiritus Dei, sicut praediximus.

先述したように、「永遠の命から不滅性〔を持つ〕御言葉」と語られていた御子と人間が混ぜ合わされることによって、人間が再び「不滅性」を得る可能性が開かれた。聖霊は、まず「受肉」し、人間となった御子であるイエスに降ったのである。ここには明確な順序がある。まず初めに「不滅性」を持つ御言葉が受肉しなければ、次の段階である聖霊が降るといってもない¹⁸⁵。このようなことから、エイレナイオスが人間の「肉体」をも含めた救いを意識し、また「肉体」の救いを否定するグノーシス主義に対する批判が込められていると考えることができる。

『異端反駁』第3巻17章1節でエイレナイオスは、受肉した「御言葉」である御子に降った聖霊は、イザヤが証をし、また弟子たちに与えられた同じ聖霊であることを強調する¹⁸⁶。その同じ聖霊が、受肉した「御言葉」に降ったことの原因として、エイレナイオスは「それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物¹⁸⁷のうちに住むということに慣れさせるためであった」と語っている¹⁸⁸。やはり、この箇所においても、エイレナイオスは「彼とともに」(cum ipso) という文言を付け加えている。この「彼」とは、その直前にある「人の子となった神の子」であることは疑いの余地はないであろう。このように「神の両手」の片方である聖霊は、もう片方である御子から離れて、人間に降るといふことはなく、「受肉」した御言葉である「御子」とともに働くのである。

エイレナイオスは聖霊が人間のうちに降ることを「人類」から初め、次に「人々」と語り、最後は「形成物」へとしている。これはまるで「神の両手」として父なる神と共にい

Et iterum : Spiritus Domini super me, propter quod unxit me, iste Spiritus de quo ait Dominus : Non enim uos estis qui loquimini, sed Spiritus Patris uestri qui loquitur in uobis. Et iterum potestatem regenerationis in Deum dans discipulis dicebat eis : Euntes docete omnes gentes, baptizantes eos in nomine Patris et Filii et Spiritus sancti. Hunc enim promisit per prophetas effundere se in nouissimis temporibus super seruos et ancillas ut prophetent ; unde et in Filium Dei Filium hominis factum descendit, cum ipso adsuescens habitare in genere humano et requiescere in hominibus et habitare in plasmate Dei, uoluntatem Patris operans in ipsis et renouans eos a uetustate in nouitatem Christi.

¹⁸⁵ 『異端反駁』第4巻38章1節には、次のように記されている。「そして、この故に、父の完全なパンは、まるで幼子に対するように、彼自身を私たちに乳として与えた。すなわち、人間として来たことであるが、彼の肉という、言わば乳房によって養育され、そして、このような授乳を通して、神の御言葉を食べ、また飲むことに慣れて、また、このようにして不滅性のパン、すなわち、父の聖霊を自分自身のうちに保つことができる[ようになる]ためである。」(AH4.38.1 : Et propter hoc, quasi infantibus, ille qui erat panis perfectus Patris lac nobis semetipsum praetavit, quod erat secum dum nomen ejus aduentus, ut, quasi a mamilla carnis ejus nutriti et per talem lactationem assueti manducare et bibere Verbum Dei, et eum qui est immortalitatis panis, qui est Spiritus Patris, in nobis ipsis continere possimus.) このことから分かるように、神からの「不滅性」の回復のためには、まず幼児としての人間が成長し、「父の完全なパン」である「聖霊」を受け取ることが出来るようになる必要性があった。そのためにも、まず御子が「受肉」し、人間に現われ、人間が「自らが神のかたちに造られたこと」を思い出すことが必要不可欠な要素であった。

¹⁸⁶ Daniel A. Smith, *Irenaeus and the Baptism of Jesus*, Theological Studies, 1997, 629.

¹⁸⁷ 下線は筆者の強調による。

¹⁸⁸ これについては鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』第5章にある「慣れ親しみ—神と人類との交わりの歴史」を参照。197-246頁。

た聖霊¹⁸⁹が、段階を踏みながら、父なる神の側から、地上の人々へ、そして「形成物」である人間のもとに降りて来たような描写である¹⁹⁰。

それでは、ここでエイレナイオスが「聖霊が神の形成物のうちに住む」と語っている「形成物」とは一体何を指してそう語るのでしょうか。私たちは、この点に注目し考察を続けていきたい。

3.3. 『異端反駁』第3巻17章1節における聖霊が降る「形成物」とは何を指しているか

エイレナイオスが「形成物」と語るとき、それが指す対象として3つの可能性がある。1つは「肉体」であり、もう1つは「魂」である。そして最後は「肉体」と「魂」の両方である。

そこで問題提起として、次のことを整理しなければならない。すなわち、エイレナイオスは聖霊が降る場所として、果たして、人間の「肉」にのみ焦点を当てて考えていたであろうか、それとも「魂」であるか、もしくは、その両方であるかという点である。

この考察のために、エイレナイオスが「神の両手」である御子と聖霊が「形成物」である人間を創造したことについて、どのように記述しているかという点から確かめていきたい。ブリッグマンは『異端反駁』の以下の箇所が、「神の両手」と「形成物」(plasma)との関係で言及されていると記している¹⁹¹。その箇所とは、『異端反駁』第4巻序4節、第4巻20章1節、第5巻1章3節、第5巻5章1節、第5巻6章1節、第5巻28章4節である¹⁹²。

(1). 『異端反駁』第4巻序4節

¹⁸⁹ 『異端反駁』4巻7章4節には、次のように記されている。「彼から生じたものと彼の両手、すなわち、御子と聖霊、御言葉と知恵とが、すべての点で父に仕えているからで、天使たちはすべて下に置かれ、仕えているのである。」(AH4.7.4: ministrat enim ei ad omnia sua progenies et figuratio sua, hoc est Filius et Spiritus, Verbum et Sapientia, quibus serviunt et subjecti sunt omnes angeli.)

¹⁹⁰ 筆者はここに、エイレナイオスが「聖霊」の臨在の場の移行を考えていたのではないかと推察する。この点に関しては、後述したい。

¹⁹¹ 「神の両手」と「形成物」との関連については『異端反駁』の第4章以降に見出すことができるが、『異端反駁』第3巻21章10節には人間の創造について次のような記述がある。「神の手で、すなわち、神の御言葉によって形造られた。」AH3.21.10: plasmatus est manu Dei, id est Verbo Dei. このように『異端反駁』第3巻においては、「神の両手」が人間を形造ったのではなく、片方の手である「御言葉」が、人間を形造ったとされている。

¹⁹² Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 114. また Briggman によれば、エイレナイオスは『異端反駁』第4巻においては主に唯一の神の働きを支える両手のモチーフを用いて「肉」の救いを確保し、『異端反駁』第5巻においては、主に両手のモチーフを用いて、「肉」の救いの保証を記していると主張している。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 123.

人間は魂と肉の結合であり、人間は神に似せて造られ、また、その両手によって、すなわち、御子と聖霊によって形成された（per manus ejus plasmatus est, hoc est per Filium et Spiritum）。〔父なる神は御子と聖霊に〕「人間を造ろう」と語ったのである¹⁹³。（下線筆者）

この箇所を小林稔は次のように訳している。

人間は魂と肉との結合であり、[肉]は神に似せて形造られ、その手によって、すなわち子と霊によって形成された。〔父なる神はこの子と霊〕に「人間を造ろう」と言ったのである¹⁹⁴。（下線筆者）

私訳と小林訳の違いは箇所の下線を引いた部分であり、私訳は「人間は」となり、小林訳は「肉は」となっている。この訳の違いは、小林稔が脚注において、次のように説明を加えていることから理解することができる。

関係代名詞や分詞の性の問題で、ラテン訳は「人は」の意で訳しているが、アルメニア訳は「肉的」ととっている。後者の方が *lectio difficilior* であり、第V巻6・1でエイレナイオスが後者の見解をとっており、また論敵への反発という点から、アルメニア訳の読み方をとりたい¹⁹⁵。

いずれの翻訳であったとしても、人間が「魂と肉の結合」であることに疑いの余地はないが、小林訳を採用した場合には「神の両手」である御子と聖霊によって「形成」された人間という観点では、創造されたのは人間の「肉体」だけということになる。そうであるとすれば、当然、「それでは『魂』の創造は、どのように考えねばならないか」ということを問題として取り上げねばならないことになる。

この問題点を踏まえた上で、次の箇所である『異端反駁』第4巻20章1節に目を向け、この点についても整理をしていきたい。

（2）『異端反駁』第4巻20章1節

¹⁹³ AH4.pref.4: Homo est enim temperatio animae et carnis, qui secundum similitudinem Dei formatus est et per manus ejus plasmatus est, hoc est per Filium et Spiritum, quibus et dixit : Faciamus hominem.

¹⁹⁴ 『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、6-7頁。

¹⁹⁵ 『エイレナイオス「異端反駁」第4巻』、170頁。

神は地の泥を取り、人を形造り (Et plasmavit Deus hominem)、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。それ故、私たちが造ったのも、私たちが形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもとので予め決定したものを形造るのに、あたかもご自身の両手を持っていないかのように、これら(天使たち)を必要としたのでもない。神の側には常に御言葉と知恵、御子と聖霊(がおり)、(御言葉と知恵)によって、また、(御言葉と知恵)のうちに、また自発性を持って万物を造り、(御言葉と知恵)に向かって語り、「私たちのかたち(似像)に、また類似性に人を造ろう」と言ったのであり、ご自身で創造されたものの存在と、造られたものと、世にある美しいものの型をご自身から取ったのである¹⁹⁶。

(下線筆者)

この箇所でも『異端反駁』第4巻序4節と同様に、「神の両手」である「御言葉と知恵」すなわち「御子と聖霊」に、父なる神が「私たちのかたち(似像)に、また類似性に人を造ろう」と語りかけ、人間を創造したことが記されている。

その一方で『異端反駁』第4巻序4節と比べると、『異端反駁』第4巻20章1節では人間の創造に関して、別の説明が加えられていることも分かる。引用において、下線を引いた初めの部分には次のように記されている。

神は地の泥を取り、人を形造り、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。

エイレナイオスは、「生命の息」と「魂」を同一視して用いており¹⁹⁷、「生命の息」と「聖霊」は明確に区別している¹⁹⁸。そのため、人間の創造において与えられた「生命の息」は「聖霊」ではなく、人間を生きるものとするために神が与えた「生魂的生命」すなわち「魂」

¹⁹⁶ AH.4.20.1 : Et plasmavit Deus hominem, limum terrae accipiens, et insuffavit in faciem ejus flatum vitae. Non ergo angeli fecerunt nos neque plasmaverunt nos, neque enim angeli poterant imaginem facere Dei, neque alius quis praeter verum Deum, neque virtus Longe absistens a Patre universorum. Neque enim indigebat horum Deus ad faciendum quae ipse apud se praefinierat fieri, quasi ipse suas non haberet manus. Adest enim ei semper Verbum et Sapientia, Filius et Spiritus, per quos et in quibus Omnia libere et sponte fecit, ad quos et loquitur, dicens: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostrum, ipse a semetipso substantiam creaturarum et exemplum factorum et figuram in mundo ornamentorum accipiens.

¹⁹⁷ John Behr, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity* 152.

¹⁹⁸ 『異端反駁』第5巻12章2節では、「命の息」と「聖霊」について、次のように言及している。「人間を心魂的にするのは生命の息で、これが1つ、他に人間を霊的に生かす生きた霊が存在する。」AH5.12.2: Aliud enim est afflatus vitae, qui et animale efficit hominem, et aliud Spiritus vivificans, qui et spiritalem eum efficit.

であると言えよう。ここで同じく人間の創造に関して記述している『証明』第 11 章を見たい。

しかし人間の場合、神は土の最も純粋で細かいところを取って、ちょうどよい割合に自分自身の力を土とを混ぜ合わせ、自らの手で形づくった¹⁹⁹。人間が形づくられ、地に置かれたのは、神の似像としてであったから、見える外観も神のようなものであるべきだと、神が人間の身体に自身の外形²⁰⁰を与えたのであった。また人が生きるようになるため、「神はその顔に生命の息吹を吹き込んだ」〔創 2 : 7〕。その結果、人間は身体においてばかりでなく、息吹に関しても神に似たものとなった²⁰¹。

この記述からも明らかなように、『証明』第 11 章においても、「神の両手」が形造っているのは人間の外観、すなわち、「肉体」ということになる。その人間に、神が「生命の息を吹き込んだ」と記されている。つまり、人間の創造における父なる神の「両手」である御子と聖霊の働きは、人間の「肉」である「身体」を造ったということになる。そこに、父なる神が「生命の息」を吹き込むのであり、この働きは「神の両手」である御子と聖霊の働きと区別されている。このことについて、塩屋惇子は次のように述べている。

「魂」＝「命の息」の直接の創造者は、みことば（御子）でも、知恵（聖霊）でもなく、父なる神である。魂は神から、すでに存在していたある本質の単なる様態としてではなく、真の新しい本質として送りこまれる。グノーシス主義者やマルキオン派によれば、ヤーヴェなる神と実体を共にする人間と「魂」は同一である。つまり、魂はヤーヴェなる神、創造主の実体から流出したものである。父なる神とヤーヴェが 1 つであることを擁護するテルトゥリアヌスは、神の実体と魂の真の交わりをためらわずのべ、創造主は自分自身の実体から、命の息、即ち、魂をとり出し、これを人間に吹き込んだと考える。エイレナイオスはこのように大胆な定式化を避け、魂は、神の両手に委ねられた「被造物」、即ち、「形を与えられた人間」(plasis) を前提としてあらわれる、ということに焦点をあてる。神自身の実体の派出、あるいは流出であるとする考えは、はっきりと斥けている。また御子も聖霊も、魂の創

¹⁹⁹ Behr は He fashioned (πλάσσω) man with His own Hands としている。 *On the Apostolic Preaching*, Translated & with an Introduction by John Behr, (New York: St. Vladimir's seminary Press, 1997), 46.

²⁰⁰ Behr, Smith, Robinson, Mackenzie のいずれも、image of God と記している。に John Behr, *On the Apostolic Preaching*, 46. J.P. Smith, *St. Irenaeus. Proof of the Apostolic Preaching*, 54. J.A. Robinson, *St Irenaeus, The Demonstration of the Apostolic Preaching*, 80. Iain M. Mackenzie, *Irenaeus's Demonstration of the Apostolic Preaching a theological commentary and translation*, 4.

²⁰¹ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、211 頁。

造には影響力を与えていない。魂は最初から人間の身体に結びつけられ、神から注ぎこまれ、人間に付着し、人間の身体の中に浸透して、外的・内的肢体を活気づける。この命の息の吹き込みによって人は生きた者となり、内的・外的あるいは霊的・物質的という2つの人間の分離は消え、霊の萌芽と肉が結合しうるものとなる。肉体は魂によって生かされ、魂を通して霊のために生きる状態を獲得する。この魂＝命の息を「精神」(psyche)とも同意義にエイレナイオスは考えている²⁰²。

これまでの考察を総合的に考えると、「神の両手」である御子と聖霊によって創造された「形成物」(plasma)とは、人間の「肉体」を指していると考えることができる。つまり、「神の両手」である御子と聖霊が、人間の外観である「肉体」を「形成」し、父なる神が「生命の息」を吹き込むことで、人間を「生魂的」に生きる存在としたということから、「魂」は「形成物」から区別されるということになるであろう。

この点に関して、ヨピッヒ (Joppich) は『異端反駁』のいくつかの箇所、例えば『異端反駁』第4巻序4節²⁰³、第4巻41章4節²⁰⁴、4巻31章2節²⁰⁵、そして第1巻9章3節²⁰⁶を取り上げ、エイレナイオスは「形成物」(plasma)と「肉」を同一視しているとの見解を示している²⁰⁷。この結論が正しければ、やはり「形成物」は「肉体」のみを指しているのであり、「魂」を指してはいないとなる。とするならば、『異端反駁』第3巻17章1節で、エイレナイオスが「それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物²⁰⁸のうちに住むということに慣れさせるためであった」と語る「形成物」とは、「肉体」であり、聖霊が宿る場所としての「形成物」は、人間の「肉体」ということになる。

(3). 『異端反駁』第5巻1章3節

初めに私たちがアダムにおいて形造られた (initio plasmationis nostrae in Adam) とき、神によって吹き込まれた生命の息が、先に形成されたものと一致して人間を生かし、理性的心魂²⁰⁹として現存させたこと、また終わりのときには、御父の御言

²⁰² 塩屋惇子「エイレナイオスにおける人間の創造 (その二)」『清泉女子大学人文科学研究紀要』(1988年)、132頁。

²⁰³ AH4.pref.4: plasma Dei, quod quidem est caro.

²⁰⁴ AH4.41.4: plasma, quod est carnis substantia.

²⁰⁵ AH4.31.2: caro, hoc est plasma.

²⁰⁶ AH1.9.3: caro est illa vetus...plasmatio a Deo.

²⁰⁷ Godehard Joppich, *Salus Carnis: eine Untersuchung in der Theologie des hl. Irenaus von Lyon*, Munsterschwarzacher Studien, 1, Munsterschwarzach: Vier-Turme-Verlag, 1965, 31.

²⁰⁸ 下線は筆者の強調による。

²⁰⁹ 「生魂的」あるいは「動物的」と翻訳している animalis は、「霊的 spilitualis と対峙する。人間を考

葉と神の霊が、アダムの古い創造と実体を結びつけて、人間を生きた完全なものとし、完全な父を受け取り、私たちすべてが心魂的において死んだように、すべての者が霊的において生かされるのである。また神の両手は、かつてアダムから離れたことはなく、父は（御言葉と知恵）に向かって語り、「私たちのかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と言ったのである。それ故に、神の両手は時の終わりにあって、肉の欲によらず、また人の欲によらず、父の欲することに従い、人間を生きるものへと完成し、アダムが神のかたちに、また似たものとなるようにされたのである²¹⁰。

この箇所でも、まずアダムに「先に造られたもの」があることが示されている。これまでのことを踏まえて考えるならば、これが「肉体」を指すことは明白であろう。そのため、「初めに私たちがアダムにおいて形造られた」（*initio plasmationis nostrae in Adam*）と語られていることの内容は、「肉体」が「形成物」として造られたことを意味している。その「形成物」である「肉体」に、神によって生命の息が吹き込まれ、「肉体」と「生命の息」すなわち、「魂」が一致することにより「理性的心魂」となる。この「生命の息」を吹き込むのは、やはり神の働きであり、ここでも「神の両手」によって創造された「肉体」と「生命の息」によって創造された「魂」は区別されている。

さらに、この箇所では「心魂的」な存在として最初に創造されたアダムと、「霊的」な存在として受肉した御子を典型的に対比させている²¹¹。「肉体」を持ったアダムの不従順に対する「遣り直し²¹²」として、御子が受肉し、人間を完成へと導く。この「完全な人間」は、

えるときの本質は、エイレナイオスにとって、何よりも“plasma”「形造られたもの」である。塩屋惇子「エイレナイオスにおける人間の創造（その二）」、133頁。

²¹⁰ AH5.1.3: *quemadmodum ab initio plasmationis nostrae in Adam ea quae fuit a Deo aspiratio vitae unita plasmati animavit hominem et animal rationabile ostendit, sic in fine Verbum Patris et Spiritus Dei adunitus antiquae aubstantiae plasmationis Adae viventem et perfectum effecit hominem, capientem perfectum Patrem, ut, quemadmodum in animali omnes mortui sumus, sic in spiritali omnes vivificemur. Non enim effugit aliquando Adam manus Dei, ad quas Pater loquens dicit: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram. Et propter hoc in fine non ex voluntate carnis neque ex voluntate viri sed ex placito Patris manus ejus vivum perfecerunt hominem, uti fiat Adam secundum imaginem et similitudinem Dei.*

²¹¹ 大貫隆『ロゴスとソフィア』、228頁。同じ主題が『証明』第32章にも記されている。「それでは、この最初の人間の肉体はどこから来るのであろうか。神の意思と知恵とそして処女地からである。なぜなら聖書は、人が造られる前には「神は雨を降らさず、地を耕す人はいなかった」〔創2:5〕と言っているからである。そして、大地がまだ処女地だったときに、神はその地面から塵を取って人間、つまり人類の始まりを形づくったのであった。それで、主は、この人間を再統合しようとしたとき、〔アダム〕が肉〔なる人〕となった、その〔救済史の〕営み〔の経過〕を再現した。〔父なる〕神の意思と知恵によって処女地から生まれたのである。それは〔主〕もアダムという肉なる人の写しとなるため、そして〔聖書の〕初めに書かれている通り、人が神の「似像および似たもの」〔創1:26〕される〔コロ3:10参照〕ためであった。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、224頁。

²¹² 「この31章から34章まで、エイレナイオスは御子によるアダムの不従順の遣り直し、マリアによるエヴァの不従順の遣り直しなど、通常、アダム＝キリスト類型論と称されている神学的説明を展開してい

「すべての者が靈的において生かされる」とあるように、「靈的な存在」として捉えられている。Behr は引用中にある 2 つの「~のように」(quemadmodum) に注目している。初めに、アダムが生命によって生きる者 (animation) とされたように、終わりにおいて、キリストが聖霊によって古い実体が生かされる (vivification) という対比が成されている²¹³。

(4). 『異端反駁』第 5 卷 5 章 1 節

からだは神の善い御心を持っている限りは、長寿を維持し続けたのであって、聖書を読むなら、私たちが以前に存在した者たちが、七百歳、八百歳、九百歳を越えた年齢であるのが分かるであろう。そして、彼らのからだは日々の長さに達し、神がそれらを生かそうと欲する限りは、生命に与ったのである。けれども、なぜ、それらの者たちについて話すか [と云えば]、実にエノクは神の御心に適ったので、からだのまま移されたが、義人たちが移されることを予め示していたのであり、エリヤもまた形造られた実体のまま引き上げられたが、靈的な者たちの上昇を預言していたのである。また、からだは彼らの上昇と移行において、彼らを妨げていない。なぜなら、初めに彼らを形造ったあの同じ両手によって、彼らは上昇と移行を受け取ったからである。神の両手は、アダムにおいて自らの形成物を整え、治め、担い、そして自分の望むところに運び、据えることに慣れ親しんでいたのである²¹⁴。

この箇所ではエイレナイオスは、神が人間に長寿を与えていたことや、エノクやエリヤといった「肉体」を持ったまま天に昇った人物を例に挙げて、神が「肉体」の救いを強調している。そのため、この箇所の主題は「肉体の救い」であり、「神の両手は、アダムにおいて自らの形成物を整え、治め、担い、そして自分の望むところに運び、慣れ親しんでいたのである」と語る時、「神の両手」としての「御子」と「聖霊」は、アダムが創造されたときから「肉体」を持つ人間の救いに関わっていることを意味している。

る。」鳥巢義文「神の救済史的啓示」、98 頁。

²¹³ Behr, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity*, p.151.

²¹⁴ AH5.5.1: Quoniam autem multo tempore perseverabant corpora in quantum placuit Deo bene haberem legant Scripturas et invenient eos qui ante nos fuerunt septingentos et octingentos et nongentos supergressos annos, et consequebantur corpora ipsorum longinquitatem dietum, et participabant vitam in quantum ea Deus vivere volebat. Quid autem de illis dicimus, quandoquidem Enoch placens Deo in quo placuit corpore translatus est, translationem justorum praemonstrans, et Helias sicut erat in plasmatis substntia assumptus est, assumptionem patrum prophetans? Et nihil impediit eos corpus in translationem et assumptionem eorum : per illas enim manus per quas in initio plasmati sunt, per ipsas assumptionem et translationem acceperunt. Assuetae enim erant in Adam manus Dei coaptare et tenere et bajulare suum plasma et ferre et ponere ubi ipsae vellent.

(5). 『異端反駁』第5巻6章1節

父の両手によって、すなわち、御子と聖霊によって、人は神の類似性に従って成るけれども、人の一部ではない。また、魂と聖霊は、人の一部になることができるが、決して人ではない。けれども、完全な人とは、父の霊を受け取る魂と、神のかたちに従って造られた肉体 (*carni quae est plasmata secundum imaginem Dei*) とが混合し、結合した〔人である〕²¹⁵。(中略)もし、誰かが形成物である肉の実体 (*Si enim substantiam tollat aliquis carnis, id est plasmatis*) を取り除き、そして、自らを純粋に全く霊だけのものとしてを理解するとしても、もはや、そのようなものは霊的な人間ではなく、むしろ、人間の霊、あるいは、神の霊〔である〕。しかし、魂と混合した聖霊が形成物に一致するとき、聖霊の流出の故に、人間は霊的なもの、また、完全なものとなる。そして、これこそが神のかたちと類似性に従って造られたものである²¹⁶。

この『異端反駁』第5巻6章1節は、エイレナイオスの語る「完全な」人間を知る上で最も重要な箇所であると言えよう²¹⁷。エイレナイオスは、完全な人間を「肉体」「魂」「聖霊」の3つから構成されることを述べる。けれども、この3つは2つに区分される。すなわち、「肉体」と「魂」が創造された心魂的な状態の人間であり、「聖霊」はまさに「神の霊」であるため、「肉体」と「魂」と区別されている。この箇所においても、やはり「形成物」は「肉体」を指していると考えることができる。

その一方、この箇所には『異端反駁』第3巻17章1節の「それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住むということに慣れさせるためであ

²¹⁵ AH5.6.1: *Per manus enim Patris, hoc est per Filium et Spiritum, fit homo secundum similitudinem Dei, sed non pars hominis. Anima autem et Spiritus pars hominis esse possunt, homo autem nequaquam: perfectus autem homo commixtio et adunitio est animae assumptis Spiritum Patris et admixtae ei carni quae est plasmata secundum imaginem Dei.*

²¹⁶ AH5.6.1: *Si enim substantiam tollat aliquis carnis, id est plasmatis, et nude ipsum solum spiritum intellegat, jam non spiritalis homo est in quod est tale, sed spiritus hominis aut Spiritus Dei. Cum autem Spiritus hic commixtus animae uniter plasmati, propter effusionem Spiritus spiritalis et perfectus homo factus est: et hic est qui secundum imaginem et similitudinem factus est Dei.*

²¹⁷ エイレナイオスが「完全な人間」を述べる際、背後にはグノーシス主義のヴァレンティノス派の考えに対する反駁がある。塩屋惇子はヴァレンティノス派の人間論を次のように説明している。「人間を3種類に分けるグノーシス主義者の一般的な考えは、聖書の中の人物と結びつけられている。カインのような『物質の人間』は悪魔と実体を共にしている。アベルのような『生魂的(ないし、理性的)、動物的人間』はユダヤ人の神ヤーヴェと同じ本質をもっている。父なる神と同じ本性を分かち合う人間はソフィア、叡智の国から来る『霊的人間』である。この3種類の人間はみな異なる3つの本性をもとにしており、地上にいる間は身体をもつことによって、動物とは区別され、人間であるが、地上を離れば、身体から自由になり、それぞれ、物質(肉)、魂、霊に戻る。」塩屋惇子、「エイレナイオスにおける人間の創造(その二)」、139頁。

った」という記述を考えるにあたり、新たな視点を与えてくれる文章が記されている。それは「完全な人とは、父の霊を受け取る魂と、神のかたちに従って造られた肉体 (*carni quae est plasmata secundum imaginem Dei*) とが混合し、結合した〔人である〕」という文章である。特に注目したいのが、「父の霊を受け取る魂」の部分である。

ここから理解することができることは、エイレナイオスが「形成物」(*plasma*)を使用する際、それは神の両手である「御子」と「聖霊」によって形造られた人間の「肉体」を意味するであろう。けれども、『異端反駁』第5巻6章1節から理解することができるのは、「形成物」である肉体のうちに、父なる神の息吹によって与えられた「魂」があり、この「魂」こそが「聖霊」を受ける場所としての役割を担っているということである。「魂」は、人間を心魂的に生かすものであると同時に、言わば、「魂」は「聖霊」を内在させる「容器」のような役割をしていると考えることができるのではないだろうか。

(6). 第5巻28章4節

人は初めに、神の両手によって、すなわち、御子と聖霊によって造られ、神のかたちと類似性に従って造られた²¹⁸。

この箇所では、「神に両手」である「御子」と「聖霊」によって人間が形造られたことが示されており、また「神のかたち」と神との「類似性」に造られたことが述べられている。エイレナイオスが「神のかたち」という場合、それは人間の目に見える「像」を意味している²¹⁹。例えば、『異端反駁』第5巻16章2節には、次のように知るされている。

かつて、確かに人間は神のかたちに従って造られたものと言われていたが、示されてはいなかった。つまり、人間がそのかたちに従って造られた御言葉は、まだ不可視であった。このために、類似性を容易に喪失した。しかし、神の御言葉が肉となったとき、〔2つの〕いずれも確かなものにした。すなわち、彼のかたちであったものになることで、真のかたちを明らかにし、また人間を目に見える御言葉によって、目に見えない父に似たものとすることで、類似性をも強固にもと通りにしたのであ

²¹⁸ AH5.28.4 : *plasmatus in initio homo per manus Dei, hoc est Filii et Spiritus, fit secundum imaginem et similitudinem Dei.*

²¹⁹ また『異端反駁』第4巻4章3節には「人間は理性的であって、この点で神に似ており、判断において自由なもの、自立的なものとして造られている。」と記されており、「神のかたち」には肉体と共に人間の「自由」や「自立性」が含まれていると考えることができる。AH4.4.3 : *homo vero rationalis, et secundum hoc similis Deo, liber in arbitrio factus et suae potestatis.*

る²²⁰。

ここで人間に現された「真のかたち」とは、受肉した御子イエスである。このイエスを人々は実際に、自らの目で見ることによって、人間が「神のかたち」に創造されたものであったことを思い出すのである。つまり、人間は神の御子のかたちに従って、自らが創造されていたことを思い出すのである。また『証明』第 11 章においても次のように記されている。

しかし人間の場合、神は土の最も純粋で細かいところを取って、ちょうどよい割合に自分自身の力を土とを混ぜ合わせ、自らの手で形づくった。人間が形づくられ、地に置かれたのは、神の似像としてであったから、見える外観も神のようなものであるべきだと、神が人間の身体に自身の外形を与えたのであった²²¹。

これに対して、神との「類似性」は、人間の目に見える「像」のようなものではない。神との「類似性」は、『異端反駁』第 5 卷 6 章 1 節に記されていたように、肉体を持つ人間が霊的な人間として完成するために必要不可欠な要素であり、また、肉体を持つ人間に最終的に与えられる救いとしての「不死性」であり「不滅性」である²²²。

以上のことを踏まえた上で、結論として次のように述べることができるであろう。「神の両手」と「形成物」の関連が記されている箇所、すなわち『異端反駁』第 4 卷序 4 節、第 4 卷 20 章 1 節、第 5 卷 1 章 3 節、第 5 卷 5 章 1 節、第 5 卷 6 章 1 節、第 5 卷 28 章 4 節を考察した結果、まずエイレナイオスが「形成物」を指して語る場合、それは人間の「肉体」を指していると考えることができる。けれども、その「肉体」自体は「聖霊」を受ける役割を担っているのではなく、『異端反駁』第 5 卷 6 章 1 節にある「肉体」「魂」「聖霊」からなる完全な人間の構成と、『異端反駁』第 3 卷 17 章 1 節に「父の例を受け取る魂」と記さ

²²⁰ AH5.16. 2: In praeteritis enim temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur: adhuc enim invisibile erat Verbum, cujus secundum imaginem homo factus fuerat; propter hoc autem et similitudinem facile amisit. Quando autem caro Verbum Dei factum est, utraque confirmavit: et imaginem enim ostendit veram, ipse hoc fiens quod erat imago ejus, et similitudinem firmans restituit, consimilem faciens hominem invisibili Patri per visibile Verbum.

²²¹ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、211 頁。また『証明』第 22 章には次のように記されている。「そして、『似像』とは神の子であり、人間は〔その神の子の〕似像に造られたのであった。そういうわけで、『終わりの時に〕〔その神の子は〕似像〔である人間〕が彼自身に似ていることを見せるために『現れた』〔1 ペト 1 : 20〕のであった。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、217 頁。

²²² 『異端反駁』第 5 卷 12 章 4 節には次のように記されている。「霊の働きの実りは、肉の救いである。なぜなら、肉の成熟と不滅性の受容をもたらすこと以外に、見えない聖霊のどのような見える実りがあるだろうか? (AH5.12.4: Fructus autem operis spiritus est carnis salus. Quis enim alius apparens fructus ejus est qui non apparet Spiritus, quam maturam efficere carnem et capacem incorruptelae?)

れているように、聖霊を受けるのは「肉体」ではなく「魂」においてであることが分かる。

3.4. 『異端反駁』第3巻17章1節における「形成物」と第3巻17章2節における「霊」の働きの関係性

私たちはエイレナイオスの記す「形成物」(plasma)という言葉自体は、「神の両手」である「御子」と「聖霊」によって形造られた人間の「肉体」を指すことを明らかにした。それと共に「形成物」である肉体と共に人間の一部として与えられた「魂」²²³こそが、神の「聖霊」を受け取る役割を担っていることについても言及した。

それでは次に、これらのことを踏まえて、聖霊がどのように人間に「不滅性」の回復を与えるかについて続けて見ていきたい。『異端反駁』第3巻17章1節の最後の部分には、次のように記されていた。

そこで〔聖霊〕は、人の子となった神の子にも降った。それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住む (habitare in plasmate Dei) ということに慣れさせるためであった。そのなかで父の意志を行い、そして彼らを古さからキリストの新しさへと新たにするのである²²⁴。(下線筆者)

ここでエイレナイオスが神の「形成物」というとき、それがただ人間の「肉体」のみならず、「魂」を含む「人間の全体」と捉えられることは先に述べた通りである。注目したい箇所は、この記述の次に記されている『異端反駁』第3巻17章2節である。そこには次のように記されている。

そこで、私たちの身体は、〔洗礼の〕洗いによって、魂は霊によって、不滅性にまで至らせる一致を受けたのである。それ故、どちらも働きかけて神の生命に〔至らせる〕ものであるから、どちらも必要である。

ここでもまずエイレナイオスは、「私たちの身体は、〔洗礼の〕洗いによって」と記し、人間の肉体の事柄から説明を始めている。筆者は「御子の受肉」と「不滅性」の回復について次のように結論を記した。「人間が墮罪によって喪失した『不滅性』は、『永遠の生命

²²³ 『異端反駁』第5巻6章1節を参照。

²²⁴ AH3.17.1 : unde et in Filium Dei Filium hominis factum descendit, cum ipso adulescens habitare in genere humano et requiescere in hominibus et habitare in plasmate Dei, uoluntatem Patris operans in ipsis et renouans eos a uetustate in nouitatem Christi.

である御言葉』としての御子の受肉を通して、人間と結合し、また一致することにより回復に至る可能性が開かれたとすることができるであろう。そして、この『御言葉の受肉』は、文字通り『肉』への働きであり、『肉』を持つ人間の『不滅性』の回復の一側面であると言えよう。」

このように永遠の不滅性である「御子の受肉」と「肉体」を持つ人間と混合一致をしたことにより、人間の肉体においても「不滅性」の回復の道が開かれた。その「肉体」が「不滅性との一致」を得るために、「御子の受肉」と共に、もう1つ重要視されているものがある。それが「洗礼」である。先ほどの『異端反駁』第3巻17章2節の中の記述からも理解することができるように、人間の肉体は洗礼の水の洗いをもって、神からの「不滅性」との一致を受けるのである。

次いで、聖霊を受ける「場所」としての「魂」についての考察をしたことを以下に記したい。「『異端反駁』第5巻6章1節から理解することができるのは、『形成物』である肉体のうちに、父なる神の息吹によって与えられた『魂』があり、この『魂』こそが『聖霊』を受ける場所としての役割を担っているということである。『魂』は、人間を心魂的に生かすものであると同時に、言わば、『魂』は『聖霊』を内在させる『容器』のような役割をしていると考えることができるのではないだろうか。」

『異端反駁』第3巻17章2節にある「魂は霊によって、不滅性にまで至らせる一致を受けた」という文章を加えて考えると、神の息吹によって与えられた「魂」に、洗礼を通して「聖霊」が与えられたことが分かる。そして、聖霊が与えられたことにより、人間は再び「不滅性にまで至らせる一致」を受けたのである。

3.5. まとめ

「永遠の生命である御言葉」である御子が受肉したことにより、「肉体」を持つ人間との混同と一致が行われた。それにより人間は「不滅性」へと至る道の回復の道が開かれた。同様に、神の形成物である「肉体」が形造られたときに、父なる神の息吹によって与えられた「魂」に「聖霊」が与えられる。『異端反駁』第3巻17章2節では「魂は霊によって、不滅性にまで至らせる一致を受けた」と記されており、これが「洗礼」のときであることが示されている。つまり、御子の受肉を通して、人間が「不滅性」に至る道が回復されることも、また「魂」に聖霊が与えられ、「不滅性」に至る道が回復されることの両者が、「洗礼」のときに結びあわされると考えることができる。そのため、人間の「肉体」も「魂」も、「洗礼」を受けることなしに、「不滅性」に至る回復へと導かれることはない結論づけることができる。

第2部 エイレナイオスの聖霊神学と牧会への応用

第3章 エイレナイオスにおける聖霊の人間への臨在

この章の目的は、「エイレナイオスは、聖霊がどのように人間に臨在すると考えていたか」ということ、すなわち「聖霊の人間への臨在」にある。代表的な先行研究に目を通すと、2通りの考えがあることに気がつく。1つは「聖霊は信者にのみ臨在する」という立場であり、もう1つは「聖霊は全人類に臨在する」という立場である²²⁵。

けれども、果たしてエイレナイオスは、上記の2つの立場のうち、どちらか一方の立場を取っていたのであろうか。筆者はこの点を取り扱うにあたり、エイレナイオスが思い描いていた「救済史²²⁶」に基づき、時代を4つに区分し、各時代における聖霊の臨在のあり方を確認していきたい。その区分とは、第1に、創造、第2に、旧約の時代、第3に、御子の受肉、第4に、教会の時代である²²⁷。

²²⁵ 序論を参照のこと。

²²⁶ Denis Minns, *Irenaeus an Introduction*, 69-95.を参照。また鳥巢義文は「エイレナイオスにとって『救済史』とは、包括的に創造から終末までの全救済史 (*universa dispositio Dei*) のことを意味しており、その全過程をとおして『神の両手』である『子』と『霊』が救いの営みを実行しているのである。」と記している。鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、129頁。また次のようにも説明している。「連続的に展開する救済史全体を通して人類の救いのために働かれる神は、エイレナイオスにとって、歴史を通して明らかにされる父と子と聖霊の神であって、彼の神理解はいわゆる『救済史的三位一体論』として説明される神理解に属する。例えば『父がよしと見て命じ、子が奉仕して形造り、霊が養い育てる』と説明するエイレナイオスは、そこに、父と子と聖霊の神の各々の救いの営みの特徴を見ている。そして、彼は三位一体の神の内、御子と聖霊の両者を『神の両手』*manus Dei*と呼んでおり、この両者においても、また墮罪以降の人類の救いの歴史を通して、共に働いていると理解している。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、158-159頁。

²²⁷ エイレナイオスの救済史に関して、O. クルマンは次のように述べている。「第二世紀の神学者のうちで、グノーシス思想を攻撃した烈しさにおいて、救済史的な時間の線を創造から終末の新しき創造まで、ゆるぎない一貫性をもって徹底させた、かのエイレナイオスに及ぶものは、誰もいなかったということも偶然ではない。十九世紀の『救済史』學派の神学者達、ベック (Joh. Tobias Beck)、ホーフマン (Joh. Chr. K. von Hofmann)、アウバーレン (Carl Aug. Auberlen)、マルティン・ケーラー (Martin Kähler) にいたるまで、エイレナイオスのごとく明確にこの事を認識した神学者は、殆んど一人もいなかった。即ちキリスト教の宣教は救済史とその存否をともにするものであり、イエス・キリストの歴史的な救済の業が、舊約よりキリストの再臨にいたる時間の線の中心をなすという認識である。」(O. クルマン『キリストと時』前田護郎譯、岩波現代叢書、1954年)、41頁。ここでO. クルマンは、エイレナイオスにおける救済史の時間の流れを「創造から終末の新しき創造」と記している。鳥巢義文は救済史を「旧約の時代」、「受肉の時」、「教会の時代」、「至福千年」の四段階としている。(鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、201頁。) またピエール・エヴィエーは研究論文においてエイレナイオスの救済史を四段階に区分している。すなわち「創造から受肉まで」「受肉」「キリスト教の時代」「神の直視とキリストの王国」である。Pierre Éviéux, *Théologie de l'accoutumance chez saint Irénée*, in *RSR* 55(1967) 5-54. また大貫隆は次のように記している。「さて、エイレナイオスに話を戻せば、彼も救済史(啓示史)を少なくとも四つの時期へ区分している。旧約聖書の族長と預言者たちの時代、受肉した方の時、使徒たちの時代、そして最後に教会の時である。そのいずれの時代(時)も固有の特質と機能を持っている。旧約の族長と預言者は「予告」し、受肉した神のことばが「啓示」と「成就」をもたらし、使徒たちは「伝承」し、最後に教会が「受け取り」、「信じて」、「述べ伝える」のである。大貫隆『ロゴスとソフィア』、254頁。エイレナイオスは『異端反駁』第2巻30章9節で「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、生きている者の神。この神は、律法が告知

『異端反駁』第3巻、第4巻、第5巻には、エイレナイオスの様々な神学理解を見て取ることが出来るが、体系的に構築されているわけでは決してない。そのため本論文の目的である「聖霊の人間への臨在」を考察するために、創造、旧約の時代、御子の受肉、教会の時代に関係する箇所を取り上げつつ、エイレナイオスの聖霊理解を出来る限り簡潔に順序立て、エイレナイオスがどのように「人間への聖霊の臨在」を捉えていたかを構築していきたい。

1. 創造における聖霊の臨在

人間の創造における聖霊の臨在について、エイレナイオスが人間の創造について記している『異端反駁』第4巻序4節と『異端反駁』第4巻20章1節、及び『異端反駁』第5巻28章4節に目を向けたい。

人間は魂と肉の結合であり、人間は神に似せて造られ、また、その両手によって、すなわち、御子と聖霊によって形成された。〔父なる神は御子と聖霊に〕「人間を造ろう」と語ったのである²²⁸。

また『異端反駁』第4巻20章1節には、次のように記されている。

神は地の泥を取り、人を形造り、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。それ故、私たちが造ったのも、私たちが形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもとので予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の両手を持っていないかのように、これら(天使たち)を必要としたのでもない。神の側には常に御

し、預言者たちが布告し、キリストが啓示し、使徒たちが伝え、教会が私たちの主イエス・キリストの父と信じた〔神である〕。(AH2.30.9: *hic Deus Abraham et Deus Isaac et Deus Iacob, Deus uiuorum, quem et lex adnuntiat, quem, prophetae praeconant, quem Christus reuelat, quem apostolic tradunt, quem Ecclesia credit: hic Pater Domini nostri Iesu Christi.*) また『証明』第98章には、次のように記されている。「愛する者よ、以上が真理の宣教内容であり、われわれの救いのあり方であり、生命の道である。それは預言者たちが告げ、キリストが承認し、使徒たちが保管し、全世界の教会がその子らに伝えてきたものである。」(エイレナイオス「使徒たちの使信の説明」、265頁)。(その他、『異端反駁』第5巻序を参照)。このようにエイレナイオスにおける救済史の区分は研究者によって異なっており、必ずしも一つの区分が定められているわけではない。そこで、筆者はエイレナイオスにおける救済史の区分を、先行研究を踏まえ、「創造」、「旧約の時代」、「御子の受肉」、「教会の時代」の四段階としたい。

²²⁸ AH4.pref.4: *Homo est enim temperatio animae et carnis, qui secundum similitudinem Dei formatus est et per manus ejus plasmatus est, hoc est per Filium et Spiritum, quibus et dixit: Faciamus hominem.*

言葉と知恵、御子と聖霊（がおり）、（御言葉と知恵）によって、また、（御言葉と知恵）のうちに、また自発性を持って万物を造り、（御言葉と知恵）に向かって語り、「私たちのかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と言ったのであり、ご自身で創造されたものの存在と、造られたものと、世にある美しいものの型をご自身から取ったのである²²⁹。（下線筆者）

そして『異端反駁』第5巻28章4節には、次のように記されている。

初めに、人間は、神の両手、すなわち、御子と聖霊によって造られ、すべての時において神のかたちと類似性に従って造られた²³⁰。（下線筆者）

これらの箇所を読むと明らかなように、聖霊は「神の両手」の片方として、常に父なる神の側に存在し、また、絶えず御子と共に父なる神に仕えている²³¹。聖霊が父なる神に仕

²²⁹ AH.4.20.1: “Et plasmavit Deus hominem, limum terrae accipiens, et insuffavit in faciem ejus flatum vitae. Non ergo angeli fecerunt nos neque plasmaverunt nos, neque enim angeli poterant imaginem facere Dei, neque alius quis praeter verum Deum, neque virtus Longe absistens a Patre universorum. Neque enim indigebat horum Deus ad faciendum quae ipse apud se praefinierat fieri, quasi ipse suas non haberet manus. Adest enim ei semper Verbum et Sapientia, Filius et Spiritus, per quos et in quibus Omnia libere et sponte fecit, ad quos et loquitur, dicens: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostrum, ipse a semetipso substantiam creaturarum et exemplum factorum et figuram in mundo ornamentorum accipiens.”

²³⁰ AH5.28.4: “Et propter hoc in omni tempore, plasmatus in initio homo per manus Dei, hoc est Filii et Spiritus, fit secundum imaginem et similitudinem Dei.” また『異端反駁』第4巻33章1節には「このような弟子は真に霊的であって、初めから神のあらゆる〔救いの〕営みのうちに人々とともにいて、将来のことを予め告げ知らせ、現在のことを見せ、過去のことを語る神の霊を受けているため、「すべての人々を裁き、自らは裁かれない。」と記されている。（AH4.33.1: Talis discipulus vere spiritualis recipiens Spiritum Dei, qui ab initio in universis dispositionibus Dei adfuit hominibus et future annuntiavit et praesentia ostendit et praeterita enarrat, judicat quidem omnes, ipse autem a nemine judicatur.）Terrance L. Tiessen, *Irenaeus on the Salvation of the Unevangelized*, 177.

²³¹ 『異端反駁』第3巻8章3節には「彼〔神〕は造られざるものであり、初めがなく、終わりもないものである。欠けるところがなく、自己充足的であり、更に、他のすべてのものに存在するというのを与えている。」と記されている。また『異端反駁』第4巻11章2節には「そして神は人間と異なっている。というのは、神は造り、人間は生じるのである。また造る方は常に同じであるが、生じるものは、初めと真中と増加を受けなければならない。また神は善いことを行い、そして人間は善いことをなされる。また神はすべてにおいて完全な方、自分自らと等しく、また同様であり、全体として光であり、また全体として知性、全体として本性であり、すべての善いものの泉であるが、人間は神に向かって進歩と増加を受ける。」（AH4.11.2: Et hoc Deus ab homine differt, quoniam Deus quidem facit, homo autem fit. Et quidem qui facit semper idem est, quod autem fit et initium et medietatem et adjectionem et augmentum accipere debet. Et deus quidem bene facit, bene autem fit homini. Et Deus quidem perfectus in omnibus, ipse sibi aequalis et similis, totus cum sit lumen et totus mens et totus substantia et fons omnium bonorum, homo vero profectum percipiens et augmentum ad Deum.）と記されており、いずれの箇所も創造における父なる神の優位性を示している。また鳥巢義文は「実は、父なる神の両手を御子と聖霊とに同一視することによって、エイレナイオスは創造における御子の存在、いわゆる『御子の先在』を裏づけると同時に、『聖霊の臨在』も語っている。こうして、彼は神の創造のわがが、いわば『三位一体の位格的交わり』の内に遂行されたものであることを指摘していると言える。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、21頁。

え、存在していると言うとき、それは人間の創造以前から父なる神と御子と共に存在していたことに他ならない²³²。その聖霊は、人間の創造において、父なる神から「私たちのかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と語られ、人間の創造に関与し、また臨在していることが示されている²³³。

2. 旧約の時代における聖霊の臨在

それでは、人間の創造において「神の両手」の片方として臨在していた聖霊は、旧約の時代においては、どのように臨在していたのであろうか。ここで『異端反駁』第5巻5章1節と『異端反駁』第5巻28章4節に注目したい。

からだは神の善い御心を持っている限りは、長寿を維持し続けたのであって、聖書読むなら、私たちの前に存在した者たちが、七百歳、八百歳、九百歳を越えた年齢であるのが分かるであろう。そして、彼らのからだは齢を重ね、神がそれらを生かそうと欲する限りは、生命に与ったのである。けれども、なぜ、それらの者たちについて話すか〔と

²³² Terrance L. Tiessen, *Irenaeus on the Salvation of the Unevangelized* (The Scarecrow Press, 1993), 175. その他として聖霊が人間の創造以前から存在することを示す箇所として、『異端反駁』第4巻20章3節を挙げる。「さて、御言葉、すなわち、御子が常に父と共にいたということは、多くの箇所指摘した。知恵、すなわち、聖霊も全てが形造られるよりも前に共にいたことは、ソロモンを通して言っている」

(AH.4.20.3 : Et quoniam Verbum, hoc est Filius, semper cum Patre erat, per multa demonstravimus. Quoniam autem et Sapientia, quae est Spiritus, erat apud eum ante omnem constitutionem, per Salomonem ait) けれども、『異端反駁』第4巻20章3節の続く箇所では箴言8章22節の「主は彼の御業において、自分の道の初めに私を造った」(Dominus creavit me principium viarum suarum in opera) という言葉を引用している。ここで考えなければならないのは、エイレナイオスが「主は私を造った」

(Dominus creavit me) という言葉をどのように捉えているかである。これに対して、1つ前の箇所である『異端反駁』第4巻20章2節には、次のような一文がある。「屠られ、自分の血で、私たちを贖った子羊以外には、すべてのものを御言葉によって造り、知恵によって秩序づけた神から『御言葉が肉となった』時に、すべてのものに対する力を受けて」(AH.4.20.2 : nisi agnus qui occisus est et sanguine suo redemit nos, ab eo Deo qui omnia Verbo fecit et Sapientia adornavit accipiens omnium potestatem quando Verbum caro factum est)。このように『異端反駁』第4巻20章2節と3節だけを読むと「エイレナイオスは御子だけが神に造られざる存在として考えており、聖霊については神によって造られた被造物であると考えていた」と捉えられかねない。けれどもエイレナイオスは、そのような理解を持っていたのではない。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 130. 聖霊は創造以前から父なる神と御子と共に存在し、また父なる神と人格的な交わりのうちに臨在している。すなわち、三位一体の神として、父なる神と御子と共に永遠から存在し、また臨在しているのである。エイレナイオスは三位一体の神の働きを区別している。“Irenaeus distinguishes the modes of working of the three Persons—the Spirit operates (operante), the Son administers (administrante), and the Father approves (comprobante)—” Terrance L. Tiessen, *Irenaeus on the Salvation of the Unevangelized*, 175.

²³³ 『証明』第12章には「人は子供であって、自らの可能性が十分実現された状態にまで至るよう成長する必要があった。」と記されており、また『異端反駁』第4巻38章3節には「御父が良いと見て命じ、御子が奉仕をして実際に形造り、聖霊が実際に育て豊かにする。人間は前進し、完全性に達する。すなわち、生まれざる方に近い者となる。というのも、生まれざる方が完全であり、それは神である。」と記されている。このように聖霊は、人間の成長のために、不断に人間を見守り続け、創造された人間を「育てる」役割をも担っていることが示されている。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、211頁。

言えば)、実にエノクは神の御心に適ったので、からだのまま移されたが、義人たちが移されることを予め示していたのであり、エリヤもまた形造られた実体のまま引き上げられたが、霊的な者たちの上昇を預言していたのである。また、からだは彼らの上昇と移行において、彼らを妨げていない。なぜなら、初めに彼らを形造ったあの同じ両手によって、彼らは上昇と移行を受け取ったからである。神の両手は、アダムにおいて自らの形成物を整え、治め、担い、そして自分の望むところに運び、据えることに慣れ親しんでいたのである²³⁴。

また『異端反駁』第5巻28章4節には、次のように記されている。

初めに、人間は、神の両手、すなわち、御子と聖霊によって造られ、すべての時において神のかたちと類似性に従って造られた²³⁵。(下線筆者)

『異端反駁』第5巻5章1節では、アダムを創造したときに、父なる神の側に臨在していた「神の両手」について再び言及されている。エイレナイオスによれば、旧約の時代のエノクやエリヤも、この「神の両手」によって「上昇と移行」を受け取ったと解釈されている。更に『異端反駁』第5巻28章4節には、人間の創造、そして旧約の時代においても人間と共に臨在し続けている「神の両手」である御子と聖霊は、人間が創造されたときから、人間が完成に至るまで人間のもとを去ることがないことが記されている。

これらのことから創造と旧約の時代において、聖霊は「神の両手」の片方として不断に人間を見守り、臨在していたと結論づけることが出来よう。次節において、御子の受肉における聖霊の臨在を確認したい。

²³⁴ AH5.5.1: Quoniam autem multo tempore perseverabant corpora in quantum placuit Deo bene haberem legant Scripturas et invenient eos qui ante nos fuerunt septingentos et octingentos et nongentos supergressos annos, et consequebantur corpora ipsorum longinquitatem dierum, et participabant vitam in quantum ea Deus vivere volebat. Quid autem de illis dicimus, quandoquidem Enoch placens Deo in quo placuit corpore translatus est, translationem justorum praemonstrans, et Helias sicut erat in plasmatis substntia assumptus est, assumptionem patrum prophetans? Et nihil impediit eos corpus in translationem et assumptionem eorum: per illas enim manus per quas in initio plasmatis sunt, per ipsas assumptionem et translationem acceperunt. Assuetae enim erant in Adam manus Dei coaptare et tenere et bajulare suum plasma et ferre et ponere ubi ipsae vellent.

²³⁵ AH5.28.4: “Et propter hoc in omni tempore, plasmatus in initio homo per manus Dei, hoc est Filii et Spiritus, fit secundum imaginem et similitudinem Dei.” また『異端反駁』第4巻33章1節には「このような弟子は真に霊的であって、初めから神のあらゆる〔救いの〕営みのうちに人々とともにいて、将来のことを予め告げ知らせ、現在のことを見せ、過去のことを語る神の霊を受けているため、「すべての人々を裁き、自らは裁かれない。」と記されている。(AH4.33.1: Talis discipulus vere spiritualis recipiens Spiritum Dei, qui ab initio in universis dispositionibus Dei adfuit hominibus et future annuntiavit et praesentia ostendit et praeteria enarrat, judicat quidem omnes, ipse autem a nemine judicatur.) Terrance L. Tiessen, *Irenaeus on the Salvation of the Unevangelized*, 177.

3. 御子の受肉における聖霊の臨在——「御子の受肉」の意味と「聖霊の人間への臨在」の関連性——

御子の受肉において、「御子の受肉」がどのように「人間への聖霊の臨在」に影響を与えたかを明らかにする。そこで『異端反駁』第4巻38章1節に目を留めたい。

そして、この故に、父の完全なパンである彼は、まるで幼子に対するように、ご自身を私たちに乳として与えた。すなわち、その人間としての来臨であるが、彼の肉という、言わば乳房によって養育され、そして、このような授乳を通して、神の御言葉を食べ、また飲むことに慣れて、また、このようにして不滅性のパン、すなわち、父の聖霊を自分自身のうちに保つことができる〔ようになる〕ためである²³⁶。

エイレナイオスによれば、「人間はあたかも幼児のような状態として創造された」と語られている²³⁷。あたかも幼児のような状態として造られた人間は、自らの弱さのために、初めから聖霊を自らの内に保つことが出来なかった²³⁸。そればかりでなく、その「幼児性」の故に、容易に蛇に唆され騙されてしまったのである²³⁹。そのため人間は、御子が受肉し、

²³⁶ AH4.38.1: “Et propter hoc, quasi infantibus, ille qui erat panis perfectus Patris lac nobis semetipsum praetavit, quod erat secundum hominem ejus adventus, ut, quasi a mamilla carnis ejus nutriti et per talem lactationem assueti manducare et bibere Verbum Dei, et eum qui est immortalitatis panis, qui est Spiritus Patris, in nobis ipsis continere possimus.”

²³⁷ 『異端反駁』第4巻38章1節には、神が人間を幼児の状態として創造したことの理由が、次のように記されている。「ちょうど母親が幼児に完全な食物を与えることができても、〔幼児は〕まだ堅い食物を受け取ることができず、同様に、神自身も初めから人に完全さを与えることはできたが、人がそれを受け取ることができなかったのである。つまり幼児であった〔からである〕」AH4.38.1: “Quemadmodum enim mater potest quidem praestare perfectam escam infanti, ille autem adhuc non potest robustiorem se percipere escam, sic et Deus ipse quidem potens fuit homini praestare ab initio perfectionem, homo autem impotens percipere illam: infans enim fuit.” 神は人間を初めから完全なものとしては造らなかったが、人間が完全さに至るために「自由な意志」を与えていた。またアダムとエバには成長と発展を通して完全な神のかたちに至る可能性が造られた状態で備えられていた。Christopher T. Bounds, *Competing Doctrines of Perfection*, 406. James G.M. Purves, “The Spirit and the Imago Dei: Reviewing the Anthropology of Irenaeus of Lyons,” 106.

²³⁸ 『異端反駁』第4巻38章1節には、次のように記されている。「そして、この故にパウロはコリント人に『私はあなたたちに乳を飲ませて、食物は与えなかった。まだ食物を得ることができなかったからである。』と言っている。すなわち、あなたたちは、主が人間となって来たことを学んだが、あなたたちの弱さのために、父の聖霊はまだ、あなたたちの上に休息してはいない。(AH4.38.2: Et propter hoc Paulus Corinthiis ait: Lac vobis potum dedi non escam, nondum enim poteratis escam percipere, hoc est eum quidem adventum Domini qui est secundum hominem didicistis, nondum autem Patris Spiritus requiescit super vos propter vestram infirmitatem.)

²³⁹ 『証明』には次のように記されている。「しかし、人は小さな者であって、その識別能力はまだ未発達であり、そのため欺く者によって誤った道に導かれるのもたやすかった。」エイレナイオス「使徒たちの使信の説明」、212頁。また大貫隆は次のように説明している。「彼は悪魔（蛇）に打ち負かされて神のいましめを破り、その結果、神との類似性（similitude）を喪失し、死によって捕らえられてしまった。エイレ

「肉を取り、人となった御言葉」である御子を「見ること」によって、自らが「神のかたち」に従って造られた存在であることを思い出す必要がある。『異端反駁』第5巻16章2節を読むことで、この点がより明確になる。

かつて、確かに人間は神のかたちに従って造られたものと言われていたが、示されてはいなかった。つまり、人間がそのかたちに従って造られた御言葉は、まだ不可視であった。このために、類似性を容易に喪失した。しかし、神の御言葉が肉となったとき、〔2つの〕いずれも確かなものにした。すなわち、彼のかたちであったものになることで、真のかたちを明らかにし、また人間を目に見える御言葉によって、目に見えない父に似たものとするので、類似性をも強固にもと通りにしたのである²⁴⁰。

先ほど引用した『異端反駁』第4巻38章1節の箇所と、上記の『異端反駁』第5巻16章2節の箇所を合わせ読むことによって、「御子の受肉」と「聖霊の人間への臨在」の関連性を理解することができる。すなわち、(1). 人間は幼児の状態として創造されたので、聖霊を受け取るよりも先に、まず御子を知る必要があった。(2). 蛇によって唆され墮罪した人間は、御子を「見ること」によって、自らが「神のかたち」として創造されたことを思い出す必要があった。

このように人間は「御子の受肉」、すなわち、御子を実際に「見ること」を通して、聖霊を受けることが出来るように整えられるのである。これら2つの点に加えて、人間が聖霊を受けることが出来るようになるために、もう1つ重大なことが残されている。それが御子の洗礼時に、聖霊が御子にも降ったことである²⁴¹。この点を次節において取り扱うこと

ナイオスはこの破壊とその帰結を、最初の間人アダム独りだけではなく、人類全体に関係づける。ただし、彼はそれを、やがてアウグスティヌスが展開することになるような原罪論によってではなく、すべての個々の人間がすでに最初の間人アダムの内に現実的に内包され、総括されている、という一種神秘的な観念に基づいて行うのである。」大貫隆『ロゴスとソフィア ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』(教文館、2001年)、199頁。これに対し、Ernst Klebbaは、エイレナイオスにおいても原罪論を確認できるとの立場を取る。Ernst Klebba, *Die Anthropologie des hl. Irenaeus, eine dogmengeschichtliche Studie*, 80-81. 脚注142を参照。

²⁴⁰ AH5.16. 2: In praeteritis enim temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur: adhuc enim invisibile erat Verbum, cujus secundum imaginem homo factus fuerat; propter hoc autem et similitudinem facile amisit. Quando autem caro Verbum Dei factum est, utraque confirmavit: et imaginem enim ostendit veram, ipse hoc fiens quod erat imago ejus, et similitudinem firmans restituit, consimilem faciens hominem invisibili Patri per visibile Verbum.

²⁴¹ 御子に聖霊が降ったことに関して、議論すべき2つの点を挙げる事ができる。1つは、聖霊はイエスの人性にのみ降ったのか。それとも人性と神性の両方であるかという点。もう1つは、イエスに注油された霊とは、聖霊であるのか、それとも非位格的霊もしくは、神の力のようなものであるかという点である。Briggmanは、聖霊はイエスの人性にのみ降り、その注油された霊は、聖霊であると主張している。Anthony Briggman, "The Holy Spirit as the Unction of Christ in Irenaeus," *Journal of Theological Studies* 61, Pt 1 (2010): 173-175. また Houssiauも注油された霊は、イエスの人性にのみとの立場を取っている。A.

にしたい。

4. 御子の受肉における聖霊の臨在——御子の洗礼における聖霊の臨在——

なぜ、御子が洗礼を受けたか²⁴²についての考察に進む前に、『異端反駁』第3巻20章2節にある一文に目を止めることから始めたい。

神の決定に従い、人間が神を捉えるのに慣れさせ、神を人間の内に住むことに慣れさせるため、人間の内に住んで人の子となった、神の御言葉である²⁴³。

この箇所にある「人間の内に住んで」というのは、ヨハネの福音書1章14節に記されている「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」という聖書からの引用であろう。さらに「人の子となった、神の御言葉」という部分と合わせて考えると、ここで表されていることは、まさに「御子の受肉」である。この「御子の受肉」によって、2つのことが行われた。ひとつは、「人間が神を捉えるのに慣れる」ことであり、もうひとつは、神を人間の内に住むことに慣れさせる」ことである。つまり、御子の受肉によって、まず人間の側も、また神の側も、それぞれの内に住むということに慣れるのである。この出来事がまずあり、それから、御子の洗礼における聖霊の臨在へと進むのである。段階的に示せば、(1). 御子の受肉によって神も人間もお互いの内に住むことに慣れる。(2). 御子の受肉によって、聖霊も人間の内に住むことに慣れ、また人間も聖霊を内在させることに慣れる段階へと進むことができるのである。

それでは、ここから御子の洗礼における聖霊の臨在について進めていきたい。エイレナイオスは『異端反駁』第3巻17章1節で次のように語っている²⁴⁴。ここで興味深いことは、

Houssiau, *La Christologie de Saint Irénée*, Universitas Catholica Lovaniensis Dissertationes, 3. I ; Louvain: Publications Universitaires; Gembloux: J. Duculot, 1955, 166-186. .

これに対して、Orbe は非位格的霊もしくは、神の力がイエスに注油されたと主張している。A. Orbe, *La unción del Verbo* (Estudios Valentinianos, 3; Analecta Gregoriana, 113; Roma: Libreria editrice dell' Università Gregoriana, 1961), 541.

²⁴² 多くの研究者たちが、イエスがヨルダンで聖霊を受けたこと目的を、「キリスト論的宣教」が成就するためであったと説明している。この点については A. Houssiau, *La Christologie de Saint Irénée*, pp.176-177. Kilian McDonnell, *The Baptism of Jesus in the Jordan: The Trinitarian and Cosmic Order of Salvation* (Collegeville, MN: Liturgical Press), 1996, 119-120. を参照。

²⁴³ AH3.20.2: Verbum Dei habitavit in homine et Filius hominis factus est, ut adsuesceret hominem percipere Deum et adsuesceret Deum habitare in homine secundum placitum Patris.

²⁴⁴ 『異端反駁』第3巻9章3節には次のように記されている。「その上、マタイは洗礼において、天が開け、そして、神の霊がまるで鳩のように降り、彼の上に来るのを見た。また、見よ、天からの声があった。『あなたは私の愛する子、私の心にかなうもの。』キリストがイエスの中へと降って来たのでもなければ、キリストとイエスが別なのでもない。すべての〔者の〕救い主であり、天と地の主である神の御言葉、先に示したようにイエスである者が、肉を取り、また父から霊〔を〕注油されて『イエス・キリス

聖霊の臨在は、単に御子にのみ必要なことではなく、聖霊の側にも、御子に臨在しなければならぬ理由があることである。

彼らは真にそうであったことを語った。すなわちイザヤが「彼の上に留まって休む」と言ったあの神の霊が、鳩のように彼に降った。それは私たちがすでに述べた通りである。また「主の霊が私の上にある。私に注油するためである」[と云っている。] その霊は主が「語るのはあなたがたではなく、あなたがたのうちで語る、あなたたちの父の霊である」と言ったのである。また神のうちに再び生まれ変わらせる権限を弟子たちに与えたとき、「あなたたちは行って、すべての民族を弟子にしなさい。父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」と彼らに言った。しもべとはしために預言させるため、終わりの時に彼らの上にこの〔霊〕を注ぐであろうと、預言者を通して約束したのである。そこで〔聖霊〕は、人の子となった神の子にも降った。それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住むということに慣れさせるためであった。そのなかで父の意志を行い、そして彼らを古さからキリストの新しさへと新たにするのである²⁴⁵。(下線筆者)

この箇所の中でエイレナイオスは、聖霊が「神の形成物」のうちに住むと表現している。つまり聖霊は、「形成物」に臨在し、「肉体と魂」から成る人間と区別される「聖霊」²⁴⁶が、

トとなった』のである。」 AH3.9.3: *Adhuc ait in baptisate Matthaues : Aperi sunt caeli, et uidit Spiritum Dei quasi columbam uenientem super eum. Et ecce uox de caelo dicens : Hic est Filius meus dilectus in quo mihi complacui. Non enim Christus tune descendit in Iesum, neque alius quidem Christus, alius uero Iesus ; sed Verbum Dei, qui est Saluator omnium et dominator caeli est terrae, qui est Iesus, quemadmodum ante ostendimus, qui et adsumpsit carnem et unctus est a Patre Spiritu, Iesus Christus factus est.* エイレナイオスの理解によれば、受肉した御言葉であるイエスは、注油されることにより「キリスト」となったということになる。この点に関して、Houssiau は、「イエスが『イエス・キリスト』となったことは、単に御言葉が肉体となったことを意味していると述べている。A. Houssiau, *La Christologie de Saint Irénée*, p.185. また McDonnell は、ヨルダンでイエスに聖霊が降り、注油されたことで「キリスト」と呼ばれるようになったと述べている。Kilian McDonnell, *The Baptism of Jesus in the Jordan*, 118.

²⁴⁵ AH3.17.1 : *Quod autem erat, hoc et dixerunt, Spiritum Dei sicut columbam descendisse in eum, hunc Spiritum de quo ab Esaia dictum est : Et requiescet super eum Spiritus Dei, sicut praediximus. Et iterum : Spiritus Domini super me, propter quod unxit me, iste Spiritus de quo ait Dominus : Non enim uos estis qui loquimini, sed Spiritus Patris uestri qui loquitur in uobis. Et iterum potestatem regenerationis in Deum dans discipulis dicebat eis : Euntes docete omnes gentes, baptizantes eos in nomine Patris et Filii et Spiritus sancti. Hunc enim promisit per prophetas effundere se in nouissimis temporibus super seruos et ancillas ut prophetet ; unde et in Filium Dei Filium hominis factum descendit, cum ipso adsuescens habitare in genere humano et requiescere in hominibus et habitare in plasmate Dei, uoluntatem Patris operans in ipsis et renouans eos a uetustate in nouitatem Christi.*

²⁴⁶ 『異端反駁』第5巻6章1節には、「父の両手によって、すなわち、御子と聖霊によって、人は神の類似性に従って成るけれども、人の一部ではない。また、魂と聖霊は、人の一部になることができるが、決して人ではない。けれども、完全な人とは、父の霊を受け取る魂と、神のかたちに従って造られた肉体とが混合し、結合した〔人である〕²⁴⁶。(中略)もし、誰かが形成物である肉の実体を取り除き、そして、自らを純粋に全く霊だけのものとして理解するとしても、もはや、そのようなものは霊的な人間ではなく、

「肉体」を持つ人間のうちに住むことに慣れる必要があったのである。

ここから前節で述べたことと合わせて、2つのことを確認することができる。一つ目は、「あたかも幼児の状態」として造られた人間は、自らの弱さのために最初から聖霊を受けることができず、受肉した御子を「見ること」によって、聖霊を受ける可能性が開かれたことである。二つ目は、人間を構成する「肉体と魂」から区別される聖霊は、「形成物」である人間の肉体に臨在することに慣れる必要があったことである。聖霊は、御言葉である「御子」が受肉し、ヨルダン川で洗礼を受けたときに降る。また聖霊自体も、人間の肉体うちに臨在するために、言わば「準備」をしたということである。

さらにエイレナイオスは「聖霊の人間への臨在」も、人が「洗礼」を受けた時に聖霊が与えられると考えている。『異端反駁』第5巻11章2節には、次のように記されている。

それでは私たちはいつ天に属しているかたちを取ったのであろうか。あなたたちが主の名を信じ、その霊を受けて、洗われたときと言えよう²⁴⁷。

以上のように「御子」が受肉し、洗礼を受けたときに聖霊が降ったことにより、人間は聖霊を受ける可能性が開かれ、また聖霊が人間の肉体のうちに住むことに慣れるようにされた。また御子が「受肉」し、ヨルダン川において聖霊を受けたことにより、「御子の受肉」以後の人間も、洗礼時において聖霊を受ける道が開かれたと考えることができる。

これらのことから「御子の受肉」は、「聖霊の人間への臨在」において「転換の契機」となったとすることができるであろう。

5. 御子の受肉における聖霊の臨在——『異端反駁』第4巻33章15節に見る「転換の契機」としての「終わりの時」——

エイレナイオスにおける「聖霊の人間への臨在」を考察するにあたり、決して見落としはならない箇所として、『異端反駁』第4巻33章15節を挙げる事が出来る。

むしろ、人間の霊、あるいは、神の霊〔である〕。しかし、魂と混合した聖霊が形成物に一致するとき、聖霊の流出の故に、人間は霊的なもの、また、完全なものとなる。そして、これこそが神のかたちと類似性に従って造られたものである。」(AH5.6.1: Si enim substantiam tollat aliquis carnis, id est plasmatis, et nuda ipsum solum spiritum intellegat, jam non spiritalis homo est in quod est tale, sed spiritus hominis aut Spiritus Dei. Cum autem Spiritus hic commixtus animae unitur plasmati, propter effusionem Spiritus spiritalis et perfectus homo factus est : et hic est secundum imaginem et similitudinem factus est Dei.)

²⁴⁷ AH5.11.2 : Quando autem iterum imaginem caelestis? Scilicet quando, ait, abluti estis credentes in nomine Domini et accipientes ejus Spiritum. この「人間は洗礼時に聖霊を受ける」というのは、エイレナイオスに特有なものではなく、原始キリスト教においては一般的な考えであった。R・ブルトマン『新約聖書神学Ⅰ』川端純四郎訳(新教出版社、1963年)、50-51頁、175-176頁を参照。

常に同じ神を知っており、今、私たちに現れたのだとしても、常に同じ神の御言葉が〔いたこと〕を識っており、終わりの時に、新たに私たちに注がれたとしても、常に同じ神の聖霊〔がおり〕、世の創造から終わりに至るまで、同じ人類がいることを識っているからである²⁴⁸。(下線筆者)

これとよく似た記述を、『証明』第6章に見出すことができる²⁴⁹。そこには次のように記されている。

そして、次に述べるのが、建物の土台であり、また生命の道を確認するものであるわれわれの信仰の素描である。父である神、創られず、把握されえず、不可視の方であり、すべてのものの創造者であるひとりの神、これがわれわれの信仰の、第一にして最も大切な箇条である。第二の箇条は、神の御言葉、神の子、われわれの主キリスト・イエスである。この方は預言の〔全体〕計画に従い、また父が配置したやり方によって、預言者たちによりあらかじめ示された。そしてこの方を通してありとあらゆるものが造られたのであった。この方はまた「時の終わりにあたって²⁵⁰」すべてのものを再統合するため、人々のなかで人間、つまり見えるもの、手で触れることのできるものとなった。それは死を滅ぼして生命を目に見えるかたちで顕し、神と人との交わりをもたらすためであった。第三の箇条は聖霊である。預言者が預言し、族長たちが神について教えられ、義人たちは義の小径に導かれたが、それらのことはみなこの聖霊を仲介としてなされたのであった。また、この聖霊は、人を神に向けて新たにしようとして、「時の終わりにあたり」新しいやり方で全地上に拡がる人類の上に注がれている²⁵¹。(下線筆者)

『異端反駁』第4巻33章15節において、特に注目したいのは下線を引いた「終わりの時に、新たに私たちに注がれたとしても、常に同じ神の聖霊〔がおり〕」という部分である。

²⁴⁸ AH4.33.15: “semper eundem Deum sciens, et semper eundem Verbum Dei cognoscens etiamsi nunc nobis manifestatus est, et semper eundem Spiritum Dei cognoscens etiamsi in novissimis temporibus nove effusus est in nos, et a conditione mundi usque ad finem idipsum humanum genus.”

Anthony Briggman, p.155.

²⁴⁹ Behr も『証明』第6章と『異端反駁』第4巻33章15節に類似した記述があることを指摘している。St Irenaeus of Lyons, *On the Apostolic Preaching*, trans. John Behr, 104. 更に『証明』第22章でも次のように記されている。「そして、『似像』とは神の子であり、人間は〔その神の子の〕似像に造られたのであった。そういうわけで、『終わりの時に〕〔その神の子は〕似像〔である人間〕が彼自身に似ていることを見せるために『現れた』〔1ペト1:20〕のであった。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、217頁。

²⁵⁰ 『証明』における「時の終わり」の他の参照箇所、及び、参照聖句については St. Irenaeus. *Proof of the Apostolic Preaching*, ACW 16 tr. & nt. J.P. Smith, New York: Newman Press, 1952, 142 を参照。

²⁵¹ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、207-208頁。

また『証明』第6章にも「ときの終わりにあたって」また「時の終わりにあたり」との表現がある。ここから、可能性として「終わりの時」と呼ばれている時期を境に、聖霊が「新たに」私たち、すなわち、人間に注がれるようになったことを考えることができる。

それでは、エイレナイオスの指す「終わりの時」とは、具体的にいつの時であろうか。エイレナイオスは『異端反駁』の多くの箇所、「終わりの時」を「御子の受肉」との関連で用いている²⁵²。ここから、聖霊の臨在は、「御子の受肉」の以前と以後において、臨在の仕方に違いがあると考えられるであろう。『異端反駁』第4巻33章15節でも、『証明』第6章でも、「聖霊の新しい注ぎ」について言及されている。

この「聖霊の新しい注ぎ」がどのようなものであるかを知るために、『証明』第8章の中の短い記述に注目したい。そこには、次のように記されている。

「時の終わりにあたって」神は養子にする契約を開いて下さっているからである²⁵³。

この箇所から「終わりの時」以降の「新たな聖霊の注ぎ」として、「養子とする」ことが加えられたと理解することができる²⁵⁴。この「養子とする」ことについて言及している2つの箇所『異端反駁』第3巻6章1節と『異端反駁』第3巻19章1節を取り上げたい。まず『異端反駁』第3巻6章1節には、次のように記されている。

また、神は神々の集いに立ち、その真中で神々への裁きを行う。ここで父と子と、そして養子とされた者たちについて言っている。これは教会であり、神の集いであって、これは神、すなわち、御子が自ら自分自身で集めたのである²⁵⁵。(中略) 神々とはどんなものか? 「私は言った。あなたたちは神々であり、また、皆、崇高なものの子らである。」

〔すなわち〕養子にする恵み²⁵⁶を受けた人々に言っている〔のであって〕これによって

²⁵² 「御子の受肉」を「終わりの時」との関連で記している箇所として、『異端反駁』第3巻5章3節、『異端反駁』第3巻11章5節、『異端反駁』第3巻17章1節、『異端反駁』第4巻7章2節、『異端反駁』第4巻20章4節、『異端反駁』第4巻24章1節、『異端反駁』第4巻38章1節、『異端反駁』第4巻41章4節、『異端反駁』第5巻15章4節、『異端反駁』第5巻17章1節、『異端反駁』第5巻18章3節を参照。また、この点で注意しなければならないのは、エイレナイオスにおける「終わりの時」とは、「御子の受肉」のときに限定されるものではなく、御子による「十字架での贖罪」までも含まれているという点である。『異端反駁』第4巻10章2節には、「また、初めから彼らを創造し、造った御言葉が、終わりの時に、私たちを買い戻し、生かす方であること」と記されている。(AH4.33.15: “Et rursus significans quoniam qui ab initio condidit et fecit eos Verbum, et in novissimis temporibus redimens nos et vivificans.”)

²⁵³ エイレナイオス「使徒たちの使信の説明」、209頁。

²⁵⁴ Carl Mosser, “The Earliest Patristic Interpretations of Psalm 82: Jewish Antecedents and the Origin of Christian Deification,” *Journal of Theological Studies*, 56 (2005): 44.

²⁵⁵ AH3.6.1: Et iterum: Deus stetit in synagoga deorum, in medio autem deos discernit. De Patre et Filio et de his qui adoptionem perceperunt dicit; hi autem sunt Ecclesia: haec enim est synagoga Dei, quam Deus, hoc est Filius, ipse per semetipsum collegit.

²⁵⁶ 『異端反駁』第4巻1章1節では、「子とする霊を受けた人々」(qui adoptionis Spiritum accipiunt)

私たちは「アバ、父よ」と呼ぶのである²⁵⁷。

次に『異端反駁』第3巻19章1節に目を向けたい。

御言葉は、その恵みの賜物のことを語った際、この人々に向かって言った。「私は言った。あなたたちは皆、神々であり、至高の者の子らである」と。養子とする賜物を受け入れず、神の御言葉の汚れのない出生という受肉を侮辱し、人間から神に向かっていくことを騙し取り、自分たちのために肉となった神の御言葉に感謝をしない態度を取る。このため、神の御言葉が人間となった。すなわち、神の子が、人の子となったのである。〔それは人間が〕神の御言葉と結合され、養子とされることを受けて、神の子となるためであった。私たちは、不滅性と不死性とひとつに結ばれるのでなければ、他の方法で不滅性と不死性を得ることはできなかったからである²⁵⁸。

これまでをまとめると、次のように述べることができるであろう。すなわち、「終わりのとき」と表現される「御子の受肉」を境に、「聖霊の人間への臨在」の仕方は大きく変化した。人間創造と旧約の時代においては、聖霊は「神の両手」の片方として、人間の創造に関与し、また、旧約の時代を通して、「神の両手」は創造された人間を不断に見守り、「養って」いた。この「神の両手」としての聖霊の臨在は、そして『異端反駁』第5巻28章4節に記されていたように、人間から離れることはない。

ここで思い出す必要があるのは、「神の両手」の片手としての聖霊のもう片方は「御言葉」である「御子」ということである。人間創造にあっても、また旧約の時代にあっても、「神の両手」としての「御子」と「聖霊」は、絶えず共に働いていた。片方の手としての「御言葉」である「御子」が受肉したことで、もう片方の手としての聖霊も、やはり「形成物」である「肉体」のうちに臨在するのである。つまり御子が「肉体」を取り、その「肉体」に聖霊が「内在」という仕方で、臨在するようになる。このように「御子の受肉」を境に、聖霊の臨在の仕方は、人間のうちに内在するという方法を取るようになる²⁵⁹。

と記されている。

²⁵⁷ AH3.6.1 : Quorum autem deorum? Quibus dicit : Ego dixi : Dii estis et filii Altissimi omnes, his scilicet qui adoptionis gratiam adepti sunt, per quam clamamus : Abba Pater.

²⁵⁸ AH3.19.1: “Ignorantes enim eum qui ex Virgine est Emmanuel, priuantur munere eius quod est uita aeterna ; non recipientes autem Verbum incorruptionis, perseuerant in carne mortali et sunt debitores mortis, antidotum uitae non accipientes. Ad quos Verbum Propter hoc enim Verbum Dei homo, et qui Filius Dei est Filius hominis factus est, < ut homo >, commixtus Verbo Dei et adoptionem percipiens, fiat filius Dei. Non enim poteramus aliter percipere incorruptelam et immortalitatem nisi aduniti fuisset incorruptelae et immortalitati.”

²⁵⁹ エイレナイオスは、『異端反駁』第3巻17章1節で、御子が洗礼時に聖霊を受けることについて述べる中で「神の形成物のうちに住む」と記している。ラテン語翻訳では *habitare in plasmate Dei* とあり、

6. 教会の時代における聖霊の臨在

教会の時代における「聖霊の臨在」を論ずるのにあたり、まず初めにエイレナイオスの教会の定義を確認する必要がある。そのために、ここで再び『異端反駁』第3巻6章1節に目を向ける。

また、神は神々の集いに立ち、その真中で神々への裁きを行う。ここで父と子と、そして養子とされた者たちについて言っている。これは教会であり、神の集いであって、これは神、すなわち、御子が自ら自分自身で集めたのである²⁶⁰。（中略）神々とはどんなものか？「私は言った。あなたたちは神々であり、また、皆、崇高なものの子らである。」
〔すなわち〕養子にする恵みを受けた人々に言っている〔のであって〕これによって私たちは「アバ、父よ」と呼ぶのである²⁶¹。（下線筆者）

この箇所で見出すべきは、下線を引いた「ここで父と子と、そして養子とされた者たちについて言っている。これは教会であり、神の集いであって、これは神、すなわち、御子が自ら自分自身で集めたのである」という部分である。

教会の時代以前の「御子の受肉」以後に、「聖霊の人間への臨在」の仕方は、それ以前から大きく変化した。御言葉である御子が受肉し、「形成物」である「肉」のうちに宿ることに慣れたことによって、「肉体と魂」から成る人間も、聖霊を自らのうちに宿らせることが

habitare の原形は *habito* で、「住む、居住する、宿る」ことを意味している。Rousseau は A. Rousseau/L. Doutreleau, *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre □* (SChr 211), 331.において、*habito* にあたるギリシア語を *oikeîn* としている。原形は *oikéō* であり、やはり「住む、居住する、宿る」ことを意味している。また『異端反駁』第3巻20章2節にも、次のように記されている。「神の決定に従い、人間が神を捉えるのに慣れさせ、神を人間の内に住むことに慣れさせるため、人間の内に住んで人の子となった、神の御言葉である。」(AH3.20.2: *Verbum Dei quod habitauit in homine et Filius hominis factus est, ut adsuesceret hominem percipere Deum et adsuesceret Deum habitare in homine secundum placitum Patris.*) また『異端反駁』第5巻8章1節では「従って、もしこの保証が、私たちのうちに宿っているのであれば、既に、霊的なものであり、また死すべきものは、不死性によって呑み込まれているのである。」(AH5.8.1: *Si ergo pignus hoc habitans in nobis jam spirituales efficit et absorbetur mortale ab immortalitate*) と記されている。この箇所でも、*habitans* が用いられている。エイレナイオスは、御子が洗礼を受けた時に、聖霊を「宿らせたこと」(*habito*) したことを『異端反駁』第3巻17章1節で記し、『異端反駁』第3巻20章2節においては、聖霊が人間のうちに住むことに慣れさせるという点が記され、『異端反駁』第5巻8章1節では、実際に、聖霊が「保証」として人間のうちに「宿る」ことを記している。これらの箇所から明らかなことは、御子が洗礼を受けた以降、人間は聖霊を「宿らせる」*habito* (*oikéō*) ことが可能となった。聖霊のこの臨在の仕方を、「臨在」と区別し、これを「内在」と表現したい。

²⁶⁰ AH3.6.1: *Et iterum: Deus stetit in synagoga deorum, in medio autem deos discernit. De Patre et Filio et de his qui adoptionem perceperunt dicit: hi autem sunt Ecclesia: haec enim est synagoga Dei, quam Deus, hoc est Filius, ipse per semetipsum collegit.*

²⁶¹ AH3.6.1: *Quorum autem deorum? Quibus dicit: Ego dixi: Dii estis et filii Altissimi omnes, his scilicet qui adoptionis gratiam adepti sunt, per quam clamamus: Abba Pater.*

出来るようになった。また、御子が「受肉」し、ヨルダン川で聖霊が降ったことにより、人間も洗礼時に聖霊を受け、「神の養子」となり、父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶことが出来るに至る²⁶²。これは人間創造や旧約の時代にはなかった「聖霊の新しい注ぎ」であり、聖霊を自らのうちに宿らせることが出来るようになった人間は「神の養子」とされるに至る。エイレナイオスは、「聖霊を自らのうちに与えられ『神の養子』とされた者たちの集い」が「教会」としてしている。そして、聖霊が与えられ「神の養子」とされた者は、「御子」と同じように、父なる神に向かって「アバ、父よ」と呼ぶことが出来るのである。『異端反駁』第5巻8章1節を見ると、「アバ、父よ」と呼ぶことができる者たちは、すでに聖霊の部分「保証」として受け取っている者たちであることが語られている。

今、私たちは完成と不滅性のために神の聖霊の部分を受け取っている。私たちは次第に神を捉え、担うことに慣れ親しんでいくのである。そして使徒は、これを保証と言っている。すなわち、神が私たちに約束された自身の栄誉の部分である。彼はエフェソへの手紙で言っている。「彼において、また、あなたがたも、真理の言葉、あなたの救いの福音、また信じて約束された聖霊で証印をされたのであり、これは私たちが相続する保証である。従って、もしこの保証が、私たちのうちに宿っているのであれば、既に、霊的なものであり、また死すべきものは、不死性によって呑み込まれているのである。——なぜなら、もしあなたたちのうちに神の霊が宿っているのであれば、あなたたちは肉にいるのではなく、霊のうちにいるのである。——と言っている。しかし、このことは肉を捨てることによるのではなく、霊と一致することでなされる。——つまり、肉を持たない者たちに書いたのではなく、神の霊を受け取った者たちにであり、この〔霊〕によって、「アバ、父よ」と呼ぶのである。——従って、もし今、保証を持っている私たちが、「アバ、父よ」と呼ぶのであれば、私たちがよみがえり、顔と顔を合わせて父を見るであろう時には、〔また〕すべての者たちが絶え間なく勝利の賛美を捧げ、死から

²⁶² エイレナイオスは洗礼を「神へと生まれ変わらせる洗礼」として捉えている。そのことを表しているいくつかの箇所を挙げたい。まず『証明』第3章には、「信仰がわれわれに勧告してくれることは、何よりもまず、われわれが受けた洗礼を思い起こすことである。その洗礼を、われわれは父なる神の名によって、また肉〔なる人〕となり、死に、そして復活した、神の子イエス・キリストの名によって、そして神の聖霊において、罪の赦しのために受けたのであった。また信仰は次のことも思い起こすように勧告する。この洗礼が永遠の生命の封印であり、神の内への生まれ変わりであるということ、すなわちこれによってわれわれはもはや死すべき人間の子供ではなく、時間を超越し、永遠の方である神の子供になるのだということ。」と記されている。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、206頁。また『証明』第7章には「洗礼は、子を通して、聖霊の内に、父なる神への再生をわれわれにもたらすのである。」と記されている。『異端反駁』第3巻17章1節「それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住むということに慣れさせるためであった。そのなかで父の意志を行い、そして彼らを古さからキリストの新しさへと新たにするのである。」と記されている。これらの箇所では、洗礼が「神の内への生まれ変わり」、「父なる神への再生」、「古さからキリストの新しさへと新たにす」と表現されている。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、208頁。

彼らを起こし、永遠の生命を与えるであろう者はどれ程、神を讃えるであろうか？もし、人を自らのうちに包んでいる保証が、すでに「アバ、父よ」と言わせているとすれば、神から人々に与えられるであろう霊の完全な恵みは何をなすであろうか？〔それは〕私たちが神に似たものとし、父の意志を完成するであろう。なぜなら、人間を神のかたちと類似性に従って造るであろうから²⁶³。（下線筆者）

この箇所を下線を引いた部分「神の霊を受け取った者たちにであり、この〔霊〕によって、「アバ、父よ」と呼ぶ」と「保証が、すでに『アバ、父よ』と言わせている」から理解することができるように、たとえ部分であったとしても、聖霊の「保証」を受けている者でなければ父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶことができないのである。そうであるならば、教会の時代における「人間への聖霊の臨在」は人間への「内在」であり、「信者のみ」ということになる。この点について次節で、他の引用箇所と合わせて更に確認をしてみたい。

7. 教会の時代における「聖霊の人間への臨在」は「信者のみ」であるか

教会の時代において聖霊の人間への臨在は、信者に限られるのであろうか。『異端反駁』第3巻24章1節には、次のように記されている。

そして〔教会〕のなかには、キリストの交わりが、すなわち、不死性の保証²⁶⁴、私たちの信仰の確証、神への上昇のはしごである聖霊が委託されている²⁶⁵。神は使徒と預言者

²⁶³ AH5.8.1: Nunc autem partem aliquando a Spiritu ejus sumimus ad perfectionem et praeparationem incorruptelae, paulatim assuescentes capere et portare Deum : quod et pignus dixit Apostolus, hoc est pars ejus honoris qui a Deo nobis promissus est, in epistola quae ad Ephesios est dicens : In quo et vos, audito verbo ueritatis, Evangelio saltis uestrae, in quo credentes signati estis Spiritus promissionis sancto, qui est pignus hereditatis nostrae. Si ergo pignus hoc habitans in nobis jam spirituales efficit et absorbetur mortale ab immortalitate—Vos enim, ait, non estis in carne sed in Spiritu, siguidem Spiritus Dei, habitat in uobis—, hoc autem non secundum jacturam carnis sed secundum communionem Spiritus fit—non enim erant sine carne quibus scribebat, sed qui assumpserant Spiritum Dei, in quo clamamus : Abba Pater, si igitur nunc pignus habentes clamamus : Abba, Pater, quid fiet quando resurgentes facie ad faciem videbimus eum, quando omnia membra affluenter exultationis hymnum protulerint, glorificantia eum qui suscitauerit ea ex mortuis et aeternam vitam donauerit? Si enim pignus complectens hominem in semetipsum jam facit dicere : Abba, Pater, quid faciet uersa Spiritus gratia quae hominibus dabitur a Deo? similes nos ei efficiet et perficiet uoluntatem Patris : efficiet enim hominem secundum imaginem et similitudinem Dei.

²⁶⁴ エフェソ1章14節、第二コリント1章22節を参照。

²⁶⁵ 鳥巢義文は、これについて次のように記している。「教会にある『霊』は『不滅性の手付』、すなわち、『保証』と言われているばかりでなく、『神への上昇のはしご』とさえ言われている。これが『神化』を表現するものでなければ一体何であろうか。エイレナイオスにとって、『不滅性の保証』である『霊』は、実に教会の中で、人間を神へと導くものなのである。しかも、『キリストとの交わり』とも言われているように、『霊』はいつも『子』と共に働きながらそうするのである。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、109頁。

と教師たち、その他あらゆる働きを教会に置いたと言っている。教会に集わない者たちは、皆、〔聖霊に〕与るものではなく、悪い説と最悪の業によって自らを欺き、生命から〔遠ざけている〕のである。教会のあるところに、神の聖霊もあり、神の聖霊のあるところには、教会とすべての恵みがある。そして聖霊は真理である²⁶⁶。

加えて『異端反駁』第3巻24章1節のラテン語翻訳の誤訳について、ペトロ・ネメシエギの重要な指摘を紹介したい。

周知のように、エイレナイオスの『異端反駁論』のギリシア語原文の大部分は紛失し、古代に作られたラテン語訳しか保存されていないが、この書のすぐれた校訂版を最近出したルッソーの研究によって、右に引用したテキストにおいて、古代ラテン語訳の一つの重大な誤訳が訂正された。テキストの第二段落の初めに、ラテン語訳は、**Hoc enim ecclesiae creditum est Dei munus** と書いて、hoc という指示代名詞を munus という名詞を飾る語としてとり、「神のこのたまもの〔すなわち、信仰〕は教会に委ねられた」という意味に理解した。ギリシア語原文において、munusにあたる語は δωρεά という女性名詞であったと思われる。したがって、hoc にあたる指示代名詞も、女性語尾の αυτη であったに違いないのである。ところで、前後関係からすると、この αυτη は、ラテン語訳者が思ったとおりの主格 αυτη ではなく、ἐκκλησία(教会)という語を飾る与格 αυτη̄であると言わざるをえない。そして δωρεά(たまもの)という言葉は、聖書の言葉遣いどおり(ヨハネ 4・10、使徒 2・38)、聖霊を意味しているのである。したがって、この個所の正しい訳は、「教会にこそ、神のたまもの〔すなわち、聖霊〕が与えられた。ちょうど〔神によって〕形づくられた〔人祖の体に〕息が与えられたように」である²⁶⁷。

この指摘に従えば、『異端反駁』第3巻24章1節でエイレナイオスが主張していることは、「教会にこそ、神のたまもの〔すなわち、聖霊〕が与えられた。ちょうど〔神によって〕形づくられた〔人祖の体に〕息が与えられたように」という内容となる。それゆえ「聖霊

²⁶⁶ AH3.24.1 : et in eo deposita est communicatio Christi, id est Spiritus sanctus, arrha incorruptelae et confirmatio fidei nostrae et scala ascensionis ad Deum. In Ecclesia enim, inquit, posuit Deus apostolos, prophetas, doctores, et uniuersam reliquam operationem Spiritus, cuius non sunt participes omnes qui non coucurrunt ad Ecclesiam, sed semetipsos fraudant a uita per sententiam malam et operationem pessimam. Vbi enim Ecclesia, ibi et Spiritus Dei ; et ubi Spiritus Dei, illic Ecclesia et omnis gratia : Spiritus autem Veritas.

²⁶⁷ペトロ・ネメシエギ「教父時代の Pneumatologia の代表的一例としてのエイレナイオスの聖霊論」『日本の神学 (24)』(1985年、128-137頁)、135頁。

が全人類に」ではなく、あくまでも「信者たちが集う教会」に与えられたと理解することができる²⁶⁸。

次いで『異端反駁』第3巻6章4節に記されているエイレナイオスの祈りに注目したい。

それ故、私もあなたの御名を呼びます。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブとイスラエルの神よ、あなたは私たちの主イエス・キリストの父です。神よ、あなたはその豊かな憐れみによって、私たちがあなたを知るようにと、私たちに好意を寄せてくださいました。あなたは天と地を造り、万物を支配する方、唯一のまことの神であって、その上に他の神はありません。私たちの主イエス・キリストによって聖霊の賜物を与え、この書物を読むすべての者が、あなたが唯一の神であることを知り、あなたのうちに強められ、すべての異端的で、無神的で不敬虔な教えから遠ざかるようにしてください²⁶⁹。(下線筆者)

この祈りにおいて、エイレナイオスはグノーシス主義とマルキオン主義に反対する観点から、唯一の創造者である神を主張している²⁷⁰。エイレナイオスの聖霊理解において、この『異端反駁』第3巻6章4節を取り上げる理由は、本文の一箇所の言葉にいくつかの写本の相違があるためである。その部分とは、下線を引いた「私たちの主イエス・キリストによって聖霊の賜物を与え」である。ここで「賜物」と訳された言葉は、*donationem* であるが、違う写本では「支配を」を意味する *dominationem* が用いられている。確かに、エイレナイオスがどちらの言葉を用いたかという点は、重要であることに変わりはない。けれども、諸写本上の相違点である「賜物」(*donationem*) であっても、「支配を」(*dominationem*) であっても、エイレナイオスが述べようとしたことの意味に違いは生じない。エイレナイオスは『異端反駁』第3巻6章4節において「私たちの主イエス・キリストによって聖霊の賜物を与え、この書物を読むすべての者が、あなたが唯一の神であることを知り」と記した。つまり、この箇所におけるエイレナイオスの主張は、聖霊の「賜物」(*donationem*) であっても、「支配を」(*dominationem*) であっても、聖霊の働きを受けた者が、「唯一の神」であることを「知る」に至るということである。換言すれば、

²⁶⁸ Terrance L. Tiessen, *Irenaeus on the Salvation of the Unevangelized*, p.184.

²⁶⁹ AH3.6.4 : Et ego igitur inuoco te, Domine Deus Abraham et Deus Isaac et Deus Iacob et Israel, qui es Pater Domini nostri Iesu Christi, Deus qui per multitudinem misericordiae tuae bene sensisti in nobis ut te cognoscamus, qui fecisti caelum et terram et dominaris omnium, qui es solus et uerus Deus super quem alius Deus non est ; per Dominum nostrum Iesum Christum donationem quoque donans Spiritus sancti, da omni legenti hanc scripturam cognoscere te quia solus Deus es et confirmari in te et absistere ab omni haeretica et quae est sine Deo et impia sentential.

²⁷⁰ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 46.

聖霊の働きを受けなければ、「唯一の神」を「知ること」ができないため、「唯一の神」を知っている者は、聖霊の働きを受けた「信者」であると言えよう。

更に『異端反駁』第5章18章2節を見ても、「信者のみ」が聖霊を受けることを理解することが出来る。

万物の上であり、万物を通して、また万物のうちにある唯一の父なる神が指し示している。すなわち、御父は万物の上であり、彼はキリストのかしらである。また万物を通して御言葉があり、これは教会のかしらである²⁷¹。けれども、私たちすべてのうちには霊があり、それは生かす水である。これを主は、彼を正しく信じる者、彼を愛する者、また御父は唯一であり、万物の上であり、また、私たちすべての者のうちにあることを知る者に与える²⁷²。

この箇所の最後にあるように、聖霊は、イエス・キリストを「正しく信じる者、彼を愛する者」に、また「御父は唯一であり、万物の上であり、また、私たちすべての者のうちにあることを知る者」に与えられるのである。

これまで、教会の時代における「聖霊の人間への臨在」を見てきたが、『異端反駁』第3巻6章1節、『異端反駁』第3巻6章4節、『異端反駁』第3巻24章1節、『異端反駁』第5章18章2節の4箇所から考えても、教会の時代における「聖霊の人間への臨在」は、「神を信じること」によって、「神の養子」とされた「信者のみ」に内在という新しい仕方で臨在すると結論づけることができるであろう。

8. まとめ

これまでエイレナイオスの「救済史」に基づき、4つの時代区分を用いて、各時代における「聖霊の人間への臨在」を『異端反駁』と『証明』からの引用を通して確認した。人間の創造において、聖霊は「神の両手」の片方として、御子と共に人間の創造に関与し、臨在していた。また旧約の時代においても、「神の両手」である御子と聖霊は人間のもとから離れず臨在し、人間を見守っていた。ここから創造と旧約の時代における「聖霊の人間へ

²⁷¹ 教会のかしらとして御子がおり、教会のうちに聖霊が臨在している。このことから、やはり「神の両手」である御子と聖霊は切り離されて働くのではなく、共に存在し、働いていると考えることができる。

²⁷² AH5.18.2: Et sic unus Deus Pater ostenditur, qui est super omnia et per omnia et in omnibus. Super omnia quidem Pater, et ipse est caput Christi; per omnia autem Verbum, et ipse est caput Ecclesiae; in omnibus autem nobis Spiritus, et ipse est aqua viva, quam praestat Dominus in se recte credentibus et diligentibus se et scientibus quia unus Pater, qui est super omnia et per omnia et in omnibus nobis.

の臨在」は、人間の側に「神の両手」として存在していたと考えることができる。この臨在の仕方が「終わりの時」とも表現される「御子の受肉」の時代に大きく変化した²⁷³。まず「幼児のような状態」として造られた人間は、自らの弱さのために、初めから聖霊を受けることができなかった。また、その「幼児性」の故に容易に蛇に唆された。その人間が「受肉」した御子を「見ること」によって自らが「神のかたち」として造られていたことを思い出す。このことにより、人間に聖霊を受ける可能性が開かれた。それに加えて、御子がヨルダン川で洗礼を受けたことにより、聖霊は「形成物」のうちに宿ることに慣れた。「御子の受肉」と「御子の洗礼」以後の人間も洗礼時に聖霊を受け、「神の養子」となり、父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶことが出来るに至る「聖霊の新しい注ぎ」を受け、聖霊を自らのうちに宿らせるに至った。

この「神の養子」とされるのは、イエス・キリストを「正しく信じる者、彼を愛する者」、また「御父は唯一であり、万物の上であり、また、私たちすべての者のうちにあることを知る者」であり、教会の時代においては、聖霊は「信者のみ」に与えられることになる。

以上のことを念頭に置きつつ、先行研究における「聖霊は信者にのみ臨在する」と「聖霊は全人類に臨在する」という 2 つの立場を考えると、次のように結論づけることができよう。聖霊は、人間創造から旧約の時代にかけては「全人類」の側に「神の両手」として臨在していた。それが「終わりの時」である「御子の受肉」に至って、「神の両手」の片方である御子が「肉」を取り、もう片方である聖霊もまた「形成物」のうちに「内在」するという仕方で、人間に臨在するようになり、続く教会の時代において、その御子を通して示された神²⁷⁴を「信じる者」つまり「信者」のうちに「宿る」ことになった。換言すれば、「神の両手」の片方である御子は「受肉」し、人間となったけれども、もう片方の手であ

²⁷³ 鳥巢義文は「神の教育と人間の成長」について記している中で「聖霊の導き」について述べ、次のような説明を記している。「さて、『霊』による教育ないし導きについて手短かに述べるのは容易なことではないが、大雑把に言うならば、『霊』は『子』の受肉以前には預言的な仕方で将来の救いの営みや『子』について表し、受肉以後には未だ弱く不完全な人間に『子とする恵み』並びに『不滅性の保証』として働きかけ、最終的には人間を『神との類似性』によって完成させるのである。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、100 頁。また「慣れ親しみ」について記している中には、次のような記述がある。「御子の受肉によるアナケファライオーシスは、人類を古い罪の束縛から解放して新たな救済史を開始したのであるが、聖霊の降臨も人類を救済史上の新たな救いと『慣れ親しみ』の段階へと前進させたのである。エイレナイオスは別の箇所でも、神のみことばの受肉以降の人類は、旧約の時代の人々よりもより大きな賜物を受け取っていると述べているが、それは、実は聖霊の降臨に外ならない。」鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、229 頁。このように「神の教育と人間の成長」の観点からも、また「慣れ親しみ」の観点からも、やはり「御子の受肉」以前と以後に大きな違いがあることが示されている。

²⁷⁴ 『異端反駁』第 4 卷 20 章 9 節には、次のように記されている。「私の顔を見て、そして生きる者は決していない。人間が神を見るのが不可能であることと、また、終わりの時に、人間が神の知恵を通して「岩の高いところで」すなわち、〔御言葉〕の人間としての来臨によって、神を見るようになることの両方を示している。」(AH4.20.9: non enim videt homo faciem meam et vivet, utraque significans, quoniam et impossibilis est homo videre Deum, et quoniam per sapientiam Dei in novissimis temporibus videbit eum homo in altitudine petrae, hoc est in eo qui est secundum hominem ejus adventu.)

る聖霊は、御子と共におらず、「人間の外」で働いているということではない。

以上のことから、エイレナイオスが示す「聖霊の人間への臨在」は、人間創造から旧約の時代にかけては「全人類に」であり、「御子の受肉」以後から教会の時代においては「信者のみ」ということが示されているのである。そして、教会の時代における聖霊の臨在は、むしろ「聖霊の人間への内在」と表現することの方が適切であろう。

第4章 聖霊の内在による信者の刷新

この章では、エイレナイオスの聖霊神学の一側面として、「聖霊が内在した人間は²⁷⁵、それ以前の生き方から、どのように変えられていくか」という点を取り扱う。それは、すなわち「なぜ神は人間に聖霊を内在させたか」との問いの答えともなるであろう。この問いに答えていくために、聖霊の内在が人間の生き方にどのような刷新を与えるかについて、次の二つの点に的を絞り、順に言及していきたい。(1) 聖霊の内在は、人間の内側から「助言」を与えること。(2) 聖霊の内在は「父の意志」を行わせ、「一致の確立」と「結実の確立」²⁷⁶を与えること。

1. 人間の内側から「助言」を与える聖霊の内在

1.1. 『使徒たちの使信の説明』第9章における聖霊の存在における7つの方法

エイレナイオスは聖霊の内在をどのように考えていたのであろうか。『証明』第9章には、聖霊の内在に関する興味深い記述がある。

それゆえ、神の霊はその内在〔の仕方〕において多様であり、預言者イザヤによって、御言葉である神の子が人として来たときに、その上に憩った七つの賜物として数え上げている。イザヤが「神の霊が彼の上に憩うであろう。その霊は、知恵と理解の霊、思慮と勇氣〔の霊、知識〕と神を敬う霊、神を畏れる霊が彼を満たすであろう」〔イザ 11:2-3〕と言っているからである²⁷⁷。

この箇所では、まず重要なことは、イザヤ書 11 章 2 節と 3 節の引用のなかに「神の霊が彼の上に憩うであろう」と記されていることにある。なぜなら、この「彼」とはもちろんイエスを指しているが、エイレナイオスは、聖霊の内在をあくまでも受肉した御子との関係で取り扱っているからである²⁷⁸。「神の両手」である「御子」と「聖霊」は別々に働くのではなく、絶えず共にあり、共に人間に臨在し、さらに御子が受肉し地上に来た時には、聖

²⁷⁵ 本論文では、「聖霊の臨在」と「聖霊内在」の言葉を区別している。臨在と記す場合、「聖霊が人間と共にいること」を意味する。それに対して、内在と記す場合、「聖霊が宿ること」を意味している。

²⁷⁶ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 78 を参照。

²⁷⁷ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、210 頁。

²⁷⁸ Iain M. Mackenzie, *Irenaeus's Demonstration of the Apostolic Preaching a theological commentary and translation*, Ashgate Publishing Company, 2002, 97.

霊はその御子に内在することにより、やはり共に存在するのである。

『証明』第9章で、エイレナイオスは聖霊の内在には7つの仕方があると語る。それは1. 知恵、2. 理解の霊、3. 思慮、4. 勇気の霊、5. 知識、6. 神を敬う霊、7. 神を畏れる霊の7つである。この「1. 知恵」に関して短く述べるとすれば、知恵としての聖霊は「秩序づけ」や「調和をもたらす」働きを世界とそこに住む人間に与えたと言えよう²⁷⁹。筆者は、この箇所を「3. 思慮」と訳されている言葉に注目し、聖霊の内在における一つの働きを明らかにしたい。

1.2. 70人訳聖書と『異端反駁』におけるイザヤ書11章2節と3節のラテン語訳

まず引用されているイザヤ書11章2節と3節の70人訳聖書を確認する。そこには *καὶ ἀναπαύσεται ἐπ' αὐτὸν πνεῦμα τοῦ Θεοῦ, πνεῦμα σοφίας καὶ συνέσεως, πνεῦμα βουλήs καὶ ἰσχύος, πνεῦμα γνώσεως καὶ εὐσεβείας* と記されている。この引用の中の *βουλήs* (*βουλή*) は「助言」を意味する言葉にあたる²⁸⁰。同じイザヤ書11章2節と3節を引用している『異端反駁』第3巻9章3節に記されているラテン語訳では、*Spiritus sapientiae et intellectus, Spiritus consilii et uirtutis, Spiritus scientiae et pietatis, et implebit eum Spiritus timoris Dei.* と記されている。このラテン語訳の引用の中で *βουλήs* (*βουλή*) にあたる言葉は、*consilii* (*consilium*) と訳されており、この言葉もやはり「助言」を意味している。そのため、70人訳聖書にある *βουλή* も、ラテン語訳にある *consilium* も、共に「助言」を意味していると捉えてよいであろう。

²⁷⁹ 『異端反駁』第4巻20章2節には、次のような一文がある。「屠られ、自分の血で、私たちが贖った子羊以外には、すべてのものを御言葉によって造り、知恵によって秩序づけた神から『御言葉が肉となった』時に、すべてのものに対する力を受けて」(AH.4.20.2: *nisi agnus qui occisus est et sanguine suo redemit nos, ab eo Deo qui omnia Verbo fecit et Sapientia adornavit accipiens omnium potestatem quando Verbum caro factum est*)。また『異端反駁』第4巻20章2節には、次のように記されている。「そしてまた、『天を整えているとき、私は共にいた。また深淵の泉をしっかりと造ったとき、地の基を強く造ったとき、私は神のもとで調和させた。世界を完成させて楽しみ、人の子らを喜びとしたとき、私は楽しんでいた者であり、すべてのときにおいて、彼の御顔の前にあって、楽しんでいた。』」(AH4.20.3: *Cum pararet caelum, eram cum illo, et cum firmos faceret fontes abyssi, quando fortia faciebat fundamenta terrae, eram apud eum aptans. Ego eram cui adgaudebat, quotidie autem laetabar ante faciem ejus in omni tempore, cum laetaretur orbe perfecto et jucundabatur in filius hominum.*)

²⁸⁰ Behrによる『証明』の翻訳でイザヤ書11章2節と3節の引用は、*the Spirit of wisdom and of understanding, the Spirit of counsel and of might, <the Spirit of knowledge> and of piety, and the Spirit of the fear of God shall fill him.* と翻訳されている。John Behr, *On the Apostolic Preaching*, 45. Smithは、*the spirit of wisdom and of understanding, the spirit of counsel and of fortitude, <the spirit of knowledge> and of godliness; the spirit of the fear of God shall fill him* と翻訳されている。J.P. Smith, *St. Irenaeus. Proof of the Apostolic Preaching*, 53. またRobinsonとMackenzieは、*the Spirit of wisdom and of understanding, the Spirit of counsel and of might, <the Spirit of knowledge> and of godliness; and the Spirit of the fear of God shall fill him* と翻訳している。J.A. Robinson, *St Irenaeus, The Demonstration of the Apostolic Preaching*, 78. Iain M. Mackenzie, *Irenaeus's Demonstration of the Apostolic Preaching a theological commentary and translation*, 4.

先ほどの『証明』第9章の引用に戻ると、「思慮」と訳されている言葉がこの「助言」にあたる。そこで、本論文では「思慮の霊」ではなく、「助言の霊」と訳し、「助言を与える働き」をする聖霊が、人間に内在するという観点に絞って考察をすすめる。そのために(1) 創造 (2) 旧約の時代 (3) 御子の受肉 (4) 教会の時代の4つの区分を設け、救済史の順番に従い、「助言を与える聖霊の内在」が、どのように人間に働きかけてきたかを明らかにしたい。

1.3. 創造における「助言」の聖霊

創造において、神はどのように人間に「助言」を与えたのであろうか。『異端反駁』第4巻37章4節には、次のように記されている。

けれども、人間は初めから自由な判断をする者であった。それは〔人間が〕似せて造られた神が、自由な判断をするからである。善を保持することを、常に彼に助言し、(この善は) 神に対する従順によって全うされるものである²⁸¹。(下線筆者)

ここで明らかなことは、神は人間が初めに造られたときから常に助言を与えているということである。この神からの助言は、人間が「自由な判断をする者」すなわち「自立性」を持つ存在として造られたことと大きな関係がある。つまり神は人間に「自立性」を与え、自由な判断をすることができるように創造したが、創造後に人間と関わらないような神ではなく、むしろ、神に従順であることで「善」を保持し続けることができるように、人間に常に「助言」を与えるのである。なぜ人間が「善」を保持する必要があるかと言えば、人間は神に従順であることが、人間の生命を保持する条件であったからである²⁸²。では、創造において、聖霊はどのように人間に接したかをも考えなければならない。『異端反駁』第4巻20章1節には次のように記されている。

²⁸¹ AH4.37.4 : Sed quoniam liberae sententiae ab initio est homo, et liberae sententiae est Deus cujus ad similitudinem factus est, semper consilium datur ei continere bonum, quod perficitur ex ea quae est ad Deum obaudientia.

²⁸² これについては『証明』第15章でも述べられている。「そして、神は人にある条件を課した。人が神の命令を守ったなら、そのとき、人は自分が置かれていた状態、つまり不死のままずっと生きていられることができる。しかし守らなかったなら、死すべきものとなり、自分の身体がとられた地の中に溶け去ってしまう。〔このような条件を課されたのであった〕〔創2:7、3:19参照〕。『園にあるすべての木からあなたは確かに食べてよい。しかし善と悪の知識の元になる木からだけは食べてはならない。食べる日にはあなたは確かに死ぬであろうから』〔創2:16-17参照〕。これがその命令であった。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、213頁。

神は地の泥を取り、人を形造り、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。それ故、私たちが造ったのも、私たちが形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもとで予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の両手を持っていないかのように、これら（天使たち）を必要としたのでもない。神の側には常に御言葉と知恵、御子と聖霊（がおり）、（御言葉と知恵）によって、また、（御言葉と知恵）のうちに、また自発性を持って万物を造り、（御言葉と知恵）に向かって語り、「私たちがかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と言ったのであり、ご自身で創造されたものの存在と、造られたものと、世にある美しいものの型をご自身から取ったのである²⁸³。（下線筆者）

このように聖霊は、父なる神の「両手」として御子と共に存在していた。そして「神の両手」である御子と聖霊が人間を形造った。そのため、創造において、聖霊は人間の言わば「外側」に臨在し、「助言」を与えていたと考えることができよう。その助言を与えられる人間とは、墮罪前の状態で考えるならば、「すべての人間」と表現してもよいであろう。

1.4. 旧約の時代における「助言」の聖霊

続いて旧約における「助言」の聖霊の働きについて見たい。『異端反駁』第4巻37章2節を見ると、旧約の時代では、神は預言者を通して人間に「助言」を与えていたことが記されている。

そして、この故に、預言者たちは義を行い、善のために働くように人々を促した。私たちが多くのことで明らかにしたように、これが私たちのうちにあり、また、私たちは、多くの不注意のために忘れてしまい、また善い助言に欠けるようになっているからである。善い神は、預言者たちを通して、善い助言を与えようとしていたのである²⁸⁴。（下線筆者）

²⁸³ AH.4.20.1 : Et plasmavit Deus hominem, limum terrae accipiens, et insuffavit in faciem ejus flatum vitae. Non ergo angeli fecerunt nos neque plasmaverunt nos, neque enim angeli poterant imaginem facere Dei, neque alius quis praeter verum Deum, neque virtus Longe absistens a Patre universorum. Neque enim indigebat horum Deus ad faciendum quae ipse apud se praefinierat fieri, quasi ipse suas non haberet manus. Adest enim ei semper Verbum et Sapientia, Filius et Spiritus, per quos et in quibus Omnia libere et sponte fecit, ad quos et loquitur, dicens: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostrum, ipse a semetipso substantiam creaturarum et exemplum factorum et figuram in mundo ornamentorum accipiens.

²⁸⁴ AH4.37.2 : Et ideo prophetae [bonum quoque] hortabantur homines justitiam agere bonumque

このように旧約の時代では、預言者を通して神からの「助言」が与えられた。神が預言者を通して「助言」を与えたことは、預言者たちに聖霊が働くことで、人間が神と交わりを持つことに慣れるという側面もあった²⁸⁵。この神が人間に「慣れる」というテーマは、御子の受肉で再び語られる。ここで聖霊が預言者を通して働いたと述べると、一つの疑問が生じる。それは「果たして御子の受肉前の人々が聖霊を有していたか」という問いである。この点に関して、エイレナイオスの2つの重要な証言を挙げることにする。エイレナイオスは『証明』第6章と第56章で、次のように記している²⁸⁶。『証明』第6章には、次のように記されている。

第三の箇条は聖霊である。預言者が預言し、族長たちが神について教えられ、義人たちは義の小径に導かれたが、それらのことはみなこの聖霊を仲介としてなされたり」新しいやり方で全地上に広がる人類の上に注がれている²⁸⁷。

また『証明』第56章には次のように記されている。

キリストが現れる前に死んだ人々、神を畏れ、義（の状態）で死に、自分たちの内に神の霊を有していたすべての人々、（つまり）族長たち、預言者たち、義人たちのような人々は、復活した〔キリスト〕による裁き〔の日〕に救いに達するという希望をもっていたからである²⁸⁸。

ここから考えることができるのは、墮罪後から御子の受肉前までの期間においても「聖霊を有する」人々がいたということである。けれども「聖霊を有する」と言った場合、それは「聖霊の内在」ではなく、「聖霊の臨在」を受けていたと考えることが妥当であろう。

operari, sicut per multa ostendimus, quia in nobis sit hoc et propter multam negligentiam in oblivionem inciderimus et consilio egeamus bono: propter quod bonus Deus praestabat bonum consilium per prophetas.

²⁸⁵ 『異端反駁』第4巻14章2節には、次のように記されている。「このように神は初めからその寛大さの故に人間を形造り、父祖たちを彼らの救いのために選び、無学な民に神に従うことを教えようとして、予め民を形成し、人間が地上で霊の担い手となり、神と交わりを持つことに慣れるよう、預言者たちも予め教育した。(AH4.14.2: Sic Deus ab initio hominem quidem plasmavit propter suam munificentiam; patriarchas vero elegit propter illorum salutem; populum vero praeformabat, docens indicibilem sequi Deum; prophetas vero praestruebat, in terra assuescens hominem portare ejus Spiritum et communionem habere cum Deo.)

²⁸⁶ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 163.

²⁸⁷ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、208頁。

²⁸⁸ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、240頁。

後述するが、実際に聖霊が人間に内在するのは、御子の時代を待たなければならない。この「聖霊の臨在」は、族長たち、預言者たち、義人たちに「キリストの復活への希望」について預言を通して「助言」として与えていたとも考えることが出来るであろう²⁸⁹。

1.5. 御子の受肉における「助言」の聖霊

御子の受肉では、神はどのように人間に「助言」を与えたのであろうか。まず『証明』第55章の記述をみたい。

〔イザヤ〕は〔この男の子〕のことを「不思議な助言者」、しかも父の〔助言者〕と呼んでいる。どんなことであれ、すべてのことを父が成し遂げるのはいつもこの〔助言者〕とともに〔行うの〕だということを指摘しているのである。われわれのもっている「創世記」という標題の付いたモーセ〔五〕書の最初の書物に「そして、神は言った。さあ、われわれは自分たちの似像および似たものとして人を造ろう」〔創1:26〕とある通りである。ここにこの方をはっきりと見ることができる。父は、父の不思議な助言者として子に語りかけているのである。さて、〔子〕はわれわれの助言者でもある。「力ある神」でありながら、助言は与えるけれども、神として強制しない〔方であり〕、われわれが無知を捨て去って知識を受け、誤りから抜け出して真理の許に来るように、そして腐敗を除き去って不朽性を受けるようにと勧めている。〔イザヤはそのように〕言うのである²⁹⁰。

ここで御子は誕生の前から常に神の「助言者」であり、また、誕生の後では人間にとっての「助言者」であることが指摘されている。御子が人間にとって「助言者」であるという点をより明確に掘り下げて考えていくために、次いで、御子の誕生についての記述を見たい。『異端反駁』第3巻21章4節には、聖霊が「処女から生まれたインマヌエルが信じる者たちのうちに住み着くこと」を告げ知らせていたことが記されている。

というのは、1つの同じ神の霊が、主が来ることがどのようなもので、どのような質のものであるかを預言者たちによって触れ回り、また善く預言されたことを長老たちによって善く解釈した〔のであるが〕、その1つの同じ神の霊が、また養子とする時の充満が来たこと、天の国が近づいたこと、処女から生まれたインマヌエル

²⁸⁹ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 181.

²⁹⁰ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、240-241頁。

を信じる者たちのうちに住み着くことを、使徒たちによって告知らせたからである²⁹¹。

このように、イエスは処女から生まれ、インマヌエルと呼ばれるが、預言者や使徒たちによって「処女から生まれたインマヌエルを信じる者たちのうちに住み着くこと」を告知らせる働きをしていた聖霊は、イエスの誕生においてどのような働きをしていたのであろうか。この点を確認するために、『証明』第 59 章を引用したい。

さて、同じイザヤはまた言っている。「そして、エッサイの根から一本の〔杖のようなまっすぐな〕若枝が出、その根から一つの花が〔咲き〕出るであろう。そして主の霊が彼の上に憩うであろう。〔それは〕知恵と理解の霊、助言と力の霊、知識と敬虔の霊〔である〕。主に対する畏敬の霊が彼を満たすであろう。彼は見かけで裁かず、耳にするところによって非難したりせず、身分の低い人々のために義なる裁きを行うであろう。彼は地に〔住む〕身分の低い人々に対し、憐れみの心をもっていることであろう。(中略) これによって〔イザヤ〕は、彼が生まれるのはダビデのアブラハムの子孫なる女性からだと言っている。エッサイはアブラハムの子孫であり、ダビデの父親である。キリストを身籠った子孫、つまりあの処女はこのようにしてその「若枝〔および杖〕」となったのである。それゆえ、モーセもファラオの前で一本の杖をもってその不思議な業を行った。人類の〔うち〕、他の人々のあいだでも、杖は支配権のしるしなのである。そして「花」とは〔神の子〕の身体を指している。〔彼の身体〕は、すでに述べた通り、霊によって蕾をつけたからである²⁹²。(下線筆者)

この箇所にも『証明』第 9 章と同じくイザヤ書 11 章 2 節と 3 節の引用が記されている。『証明』第 59 章が明らかにしていることは、イザヤ書が語る聖霊、すなわち「知恵と理解の霊、助言と力の霊、知識と敬虔の霊〔である〕。主に対する畏敬の霊が彼を満たすであろう」と記された聖霊が、処女に宿り、イエスの身体を形造ったということである。この点を踏まえた上で、イエスの洗礼時に降った聖霊に注目する必要がある。『異端反駁』第 3 巻 9 章 3 節には、イエスが洗礼時に聖霊を授けられたことが記されている。

²⁹¹ AH3.21.4 : Vnus enim et idem Spiritus Dei, qui in prophetis quidem praeconauit quis et qualis esset aduentus Domini, in senioribus autem interpretatus est bene quae bene prophetata fuerant, ipse et in apostolis adnuntiavit plenitudinem temporum adoptionis uenisse et proximasse regnum caelorum et inhabitare intra homines credentes in eum qui ex Virgine natus est Emmanuel.

²⁹² エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、243 頁。

先に示したように、イエスである者が肉を取り、また父から霊を注油されて「イエス・キリストとなった」のである。イザヤも言っているように。「エッサイの根から杖が出て、根から花が成長する。そして、その上に神の霊が休む。知恵と悟りの霊、助言と力の霊、知識と敬虔の霊、そして霊が彼を神の畏れで満たすであろう」²⁹³。

(下線筆者)

この箇所にも同じく、イザヤ書 11 章 2 節からの引用がある。エイレナイオスは、洗礼時にイエスに降った聖霊においても、「助言」を与える働きがあることを示している。筆者はこれを、イエス自身の誕生において「助言」の霊としての働きを成す聖霊によって、マリアの胎に身籠ったからであると考え。つまりエイレナイオスは、このように記すことで、「イエスは聖霊によって身籠った」というときの聖霊と、洗礼時にイエスに降った聖霊が、別の聖霊ではなく、同じであることを示そうとしている。そして『異端反駁』第 4 巻 37 章 3 節をみると、「助言」の聖霊によって身籠り、「助言」の聖霊を洗礼時に受けたイエスが、確かに「助言を与える者」であったことが記されている。

そして、この故に主も「あなたたちの光が、人々の前で輝くように。あなたたちの善い行ないを見て、天におられるあなたたちの父を輝かせるためである」と言ったのである。また「あなたたちは、酩酊や不節制や世俗の心配で心を煩わせないように気をつけなさい」。そして「あなたたちは、腰に帯を締め、灯火をともしなさい。そして、あなたたちは、自分たちの主人が婚宴から戻り、戸を叩くなら、彼のために開けようと待っている人々のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、そのようにしているのを見るしもべは幸いである。また言われた。「自分の主人の意志を知りながら、行わなかったしもべは、多く鞭で打たれるであろう。また「私に『主よ、主よ』と言いながら、あなたはなぜ行わないのか」と言っている。そしてまた「もし、しもべが彼の心の中で、私の主人は遅れると言い、仲間のしもべを殴ったり、大食をしたり、飲んだり、酔ったりし始めるなら、彼の主人は予期しない日に来て、彼を切り離し、また偽善者たちと同じ一員とみなすであろう」。そして、このようなことはすべて人間の自由と自立性と、神が助言を与える方であることを明らかにしている。〔神は〕自分に服従するように、私たちに勧告し、不信から引き

²⁹³ AH3.9.3 : qui est Iesus, quemadmodum ante ostendimus, qui et adsumpsit carnem et unctus est a Patre Spiritu, Iesus Christus factus est. Sicut et Esaias ait : Exiet uirga de radice Iesse, et flos de radice eius ascendet ; et requiescat super eum Spiritus Dei, Spiritus sapientiae et intellectus, Spiritus consilii et uirtutis, Spiritus scientiae et pietatis, et implebit eum Spiritus timoris Dei.

離そうとはするが、厳しく強制はしない〔方〕である²⁹⁴。(下線筆者)

このように御子の受肉においては、「助言」の霊は御子のうちに降り、御子の口を通して人々に助言を与える働きをしたのである。

1.6. 教会の時代における「助言」の聖霊

『異端反駁』第3巻17章3節に記されている人間に降った聖霊について、エイレナイオスは「この霊を〔主は〕教会に与え」と記している。『異端反駁』第3巻24章1節でも、教会に聖霊が与えられたことが記されている。

そして〔教会〕のなかには、キリストの交わりが、すなわち、不死性の保証²⁹⁵、私たちの信仰の確証、神への上昇のはしごである聖霊が委託されている。神は使徒と預言者と教師たち、その他あらゆる働きを教会に置いたと言っている。教会に集わない者たちは、皆、〔聖霊に〕与るものではなく、悪い説と最悪の業によって自らを欺き、生命から〔遠ざけている〕のである。教会のあるところに、神の聖霊もあり、神の聖霊のあるところには、教会とすべての恵みがある。そして聖霊は真理である²⁹⁶。

ここで一つの疑問が生じる。それは、エイレナイオスは「教会」をどのように定義しているのであろうかということである。このことを知るために『異端反駁』第3巻6章1節をみたい。

²⁹⁴ AH4.37.3 : Propter hoc autem et Dominus : Luceat lumen uestrum, dicebat, coram hominibus, ut videant bona facta uestra et clarificent Patrem uestrum qui in caelis est. Et : Attendite uobis, ne forte grauentur corda uestra in crapula et ebrietate et sollicitudinibus saecularibus. Et : Sint lumbi uestri praecincti et lucernae ardentes, et uos similes hominibus expectantibus dominum suum, quando reuertatur a nuptiis, ut cum uenerit et pulsauerit aperiant ei. Beatus seruus ille quem, cum uenerit dominus, inuenit ita facientem. Et iterum : Seruus qui scit uoluntatem domini sui et non facit uapulabit multas. Et : Quid mihi dicitis : Domine, Domine, et non facitis quae dico? Et iterum : Si autem dicat seruus in corde suo : Tardat dominus meus, et incipiat caedere conseruos et manducare et bibere et inebriari, ueniet dominus eius in die qua non sperat, et dividet eum et partem eius cum hypocritis ponet. Et omnia talia quae liberum et suae potestatis ostendunt hominem et quia consilio instruat Deus, adhortans nos ad subiectionem sibi et avertens ab incredulitate, non tamen de uolentia cogens.

²⁹⁵ エフェソ1章14節、第二コリント1章22節を参照。

²⁹⁶ AH3.24.1 : et in eo deposita est communicatio Christi, id est Spiritus sanctus, arrha incorruptelae et confirmatio fidei nostrae et scala ascensionis ad Deum. In Ecclesia enim, inquit, posuit Deus apostolos, prophetas, doctores, et uniuersam reliquam operationem Spiritus, cuius non sunt participes omnes qui non concurrunt ad Ecclesiam, sed semetipsos fraudant a uita per sententiam malam et operationem pessimam. Vbi enim Ecclesia, ibi et Spiritus Dei ; et ubi Spiritus Dei, illic Ecclesia et omnis gratia : Spiritus autem Veritas.

また、神は神々の集いに立ち、その真中で神々への裁きを行う。ここで父と子と、そして養子とされた者たちについて言っている。これが教会であり、神の集いであって、これは神、すなわち、御子が自ら自分自身で集めたのである²⁹⁷。(中略) 神々とはどんなものか? 「私は言った。あなたたちは神々であり、また、皆、崇高なものの子らである。」
〔すなわち〕 養子にする恵み²⁹⁸を受けた人々に言っている〔のであって〕 これによって 私たちは「アバ、父よ」と呼ぶのである²⁹⁹。(下線筆者)

この箇所に記載されているとおり、エイレナイオスによれば、教会とは「養子とされた者たち」のことであると定義している。すなわち、神は養子とした者たちに「弁護者」としての聖霊を内在させるのである。内在した聖霊が、実際にどのように働くかについて、『異端反駁』第3巻17章1節には、次のように記されている。

また主の霊が私の上にある。私に注油するために。その霊は主が『語るのはあなたたちではなく、あなたたちのうちで語る、あなたたちの父の霊である。』と言ったのである³⁰⁰。

聖霊の内在を受け、養子とされた者は内側からの聖霊の働きにより、語るべきことが与えられ、さらに父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶようになる。

教会の時代における人間は、御子に聖霊が内在したのと同様に³⁰¹、洗礼時に聖霊の内在が与えられるとエイレナイオスは主張する。『異端反駁』第5巻11章2節には、次のように記されている。

それでは私たちはいつ天に属しているかたちを取ったのであろうか。あなたたちが

²⁹⁷ AH3.6.1 : Et iterum : Deus stetit in synagoga deorum, in medio autem deos discernit. De Patre et Filio et de his qui adoptionem perceperunt dicit ; hi autem sunt Ecclesia : haec enim est synagoga Dei, quam Deus, hoc est Filius, ipse per semetipsum collegit.

²⁹⁸ 『異端反駁』第4巻1章1節では、「子とする霊を受けた人々」(qui adoptionis Spiritum accipiunt)と記されている。

²⁹⁹ AH3.6.1 : Quorum autem deorum? Quibus dicit : Ego dixi : Dii estis et filii Altissimi omnes, his scilicet qui adoptionis gratiam adepti sunt, per quam clamamus : Abba Pater.

³⁰⁰ AH: 3.17.1 : Et iterum : Spiritus Domini super me, propter quod unxit me, iste Spiritus de quo ait Dominus : Non enim uos estis qui loquimini, sed Spiritus Patris uestri qui loquitur in uobis.

³⁰¹ 『異端反駁』第3巻17章1節には、次のように記されている。「そこで〔聖霊〕は、人の子となった神の子にも降った。それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住むということに慣れさせるためであった。」(AH3.17.1 : unde et in Filium Dei Filium hominis factum descendit, cum ipso adsuescens habitare in genere humano et requiescere in hominibus et habitare in plasmate Dei.)

主の名を信じ、その霊を受けて、洗われたときと言えよう³⁰²。

教会の時代における聖霊の内在を取り扱うにあたり、重要なことは『異端反駁』第3巻17章3節に記されている人間に与えられた聖霊、すなわち弁護者としての聖霊も、同じくイザヤ書が伝えた「助言の聖霊」であるという点である。

すなわち主に降った神の霊であって、「知恵と悟りの霊、助言と力の霊、認識と敬虔の霊、神への畏れの霊」である。この霊を〔主は〕教会に与え、弁護者を天から全地に遣わしたのであるが、主が語られるには、悪魔も稲妻のように投げ落とされている。それ故、私たちには神の露が必要である。それは私たちが焼き尽くされてしまわないため、また、実を結ばないままではなく、訴える者のいるところに弁護者もいてもらうためである³⁰³。

御子の受肉における「助言」の霊の内在を含めて、教会の時代における聖霊の働きをまとめると、エイレナイオスは、(1) イエスが聖霊によって身籠ったというときの聖霊の内在をイザヤ11章2節と3節から取っている。(2) 御子の洗礼時に降った聖霊もイザヤ11章2節と3節から取っている。(3) 人間の洗礼時に降った聖霊もイザヤ11章2節と3節から取っているとなる。すなわち、ここには明確な一貫性があり、イエスの誕生からイエスへの聖霊の内在、人間への聖霊の内在は同じ聖霊であることをエイレナイオスは主張する。受肉した御子であるイエスが洗礼時に聖霊を受け、「助言」する者となったこととの関連で述べるならば、御子の口を通して語られていた「助言」が、教会の時代にあっては、人々に内在している聖霊の働きにより、内側から御子の言葉、すなわち、御言葉が人間に助言を与え、人間を「善」へと導くのである。

1.7. まとめ

この章をまとめると次のように言うことができよう。エイレナイオスは、人間に内在し「助言」を与える聖霊について、『証明』第9章でイザヤ書11章2節と3節から引用し「神の霊が彼の上に憩うであろう。その霊は、知恵と理解の霊、思慮と勇気〔の霊、知識〕

³⁰² AH5.11.2: *Quando autem iterum imaginem caelestis? Scilicet quando, ait, abluti estis credentes in nomine Domini et accipientes ejus Spiritum.*

³⁰³ AH3.17.3: *quod est Spiritus Dei, qui descendit in Dominum, Spiritus sapientiae et intellectus, Spiritus consilii et uirtutis, Spiritus scientiae et pietatis, Spiritus timoris Dei, quem ipsum iterum dedit Ecclesiae, in omnem terram mittens de caelis Paraclitum.*

と神を敬う霊、神を畏れる霊が彼を満たすであろう」と記している。興味深いことに、イエスが聖霊によって身籠ったというときの聖霊の内在も、また御子の洗礼時に降った聖霊も、そして人間の洗礼時に降った聖霊についても、エイレナイオスはすべてイザヤ 11 章 2 節と 3 節で示されたのと同じ聖霊が降ったことを強調している。ここには明確な一貫性があり、イエスの誕生からイエスへの聖霊の内在、人間への聖霊の内在は同じ聖霊であることをエイレナイオスは主張する。「不思議な助言者」であった御子が受肉し、また洗礼時に聖霊を受け、地上においても「助言」する者となった。このことに関連で述べるならば、御子の口を通して語られていた「助言」が、教会の時代では、聖霊を内在させた人間の口を通して語られ、人間を「善」へと導くのである。

2. 聖霊の内在は「父の意志」を行わせ、「一致の確立」と「結実の確立」を与えること

この章では、聖霊の内在は「父の意志」を行わせ、「分裂」、「不和」を引き起こす人々に「一致」を与えることについて取り扱いたい。まずパウロが元来の「古い」人間について記している『異端反駁』第 3 卷 20 章 3 節を見たい。

そして、この故にパウロは人間の弱さを解き明かして「私は自分の肉の中に善が住まないことを知っている」と言っている。私たちの救いという善が、私たちにはではなく、神からであることを言おうとしているのである³⁰⁴。(下線筆者)

この箇所では述べられているように、元来の人間³⁰⁵は自らの肉の中に善を住まわせることができない。そうであるならば、人間が何か善を成すためには、「外側」からの働きかけがなければ、善の行為には進めないことになる。すなわち、聖霊が人間に内在していなければ、人間は善を行うことはできない。「肉的」な歩みをしている者たちの間には、「妬み」、「不和」、「不一致」があることを、『異端反駁』第 4 卷 38 章 2 節は示している。

なぜなら、「あなたたちのうちに、妬み、不和、そして不一致があるなら、あなたたちは肉的であって、人間に従って歩んでいる」と言っている。すなわち、彼らの不完全さと振る舞いの弱さのために、父の聖霊は、まだ彼らと共にいなかった。

³⁰⁴ AH3.20.3 : et propter hoc Paulus infirmitatem hominis adnuntians ait : Scio enim quoniam non inhabitat in carne mea bonum, significans quoniam non a nobis sed a Deo est bonum salutis nostrae.

³⁰⁵ 初めに人間が造られたとき、人間の肉体には魂のみが吹き込まれた。この段階では人間は未完成であり、不完全であったと言えよう。 Johannes Quasten, *Patrology*. vol. I , 308-309.

ここで「妬み、不和、そして不一致」があることの理由が、聖霊が人間と共にいなかったことであることが示されている。そうであるならば、聖霊が人間と共にいるとき、すなわち、聖霊が人間に内在したときには、人間に「一致」が与えられることになる。

2.1. 神の形成物と聖霊の一致により、人間が行う父の意志とは何か

それでは、聖霊による「一致」を与えられた人間が、どのように生きるかを見るために、『異端反駁』第3巻17章1節と2節に注目したい。まず『異端反駁』第3巻17章1節を取り上げ、この箇所に記載されている「聖霊の内在が人間に『父の意志』を行わせる」とは一体どのようなことであるかを見たい。

彼らは真にそうであったことを語った。すなわちイザヤが「彼の上に留まって休む」と言ったあの神の霊が、鳩のように彼に降った。それは私たちがすでに述べた通りである。また「主の霊が私の上にある。私に注油するためである」[と言っている。]その霊は主が「語るのはあなたがたではなく、あなたがたのうちで語る、あなたたちの父の霊である」と言ったのである。また神のうちに再び生まれ変わらせる権限を弟子たちに与えたとき、「あなたたちは行って、すべての民族を弟子にきなさい。父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」と彼らに言った。しもべとはしために預言させるため、終わりの時に彼らの上にこの〔霊〕を注ぐであろうと、預言者を通して約束したのである。そこで〔聖霊〕は、人の子となった神の子にも降った。それは彼とともに、人類のうちに住み、人々のうちに休み、神の形成物のうちに住むということに慣れさせるためであった。そのなかで父の意志を行い、そして彼らを古さからキリストの新しさへと新たにするのである³⁰⁶。(下線筆者)

このように聖霊が神の形成物と一致することによって、人間は聖霊を内在させ、「父の意志」を行うようにされる。この点について、ペトロ・ネメシエギは次のように記している。

³⁰⁶ AH3.17.1 : Quod autem erat, hoc et dixerunt, Spiritum Dei sicut columbam descendisse in eum, hunc Spiritum de quo ab Esaia dictum est : Et requiescet super eum Spiritus Dei, sicut praediximus. Et iterum : Spiritus Domini super me, propter quod unxit me, iste Spiritus de quo ait Dominus : Non enim uos estis qui loquimini, sed Spiritus Patris uestri qui loquitur in uobis. Et iterum potestatem regenerationis in Deum dans discipulis dicebat eis : Euntes docete omnes gentes, baptizantes eos in nomine Patris et Filii et Spiritus sancti. Hunc enim promisit per prophetas effundere se in nouissimis temporibus super seruos et ancillas ut prophetent ; unde et in Filium Dei Filium hominis factum descendit, cum ipso aduescens habitare in genere humano et requiescere in hominibus et habitare in plasmate Dei, uoluntatem Patris operans in ipsis et renouans eos a uetustate in nouitatem Christi.

聖霊は人間の中に住むのはもちろん、ダイナミックな現存としてである。聖霊は、「人々のうちに父のご意志を実現する」。この父の意志はもちろん、イエスが福音の中に教えてきた神のみ心にほかならない。人間の倫理生活は単なる人間的な努力の結果ではない。神にならう（エフェソ5・1）という倫理的な当為は、ただ神なる霊が人間のうちに住んで、人間に新しい可能性を与えるということによってのみ果たしうる。キリスト教の倫理は、キリストの息である聖霊に感化されて生きることにほかならない³⁰⁷。

ペトロ・ネメシエギが語っているように、筆者も、人間と聖霊の一致は単なる教義的事柄ではなく「ダイナミックな現存として」捉えられること、また「キリストの息である聖霊に感化されて生きること」が、どのような生き方となるべきかを問うことは非常に意義深いことであり、必要なことであると考え。ペトロ・ネメシエギは、実際に聖霊が行う「父の意志」について「イエスが福音の中に教えてきた神のみ心」と説明している。確かに、人間が行うのは、「イエスが福音の中に教えてきた神のみ心」であるが、筆者としては、「神のみ心」が『異端反駁』第3巻17巻1節と2節の文脈において何を示しているかを、よりの確に判断したいと考える。そのため、この点を明らかにするために「父の意志を行い」の後に記されている「彼ら」(eos)とは誰のことを指しているかを判断したい。この箇所は「あなたたちは行って、すべての民族を弟子としなさい。父と子と聖霊の名において、彼らに洗礼を授けなさい³⁰⁸」とあり、実際に「使徒たち」に「神へと生まれ変わらせる権限」が与えられたことが触れられている。そのため、この「彼ら」とは使徒たちであるかのように考えられるかもしれない。さらに「しもべとはしのために預言させるために、終わりの時に、彼らの上にこの〔霊〕を注ぐであろうと、預言者を通して約束したのである。」と記されており、使徒たちに約束の聖霊が与えられることにも言及されている。

³⁰⁷ ペトロ・ネメシエギ「教父時代の Pneumatologia の代表的一例としての エイレナイオスの聖霊論」、132-133 頁。

³⁰⁸ 『異端反駁』第3巻1章1節には、次のように記されている。(使徒たちは) 私たちの主が死者からよみがえり、そして聖霊が上に降ったときに、高みからの力をまとい、すべてについて満たされ、完全な知識を持ち、その後、神からの私たちにあって善いことを告げ知らせながら、また天的な平和を人々に告げながら、地の果てにまで出て行ったのである。彼らは皆が共に、そして、彼らの一人ひとりが、神の福音を持って(出て行ったのである)。(AH3.1.1: *Postea enim quam surrexit Dominus noster a mortuis, et iuduti sunt superueniente Spiritu Sancto uirtutem ex alto, de omnibus adimpleti sunt et habuerunt perfectam agnitionem; exierunt in fines terrae, ea quae a Deo nobis bona sunt euangelizantes et caelestem pacem hominibus adnuntiantes, qui quidem et omnes pariter et singuli eorum habentes Euangelium Dei.*) 聖霊が降った者は、「力」と「満たし」と「完全な知識」が与えられることが記されている。ここで重要なことは、聖霊を受けた者が「一人ひとり」でありながら、同時に「共に」神の福音を伝えたことである。つまり、聖霊を受けた者たちが持っている福音は、一人ひとりが別の福音を持っているのではなく、同じ福音が与えられているということになる。言い換えれば、彼らは聖霊を受けたことで、同じ福音が与えられる「一致」を受けているということができるであろう。

しかし、実際に「父の意志」を行う聖霊を受ける者を指す言葉として「人類のうちに住み」と記されている部分を見落としてはならない。続く『異端反駁』第3巻17章2節の冒頭でもダビデが「この霊が人類に与えられることを祈り求めた」と記されており、やはり聖霊が与えられることに関して、「人類」に視点が注がれている。また『異端反駁』第3巻17章2節に「新しい契約を開く権限」とあり、これは『異端反駁』第3巻17章1節にある「神へと生まれ変わらせる権限」と同じことを意味すると考えられる。これらの権限とは、ともに洗礼のことを指していると考えて間違いないであろう。つまり、弟子たちは、父なる神から「神へと生まれ変わらせる権限」と「新しい契約を開く権限」、すなわち「父と子と聖霊の名において、彼らに洗礼を授けなさい」と言われている通りに、洗礼を授けることを「全人類」のために与えられている。そのため、「父の意志」とは、神へと生まれ変わらせるために、「全人類」が聖霊を受けて、さらに洗礼を受けることに他ならない。

さらに『異端反駁』第5巻9章3節を読むと、聖霊を受けて「神の意志を行なうこと」は、神に従順な者として生きることであることを理解することができる。

従って、神の霊なしには、肉は死んだものであり、生命を持っておらず、神の御国を受け継ぐことはできない。地にまかれる水のように、血は非理性的なものである。「彼は土的な者であり、彼らも土的な者たちである。」けれども、父の聖霊のあるところ、そこに生きている人間がおり、理性によって生かされる血は、復讐のために神によって守られる。聖霊の所有となった肉は、聖霊の性質を得て、神の御言葉に型取られたことで、自らのものを忘れてしまう。そして、この故に言う。「私たちは、土からのその者のかたちとなっているように、天にある方のかたちにもなる。」それでは、土的なものとは何か？形成物である。それでは、天的なものとは何か？聖霊である。従って、言うのである。「天的な聖霊なしに、かつて私たちは肉の古さのうちに生き、神に不従順であったが、今や、聖霊を受けて、神に従順なものとして生命の新鮮さに歩んでいる。」従って、神の聖霊なしに、私たちは救われないのであるから、使徒は、信仰と敬虔な振る舞いによって、神の聖霊を保持するように、私たちを励ますのである。それは聖霊の参与を欠く者となり、天に御国を喪失することのないためである。そしてまた、大声で叫ぶのである。「肉と血だけでは、神の御国を受け継ぐことはできない」と³⁰⁹。

³⁰⁹ AH5.9.3 : Igitur caro sine Spiritus Dei mortua est, non habens vitam, regnum Dei possidere non potens ; sanguis irrationalis, velut aqua effusa in terram. Et propter hoc ait : Qualis terrenus, tales et terreni. Ubi autem Spiritus Patris, ibi homo vivens, sanguis rationalis in ultionem a Deo custoditus, caro a Spiritu possessa, oblita quidem sui, qualitatem autem Spiritus assumens, conformis facta Verbo Dei. Et propterea ait : Sicut portavimus imaginem ejus quide terra est, portemus et imaginem ejus

この箇所の中に「天的な聖霊なしに、かつて私たちは肉の古さのうちに生き、神に不従順であったが、今や、聖霊を受けて、神に従順なものとして生命の新鮮さに歩んでいる。」とある。このことから、人間の神への従順さは、墮罪後の人間から自発的に生じてくることではなく³¹⁰、聖霊が人間のうちに内在することによって実現するものであると言うことができよう。

2.2. 『異端反駁』第3巻に見る「神への生まれ変わり」と『異端反駁』第5巻と『証明』に見る「子とされること」、「神への従順」の関連性

『異端反駁』第3巻17章1節と『証明』第3章と第7章を見ることで、洗礼と「神へと生まれ変わらせること」に関するさらなる発展を見ることができる。『証明』第3章には、次のように記されている。

この洗礼が永遠の生命の封印であり、神の内への生まれ変わりであるということ、すなわちこれによってわれわれはもはや死すべき人間の子供ではなく、時間を超越し、永遠の方である神の子供になるのだということ³¹¹。(下線筆者)

また『証明』第7章には、次のように記されている。

洗礼は、子を通して、聖霊の内に、父なる神への再生をわれわれにもたらしのである。なぜなら、神の霊を保持する人々が御言葉、すなわち子へと導かれ、子はこの人々を父の許へと連れて行って引き合わせ、父は不朽性を授けるからである。それ

quide caelo est. Quid ergo est terrenum ? Plasma. Quid autem caeleste ? Spiritus. Sicut igitur, ait, sine Spiritu caelesti conversati sumus aliquando in vetustate carnis, non obaudientes Deo, sic nunc accipientes Spiritum in novitate vitae ambulemus, obaudientes Deo. Quoniam igitur sine Spiritu Dei salvari non possumus, adhortatur Apostolus nos per fidem et castam conversationem consecrare Spiritum Dei, ut non sine participatione sancti Spiritus facti amittamus regnum caelorum, et clamavit non posse carnem solam et sanguinem regnum Dei possidere.

³¹⁰ この観点から『異端反駁』第4巻37章1節を読むことをしたい。そこには、次のように記されている。「なぜなら神は、人間が初めから自分の魂を持つと同じように、自立性を持つように、人間を自由なものに造った。それは神の意志を、彼〔神〕に強制されてではなく、自発的に行なわれたことを示すためである。(AH4.37.1 : quia liberum eum Deus fecit, ab initio habentem suam potestatem sicut et suam animam, ad utendum sententia Dei voluntarie, et non coactum ab eo.) つまり、聖霊を受けたことによって「神への従順」を保持しつつ歩むことができるようになった人間は、最初に創造された状態のように「神の意志」を強制によって行なうのではなく「自主性」を持って「神に従順」であることができる。けれども、この「自主性」は創造時の「自立性」に基づくものであるよりも、聖霊の人間への働きであると考えられる。

³¹¹ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、206頁。

ゆえ、霊によらないでは神の御言葉を見ることはできず、子によらないでは父に近づくことはできない。子は父の知識であり、子の知識は聖霊を仲介とするからである。しかし、子は、父が望むように、自分の望む人々に、役務に応じて霊を与える。それが父の心に適うことだからである³¹²。(下線筆者)

『異端反駁』第3巻の時点では、洗礼は「神のうちへと生まれ変わらせる」ことに繋がられているが、『証明』に至ると、洗礼が神のうちへ生まれ変わらせることに繋がり、さらに「子とされる」ことまで発展していると考えられることができるだろう。

また『異端反駁』第5巻8章1節を見ると、聖霊を内在させた人間は、「肉」にいたるのではなく、「霊」のうちにある。そのあり方は、肉を捨てて、聖霊を得るのではなく、肉と聖霊が一致することによって³¹³、人間は霊のうちにある者とされる。つまり、「肉的」な存在から「霊的」な存在となる³¹⁴。聖霊の一致を与えられた人間は、父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶことができる³¹⁵ようになることが『異端反駁』第5巻8章1節にも示されている。

³¹² エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、208頁。Joseph P. Smithは「生まれ変わり」と「再生」のどちらも“rebirth”と記している。Behrは“regeneration”とし、元のギリシア語は *παλιγγενεσία* であったと記している。J.P. Smith, *St. Irenaeus. Proof of the Apostolic Preaching*, 49, 51. John Behr, *On the Apostolic Preaching*, 44.

³¹³ 『異端反駁』4巻序4節には、次のように述べられている。「事実、人は魂と肉の結合であり、人は神の類似性に従って造られ、そして彼の両手によって、すなわち、子と霊によって形成され、彼は彼らに「人を造ろう」と語った。(AH4. pref. 4: *Homo est enim temperatio animae et carnis, qui secundum similitudinem Dei formatus est et per manus ejus plasmatus est, hoc est per Filium et Spiritum, quibus et dixit: Faciamus hominem.*) また『異端反駁』5巻9章1節には次のように記されている。「私たちが示したように、完全な人とは、肉、魂、そして霊の3つのものから成ることを理解していないからである。そして、そのうちの1つは救いを形づくるものである。それは聖霊である。別のものは、救われ、そして、造られるものである。それは肉である。もう1つは、前の2つの間にある。それは魂である。

(AH5.9.1: “non conspicientes quia sunt tria ex quibus, quemadmodum ostendimus, perfectus homo constat, carne, anima, et spiritu, et altero quidem salvante et figurante, qui est Spiritus, altero quod salvatur et formatur, quod est caro, altero quod inter haec est duo, quod est anima”) さらに John Behr は次のように説明している。「完全な、また完成した人は、肉体、魂、そして聖霊がキリストの到来で保たれたように、救われる。いずれの性質も個々に人と呼ぶことができる。けれども、肉体と魂は、人の『一部』と呼ばれ、聖霊はそのようではない。なぜなら聖霊は人ではなく、神であるからである。」John Behr, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity*, 158. また『異端反駁』第3巻22章1節には「私たちが地から取られた身体であり、神から霊を受ける魂であることは、すべての人が認めるであろう。」(AH3.22.1: *Nos autem quoniam corpus sumus de terra acceptum et anima accipiens a Deo Spiritum, omnis quicumque confitebitur.*) と記されている。これらのことから「肉と聖霊が一致する」というとき、そこには暗黙の了解として魂の存在もあり、聖霊を受け取っている部分は肉であるというよりも人間の構成部分としての魂であると言うことができるであろう。

³¹⁴ 『異端反駁』5巻6章1節において次のように語られている。「しかし、魂と混合した聖霊が形成物に一体となるとき、聖霊の流出の故に、人は霊的、そして、完全になるのである。そして、それが神のかたちと類似性に従って造られたものである。」(AH5.6.1: *Cum autem Spiritus hic commixtus animae unitur plasmati, propter effusionem Spiritus spiritualis et perfectus homo factus est: et hic est qui secundum imaginem et similitudinem factus est Dei.*) Anthony Briggman は、エイレナイオスは「霊的」と「完全」を同義語として用いていることを指摘している。Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 175.

³¹⁵ マルコ福音書14章36節を参照。

従って、もしこの保証が、私たちのうちに宿っているのであれば、既に、霊的なものであり、また死すべきものは、不死性によって呑み込まれているのである。——なぜなら、もしあなたたちのうちに神の霊が宿っているのであれば、あなたたちは肉にいるのではなく、霊のうちにいるのである。——と言っている。しかし、このことは肉を捨てることによるのではなく、霊と一致することでなされる。——つまり、肉を持たない者たちに書いたのではなく、神の霊を受け取った者たちにであり、この〔霊〕によって、「アバ、父よ」と呼ぶのである³¹⁶。

このように、聖霊はまず人間の形成物である肉と一致をする。この一致が可能となったのは、御子が肉を取り、洗礼時に御子のうちに聖霊が宿ることによってもたらされた一致に基づいている³¹⁷。同様に人間への聖霊の内在も洗礼時に起こるのである。そして、実際に聖霊の内在を受けた人間は、「父の意志」を行う。すなわち、「神へと生まれ変わらせる」洗礼を人々に授けるのである。それにより人類は、古さからキリストの新しさへと新たにされるのである。

2.3. 『異端反駁』第3巻17章2節における聖霊の内在が与える「一致」

³¹⁶ AH5.8.1 : Nunc autem partem aliquando a Spiritu ejus sumimus ad perfectionem et praeparationem incorruptelae, paulatim assuescentes capere et portare Deum : quod et pignus dixit Apostolus, hoc est pars ejus honoris qui a Deo nobis promissus est, in epistola quae ad Ephesios est dicens : In quo et vos, audito verbo ueritatis, Evangelio saltis uestrae, in quo credentes signati estis Spiritus promissionis sancto, qui est pignus hereditatis nostrae. Si ergo pignus hoc habitans in nobis jam spiritalis efficit et absorbetur mortale ab immortalitate—Vos enim, ait, non estis in carne sed in Spiritu, siguidem Spiritus Dei, habitat in uobis—, hoc autem non secundum jacturam carnis sed secundum communionem Spiritus fit—non enim erant sine carne quibus scribebat, sed qui assumpserant Spiritum Dei, in quo clamamus : Abba Pater, si igitur nunc pignus habentes clamamus : Abba, Pater, quid fiet quando resurgentes facie ad faciem uidebimus eum, quando omnia membra affluenter exultationis hymnum protulerint, glorificantia eum qui suscitauerit ea ex mortuis et aeternam vitam donauerit? Si enim pignus complectens hominem in semetipsum jam facit dicere : Abba, Pater, quid faciet uersa Spiritus gratia quae hominibus dabitur a Deo? similes nos ei efficiet et perficiet uoluntatem Patris : efficiet enim hominem secundum imaginem et similitudinem Dei.

³¹⁷ 『異端反駁』第3巻9章3節には次のように記されている。「その上、マタイは洗礼において、天が開け、そして、神の霊がまるで鳩のように降り、彼の上に来るのを見た。また、見よ、天からの声があつて言った。「あなたは私の愛する子、私の心にかなうもの。」キリストがイエスの中へと降って来たのでもなければ、キリストとイエスが別なのでもない。すべての〔者の〕救い主であり、天と地の主である神の御言葉、先に示したようにイエスである者が、肉を取り、また父から霊〔を〕注油されて『イエス・キリストとなった』のである。」(AH3.9.3: Adhuc ait in baptisate Matthaues : Aperi sunt caeli, et uidit Spiritum Dei quasi columbam uenientem super eum. Et ecce uox de caelo dicens : Hic est Filius meus dilectus in quo mihi complacui. Non enim Christus tune descendit in Iesum, neque alius quidem Christus, alius uero Iesus ; sed Verbum Dei, qui est Saluator omnium et dominator caeli est terrae, qui est Iesus, quemadmodum ante ostendimus, qui et adsumpsit carnem et unctus est a Patre Spiritu, Iesus Christus factus est.)

『異端反駁』第3巻17章2節は、前章である『異端反駁』第3巻17章1節が神の形成物と聖霊の一致について、また、そのことから起こる人間の行動、すなわち、「父の意志」を行うというような視点に比べて、より個々の人間と人間の一致について示されている。

ブリッグマン (Briggman) は、この箇所には2つのテーマが記されているとする。ひとつは「一致の確立」(the establishment of unity) であり、もうひとつは「結実の確立」(the establishment of productivity) である³¹⁸。

最初の場面は、ペンテコステにおいて実際に聖霊を受けた弟子たちに何が起こったというところからはじまる。そして、弟子たちだけではなく「諸部族」と「私たち」とが聖霊を受ける者たちとなることを示しながら、いくつかの発展がある聖霊の働きが記されている。そこで、この箇所を4つの部分に分けて聖霊の内在を受けた人間について確認したい。区別の仕方として「一致」等の表現が用いられている段落ごとに区分し、その言葉の意味を明らかにしたい。特に(1)から(3)までは「一致の確立」について、(4)は「結実の確立」について見たい。

- (1). ダビデが「人を導いてくれる霊で私を支えてください」と言ったとき、彼はこの霊が人類に与えられることを祈り求めた。またルカも、主の昇天の後、ペンテコステにすべての民族を生命に導き入れて、彼らのために新しい契約を開く権限を持って、弟子たちの上に降ったと言っている。そこで、弟子たちは一致してすべての言語で神を賛美した³¹⁹。(下線筆者)

まず「この霊」とは、前節で取り扱ったように、「神のうちへ生まれ変わらせる」聖霊を意味している。ダビデが「人類」に与えられることを祈っていた聖霊は、ルカが証言するように、ペンテコステにおいて「すべての民族」を生命に導き入れるために、「新しい契約を開く権限」、すなわち「神のうちへと生まれ変わらせる権限」を弟子たちに与えた。その結果として、「弟子たちは一致して」と記されている。「あなたたちは行って、すべての民族を弟子にしなさい。父と子と聖霊の名によって洗礼を受けなさい」とあるように、人類に洗礼を授けるために出て行く弟子たちの「一致」が取り上げられている。ここで「一致して」と訳しているラテン語は *conspirantes* であり、この言葉は「調和させる」とも訳す

³¹⁸ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 78.

³¹⁹ AH3.17.2: Hunc Spiritum petiit David humano generi dicens: Et Spiritu principali confirma me. Quem et descendisse Lucas ait post ascensum Domini super discipulos in Pentecoste, habentem potestatem omnium gentium ad introitum uitae et adaptationem noui Testamenti; unde et omnibus linguis conspirantes hymnum dicebant Deo,

ことができる³²⁰。このように聖霊の内在は、まず弟子たちに調和という一致をもたらすのである。

- (2). そして霊は、分離させてしまった諸部族を一致させ、すべての民族の初穂を父に捧げた。このために、主は自ら弁護者を遣わすことを約束された³²¹。(下線筆者)

この部分には「分離させてしまった諸部族を一致させ」と記されている。ここでの「一致」はラテン語訳では *unitas* であり、この文脈においては「感情や意見、考え方の一致、統合」を意味すると考えられる³²²。興味深いことに、主は自ら弁護者を遣わし、諸部族の意見をまとめ、一致させたように記されている。

- (3). 事実、湿り気がなければ、渴いた小麦〔粉〕からは、ひとつのかたまりも、ひとつのパンもできないように、天から来る水なしには、私たちが多くの者でありながら、キリストにおいて一致することができなかつたのである。また渴いた地が、水を吸い込まなければ実を結ばないように、以前には枯れ木であった私たちも、上からの豊かな雨なしには、生命の実を結ぶことは決してなかつたであろう。そこで、私たちの身体は、〔洗礼の〕洗いによって、魂は霊によって、不滅性にまで至らせる一致を受けたのである³²³。(下線筆者)

この箇所には、「渴いた小麦〔粉〕」と「枯れ木」の2つの比喩が記されている。それぞれは異なったことを示そうとしている。まず「乾いた小麦〔粉〕」の比喩であるが、そこで使われている一致は、*unus* である。これは「一つ」、「同一」とすることが示されている³²⁴。では、何と「一つとする」のかと言えば、「私たちが多くの者でありながら、キリストにおいて」一つすることである³²⁵。この一致が何によって成されるかと言えば、「〔洗礼の〕洗

³²⁰ A Latin Dictionary, Founded on Andrews' Editon of Freund's Latin Dictionary, Revised, Enlarged, and in Great Part Rewritten by Charlton T. Lewis, and Charles Short, Oxford an the Clarendon Press, 436.

³²¹ AH3.17.2 : Spiritu ad unitatem redigente distantes tribus et primitias omnium gentium offerente Patri. Vnde et Dominus pollicitus est mittere se Paraclitum, qui nos aptaret Deo.

³²² A Latin Dictionary, 1932.

³²³ AH3.17.2 : Sicut enim de arido tritico massa una fieri non potest sine humore neque unus panis, ita nec nos multi unum fieri in Christo Iesu poteramus sine aqua quae de caelo est. Et sicut arida terra, si non percipiat humorem, non fructificat, sic et nos, lignum aridum existentes primum, numquam fructificaremus uitam sine superna uoluntaria pluuiam. Corpora enim nostra per lauacrum illam quae est ad incorruptionem unitatem acceperunt, animae autem per Spiritum.

³²⁴ A Latin Dictionary, 1933.

³²⁵ また『異端反駁』第3巻19章3節は、この「一致」を異なった視点から考えている。「見出した人間

い」による。ペトロ・ネメシエギは、次のように説明している。

人々を一致させること、また実を結ばせること、というような聖霊の二つの働きを、エイレナイオスは水の働きに譬えている。水が粉に加えられるとき、はじめて一つのパン生地、一つのパンになりうる。それと同様に、アダムの罪以来ばらばらになってしまった人類の姿は、天から降ってくる水である聖霊のおかげで、はじめてキリストにおいて一体となる³²⁶。

ここからエイレナイオスの洗礼の理解も伺い知ることができる。すなわち洗礼とは、単に聖霊が個々人に授けられるときであるのではなく、個々の信者たちが洗礼によってキリストの一つのからだに結びあわされることを意味している。

次いで「枯れ木」である。ブリッグマンはこの比喻を『異端反駁』第3巻17章3節と結びあわせて考えている³²⁷。またこの「枯れ木」の比喻こそが「結実の確立」に当たる部分である。『異端反駁』第3巻17章3節の最初の部分に注目したい。

神がイスラエルの民を外国人の支配から救うために選んだイスラエル人ギデオンは、賜物の恵みを予見したので、願いを変更した。彼はそこにだけ最初に露の置いた羊毛の上に、乾燥がなくなることを預言したのである。すなわち、民の型であって、彼らが神からの聖霊を保持していない〔ということを〕。イザヤも「私はぶどう畑の上に雨を降らさない」と言っているように³²⁸。

を父に捧げ、委ね、自らのうちで人間の復活の初穂を行った。頭が死者からよみがえったように、身体の残り〔の部分〕、生命のうちにあるすべての人間も「結目と筋によって」ひとつとなり、神の増加のよって強められ、肢体の各々が身体のかなで固有な、また適切な位置を持ち、不従順ゆえの罰の期間が完了するときによみがえるためである。身体には多くの肢体があるため、父のところには住処も多いのである。

AH3.19.3: offerentem et commendantem Patri eum hominem qui fuerat inuentus, primitias resurrectionis hominis in semetipso faciens, ut quemadmodum caput resurrexit a mortuis, sic et reliquum corpus omnis hominis qui inuenitur in uita, impleto tempore condemnationis eius quae erat propter inobaudientiam, resurgat, per compagine et coniunctiones coalescens et confirmatum augmento Dei, unoquoque membrorum habente propriam et aptam in corpore positionem. Multae enim mansiones apud Patrem, quoniam et multa membra in corpore. まず、この箇所にある「身体の残り」は教会を指していると理解して間違いはないであろう。そして「教会のあるところに、神の聖霊もあり、神の聖霊のあるところには、教会とすべての恵みがある。」この箇所の下線を引いた「ひとつとなり」は *coalesco* が使われている。この言葉には「ひとつとなる」ということに加えて「共に成長する」という意味が含まれている。そのため、聖霊の内在の働きは「教会に集うものたち」、すなわち「神の養子」とされた人々をひとつにし、さらに「共に成長される」働きをすると考えることができよう。

³²⁶ ペトロ・ネメシエギ「教父時代の pneumatologia の代表的一例としてのエイレナイオスの聖霊論」、133頁。

³²⁷ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 83-85.

³²⁸ AH3.17.3: Hanc muneris gratiam praeuidens Gedeon ille Israelita, quem elegit Deus ut saluaret populum Israel de potentatu alienigenarum, demutauit petitionem, et super uellus lanae in quod tantum primum ros fuerat, quod erat typus populi, ariditatem futuram prophetans, hoc est non iam

ここから分かるように「枯れ木」とは「聖霊を保持していない」状態のことを指している。その状態に留まる限り、生命の実を結ぶことは決してなかった。けれども、聖霊の内在があり、魂は霊によって、不滅性にまで至らせる一致を受けたのである。この魂が受けた一致は、「信者たちが実を結ぶこと」に他ならない。つまり、聖霊の内在は、洗礼によって信者たちを一つのキリストのからだに結び合わせ、からだへの不滅性を与えるだけでなく、信者たちが「実を結ぶ」ように魂の内側から聖霊によって不滅性を与えるのである。

(4). だから、どちらも神の生命において役立つものであり、どちらも必要である。

私たちの主は律法に背いたサマリヤ女性、ひとりの夫のもとに留まらず、多くの婚姻によって姦淫の罪をしたあの女を憐れんで、女に生ける水を示し約束された。こうして、彼女はもはや渴くことがなく、また多くの苦勞をして得た水を飲む必要がなくなり、永遠の生命にほとぼしる飲み物を自らの内に持つようになった。この飲み物は主が父から賜物として受けたものであり、〔主も〕これを自分に関与する人々に与えた。全地に聖霊を遣わしたのである³²⁹。(下線筆者)

この最後の部分において示されていることは、聖霊の内在を受けた人間が、どのように「実を結ぶか」という具体的証拠である。実際に天から来る水、生ける水を与えられた者が、どのように生きるかが示されていると言えよう。このサマリヤの女性は「多くの婚姻」(multis nuptiis)をしていたために、「ひとりの夫」(uno uiro)のものに留まることができていなかった。また「多くの苦勞をして得た水」しか得ることができなかった。これは、まさに「一致」がないような状態であり、エイレナイオスは言わば視聴覚教材のように実際の聖書の記述を取り、聖霊の内在が人々に「一致」をもたらすことを説明している。

サマリヤの女性は「生ける水」である聖霊が内在したことによって、決して渴くことがなく、さらに永遠の生命にまで導かれたことが示されている。そして、この同じ聖霊について「〔主も〕これを自分に関与する人々に与えた。全地に聖霊を遣わしたのである」と語

habituros eos a Deo Spiritum sanctum, sicut Esaias ait : Et nubibus mandabo ne pluant super eam, in omni atutem terra fieri ros.

³²⁹ AH3.17.2: Vude et utraque necessaria, cum utraque proficiunt in uitam Dei, miserante Domino nostro Samaritanae illi praeuaricatrici, quae in uno uiro non mansit, sed fornicata est in multis nuptiis, et ostendente ei et pollicente aquam uiuam, ut ulterius non sitiret neque occuparetur ad humectationem aquae laboriosae, habens in se potum saliens in uitam aeternam, quod Dominus accipiens munus a Patre ipse quoque his donauit qui ex ipso participantur, in uniuersam terram mittens Spiritum sanctum.

られていることから、聖霊の内在は、人間に「永遠の生命」との一致も与えると考えられる。これこそまさに、「結実の確立」と言うことができるであろう³³⁰。このことは『異端反駁』第3巻17章2節のなかにある「そこで、私たちの身体は、〔洗礼の〕洗いによって、魂は霊によって、不滅性にまで至らせる一致を受けたのである。」と記されていることから同様に理解できる。このサマリヤの女性の姿こそ、聖霊の内在を受けたすべての信者たちの姿に他ならないのである。

2.4. まとめ

聖霊の内在を受けた人間は、『異端反駁』第3巻17章1節に記されている「父の意志」を行うように変えられる。「父の意志」とは「神へと生まれ変わらせる権限」を持つキリストの弟子たちが、人類に洗礼を授けていくことに他ならない。人類は洗礼によって聖霊を授けられることにより、「神へと生まれ変わらせる」ことからさらに発展し、父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶことができる養子とされるのである。この観点から『異端反駁』第3巻6章1節の「ここで父と子と、そして養子とされた者たちについて言っている。これが教会であり、神の集いであって、これは神、すなわち、御子が自ら自分自身で集めたのである。」という部分と『異端反駁』第3巻24章1節の「教会のあるところに、神の聖霊もあり、神の聖霊のあるところには、教会とすべての恵みがある。」を合わせ読むとき、エイレナイオスは、聖霊は教会に、すなわち、洗礼を受けた信者のみに内在すると考えた結論づけることができよう³³¹。

また『異端反駁』第3巻17章2節を見ると、「神の養子」とされた個々人が、同じ聖霊に預かり、「一致」へと導かれることが明らかにされている。その一致とは、弟子たちに「調和」をもたらし、「諸部族を統合」し、「多でありながら一つ」のキリストのからだとする。そして「一致」が与えられた人間は、同じ聖霊の内在によって「結実の確立」まで導かれる。サマリヤの女性の姿で示されていたように、聖霊の内在を受けた人間は、決して渴くことのない「永遠の生命」すなわち「不滅性」を与えられる。

このように、聖霊の内在を受けた人間は、それ以前とは違い、「助言」を自らの内側から発するよう変えられる。つまり、それまでは自分が神から受けていた「助言」を他者に向けて語るようにされる。また「分裂」、「不和」ではなく、「一致の確立」と「結実の確立」に導かれ、「不滅性」を与えられる。この姿こそ、聖霊の内在を受けたすべての信者たちの刷新された姿に他ならないのである。

³³⁰ Anthony Briggman, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, 85.

³³¹ Terrance L. Tiessen, *Irenaeus on the Salvation of the Unevangelized*, 184.

第5章 エイレナイオス神学における救済史的観点の人間の成長と自立への応用

この章の目的は、エイレナイオス神学を現代の教会における牧会の問題解決のために応用することにある。エイレナイオス自身も司牧者として生きた人物であり³³²、彼の神学は、当時の彼の司牧に影響を与えていたはずである。そこで、前章までに解明してきたエイレナイオスの神学を踏まえ、今日の牧会にどのように応用できるかを検討する新しい試みをしたい。

エイレナイオスの時代の司牧と今日の牧会とを比べると、時代的に大きな隔りがあるために内容的にも違いが大きいように思われるかもしれない。確かに西暦紀元2世紀と21世紀と聞けば、共通の事柄として受け取ることが困難であると思われるだろう。けれども、この疑問は救済史の視点から捉えることで解消される。私たちはこれまでエイレナイオスにおける救済史を、創造、旧約の時代、御子の受肉、教会の時代に区分して論じてきた。この章を記すにあたり、教会の時代の後に、もう1つの時代を付け加える必要がある。それは至福千年の時代である³³³。つまりエイレナイオスが描いている救済史は、教会の時代で終わるものではなく、至福千年の時代へ向けて進んでいく。この一連の救済史の観点から考えると、実は2世紀に司牧活動を行ったエイレナイオスも、現代の教会も同じ教会の時代に属していることになる。ここに2世紀の司牧と現代の牧会の接点が存在するのである。さらに、この教会の時代は、人間が「保証」である聖霊を受けて³³⁴、神が与える救いの営みに自ら積極的に関わっていく時代でもある³³⁵。そのため、本章で試みようとしているエイレナイオス神学の現代の牧会への応用は、時代の開きがあるために不可能であると考えられるどころか、聖霊の授与も司牧、牧会も共に教会の時代において行われることであるから、むしろ可能であることを強調したい。

そこで、救済史における教会の時代の中で、まずエイレナイオスがどのような神学に基づいて、司牧することを志していたかという点からエイレナイオスの「司牧者」としての

³³² 「イレナエウスは、特定の問題と期待を持って、外部から教会に接近したのではなく、古代教会の中で成長し、その伝承に精通し、教会に仕えるために生きた人であった。彼は<哲学者>であろうとは欲せず、より古い教父たちの弟子、また純正な使徒的伝承の、聖霊に満たされた守護者であろうと欲した。確かに、われわれに残されている彼の著作は、教会内の読者に向けられたものばかりである」カンペンハウゼン『古代キリスト教思想家ギリシア教父』三小田敏雄訳（新教出版社、1963年）、28頁。「エイレナイオスは終始、教会内部の問題——単に狭義の神学（教義）のみならず、祭儀にも関わる問題を含めて——の解決にこそ自己の中心的な課題を見出し、それに心血を注いだ人物であったということができようであろう。」大貫隆『ロゴスとソフィア ヨハネ福音書からグノーシス主と初期教父への道』（教文館、2001年）、158頁。

³³³ 至福千年に関しては、鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、237-243頁を参照。

³³⁴ 『異端反駁』第5巻8章1節を参照。

³³⁵ 鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』、245頁。鳥巢義文は次のように述べている。「すなわち、救済史の初期において人類が幼い場合には神の力強い介入が語られるが、受肉を経た救済史の後半になると、聖霊の恵みを受けた人類は、多少は成長した者として、自立して神に慣れ親しんで行くのである。」

一面を浮き彫りにしたい。次いで、エイレナイオスの神学を現代の牧会に応用することを試みていきたい。

1. エイレナイオス神学の司牧的側面

エイレナイオスの司牧を考察するにあたり、洗礼を基軸として、2つの期間に区分し考察を試みたい。第一の期間は、洗礼志願者³³⁶が洗礼を受けられるまでの期間であり、第二の期間は、洗礼を受けた後の信者の信仰の歩みの期間である³³⁷。

初めに、第一の期間である「洗礼志願者が洗礼を受けられるまで」を考察したい。そのために、まずエイレナイオスが人間をどのように考えていたかという点から始めたい。なぜなら、エイレナイオスの人間理解を知ることが、彼が実際に司牧を行うにあたり、どのように洗礼志願者、または信者を見ていたかを知ることには他ならないからである。まず忘れてはならないことは、人間は自立性を持つ存在として創造されたということである。『異端反駁』第4巻37章1節には、次のように記されていた。

なぜなら神は、人間が初めから自分の魂を持つと同じように、自立性を持つように、人間を自由なものに造った。それは神の意志を、彼〔神〕に強制されてではなく、自発的に行なわれたことを示すためである。と言うのも、〔物質的な〕力は、神に属するものではない。神の側に常にあるのは、善い意志なのである³³⁸。

このように人間には特質として自立性が与えられた。その理由として「それは神の意志

³³⁶ N.ブロックスは古代教会における洗礼志願者について、次のように述べている。「古代の教会は、拙速かつ頻繁には洗礼を施すことをせず、洗礼志願者に条件を課し、洗礼志願者は特に整えられた準備のための期間に、その条件を満たさねばならなかった。洗礼を真剣に望む者は、特別なクラスにグループ分けされ、洗礼志願者（カテキューメン「指導下にある人々」あるいは生徒）と呼ばれた。テクニカルタームとして、このギリシア語は、洗礼前のキリスト教の教育のために用いられた。したがって、まずキリスト教に興味をもつ人々は、教師によって、のちには聖職者によって、教会の教えと生活にわたって教示を受けた。われわれは西方では二世紀末までには、また東方ではもう少し後の時代に、洗礼志願者がいたことを知っている。洗礼志願者は、すでに義務を負うことを求められた。かれらは、教会の教え、倫理そして訓練に服し、どこかの教会に属し、共同体の生活とみ言葉の典礼の一部にさえも参与したと思われる。かれらは、この時までには、試験期間として観察下に置かれた。」N.ブロックス『古代教会史』関川泰寛訳、教文館、1999年、136頁。

³³⁷ エイレナイオスがこのような区分を明確に記しているのではないが、『異端反駁』を考察すると、エイレナイオスは、洗礼を受ける前の者と洗礼を受けた後の者では取り組まねばならない課題が違うことを示している。そのため、洗礼を受ける前の者を「洗礼志願者」とここでは定義し、洗礼志願者と洗礼を受けた信者がそれぞれどのような課題に取り組むかを聖霊の働きとの関連で示したい。そのことも、この章の目的の一つである。

³³⁸ AH4.37.1 : quia liberum eum Deus fecit, ab initio habentem suam potestatem sicut et suam animam, ad utendum sententia Dei voluntarie, et non coactum ab eo. Vis enim a Deo non fit, sed bona sententia adest illi semper.

を、彼〔神〕に強制されてではなく、自発的に行なわれたことを示すため」と記されている。この点を司牧との関係で考えるならば、まず次の点を問わねばならない。それは「自立性を与えられた人間は、神の意志を絶えず行っていくことができるか」ということである。この問いに対する答えは、すでに述べたことから容易に理解することができる。すなわち、人間はあたかも幼児のような状態として創造されたので、蛇に唆され罪を犯したのである³³⁹。ここから、人間は、自らに与えられた自立性だけでは神の意志を行うことはできないと結論付けることができる。

それでは、どのようにして人間は与えられた自立性を用いて、神の意志を行うことができるのであろうか。筆者はここに司牧の役割が必要になると考える。まず神が人間に求めたことが何であったかを確認しよう。『異端反駁』第4巻37章1節に目を向けたい。

そして、この故に〔神は〕よい判断をすべての人に与えた。人間のうちには選択の力を置いた。——天使たちも理性的であるので——天使たちのうちにも〔置いた〕ように。事実、聞き従う者たちが、正しく善を持つ者となるためであった。与えたのは神であるが、守るのは彼ら自身の方であり、聞き従わなかった者たちは、善とともにないことが分かり、そして当然の罰を受け取るようになるのである。なぜなら、神は好意をもって善を与えたが、彼らはそれを慎重に重んじることも、価値あるものと思ふこともせず、卓越した慈愛を無視したからである。それ故、善を投げ捨て、まるで吐き出す者たちには、すべての者が、当然、神の正しい裁きへと陥るのであろう³⁴⁰。

ここに記されているように、神は人間に自立性を用いて善を行うことを求めておられるのである。この箇所注目すべきは「事実、聞き従う者たちが、正しく善を持つ者となるためであった。与えたのは神であるが、守るのは彼ら自身の方であり、聞き従わなかった者たちは、善とともにないことが分かり、そして当然の罰を受け取るようになるのである」と記されている部分である。この部分で特に重要であるのは「聞き従う者たち」と「聞き従わなかった者たち」という表現である。当然ながら、ここでは「誰に」聞き従うのか、

³³⁹ 『異端反駁』第4巻38章1節、『照明』第12章を参照。

³⁴⁰ AH4.37.1 : Et propter hoc consilium quidem bonum dat omnibus; posuit autem in homine potestatem electionis, quemadmodum et in angelis – etenim angeli rationabiles –, uti hi quidem qui obaudissent juste bonum sint possidentes, datum quidem a Deo, sarvatum vero ab ipsis; qui autem non obaudierunt juste non invenientur cum bono et meritam poenam percipient, quoniam Deus quidem debet benigne bonum, ipsi vero non custodierunt diligenter illud neque pretiosum arbitrati sunt, sed supereminentiam bonitatis contempserant. Abjicientes igitur bonum et quasi respuentes, merito omnes <in> justum iudicium incident Dei.

また聞き従わないのかということが考えられねばならない。その答えとしては第一には「神に」となるであろう。けれども、この点を司牧に置き換えて考えるならば、「司牧者」こそ、信者に対して「何が善であるか」を教え、助言できる立場であるだろう。それでは司牧者は、どのような権限に基づき、信者を教えていくのであろうか。この点を、次いで考察していきたい。

1.1. 司牧者に与えられた使徒的権限

エイレナイオスは司牧者に与えられた権限について、「司教たちへの使徒からの継承」を取り上げる。この点を明らかにするために、『異端反駁』第3巻序と『異端反駁』第3巻3章2節を取り上げたい。まず『異端反駁』第3巻序には、次のように記されている。

実際、万物の主がその使徒たちに福音の権限を与えた。この人々によって、私たちは真理、すなわち神の子の教えを知ったのであり、またこの人々に主は言った。「あなたたちに聴く者は、私に聴き、あなたたちを拒む者は、私と私を遣わした方を拒むのである」と³⁴¹。

また『異端反駁』第3巻3章2節には、次のように記されている。

けれども、この巻の中ですべての教会の継承を数え上げることは、あまりにも長いので、最大で最古、また、すべての人々に知られ、栄誉ある二人の使徒ペテロとパウロによってローマに創立され、また設立された教会を、また使徒たちからの伝承と、人々に告げ知らせた信仰が司教たちの継承によって、私たちにまで至っていることを示すことにする³⁴²。

このように、御子はまず使徒たちに「福音の権限」を与えた。この「福音の権限」が与えられた故に、使徒たちに聴く者は、御子に聴くことと同様に扱われる。そして、「福音の権限」は使徒たちにだけ与えられて終わったものではない。『異端反駁』第3巻3章2節に

³⁴¹ AH3.prae : Etenim Dominus omnium dedit apostolis suis potestatem Euangelii, per quos et ueritatem, hoc est Dei Filii doctrinam, cognouimus; quibus et dixit Dominus : Qui uos audit me audit, et qui uos contemnit me contemnit et eum qui me mist.

³⁴² AH3.3.2 : Sed quoniam ualde longum est in hoc tali uolumine omnium Ecclesiarum enumerare successiones, maximae et antiquissimae et omnibus cognitae, a gloriosissimis duobus apostolis Petro et Paulo Romae fundatae et constitutatae Ecclesiae, eam quam habet ab apostolis traditionem et adnuntiatam hominibus fidem per successiones episcoporum peruenientem usque ad nos indicantes.

記されていたように、「福音の権限」は、「司教たちの継承」によって受け継がれていくものである。それ故に、司牧者（司教職の者）たちは、御子が使徒たちに与えた「福音の権限」、また教会の中で受け継がれ、保たれてきた「司教たちの継承」による権限が与えられた者たちである。さらに『異端反駁』第3巻3章3節には、次のように記されている。

このような順序と継承により、使徒たちからの教会の中の伝承と真理の使信とが、私たちにまで絶えず届いている。そして、このことは、一つの同じ生命を与える信仰が使徒たちから今に至るまで、教会の中で保持され、真理のうちに伝えられていることの完全な明示である³⁴³。

これらの箇所から明らかなように、司牧者たちは「使徒的権限」に基づき、信者たちが善を行うことができるように、教え導いていくのである。この点は、今日の牧会者も同様である。

1.2. 一つの聖霊によって記された聖書

それでは、司牧者は何を基準として「善」を教え、洗礼志願者、信者に聞き従うことを求めるのであろうか。エイレナイオスは、その基準こそ「聖書」と「使徒の伝承」であると訴える³⁴⁴。エイレナイオスは『異端反駁』第3巻の最初で、グノーシス主義の誤謬に対して反論する方法として「そして、この第三〔巻〕では聖書によって証明を述べたい³⁴⁵」と語り出している³⁴⁶。なぜなら、グノーシス主義者たちは「聖書」と「伝承」を認めない

³⁴³ AH3.3.3 : *Hac ordinatione et successione ea quae est ab apostolis in Ecclesia traditio et ueritatis praeconatio peruenit usque ad nos. Et est plenissima haec ostensio, unam et eandem uiuificatricem fidem esse quae in Ecclesia ab apostolis usque nunc sit conseruata et tradita in ueritate.*

³⁴⁴ エイレナイオスにおける聖書と伝承の関係性についてはいくつかの意見に分かれる。J.N.D.ケリーは、次のように述べている。「それでは、エイレナイオスは聖書を不文の伝統よりも下位に置いたのであろうか。一般的にこのような推論がなされてきたが、それはいくぶん誤った事実から発している。この推論が理にかなっているように見えるのは、次のような考察に基づいているからである。(a) グノーシスとは対照的に、聖書よりもむしろ伝統の方が、エイレナイオスの主張における最終的な判断の拠り所であったように見えること、そして (b) 一見すると、エイレナイオスが真の聖書解釈を確立するために伝統に依存していたことなどである。しかし彼の『異端反駁』を注意深く分析するならば、グノーシスが主張する『隠された伝統』によってエイレナイオスは教会の公の伝統を強調するようになった一方で、彼が行った真の正統信仰の擁護は聖書に基づいているのである」。J.N.D.ケリー『初期キリスト教教理史<上>使徒教父からニカイア公会議まで』（津田謙治訳、一麦出版社、2010年）、52-53頁。またカンペンハウゼンは、次のように述べている。「教会の伝承は今や、もはや聖書と並ぶ独立した要因ではなく、聖書の証言を裏書きする時にだけ、聖書と同等と認められた。」カンペンハウゼン『古代キリスト教思想家ギリシア教父』、36頁。

³⁴⁵ AH3.prae : *In hoc autem tertio ex Scripturis inferemus ostensiones.*

³⁴⁶ エイレナイオスは『異端反駁』第3巻25章7節で、グノーシス主義者たちを反駁する理由を次のように述べている。「私たちとしては、彼らが自分たちの掘った罫に留まることをせず、そのような母から離れ、ビュトスから出て、空虚さから退き、闇を棄て、神の教会へと向きを変え、嫡出のものとして生まれ、彼

からである³⁴⁷。エイレナイオスは『異端反駁』第3巻2章1節でグノーシス主義者たちの聖書と伝承に対する考えを次のように述べている。

彼らは、聖書を非難されると、聖書そのものに非難を向けさせる。聖書は正しくなく、権威に由来せず、様々に言われており、伝承を知らない人々がそれから真理を見出すことは不可能だと〔言うのである〕。〔真理は〕文字によってではなく、生ける声によって伝えられた〔とやっている〕³⁴⁸。

これに対し、エイレナイオスは『異端反駁』第3巻1章1節で、聖書と伝承の必要性を次のように述べる。

私たちは、私たちの救いの営みを、他の人々によってではなく、彼ら³⁴⁹を通して知った。福音は、彼らによって私たちに届いたのである。それから彼らは宣べ伝え、その後、私たちの信仰の基礎であり、柱³⁵⁰となるものとして、神の意志により、聖書で私たちに伝えたのである³⁵¹。

このようにエイレナイオスは、聖書を「私たちの信仰の基礎であり、柱となるもの」と位置付ける。エイレナイオスは、司牧の基準としての聖書に、どのような権威を認めてい

らのうちにキリストが形造られ、彼らが唯一の真の神であり、万物の主にして、この宇宙の製作者である方を知ることを祈る。私たちが、彼らについてこれらのことを祈るのは、彼ら愛するからであるが、彼らが自らを愛していると思っている〔愛よりも〕有益である。私たちからの愛は、真正のものであるため、彼らがそれを受けさえすれば、彼らに救いを〔与えるからである〕。これは苦い薬と似ていて、傷の不適合で余分な肉を滅ぼす、彼らの傲慢と思いがりを取り去るのである。それゆえ、私たちは全力を尽くして、彼らに手を差し伸べることに飽きることがないのである。」(AH3.25.7 : *Nos autem precamur non perseuerare eos in fouea quam ipsi foderunt, sed segregari ab eiusmodi Matre et exire a Bytho et absistere a uacuo et umbram derelinquere, et legitime eos generari conuersos ad Ecclesiam Dei et formari Christum in eis et cognoscere eos Fabricatorem et Factorem huius uniuersitatis, solum uerum Deum et Dominum omnium. Haec precamur de illis, utilius eas diligentes quam ipsi semetipsos putant diligere. Quae enim est a nobis dilectio, cum sit uera, salutaris est eis si quidem eam recipiant. Est enim austero medicamini similis, absumens impropriorem ac superfluum uulneris carnem : elationem enim illorum et inflationem euacuat. Quapropter temptantes omni uirtute manum porrigere eis non taedebit nos.*)

³⁴⁷ Eric Osborn, *Irenaeus of Lyons*, 172.

³⁴⁸ AH3.2.1 : *Cum enim ex Scripturis arguuntur, in accusationem conuertuntur ipsarum Scripturam, quasi non recte habeant neque sint ex auctoritate, et quia varie sint dictae, et quia non possit ex his inueniri ueritas ab his qui nesciant traditionem, Non enim per litteras traditam illam sed per uiuam uocem.*

³⁴⁹ 使徒たちのこと。

³⁵⁰ 『異端反駁』第3巻11章8節では、福音書について「人々をよみがえらせる柱」と記されている。

³⁵¹ AH3.1.1 : *Non enim per alios dispositionem salutis nostrae cognouimus quam per eos per quos Euangelium, peruenit ad nos : quod quidem tunc praeconauerunt, postea uero per Dei uoluntatem in Scripturis nobis tradiderunt, fundamentum et columnam fidei nostrae futurum.*

たのであろうか。エイレナイオスの聖書観を窺い知ることができる二つの箇所を見ていきたい。まず『異端反駁』第3巻21章4節には、次のように記されている。

というのは、1つの同じ神の霊が、主が来ることがどのようなもので、どのような質のものであるかを預言者たちによって触れ回り、また善く預言されたことを長老たちによって善く解釈した〔のであるが〕、その1つの同じ神の霊が、また養子とする時の充満が来たこと、天の国が近づいたこと、処女から生まれたインマヌエルを信じる者たちのうちに住み着くことを、使徒たちによって告げ知らせたからである³⁵²。

ここで「また善く預言されたことを長老たちによって善く解釈した」と記されている「長老たち」とは、旧約聖書をギリシア語に翻訳した70人の長老たちを指している³⁵³。エイレナイオスは『異端反駁』第3巻21章2節で、70人の長老が行った、いわゆる「70人訳聖書」の翻訳における有名な伝説を取り上げ³⁵⁴、聖書が「神の呼吸」（靈感）によって翻訳さ

³⁵² AH3.21.4 : *Vnus enim et idem Spiritus Dei, qui in prophetis quidem praeconauit quis et qualis esset aduentus Domini, in senioribus autem interpretatus est bene quae bene prophetata fuerant, ipse et in apostolis adnuntiavit plenitudinem temporum adoptionis uenisse et proximasse regnum caelorum et inhabitare intra homines credentes in eum qui ex Virgine natus est Emmanuel.* また『異端反駁』第4巻33章8節には、次のように記されている。

³⁵³ 大貫隆『ロゴスとソフィア』、164頁。

³⁵⁴ 『異端反駁』第3巻21章2節には、次のように記されている。「ローマ人がその支配を獲得する以前、まだマケドニア人がアジアを所有していた時、ラゴスの子プトレマイオスが、自分がアレクサンドリアに建てた図書館を、すべての人間の書物で、それが相応しいものを備えようとした。そして、聖書をギリシア語に翻訳したものとエルサレムの人々に頼んだ。彼らは当時はまだマケドニア人に従っていたので、自分たちのもとで、聖書と両方の言葉を最もよく理解している長老たち70人を〔プトレマイオスの〕望むことを行わせるためにプトレマイオスのために遣わした。けれども〔王〕は、彼らを試みてみたいと思ひ、また彼らが共謀して聖書の中にある真理を翻訳によって隠してしまわないか心配したため、彼らをお互いに分け、皆に同じ書を翻訳するように命じ、そしてすべての書についてこれを行った。ところが、彼らがプトレマイオスのもとで一つに集まり、各々が自分の翻訳を比較すると、神に栄光があり、聖書は真に神納なものであることが信じられた。皆が初めから終わりに至るまで、同じことを同じ句、言葉で朗読したからであって、結果、そこにいた異邦人たちも、聖書が神の呼吸によって翻訳されたことを知ったのである。神がこれを行ったことは驚くべきことではない。〔神は〕ネブカドネザルの時の民の捕囚の時に、聖書が失われ、70年の後でユダヤ人が自分の土地に下って行ったが、その後ペルシア王アルタクセルクセスの時代に、レビ部族の祭司エズラに靈感を〔与え〕、昔の預言者たちの言葉をすべて思い出させ、またモーセによって与えられた律法を民に取り戻させたのである。」(AH3.21.2 : *Prius enim quam Romani possiderent regnum suum, adhuc Macedonibus Asiam possidentibus, Ptolomaeus Lagi filius, cupiens eam bibliothecam quae a se fabricate esset in Alexandria ornare omnium hominum dignis conscriptionibus, petiit ab Hierosolymitis in graecum sermonem interpretatas habere Scripturas eorum. Illi uero, obaudiebant enim tunc adhuc Macedonibus, eos quos habebant perfectiores Scripturarum intellectores et utriusque loquellae LXX seniores miserunt Ptolomaeo facturos hoc quod ipse uoluisset. Ille autem experimentum eorum sumere uolens et metuens ne forte consentientes eam ueritatem quae esset in Scripturis absconderent per interpretationem, separans eos ab inuicem, iussit omnes eandem interpretari Scripturam ; et hoc in omnibus libris fecit. Conuenientibus autem ipsis in unum apud Ptolomaeum et comparantibus suas interpretationes, Deus glorificatus est et Scripturae uere diuinae creditae sunt, omnibus eadem et isdem uerbis et isdem nominibus recitantibus ab initio usque ad finem, uti et praesentes gentes cognoscerent quoniam per aspirationem Dei interpretatae*

れたことを主張している³⁵⁵。『異端反駁』第3巻21章4節を見ても、「1つの同じ神の霊」と繰り返し述べられており、旧約聖書の70人訳聖書が聖霊の働きによって成し遂げられたことが強調されている。この聖霊は『証明』第6章に記されていたように、旧約の時代にあつて、預言者や族長たちに働いたのと同じ聖霊であり³⁵⁶、また『異端反駁』第4巻33章15節で「常に同じ神の聖霊〔がおり〕」³⁵⁷と語られた聖霊である。この聖書への「一つ」の聖霊の働きは、旧約聖書の事柄に限定された話ではない。続けて、エイレナイオスが新約聖書、とりわけ福音書について記している³⁵⁸『異端反駁』第3巻11章8節に目を向けてみたい。

福音書は数において〔これより〕多くもなく、また少ない〔こと〕も決してない。なぜなら、私たちのいる世界の方向は四つであり、重要な風も四つであり、教会は全地上に広められており、福音と生命の霊が教会の柱であり、支えであるので、あらゆる方向から不死性を吹き込み、人々をよみがえらせる柱を四つ持つことは当然のことだからである³⁵⁹。すべてのものの創造者である御言葉、すなわち、ケルビムの上に座して、万物を保持している方が人々に明らかにされ、一つの霊に密接につながられた四つの形の福音書を私たちに与えたことは、これらのことから明らかで

sunt Scripturae. Et non esse mirabile Deum hoc in eis operatum, quando in ea captiuitate populi quae facta est a Nabuchodonosor corruptis Scripturis, et post LXX annos Iudaeis descendentibus in regionem suam, post deinde temporibus Artaxersis Persarum regis inspirauit Hesdrae, sacerdoti tribus Leui, praeteritorum prophetarum omnes rememorare sermones et restituere populo eam legem quae data est per Moysen.)

³⁵⁵ Gustaf Wingren, *Man and the Incarnation*.70を参照。また Montgomery Hitchcock, *Irenaeus of Lugdunum, A study of his teaching*, Cambridge: at the University Press, 1914, 192-194.

³⁵⁶ 『証明』第6章には、次のように記されている。「第三の箇条は聖霊である。預言者が預言し、族長たちが神について教えられ、義人たちは義の小径に導かれたが、それらのことはみなこの聖霊を仲介としてなされたのであった。また、この聖霊は、人を神に向けて新たにしようとして、「時の終わりにあたり」新しいやり方で全地上に広がる人類の上に注がれている。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、208頁。

³⁵⁷ 『異端反駁』第4巻33章15節には、次のように記されている。「常に同じ神を知っており、今、私たちに現れたのだとしても、常に同じ神の御言葉が〔いたこと〕を識っており、終わりの時に、新たに私たちに注がれたとしても、常に同じ神の聖霊〔がおり〕、世の創造から終わりに至るまで、同じ人類がいることを識っているからである。」(AH4.33.15: “semper eundem Deum sciens, et semper eundem Verbum Dei cognoscens etiamsi nunc nobis manifestatus est, et semper eundem Spiritum Dei cognoscens etiamsi in novissimis temporibus nove effusus est in nos, et a conditione mundi usque ad finem idipsum humanum genus.”)

³⁵⁸ 「イレネウスは、キリスト教会の最初の意識的な聖書神学者 (Schrifttheologe) であった。彼によって初めて四福音書正典が一連の使徒文書と共に、もっともそれは今日聖書に選定されているものすべてではないが、旧約聖書に並べられている。それらは旧約聖書と同様に、<聖書>として引用された。」カンペンハウゼン『古代キリスト教思想家ギリシア教父』、35頁。

³⁵⁹ この点を大貫隆は次のように説明している。「この立場をエイレナイオスはまず自然論的に創造の秩序から根拠づける。——すなわち、全世界は『四つの領域』と主要な『四つの方角』から成っているように、この全世界に蒔かれて宣教の任を負う教会も、その基盤に『四本の支柱』を持たねばならない。」大貫隆『ロゴスとソフィア ヨハネ福音書からグノーシス主と初期教父への道』、170頁。

ある³⁶⁰。

四つの福音書について語られているこの箇所でも、「一つの霊」によって福音書が結び付けられていることが記されている。このようにエイレナイオスは、旧約聖書の翻訳においても、また福音書が四つ人間に与えられたことのどちらも、聖霊の働きがあったことを『異端反駁』の読者に訴える。この聖霊は旧約の時代において、「預言者や族長に働いた聖霊」、「常に同じ聖霊」と証言された聖霊であるが、何よりも「神の両手」の片手としての聖霊であることを忘れてはならない。

2. 洗礼志願者への司牧

さて、司牧者は、「一つ」の聖霊によって記された聖書を用いて洗礼志願者を教育するのであるが³⁶¹、同時に、神の両手の片手としての聖霊が、教会にも与えられたというエイレナイオスの言及を思い起こす必要がある。『異端反駁』第3巻24章1節には、次のように記されている。

そして〔教会〕のなかには、キリストの交わりが、すなわち、不死性の保証、私たちの信仰の確証、神への上昇のはしごである聖霊が委託されている。神は使徒と預言者と教師たち、その他あらゆる働きを教会に置いたと言っている。教会に集わな
い者たちは、皆、〔聖霊に〕与るものではなく、悪い説と最悪の業によって自らを

³⁶⁰ AH3.11.8 : Neque autem plura numero quam haec sunt neque rursus pauciora capit esse Euangelia. Quoniam enim quattuor regiones mundi sunt in quo sumus et quattuor principales spiritus et disseminata est Ecclesia super omnem terram, columna autem et firmamentum Ecclesiae est Euangelium et Spiritus uitae, consequens est quattuor habere eam columnas undique flantes incorruptibilitatem et uiuificantes homines. Ex quibus manifestum est quoniam qui est omnium Artifex Verbum, qui sedit super Cherubim et continet omnia, declaratus hominibus, dedit nobis quadriforme Euangelium quod uno Spiritu continetur.

³⁶¹ 『異端反駁』第4巻37章7節には、次のように記されている。「それ故、神は私たちのために、これら全てを耐え忍んだ。それは私たちがすべてのことを通して教えられ、すべてのことに注意するようになり、理性的に神を愛することを徹底的に教わり、すべてにおいて神の愛のうちに留まるためであった。事実、神は人間の背信への寛大さを保ち、人間はそれ〔背信〕を通して、教育されるのであり、それは預言者も「お前の背教が、お前を教育した」と言っている通りである。神は人間の完成のため、また〔神の〕配剤の効果的現れのために全てのことを予め定めたのであり、それは善が明らかにされ、そして義が全うされ、そして教会が神の御子のかたちの姿へと結合され、人間がいつかついに神を見て、そして把握するまでに成熟するほどのものとなるためであった。」(AH4.37.7 : Pro nobis igitur omnia haec sustinuit Deus, uti per omnia eruditi in omnibus in futurum simus cauti et perseveremus in omni ejus dilectione rationabiliter edocti diligere Deum, Deo quidem magnanimitatem praestante in apostasia hominis, homine autem erudito per eam, quemadmodum et propheta ait : Emendabit te abscessio tua, praeferente Deo omnia ad hominis perfectionem et ad efficaciam et manifestationem dispositionum, uti et bonitas ostendatur et justitia perficiatur et Ecclesia ad figuram imaginis Filii ejus coaptetur, et tandem aliquando maturus fiat homo, in tantis maturescens ad videndum et capiendum Deum.)

欺き、生命から〔遠ざけている〕のである。教会のあるところに、神の聖霊もあり、神の聖霊のあるところには、教会とすべての恵みがある。そして聖霊は真理である³⁶²。

第一の期間である「洗礼志願者が洗礼を授けられるまで」における時期において、まだ洗礼を受けていない志願者には、司牧者は聖霊によって記された聖書を朗読し、「何が善であるか」を教え³⁶³、信者たちは聖霊が働く場としての教会でそれを聞く。すなわち、聖霊は教会で働くのであるから³⁶⁴、教会を離れた司牧も、信者の成長もありえない。つまり、まだ洗礼を授与されていない志願者は、司牧者の司牧の下で聖書を通して、また教会において、聖霊の働きを受けるということである。それは『異端反駁』第4巻38章2節に記されている洗礼を受ける以前の人間が抱える問題を克服させることでもある。

そして、この故にパウロはコリント人に「私はあなたたちに乳を飲ませて、食物は与えなかった。まだ食物を得ることができなかったからである。」と言っている。即ち、「あなたたちは、主が人間となって来たことを学んだが、あなたたちの弱さのために、父の聖霊はまだ、あなたたちの上に休息してはいない。なぜなら、あなたたちのうちに、妬み、不和、そして不一致があるなら、あなたたちは肉的であって、人間に従って歩んでいる」と言っている。すなわち、彼らの不完全さと振る舞いの弱さのために、父の聖霊は、まだ彼らと共にいなかった。それ故、使徒は食物を与えることができた。使徒たちが手を置いた人々は誰でも、聖霊、すなわち、生命の食物を受けたのであるが、彼らの方で、神に向かう振る舞いを持つには、感覚がまだ弱く、訓練されていないために、それを受けることができなかったのである³⁶⁵。

³⁶² AH3.24.1 : et in eo deposita est communicatio Christi, id est Spiritus sanctus, arrha incorruptelae et confirmatio fidei nostrae et scala ascensionis ad Deum. In Ecclesia enim, inquit, posuit Deus apostolos, prophetas, doctores, et uniuersam reliquam operationem Spiritus, cuius non sunt participes omnes qui non coucurrunt ad Ecclesiam, sed semetipsos fraudant a uita per sententiam malam et operationem pessimam. Vbi enim Ecclesia, ibi et Spiritus Dei ; et ubi Spiritus Dei, illic Ecclesia et omnis gratia : Spiritus autem Veritas.

³⁶³ 『証明』第2章には、罪について次のように記されている。「『罪人たち』とは、神についての知識を持ちながら、その戒めを守らない人々のこと、すなわち神を軽蔑する輩のことである」。また続く3章には「それゆえ、そのようなことがわれわれの身に起こらないよう、われわれは厳格に、また道から逸れることなく、信仰の規範を守り、そして、神は主であるから、その神を信じ、恐れ、また神は父であるから、その神を愛し、このようにして神の戒めを実行しなければならない。」と記されている。エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、205頁。

³⁶⁴ 聖ヒッポリュトスの使徒伝承中の「聖なる洗礼の授与」の項目の中で、洗礼を授ける者が「聖なる教会の中で、聖霊を信じますか。」と尋ねている。『聖ヒッポリュトスの使徒伝承 B・ボットの批判版による初訳』（土屋吉正訳、オリエンズ宗教研究所、1983年）、51頁。

³⁶⁵ AH4.38.2 : Et propter hoc Paulus Corinthiis ait : Lac vobis potum dedi non escam, nondum enim poteratis escam percipere, hoc est eum quidem adventum Domini qui est secundum hominem didicistis, nondum autem Patris Spiritus requiescit super vos propter vestram infirmitatem. Ubi enim

この箇所には「あなたたちのうちに、妬み、不和、そして不一致があるなら、あなたたちは肉の肉であって、人間に従って歩んでいる」と記されており³⁶⁶、また「彼らの方で、神に向かう振る舞いを持つには、感覚がまだ弱く、訓練されていないために、それを受けることができなかつた」とも記されている。ここで言及されている「それ」とは、まさしく聖霊のことである。エイレナイオスによれば、人間が聖霊を受けるのは、洗礼時であるから³⁶⁷、「妬み、不和、不一致」があることが認められている者たちは、司牧者からの洗礼を受けることができなかつたということになろう。ここから分かることは、「肉の」と言われる人間は、その不完全さのゆえに聖霊を受けることができなかつたのであり、言い換えれば、聖霊を受けていないからこそ不完全であるということができよう³⁶⁸。そのため、司牧者は人間が聖霊を受けることができない条件としての「妬み、不和、不一致」がなくなるように志願者を司牧することが求められる。一方、洗礼志願者も、ただ司牧を受けるのではなく、自らに与えられた自立性を用いて、積極的に司牧に預かることが求められている。『異端反駁』第4巻38章3節には、次のように記されている。

御父が良いと見て命じ、御子が奉仕をして実際に形造り、聖霊が実際に育て豊かにする。人間は前進し、完全性に達する。すなわち、生まれざる方に近い者となる。というのも、生まれざる方が完全であり、それは神である。そして、人間はまず生じ、生じてから成長し、成長してから強くなり、強くなってから増加し、増加してから力を増し、力を増してから栄光を受け、栄光を受けてから自分の主を見ること

zelus et discordia, ait, in vobis et dissensiones, nonne carnales estis et secundum hominem ambulatis? hoc est quoniam nondum Spiritus Patris erat cum ipsis propter imperfectionem eorum et infirmitatem conversationis. Quemadmodum igitur Apostolus quidem poterat dare escam-, quibuscumque enim imponebant Apostoli manus accipiebant Spiritum sanctum, qui est esca vitae-, illi autem non poterant accipere illud quoniam infirmum adhuc et inexercitabilem sensum erga Deum conversationis habebant.

³⁶⁶ 『異端反駁』第4巻33章7節には、次のように記されている。「彼はまた分裂を起こす人々を裁くであろう。彼らは、彼の愛を持ってはおらず、空虚で、教会の一致よりも利益を考え、小さなことやいかなる理由のゆえに、偉大な、また栄光あるキリストの体を切断し、分離させ、できる限り殺してしまう〔からである〕。平和を語りながら、戦いのために働いており、まさに「ぶよは濾すけれども、らくだは飲み込んでしまう」のである。というのも、分裂の破滅がそれほど大きいので、彼らに対しては、矯正がありえないからである。(AH4.33.7: *Judicabit autem et eos qui schismata operantur, qui sunt inanes non habentes Dei dilectionem suamque utilitatem potius considerantes quam unitatem Ecclesiae, et propter modicas et quaslibet causas magnum et gloriosum corpus Christi conscindunt et dividunt et quantum in ipsis est intenciant, pacem loquentes et bellum operantes, vere liquantes culicem et camelum transglutientes: nulla enim ab eis tanta potest fieri correctione quanta est schismaticae perniciosa.*)

³⁶⁷ 『異端反駁』第3巻17章2節、『証明』第3章、第7章を参照。

³⁶⁸ エイレナイオスは人間を構成するものとして「肉」と「魂」に加えて「聖霊」を加えている。

になっていた³⁶⁹。

以上のように、洗礼志願者は、聖書と教会に働く聖霊の働きを受けることになる。誇張した表現であるかもしれないが、「妬み、不和、不一致」があるために、まだ洗礼を受けることが許されていない志願者は、聖書と教会に働く聖霊からの二重の聖霊の働きによって司牧を受けるということもできよう。この時期の司牧の中心的課題は、「妬み、不和、不一致」から「善を行うこと」へ洗礼志願者を転換させることとすることができるであろう。

この司牧によって、洗礼志願者は、洗礼へと導かれるのである。

3. 信者への司牧

第二の期間は、洗礼を受けた後の信者の信仰の歩みの期間である。エイレナイオスによれば、人間が聖霊を受けるのは洗礼の時である。その聖霊は人間に内在し、人間の内側から「善」を行うための助言を与える。けれども、このことは洗礼によって聖霊を受けたとは言え、それによって人間が完全に善を行えるわけではないことを意味している。人間は『異端反駁』第3巻24章1節において「不死性の保証」³⁷⁰と呼ばれていた聖霊の一部が与えられたに過ぎず、洗礼後の人間もまだ神への成長過程にある³⁷¹。ここに洗礼後の信者へ

³⁶⁹ AH4.38.3 : *Patre quidem bene sentiente et jubente, Filio vero ministrante et formante, Spiritu vero nutriente et augente, homine vero paulatim proficiente et perveniente ad perfectum, hoc est proximum infecto fieri : perfectus enim est infectus, hic autem est Deus. Oportuerat autem hominem primo fieri, et factum augeri, et auctum corroborari, et corroboratum multiplicari, et multiplicatum convalescere, convalescentem vero glorificari, et glorificatum videre suum Dominum: Deus enim est qui habet videri, visio autem Dei efficax est incorruptelae, incorruptela vero proximum facit esse Deo.*

³⁷⁰ 『異端反駁』第5巻8章1節には、次のように記されている。「今、私たちは完成と不滅性のために神の聖霊の部分を受け取っている。私たちは次第に神を捉え、担うことに慣れ親しんでいくのである。そして使徒は、これを保証と言っている。すなわち、神が私たちに約束された自身の榮譽の部分である。彼はエフェソへの手紙で言っている。「彼において、また、あなたがたも、真理の言葉、あなたの救いの福音、また信じて約束された聖霊で証印をされたのであり、これは私たちが相続する保証である。従って、もしこの保証が、私たちのうちに宿っているのであれば、既に、霊的なものであり、また死すべきものは、不死性によって吞み込まれているのである。——なぜなら、もしあなたたちのうちに神の霊が宿っているのであれば、あなたたちは肉に在るのではなく、霊のうちに在るのである。——と言っている。」(AH5.8.1 : *Nunc autem partem aliquando a Spiritu ejus sumimus ad perfectionem et praeparationem incorruptelae, paulatim assuescentes capere et portare Deum : quod et pignus dixit Apostolus, hoc est pars ejus honoris qui a Deo nobis promissus est, in epistola quae ad Ephesios est dicens : In quo et vos, audito verbo veritatis, Evangelio saltis uestrae, in quo credentes signati estis Spiritus promissionis sancto, qui est pignus hereditatis nostrae. Si ergo pignus hoc habitans in nobis jam spiritalis efficit et absorbetur mortale ab immortalitate—Vos enim, ait, non estis in carne sed in Spiritu, siguidem Spiritus Dei, habitat in vobis—*)

³⁷¹ 『異端反駁』第5巻8章1節には、次のように記されている。「従って、もし今、保証を持っている私たちが、「アバ、父よ」と呼ぶのであれば、私たちがよみがえり、顔と顔を合わせて父を見るであろう時には、[また]すべての者たちが絶え間なく勝利の賛美を捧げ、死から彼らを起こし、永遠の生命を与えるであろう者はどれ程、神を讃えるであろうか?もし、人を自らのうちに包んでいる保証が、すでに「アバ、父よ」と言わせているとすれば、神から人々に与えられるであろう霊の完全な恵みは何をなすであろうか?

の司牧の必要性がある。すなわち、洗礼後の信者は内在した聖霊による助言と司牧者による聖書からの励ましの両方を受けることになる。これは、洗礼の以前に、洗礼志願者が「聖書と教会に働く聖霊」の両方から司牧を受けていたことと何ら変わらないことである。このように「神の両手」である御子すなわち御言葉と知恵である聖霊の両者は、洗礼以前でも、また洗礼以後においても、共に司牧に関わっているのである。これは人間の創造が「神の両手」の働きによって始められたからであり、教会の時代にあっては、聖霊は「神への上昇のはしご」と呼ばれ³⁷²、人間が「神のようになる」こと³⁷³、すなわち、神化としての人間の成長のために教会の中で働くのである。聖霊が教会の中で働くということは、司牧の中で働くと言い換えることもできるであろう。

それでは聖霊が人間に内在し助言を与えることと、司牧者が聖書を用いて励ましを与えるのは、具体的にどのような状況を避けるためであろうか。これを知る助けとして『異端反駁』第4巻37章4節と『異端反駁』第5巻9章3節、そして『証明』第42章に注目したい。『異端反駁』第4巻37章4節には、次のように記されている。

けれども、人間は初めから自由な判断をする者であった。それは〔人間が〕似せて造られた神が、自由な判断をするからである。善を保持することを、常に彼に助言し、(この善は)神に対する従順によって全うされるものである³⁷⁴。

次いで、『異端反駁』第5巻9章3節に目を向けたい。

従って、神の霊なしには、肉は死んだものであり、生命を持っておらず、神の御国を受け継ぐことはできない。地にまかれる水のように、血は非理性的なものである。

「彼は土的な者であり、彼らも土的な者たちである。」けれども、父の聖霊のあるところ、そこに生きている人間がおり、理性によって生かされる血は、復讐のために神によって守られる。聖霊の所有となった肉は、聖霊の性質を得て、神の御言葉

〔それは〕私たちが神に似たものとし、父の意志を完成するであろう。なぜなら、人間を神のかたちと類似性に従って造るであろうから。(AH5.8.1 : si igitur nunc pignus habentes clamamus : Abba, Pater, quid fiet quando resurgentes facie ad faciem videbimus eum, quando omnia membra affluenter exultationis hymnum protulerint, glorificantia eum qui suscitaverit ea ex mortuis et aeternam vitam donaverit? Si enim pignus complectens hominem in semetipsum jam facit dicere : Abba, Pater, quid faciet universa Spiritus gratia quae hominibus dabitur a Deo? similes nos ei efficiet et perficiet voluntatem Patris : efficiet enim hominem secundum imaginem et similitudinem Dei.)

³⁷² 『異端反駁』第3巻24章1節を参照。

³⁷³ 『異端反駁』第4巻38章4節を参照。

³⁷⁴ AH4.37.4 : Sed quoniam liberae sententiae ab initio est homo, et liberae sententiae est Deus cujus ad similitudinem factus est, semper consilium datur ei continere bonum, quod perficitur ex ea quae est ad Deum obaudientia.

に型取られたことで、自らのものを忘れてしまう。そして、この故に言う。「私たちは、土からのその者のかたちとなっているように、天にある方のかたちにもなる。」
それでは、土的なものとは何か？形成物である。それでは、天的なものとは何か？
聖霊である。従って、言うのである。「天的な聖霊なしに、かつて私たちは肉の古さのうちに生き、神に不従順であったが、今や、聖霊を受けて、神に従順なものとして生命の新鮮さに歩んでいる。³⁷⁵」従って、神の聖霊なしに、私たちは救われないのであるから、使徒は、信仰と敬虔な振る舞いによって、神の聖霊を保持するように、私たちを励ますのである。それは聖霊の参与を欠く者となり、天に御国を喪失することのないためである。そしてまた、大声で叫ぶのである。「肉と血だけでは、神の御国を受け継ぐことはできない」と³⁷⁶。

また『証明』第 42 巻には、次のように記されている。

信じる人々が〔身体と魂を〕 そのよう〔な状態〕 に保つことができるのは、自分の内に聖霊が持続的にとどまっているときである。〔その聖霊〕 は洗礼に際して〔父なる神〕 から与えられ、真理と聖性と義と忍耐を実践することによって〔神〕 を受け入れてきた人により保持される³⁷⁷。

『異端反駁』第 4 巻 37 章 4 節では、神が人間に善を保持することを助言することが示されており、また『異端反駁』第 5 巻 9 章 3 節においては、使徒が「信仰と敬虔な振る舞いによって」聖霊を保持するように励ますことが示されている。そして『証明』第 42 章では、洗礼の際に受けた聖霊は、「真理と聖性と義と忍耐を実践すること」によって、神を受け入れてきた人、すなわち、信者に保持されることが示されている。すなわち、これらを合わせて考えると、聖霊を受けた人間は「真理と聖性と義と忍耐を実践すること」によって、

³⁷⁵ Rousseau はローマ 6 章 4 節からの引用であるとしている。また Eric Osborn, *Irenaeus of Lyons*, 227 を参照。

³⁷⁶ AH5.9.3 : Igitur caro sine Spiritus Dei mortua est, non habens vitam, regnum Dei possidere non potens ; sanguis irrationalis, velut aqua effusa in terram. Et propter hoc ait : Qualis terrenus, tales et terreni. Ubi autem Spiritus Patris, ibi homo vivens, sanguis rationalis in ultionem a Deo custoditus, caro a Spiritu possessa, oblita quidem sui, qualitatem autem Spiritus assumens, conformis facta Verbo Dei. Et propterea ait : Sicut portavimus imaginem ejus quide terra est, portemus et imaginem ejus quide caelo est. Quid ergo est terrenum ? Plasma. Quid autem caeleste ? Spiritus. Sicut igitur, ait, sine Spiritu caelesti conversati sumus aliquando in vetustate carnis, non obaudientes Deo, sic nunc accipientes Spiritum in novitate vitae ambulemus, obaudientes Deo. Quoniam igitur sine Spiritu Dei salvari non possumus, adhortatur Apostolus nos per fidem et castam conversationem consecrare Spiritum Dei, ut non sine participatione sancti Spiritus facti amittamus regnum caelorum, et clamavit non posse carnem solam et sanguinem regnum Dei possidere.

³⁷⁷ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、231 頁。

聖霊を保持する。その際に、使徒からは「信仰と敬虔な振る舞いによって」聖霊を保持するように励ましを受ける。これは、司牧者からの聖書による励ましと適応させることができるであろう。言い換えれば、人間が「真理と聖性と義と忍耐を実践すること」を行うときに、司牧者がその実践をすることができるように支える。そして神もまた、実践をする人間に「善」を保持するように助言する。これは、聖霊による内側からの助言と言い換えることができるであろう。このように、内側からの聖霊の助言、外側からの司牧者の励ましを受け、信者は「真理と聖性と義と忍耐を実践すること」、すなわち「善」を行い、聖霊を保持することが可能となる。

そして、「善」を行うことによって聖霊を保持することに「洗礼」もまた関係している。『証明』第2章には、次のように記されている。

「彼は、罪人たちの道に立たなかった」〔詩1:1〕。「罪人たち」とは、神についての知識をもちながら、その戒めを守らない人々のこと、すなわち神を軽蔑する輩のことである³⁷⁸。

エイレナイオスは「罪人」の定義を、「神についての知識をもちながら、その戒めを守らない人々のこと」と語る。それでは、人間はどのようにして神の戒めを守ることができるであろうか。その答えを、エイレナイオスは『証明』第3章で、次のように述べている。

それゆえ、そのようなことがわれわれの身に起こらないよう、われわれは厳密に、また道から逸れることなく、信仰の規範を守り、そして、神は主であるから、その神を信じ、恐れ、また神は父であるから、その神を愛し、このようにして神の戒めを実行しなければならない。さて、〔神の戒めの〕実行は信仰によって〔初めて〕可能となる。なぜなら、イザヤが言っているように「あなたがたは信じなければわからない」〔イザ7:9〕からである³⁷⁹。

ここでエイレナイオスは、「〔神の戒めの〕実行は信仰によって〔初めて〕可能となる。」と記されている。そして『証明』第3章で、次のように続ける。

信仰がわれわれに勧告してくれることは、何よりもまず、われわれが受けた洗礼を思い起こすことである。その洗礼を、われわれは父なる神の名によって、また肉〔な

³⁷⁸ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、205頁。

³⁷⁹ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、205頁。

る人] となり、死に、そして復活した、神の子イエス・キリストの名によって、そして神の聖霊において、罪の赦しのために受けたのであった。また信仰は次のことも思い起こすように勧告する。この洗礼が永遠の生命の封印であり、神の内への生まれ変わりであるということ、すなわちこれによってわれわれはもはや死すべき人間の子供ではなく、時間を超越し、永遠の方である神の子供になるのだということ³⁸⁰。

つまり、神の戒めを守るように実行するのは、信仰によることであり、その信仰は信者に「洗礼」を思い起こさせる。そして信者は、洗礼を「罪の赦しのために受けた」こと、また「永遠の方である神の子供になるのだということ」を思い起こすのである。信者は洗礼時に聖霊を受けて、その聖霊を保持するように「善」を行うことを求められる。「善」を行うことは、すなわち、神に従うことであり、また神の戒めを実行することに他ならない。『異端反駁』第4巻39章1節には、次のように記されている。

人間は善と悪の知識を受け取った。神に従うことは善であり、そして、神に信頼し、また、神の命令を守ること、これが人間の生命である。神に従わないことが悪であるように、これが死である³⁸¹。

このように信者は、洗礼時に聖霊を受け、その聖霊を保持するべく「善」を行う。そして、実際に「善」を行い、神の戒めに従っていく。その過程において、信者は自分が受けた洗礼を思い起こし、神に従っていく思いを新たにす。ここに、「洗礼」と「善の実行」の相互作用が起こるのである。

さらに信者が聖霊を保持するために善を行うことについて、エイレナイオスの司牧的姿勢を窺い知ることができる『異端反駁』第4巻20章4節に目を向けたい。

すなわち、神に背いたすべての霊から、私たちを自由にし、私たちが毎日、「聖性と義のうちに〔神に〕仕える」ようにし、こうして人間が神の霊に包含され、父の栄光に進むようになるであろうことは、神の御言葉が、初めから予め告げていたことである³⁸²。

³⁸⁰ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、206頁。

³⁸¹ AH4.39.1 : Agnitionem autem accepit homo boni et mali. Bonum est autem obaudire Deo et credere ei et custodire ejus praeceptum, et hoc est vita hominis, quemadmodum non obaudire Deo malum, et hoc est mors ejus.

³⁸² AH4.20.4 : hoc est ab universo transgressionis spiritu, et faciens nos servire sibi in sanctitate et justitia omnes dies nostros, uti complexus homo Spiritum Dei in gloriam cedat Patris.

エイレナイオスは、ルカの福音書 1 章 74 節と 75 節を引用して「私たちが毎日、『聖性と義のうちに〔神に〕仕える』ようにし」と述べている。この部分のギリシア語をルソーは次のように改訂している。Καὶ διδοὺς λατρεύειν αὐτῷ ἐν ὁσιότητι καὶ δικαιοσύνῃ πάσαις ταῖς ἡμέραις ἡμῶν.³⁸³ これをギリシア語聖書と比べてみる。そこには ἀφόβως ἐκ χειρὸς ἐχθρῶν ῥυσθέντας λατρεύειν αὐτῷ ἐν ὁσιότητι καὶ δικαιοσύνῃ ἐνώπιον αὐτοῦ πάσαις ταῖς ἡμέραις ἡμῶν. と記されている。ここから明らかになることは、エイレナイオスは厳密にルカの福音書から引用したのではなく、むしろ、ルカの福音書 1 章 74 節と 75 節を念頭に置きつつ、自らの言葉として「毎日、聖性と義のうちに神に仕える」ことを勧めているように思われる³⁸⁴。とするならば、エイレナイオスは、自ら司牧する教会においても、この言葉を信者に語っていた可能性が高いのではないだろうか。エイレナイオスは司牧者として信者に「毎日」、聖霊を保持するために「聖性と義」を持って生活することを勧めていたと受け取ることができる。最後にもう一度、『異端反駁』第 3 卷 24 章 1 節の記述を確認したい。そこには次のように記されている。

そして〔教会〕のなかには、キリストの交わりが、すなわち、不死性の保証、私たちの信仰の確証、神への上昇のはしごである聖霊が委託されている³⁸⁵。

この箇所にある教会に聖霊が与えられたこと、すなわち「キリストの交わり」が教会に与えられたことに関して、イヴ・コンガールは次のように述べている。

洗礼の賜物は充満の〔賜物〕である。信仰と聖霊の塗油によって、終末的救いのためにキリストの秘儀にあずからせるものだからである。これは、聖エイレナイオスが、著名な文脈の中で、「コンムニカティオ・クリスティ」〈キリストへの参与〉と述べていることである。この充満は、御父のみ心に従う——これも聖エイレナイオスの表現である——のはもとより、われわれの自覚の発展と人間社会ならびに世界の歴史へのわれわれの参入に則して、開示され、現実化されねばならない³⁸⁶。

³⁸³ Rousseau, A., Hemmerdinger, B., Doutreleau, L. and Mercier, C., *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre I*, SC 100 (Paris: Cerf, 1965), 637.

³⁸⁴ 小林稔も「著者にはルカー・七四～七五が自分のことばになっていたのであろう。」と脚注で述べている。小林稔訳『異端反駁』第 4 卷、217 頁。

³⁸⁵ AH3.24.1 : et in eo deposita est communicatio Christi, id est Spiritus sanctus, arrha incorruptelae et confirmatio fidei nostrae et scala ascensionis ad Deum.

³⁸⁶ イヴ・コンガール『わたしは聖霊を信じる第三卷』(小高毅訳、サンパウロ、1996 年)、288 頁。

聖霊を与えられた信者は、「コンムニカティオ・クリスティ」〈キリストへの参与〉にあずかっている。イヴ・コンガールがここで述べているように、信者は「御父のみ心に従う」ということから始まり、「われわれの自覚の発展と人間社会ならびに世界の歴史へのわれわれの参入に則して、開示され、現実化」するためにも、自分に与えられた聖霊を保持し、善を求め、行う必要があるのである。

4. 現代の牧会における問題解決のためのエイレナイオス神学の応用

これまで、エイレナイオスにおける司牧観を概観した。エイレナイオスの司牧観に触れた今、現代の教会における牧会上の問題点に対して、「エイレナイオスであれば、どのように問題と取り組んだか」を知るために、エイレナイオス神学を2つの問題と対峙させ、検討を試みたい。(1) 信仰の受容の問題について。すなわち、罪意識³⁸⁷や自分の信仰は弱く神に受け入れられないと思ひ悩む者に対して。(2) 実際に罪を犯した者をどのように牧会するか2点である。

4.1. 思い悩む者に対して

それでは、(1) 信仰における受容の問題に対しての考察を始めていきたい。牧会という視点から考えるのであれば、この問題は、まず信仰の成長との関係で語る事が有益であろう。なぜなら、しばしば牧会において、自分の信仰のあり方を受け止められない者に対して、「そのままのあなたで良い」と語られることがあるからである。言い換えれば、これは信仰に成長は必要がないという立場である。もし信仰に成長が必要ないとすれば、「そのままのあなたで良い」という立場が、信仰の受容につながるかもしれない。けれども、それは正しい「助言」であろうか。このような問題提起から、信仰の受容を考えるのに当たり、「信仰には成長が必要であるか、否か」という課題を関連づけ、エイレナイオスがどのように信仰の自容について語るかを考察していきたい。

それでは、まずエイレナイオスが信仰の成長について、どのような理解を持っていたかを確認しよう。『異端反駁』第3巻20章2節には、次のように記されている。

人間がすべてを通り抜け、死の知識を得て、それから死者の復活に達し、どこから自由にされたかを経験で学び、主から受けた不滅性という賜物を常に感謝するよう

³⁸⁷ 工藤信夫は「罪意識に悩む求道者——罪意識の構造——」と題して、罪意識と受容の問題を取り扱っている。工藤信夫『牧会者と心の援助 牧会事例研究』（いのちのことば社、1993年）、72-93頁を参照。

になるのは、神の度量の大きさである。多く赦されたものは、多く愛するため、〔神を〕愛するため、自分自身は死すべき、また弱い者であることを知り、神が死すべき者に不死性を、また、一時的な者に永遠を与えるほど力ある方であると理解し、〔神が〕ご自身で示した力をすべて知り、教えられ、神について、神が如何に偉大なお方か気がつくようになった³⁸⁸。

この箇所を見ると、エイレナイオスが信仰の成長の必要性を説いていたことを理解することができる。そのため、まず「信仰には成長が必要であるか、否か」という問題の結論だけを述べるならば、エイレナイオス神学においては、「そのままのあなたで良い」という信仰は認められず、信者は信仰の成長を目指すべきであるということになる³⁸⁹。そして、この成長を求めて歩みを続けていくという点にこそ、信仰の受容における解決の糸口となっていくのである。

それでは、「そのままのあなたで良い」という立場を否定し、信者の成長の必要性を認め、それを牧会の視点で考える際、ここで問わねばならないことが残されている。それは、「それでは信者は信仰の成長の過程で、どのように自らの信仰の受容を行うことができるか」という点である。特に、罪意識を拭い去ることができず、自分の信仰は弱いと感じている者が、信仰の受容を行っていく際、何が受容をする上で助けとなるのか。この「自分の信仰に悩む者に対して、どのように受容へと導くか」という点にこそ、エイレナイオス神学を現代の牧会に適應させる大きな意味がある。

4.1.1. 神の寛大さにおける弱さの受容

先ほどの『異端反駁』第3巻20章2節の引用文の中に「自分自身は死すべき、また弱い者であることを知り」という文章があることに注目したい。エイレナイオスは、信仰の成長に関して、「自らがどのような者であるか」という視点を欠いてはいない。むしろ、「自

³⁸⁸ AH3.20.2 : Haec ergo fuit magnanimitas Dei, ut per omnia pertransiens homo et mortis agnitionem percipiens, dehinc ueniens ad resurrectionem quae est a mortis et experimento discens unde liberatus est, semper gratus exsistat Domino, munus incorruptelae consecutus ab eo, ut plus diligeret eum, cui enim plus dimittitur plus diligit, cognoscat autem semetipsum quoniam mortalis et infirmus est, intellegat autem et Deum quoniam in tantum immortalis et potens est uti et mortali immortalitatem et temporali aeternitatem donet, intellegat autem et reliquas virtutes Dei omnes in semetipsum ostensas, per quas edoctus sentiat de Deo quantus est Deus.

³⁸⁹ さらにエイレナイオス神学では、信者を成長させるために神が人間を「教育」することまでもが示されている。エイレナイオスの人間論において、教育の概念は重要なテーマとされている。J. Daniélou, *A History of early Christian doctrine before the Council of Nicaea, vol.2: Gospel message and Hellenistic culture*, London/Philadelphia 1973, 408. また大貫隆は「救済史は全体として人類に対する神の教育の過程と成る。」と記している。『ロゴスとソフィア』、234頁。

らは弱い者である」との視点こそ、エイレナイオスにおける信仰の成長理解において重要なことであるように思われる³⁹⁰。そして、この理解は信仰の受容の基盤となるものである。「自らは弱い者である」ということが実際の出来事として最も表されているのが、墮罪をした人間の姿ではないだろうか。『異端反駁』第3巻23章5節には、次のように記されている。

他者から不死性の機会のもとに誘惑され、直ちに恐れに襲われて、そして隠れた。それは神から逃れることができるかのように思ったのではなく、〔神の〕命令を犯したために、神の面前に話すために行くことができない者となったことを恥ずかしく思ったのである³⁹¹。

ここに描き出されているのは、「誘惑され」、「恐れ」、「隠れ」、「恥ずかしく思った」人間の姿である。このようにエイレナイオスは、人間の弱さが表される記述を『異端反駁』の中に記している。エイレナイオスの抱く人間の弱さが、他にどのようなものがあるか、いくつかの箇所を見ていきたい。まず『異端反駁』第4巻39章1節に目を向けてみよう。

それ故、神が寛大さを示してくださったので、人間は従順の善と、不従順の悪を知り、そのため、心の目が、両方からの試みを受けるとき、判断を下して、よりよい方を選び、決して神の命令に対して、無気力や無視するものとならず、また、自分の生命を取り去ることが、すなわち、神に従わないことが悪であることを試みによって学び、いつか、それに触れることをせず、自分の生命を保護すること、〔すなわち〕神に従うことが善であると知り、十分な細心の注意をもって守るためであった。この故に、両方の知識を持つ二重の知覚を〔人間は〕持っている。〔それは〕よりよ

³⁹⁰ 『異端反駁』第4巻11章2節には、次のように記されている。「そして神は人間と異なっている。というのは、神は造り、人間は生じるのである。また造る方は常に同じであるが、生じるものは、初めと真中と増加を受けなければならない。また神は善いことを行い、そして人間は善いことをなされる。また神はすべてにおいて完全な方、自分自らと等しく、また同様であり、全体として光であり、また全体として知性、全体として本性であり、すべての善いものの泉であるが、人間は神に向かって進歩と増加を受ける。」

(AH4.11.2: Et hoc Deus ab homine differt, quoniam Deus quidem facit, homo autem fit. Et quidem qui facit semper idem est, quod autem fit et initium et medietatem et adjectionem et augmentum accipere debet. Et deus quidem bene facit, bene autem fit homini. Et Deus quidem perfectus in omnibus, ipse sibi aequalis et similis, totus cum sit lumen et totus mens et totus substantia et fons omnium bonorum, homo vero profectum percipiens et augmentum ad Deum.)。この箇所や『異端反駁』第3巻8章3節などから、神と人間(自己)を明確に区別し、人間は造られたものであり、成長が必要である点をエイレナイオスは主張している。

³⁹¹ AH3.23.5: Ab altero enim seductus sub occasione immortalitatis, statim timore corripitur et absconditur, non quasi possit effugere Deum, sed confusus quoniam transgressus praeceptum eius indignus est uenire in conspectum et colloquium Dei.

いものの選択を行うためであった³⁹²。

ここでは、「不従順の悪」を知ることが記されている。これは実際に、善ではなく悪を選び取った経験があることが明示されている。また『異端反駁』第4巻14章2節には、次のように記されている。

このように神は初めからその寛大さの故に人間を形造り、父祖たちを彼らの救いのために選び、無学な民に神に従うことを教えようとして、予め民を形成し、人間が地上で霊の担い手となり、神と交わりを持つことに慣れるよう、預言者たちも予め教育した。〔神〕自身は何も必要としないが、彼を必要とする人々に自分との交わりを提供する。そして彼を喜ばせる人々には、建築技師のように救いの建物を設計し、またエジプトでは、見〔ようとし〕ない人々に自ら導きを与え、また砂漠では、不安にかられていた人々に適した律法を与え、良い地に入った人々には、ふさわしい相続財産を与え、また父に立ち返る人々には、太らせた子牛をほふり、また一番良い着物を与え、救いという「協和音」に向けて様々な方法で人類を整えるのである³⁹³。

この箇所には、「またエジプトでは、見〔ようとし〕ない人々に自ら導きを与え」と「また砂漠では、不安にかられていた人々に適した律法を与え」と記されている。

以上の箇所から、エイレナイオスが思い描いていた人間像をまとめたい。「自分自身は死すべき、また弱い者であることを知」と語られる人間の中に、どのような弱さがあるのか。エイレナイオスの描く人間は、「不従順の悪を知り」、「誘惑され」、「恐れ」、「隠れ」、「恥ずかしく思い」、「見〔ようとし〕ない人々」、「不安にかられていた人々」である。すなわち、善を選び取ることができず、墮罪し、神に信頼することができない者である。ここに描き出されているのは、人間の「弱さ」が表された姿ということができよう。なぜ、エイレナイオスは、それぞれの記述の中に、人間の弱さを記す必要があったのか。それは、自分の弱さを通して神を知ることにあるとエイレナイオスが考えていたからではないだろう

³⁹² AH4.39.1 : Magnanimitatem igitur praestante Deo, cognovit homo et bonum obaudientiae et malum inobaudientiae, uti oculus mentis utrorumque accipiens experimentum electionem meliorum cum iudicio faciat, et nunquam segniter neque negligens praecepti fiat Dei ; et id quod aufert ab eo vitam, hoc est non obaudire Deo, experimento discens quoniam malum est, neque temptet quidem illud unquam, quod autem conservatorium vitae ejus est, obaudire Deo, sciens quoniam bonum est, cum omni intentione diligenter custodiat. Propter hoc et duplices habuit sensus utrorumque agnitionem habentes, ut electionem meliorum cum disciplina faciat.

³⁹³ AH4.14.2 : Sic Deus ab initio hominem quidem plasmavit propter suam munificentiam; patriarchas vero elegit propter illorum salutem; populum vero praeformabat, docens indocibilem sequi Deum; prophetas vero praestruerat, in terra assuescens hominem portare ejus Spiritum et communionem habere cum Deo.

か。なぜなら、これらの記述のいくつかに共通して「神の寛大さ」(magnanimitas)が語られているからである。『異端反駁』第3巻23章5節には、墮罪のことが記されていた。この箇所には直接、神の寛大さは語られていないが、同じく墮罪について記されている『異端反駁』第4巻37章7節には、次のように記されている。

それ故、神は私たちのために、これら全てを耐え忍んだ。それは私たちがすべてのことを通して教えられ、すべてのことに注意するようになり、理性的に神を愛することを徹底的に教わり、すべてにおいて神の愛のうちに留まるためであった。事実、神は人間の背信への寛大さを保ち、人間はそれ〔背信〕を通して、教育されるのであり、それは預言者も「お前の背教が、お前を教育した」と言っている通りである³⁹⁴。

このようにエイレナイオスは、「神の寛大さ」と人間の弱さを結び合わせて記している。これは「神の寛大さ」のもとで、人間の弱さが「受容」されていることを表していることに他ならない。自分の信仰に悩む者や、罪意識に苛まれている者にとって、最も重要なことは「神の寛大さ」(magnanimitas)のもとで、自分が「受容」されているということである。この神の「寛大さ」に基づく受容は、失敗を経ることによって成されるものである。そのため、自らの信仰の受容において重要となるのが「自立性」を有した人間の「弱さ」である。信仰の成長という場合、弱さを克服し、絶えず善を選び、神に従順であると考えられるかもしれない。そして、この理解が「信仰の受容」を妨げている一つの原因であろう。確かに、エイレナイオスは、人間が「善」を行うこと、神に従順であることを説いている。けれども、「弱さ」のことは、「弱さがない」ということが「弱い」ということよりも優れているというようには捉えられてはいない。むしろ、エイレナイオスが語る「弱さ」とは、「自分自身は死すべき、また弱い者であることを知り」という記述に代表されるように、「自分自身」を知ることにつながる。一方、「弱さ」を知ること、「神の寛大さ」をも知るに至る。つまり、人間は「自立性」に基づいて「弱さ」を通して、自分を知り、また神を知る。ここに信仰の受容が行われるのである。

4.1.2. 神の牧会的配慮としての御子の顕現

また、この神を知ることに、最も重要な出来事が「神を見る」ことによって、神

³⁹⁴ AH4.37.7 : Pro nobis igitur omnia haec sustinuit Deus, uti per omnia eruditi in omnibus in futurum simus cauti et perseveremus in omni ejus dilectione rationabiliter edocti diligere Deum, Deo quidem magnanimitatem praestante in apostasia hominis, homine autem erudito per eam, quemadmodum et propheta ait : Emendabit te abscessio tua.

を知ることである。この「神を見る」ということを、端的に表している箇所がある。それは『異端反駁』第4巻20章7節である。そこには、次のように記されている。

神の栄光は、人間が生きていることであり、人間の生命とは、神を見ることである³⁹⁵。

なぜ、エイレナイオスはこの一文を書いたのであろうか。その理由がこの一文の直前に次のように記されている。

また人間がいつか神を熟視するものになってしまわないよう、そして常に前進していくことがあるようにと、一方では父の不可視性を守ったが、他方ではまた多くの営みを通して人々に神を見えるものとして示した。それは人間が完全に神から離れて、存在することをやめてしまうことのないためである³⁹⁶。

なぜ人間に神を見ることが与えられたか。その答えがここに示されている。すなわち、「人間が完全に神から離れて、存在することをやめてしまうことのないため」である。この点を牧会的に表現するならば、次のようになるだろう。いくら神が寛大さを持っていたとしても、人間はその神と直接語り合うこともできなければ、触れ合うこともできない。そこで、神は人間の目に見える形で「神を見せ」、弱さを通るような時でさえ、人間が「存在をやめてしまうこと」がないようにされる。ここに、生きている人間の存在そのものを受容する神の姿が描き出されている。武田なほみは、『異端反駁』第4巻20章7節のエイレナイオスの言葉を引用しつつ、キリスト者の成長について次のように述べる。

二世紀の教父エイレナイオスは、「神の栄光は人が生きていることであり、人のいのちとは神を見ることである」と言いました。私たちの生の歩みには、強さや技能を獲得していく時期もあれば、持てる力を自分や他者のために使う時期も、またそれらの力や大切にしてきたものを一つひとつ手放していく時期もあります。どの時期にあっても、いのちは神の絶対的な肯定であり、神の栄光を示すものです。しばしば私たちは、何か「できない」ことを悲観したり、人生を歩む過程で出会う新たな課題を前にして、何か安定を失うような不安や抵抗を感じたりするのですが、そのようにさまざまな経験も、また時間をかけて歩む私たちの人生の旅路そのものも、

³⁹⁵ AH4.20.7: gloria enim Dei vivens homo, vita autem hominis visio Dei.

³⁹⁶ AH4.20.7: et invisibilitatem quidem Patris custodiens, ne quando homo contemptor fleret Dei et ut semper haberet ad quod proficeret, visibilem autem rursus hominibus per multas dispositiones ostendens Deum, ne in totum deficiens a Deo homo cessaret esse.

それを通して私たちがよりよく「神を見る」ことへの、神の招きなのかもしれません。信仰者は何の心配もなく人生の歩みを朗らかに進んでいく、というよりはむしろ、不安や心配、弱さや痛みを抱えながら、その存在の深く根源的なところでの神の「大丈夫」を聞き、受容を感じ、それに力づけられて生の歩みをもう一步前に踏み出していく、というものであるかもしれません³⁹⁷。

この引用の最後にも「信仰者は何の心配もなく人生の歩みを朗らかに進んでいく、というよりはむしろ、不安や心配、弱さや痛みを抱えながら、その存在の深く根源的なところでの神の『大丈夫』を聞き、受容を感じ、それに力づけられて生の歩みをもう一步前に踏み出していく」と語られているように、時に失敗から生じるであろう「不安や心配、弱さや痛み」を抱えつつ、「神の寛大さ」という神の受容を感じ、「神を見ること」すなわち、「神を知ること」へと繋がっていくことが示唆されている。

以上のことから、自分の信仰は弱いとの思いから生じる罪意識によって信仰の受容ができない者に対してエイレナイオスが語るであろうことは、「信仰を受容していくことには、むしろ『弱さを知ること』が必要である」ということではないだろうか。なぜなら、弱さは、それ自体として終わるのではなく、「神の寛大さ」へと人間を導くからである。同時に、「人間が完全に神から離れて、存在することをやめてしまうことのないため」に受肉した御子を見る、すなわち「神を見る」ことにもつながる。エイレナイオスは「自分」が信仰を受容しなければならないという視点ではなく、「神が」受容するという視点を持って、信者に語りかけると考えることができる。

4.2. 罪を犯した者に対して

それでは、次いで(2) 実際に罪を犯した者をどのように牧会するかの問題に移っていきう。この問題を取り扱うのに際して、エイレナイオスが、墮罪について記している箇所を確認し、この問題に対する答えを導き出していきたい。

4.2.1. アダムとエバが墮罪をした理由

実際に、罪を犯した者をどのように牧会するかという問題の解決を探るために、アダムとエバの歩みを参考にしたい。そこで、まずアダムとエバが墮罪をした理由について、ど

³⁹⁷ 佐久間勤編著『神の知恵と信仰——現代に生きる信仰者のための視点——』（サンパウロ、2005年）、252頁。

のように記されているかを確認することから始めよう。『異端反駁』第3巻23章1節には、次のように記されている。

アダムは彼〔蛇〕の所有する最初の器となり、彼の力の下に捕えられた。すなわち、〔蛇は〕アダムに罪をもたらし、不死性という見せかけによって、彼のうちに死をもたらしたのである³⁹⁸。

また『異端反駁』第3巻23章5節には、次のように記されている。

他者から不死性の機会のもとに誘惑され、直ちに恐れに襲われて、そして隠れた。それは神から逃れることができるかのように思ったのではなく、〔神の〕命令を犯したために、神の面前に話すために行くことができない者となったことを恥ずかしく思ったのである³⁹⁹。

これらの箇所から分かるように、アダムは蛇から「不死性」を与えるとの誘惑に会い、墮罪をし、条件付きであったが、自らに与えられていた不死性を失ったのである⁴⁰⁰。また墮罪をしたエバについて、『異端反駁』第3巻22章4節で、次のように記されている。

従って、処女マリアも「主よ。ご覧ください、私はあなたのはしためです。あなたのお言葉通りになりますように」と言っており、従順であったのに対して、エバは不従順であった。彼女はまだ処女であった時に、従わなかったのである⁴⁰¹。(中略)〔エバは〕不従順な者となり、自分と人類にとって死の源なった⁴⁰²。

このようにアダムもエバも蛇に誘惑され、神の命令に背いた⁴⁰³。すなわち、神への不従

³⁹⁸ AH3.23.1 : Primum enim possessionis eius uas Adam factus est, quem et tenebat sub sua potestate, hoc est praeuarcationem inique inferens ei et per occasionem immortalitatis mortificationem faciens in eum.

³⁹⁹ AH3.23.5 : Ab altero enim seductus sub occasione immortalitatis, statim timore corripitur et absconditur, non quasi possit effugere Deum, sed confusus quoniam transgressus praeceptum eius indignus est uenire in conspectum et colloquium Dei.

⁴⁰⁰ 『証明』第15章には、次のように記されている。「神は人にある条件を課した。人が神の命令を守ったなら、そのとき、人は自分が置かれていた状態、つまり不死のままでいつまでもとどまることができる。しかし守らなかつたら、死すべきものとなり、自分の身体がとられた地の中に溶け去ってしまう。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、213頁。

⁴⁰¹ AH3.22.4 : Consequenter autem et Maria Virgo obaudiens inuenitur dicens : Ecce ancilla tua, Domine, fiat mihi secundum uerbum tuum. Eua uero inobaudiens : non obaudiuit enim adhuc cum esset uirgo.

⁴⁰² AH3.22.4 : inobaudiens facta, et sibi et uniuerso generi humano causa faeta est mortis.

順によって墮罪を引き起こしたことを確認することができる。蛇は人間に「不死性」という誘惑を用いて、人間を死に至らしめたのである。なぜ「不死性」が誘惑になるかと言えば、「不死性」に至ることが人間の完成であったからである。『異端反駁』第4巻38章4節には、次のように記されている。

まず本性が現れ、後に死すべきものが不死性に、滅びるべきものが不滅性に勝利し、飲み込まれ、そして善と悪の知識を得て、神のかたちと類似性に従って人間となることになっていたのである⁴⁰⁴。

幼児の状態として造られた人間は、神のかたちと類似性にしがたって「不死性」に至るまで成長するように定められていたが、蛇の誘惑による墮罪によって、むしろ「類似性」を喪失してしまったのである。

4.2.2. 墮罪後のアダムとエバの反応

蛇からの誘惑によって墮罪し、「類似性」を喪失した後のアダムとエバの反応はどうか。まず墮罪後のアダムの姿を見てみよう。『異端反駁』第3巻23章5節には、次のように記されている。

「主への畏れは知恵の初め」であるが、違反の自覚は、悔い改めをもたらし、悔い改める者たちに、神はその好意を示してくださる。実際、腰帯により〔すなわち〕わざにおいて自らの悔い改めを示した。他の葉もたくさんあったが、イチジクの葉で覆ったのである。〔他の葉は〕彼の体を苦しめることのできる〔量が〕より少ない代わり、不従順を覆うのにふさわしかったからであり、彼は神への恐れで怯えてい

⁴⁰³人間が創造された時の状態が、あたかも幼児のような状態であったことと関係している。『異端反駁』第4巻38章1節には、次のように記されている。「ちょうど母親が幼児に完全な食物を与えることができても、〔幼児は〕まだ堅い食物を受け取ることができず、同様に、神自身も初めから人に完全さを与えることはできたが、人がそれを受け取ることができなかったのである。つまり幼児であった〔からである〕。」

(AH4.38.1: “*Quemadmodum enim mater potest quidem praestare perfectam escam infanti, ille autem adhuc non potest robustiorem se percipere escam, sic et Deus ipse quidem potens fuit homini praestare ab initio perfectionem, homo autem impotens percipere illam : infans enim fuit.*”) 人間はこの幼児性の故に蛇に唆され墮罪してしまう。エイレナイオスは『証明』第12章で、墮罪を人間の幼児性との関連で説明している。「しかし、人は小さな者であって、その識別能力はまだ未発達であり、そのため欺く者によって誤った道に導かれるのもたやすかった。」エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、212頁。

⁴⁰⁴ AH4.38.4: *Oportuerat autem primo naturam apparere, post deinde vinci, et absorbi mortale ab immortalitate et corruptibile ab incorruptibilitate, et fieri hominem secundum imaginem et similitudinem Dei, agnitione accepta boni et mali.*

たからである⁴⁰⁵。(中略)すなわち、彼は言う。「聖霊から受けた聖なる衣を、不従順によって喪失しました。そして、今、私は決して喜びをもたらさず、身体を傷つけ、貫くこのような上着が相応しいことを知っています。そして主が憐れみ深い方であるので、イチジクの葉の代わりに、毛皮の下着を彼らに着せたのでなかったなら、彼は自分を卑しめていたため、確かに常にこの衣を着けていただろう⁴⁰⁶。

ここで明らかにされているように、アダムは墮罪後に「罪の自覚」が生じ、自ら悔い改めへと進んでいった⁴⁰⁷。アダムは自らが悔い改めていることの証として、「身体を傷つけ、貫く上着」としてイチジクの葉を選び、それを腰帯としたのである。このようにアダムは違反の自覚が生じ、悔い改め、それを神に示した。その結果、神はアダムを憐れみ、イチジクの葉に代わって、毛皮を与えたのである⁴⁰⁸。またエバの姿は『異端反駁』第3巻23章5節に次のように記されている。

それゆえ、〔神は〕彼らに尋ねたが、それは告訴を女性に移すためであり、また彼女に尋ねたが、それは訴訟が蛇に移るためであった。〔彼女は〕起こったことを述べて、蛇が私を誘惑し、私は食べましたと言った。〔神は〕蛇には尋ねなかった。罪の導き手となったことを知っていたからである。まずこれに呪いを与えた。それは人間には劣った叱責⁴⁰⁹を与えるためである。神は人間を誘惑した者を憎み、惑わされた者は少しずつ憐れんだのである⁴¹⁰。

⁴⁰⁵ AH3.23.5 : *Timor autem Domini initium intellegentiae, intellectus uero transgressionis fecit paenitentiam, paenitentibus autem largitur benignitatem suam Deus. Etenim per succinctorium in facto ostendit suam paenitentiam, foliis ficulneis semetipsum contegens, existentibus et aliis foliis multis quae minus corpus eius uexare potuissent, condignum tamen inobaudientiae amictum facti, conterritus timore Dei.*

⁴⁰⁶ AH3.23.5 : *Quoniam, inquit, eam quam habui ab Spiritu sanctitatis stolam amisi per inobaudientiam, et nunc cognosco quod sim dignus tali tegimento quod delectationem quidem nullam praestat, mordet autem et pungit corpus. Et hoc uidelicet semper habuisset indumentum, humilians semetipsum, nisi Dominus qui est misericors tunicas pellicias pro foliis ficulneis induisset eos.*

⁴⁰⁷ J. T. マクニールは次のように記している。「エイレナイオスは、その数十年後、一人の執事の妻について語っている。彼女は魔術師にだまされて『心とからだに』害を受け、その魔術師から逃れたのであるが、彼女は、『自分の受けた汚れを泣き悲しみ、告白して自分の時間の全てを費した』。この告白は、明らかに公の告白である。エイレナイオス（180年頃）は、同様の場合に、告白が『あからさまに』なされていることに明らかに言及している」。J. T. マクニール『キリスト教教会の歴史』吉田信夫訳（日本基督教団出版局、1987年）、79頁。また、これに関連して、『異端反駁』第1巻13章7節には「彼らのある者は、明らかに罪の告白を行い、また、ある者たちはそれをするを恥じた」と記されている。(AH1.13.7 : *quaedam autem in manifesto exmologiesim faciunt, quaedam autem reuerentes hoc ipsum*)

⁴⁰⁸ Eric Osborn, *Irenaeus of Lyons*, 231 参照。

⁴⁰⁹ 小林総は、*secunda increpatione* を「第二の譴責」と訳しているが、ANF では、*mitigated rebuke* と訳しているため、ここを「劣った叱責」と訳した。Saint Irenaeus of Lyons, *Against Heresies*, The complete English translation from the First Volume of The Ante Nicene Fathers, 384.

⁴¹⁰ AH3.23.5 : *Et hoc uidelicet semper habuisset iudumentum, humilians semetipsum, nisi Dominus qui est misericors tunicas pellicias pro foliis ficulneis induisset eos. Propter hoc autem et interrogat*

この箇所、神はまずアダムとエバの両者に墮罪の理由を尋ねている。それは告訴をエバに移すことによって、墮罪を引き起こさせたのが、蛇であることをエバの口を通して語らせ、訴訟が蛇に移るためであった。エバは「蛇が私を誘惑し、私は食べましたと言った」とあるように、神からの問いかけに応じて、口を開いているのである。このエバの証言に待って、またそれに基づいて、蛇に呪いが与えられた。そしてアダムとエバには、憐れみが与えられた。

4.2.3. 人間の回復のための「罰の期間」

一方で、不従順を犯した人間に「罰の期間」を与えたことも言及されている。注目すべきは、確かに、この「罰の期間」を与えたのは父なる神であるが、人間がこの期間を全うしたのではない。この箇所でも「主が失われた羊のものへ来て、これほどの営みの再統合を行ない、自ら形成した〔人間〕を探し、そのかたちと類似性に従って造られた人間、不従順のために成された罰の期間、「父がその力によって定めた」〔期間〕を満了した」と述べられている。また『異端反駁』第3巻23章7節には、次のように記されている。

それゆえ、蛇と女性、またその子孫との間に敵意を置いた。彼らは互いにかがいがい、かかとを噛まれる子孫は、敵の頭を力強く踏みつぶすことができ、〔蛇は〕噛みつき、また殺し、また人の歩みを妨げるのであるが、これは、この頭を踏みつぶすように定められた子孫、マリアの子が来る時までのことである⁴¹¹。

つまり、この「罰の期間」は「御子の受肉の時」までであると考えられ、御子が受肉し「再統合」を行った結果、「罰の期間」は全うされたのである。とするならば、父なる神は「罰の期間」を与えたが、それを終わらせたのは人間ではなく、御子であることが明らかにされているのである。人間が神から受けた「罰の期間」とは一体どのようなものであろうか。『異端反駁』第3巻23章3節を見ると、その罰についての記述を見つけることがで

eos, uti ad mulierem ueniat accusatio; et illam rursus interrogat, uti ad serpentem transmitteret causam. Dixit enim quid fuerat factum : Serpens, ait, seduxit me et manducaui. Serpentem uero non interrogauit : sciebat enim eum principem transgressionis factum; sed maledictum primo immisit in eum, uti secunda increpatione ueniret in hominem. Eum enim odiuit Deus qui seduxit hominem, ei uero qui seductus est sensim paulatimque misertus est.

⁴¹¹ AH3.23.7 : Quapropter inimicitiam posuit inter serpentem et mulierem et semen eius, obseruantes inuicem, illo quidem cui mordetur planta et potente calcare caput inimici, altero uero mordent et occidente et interpediente ingressus hominis, quoadusque uenit semen praedestinatum calcare caput eius, quod fuit partus Mariae.

きる。

この故に、アダムが道を踏み外した最初の時も、聖書が言うように、アダムその人を呪うことをせず、彼の働く地を呪った。昔のある人が「神は人間の中に残らないよう、呪いを地に転嫁した」と言っている通りである。人間は疲労と地上的な労苦、また自分の顔に汗してパンを食べること、そして自分がそこから取られた地に帰ることを違反の罰として受けた。同様に、女性も疲労と労苦、また呻きと産みの苦しみ、また奴隷の身分、すなわち自分の夫への隷属を〔受けた〕。それは彼らが神から呪われて、全く滅んでしまうことも譴責なしであったために、神を軽んじるようなことがないためである⁴¹²。(下線筆者)

このようにアダムとエバには「罰の期間」が与えられたが、彼ら自身が呪われたわけではなかった。呪われたのは、彼らではなく地であった。さらにこの「罰の期間」とは、神が人間の不従順に対して罰を与えることが目的なのではなく、信仰の回復、すなわち人間の成長のためとしての「譴責」の意味が強いことを読み解くことができる。その証拠として、神が人間に「罰の期間」を与えたのは第一に「神から呪われて、全く滅んでしまうことがないため」であり、第二に「神を軽んじるようなことがないため」である。

4.2.4. 人間を教育する神——人間に「罰の期間」を与えた理由——

さらに『異端反駁』第3巻23章1節と『異端反駁』第4巻37章7節を合わせて読むと、神が「寛大さ」のゆえに人間を呪うことをせず地を呪ったこと、また「劣った叱責」として人間を取り扱い、「罰の期間」を与えたことの目的がより明確に伝わってくる。『異端反駁』第3巻23章1節には、父なる神が「寛大さ」を持ってどのように墮罪した人間を取り扱ったかについて、次のように記されている。

したがって、主が失われた羊のものへ来て、これほどの営みの再統合を行ない、自ら形成した〔人間〕を探し、そのかたちと類似性に従って造られた人間、不従順の

⁴¹² AH3.23.3 : Propter hoc et in initio transgressionis Adae, sicut enarrat Scriptura, non ipsum maledixit Adam, sed terram in operibus eius, quemadmodum ex ueteribus quidam ait : Quoniam quidem transtulit Deus maledictum in terram ut non perseueraret in homine. Condemnationem autem transgressionis accepit homo taedia et terrenum laborem et manducare panem in sudore uultus et conuerti in terram ex qua adsumptus est; similiter autem et mulier taedia et labores et gemitus et tristitias partus et seruitium, id est ut seruiret uiro suo : ut neque maledicti a Deo in totum perorent, neque sine increpatione perseuerantes Deum contmnerent.

ために成された罰の期間、「父がその力によって定めた」〔期間〕を満した、すなわち、アダムを救うのは必然であった。人間と関わる救いの営みは、神が打ち破られないため、その業が弱められないため、父のよしとすることに従って、行われたからである。生きるようにと神によって造られた人間が、彼を騙した蛇によって生命を失った時、もはや生命に戻ることができず、完全に死に投げ込まれたのであれば、神は打ち破られ、蛇の悪意が、神の意志に勝ることになったであろう。しかし、神は打ち破られず、寛大であるから、人間を叱責するにしても、すべての試みに対して、すでに述べたように寛大さを示したが、第二の人間を通して強い者を縛り、その器を粉々にし、死を滅ぼした。殺されていた人間を生かしたのである⁴¹³。

(下線筆者)

また『異端反駁』第4巻37章7節には、次のように記されている。

それ故、神は私たちのために、これら全てを耐え忍んだ。それは私たちがすべてのことを通して教えられ、すべてのことに注意するようになり、理性的に神を愛することを徹底的に教わり、すべてにおいて神の愛のうちに留まるためであった。事実、神は人間の背信への寛大さを保ち、人間はそれ〔背信〕を通して、教育されるのであり、それは預言者も「お前の背教が、お前を教育した」と言っている通りである⁴¹⁴。

(下線筆者)

このように神が「寛大さ」を示し、人間に「劣った叱責」を与え、さらに「罰の期間」を与えたことには、神が人間を教育する目的があったことが示されている⁴¹⁵。つまり、随

⁴¹³ AH3.23.1 : *Necesse ergo fuit Dominum ad perditam ouem uenientem et tantae dispositonis recapitulationem facientem et suum plasma requirentem, illum ipsum hominem saluare qui factus fuerat secundum imaginem et similitudinem eius, hoc est Adam, adimplentem tempora eius condemnationis quae facta fuerat propter inobaudientiam, quae Pater posuit in sua potestate, quoniam et omnis dispositio salutis quae circa hominem fuit secundum placitum fiebat Patris, uti non uinceretur Deus neque infirmaretur ars eius. Si enim qui factus fuerat a Deo homo ut uiueret, hic amittens uitam laesus a serpent qui deprauauerat eum iam non reuerteretur ad uitam sed in totum proiectus esset morti, uictus esset Deus et superasset serpentis nequitia uoluntatem Dei. Sed quoniam Deus inuictus et magnanimis set, magnanimum quidem se exhibuit ad correptionem hominis et probationem omnium, quemadmodum praediximus, per secundum autem hominem adligauit fortem et diripuit eius uasa et euacuauit mortem, uiuificans eum hominem qui fuerat mortificatus.*

⁴¹⁴ AH4.37.7 : *Pro nobis igitur omnia haec sustinuit Deus, uti per omnia eruditi in omnibus in futurum simus cauti et perseveremus in omni ejus dilectione rationabiliter edocti diligere Deum, Deo quidem magnanimitatem praestante in apostasia hominis, homine autem erudito per eam, quemadmodum et propheta ait : Emendabit te abscessio tua.*

⁴¹⁵ ハンス ユーゲン・マルクスも「教育的配慮から罰は必要である」と記している。ハンス ユーゲン・マルクス「悪魔の権限——アウグスティヌスの贖罪論の一側面——」(『南山神学 (第29号)』、2006年、1-43頁)、5頁。

罪を犯した人間が「罰の期間」でありながら、同時に、墮罪を失敗の一つとして扱われ⁴¹⁶、むしろ完全な人間に向かう教育のために用いられているのである。このように墮罪を失敗の一つとして取り扱われるのは、神が人間を憐れまれたからに他ならない。『異端反駁』第3巻23章5節には、「神は人間を誘惑した者を憎み、惑わされた者は少しずつ憐れんだのである」と記されており、また『異端反駁』第4巻40章3節には、次のように記されている。

この天使は神の形成した〔人間を〕妬んで、彼を神に敵対させようとしたその時以来、背教者であり、敵である。それ故、神は自分で隠れて毒麦を蒔いた〔者〕、すなわち、罪を持ち込んだ者は、自分の交わりから分離し、不注意ではあったが、不幸にも不従順を受け入れた人間を憐れみ、神に敵対させようとしたその敵意の方向を変えて、敵対させようとした〔者〕へと向けた。人に対する敵対心は自分から取り去り、反射させて蛇の方へ送り返した。神が蛇に対して述べたと言っている通りである。「私はお前と女性との間、お前の子孫と女性の子孫との間に敵意を置く。彼はお前の頭をうかがい、お前は彼のかかとをうかがうであろう。」そして以前の巻で明らかにしたように、主は人間として女性から生まれ、蛇の頭を踏みつぶした時、この敵意を自分の中に再統合したのである⁴¹⁷。（下線筆者）

⁴¹⁶ 『異端反駁』第4巻39章1節には、次のように記されている。「それ故、神が寛大さを示してくださったので、人間は従順の善と、不従順の悪を知り、そのため、心の目が、両方からの試みを受けるとき、判断を下して、よりよい方を選び、決して神の命令に対して、無気力や無視するものとならず、また、自分の生命を取り去ることが、すなわち、神に従わないことが悪であることを試みによって学び、いつか、それに触れることをせず、自分の生命を保護すること、〔すなわち〕神に従うことが善であると知り、十分な細心の注意をもって守るためであった。この故に、両方の知識を持つ二重の知覚を〔人間は〕持っている。〔それは〕よりよいものの選択を行うためであった。」(AH4.39.1: *Magnanimitatem igitur praestante Deo, cognovit homo et bonum obaudientiae et malum inobaudientiae, uti oculus mentis utrorumque accipiens experimentum electionem meliorum cum iudicio faciat, et nunquam segnis neque negligens praecepti fiat Dei; et id quod aufert ab eo vitam, hoc est non obaudire Deo, experimento discens quoniam malum est, neque temptet quidem illud unquam, quod autem conservatorium vitae ejus est, obaudire Deo, sciens quoniam bonum est, cum omni intentione diligenter custodiat. Propter hoc et duplices habuit sensus utrorumque agnitionem habentes, ut electionem meliorum cum disciplina faciat.*)

⁴¹⁷ AH4.40.3: *Ex tunc enim apostate est angelus hic et inimicus, ex quo zelavit plasma Dei et inimicum illum Deo facere aggressus est. Quapropter et Deus eum quidem qui a semetipso zizania absconse seminavit, hoc est transgressionem [quam ipse] intulit, separavit a sua conversatione; eum autem qui negligenter quidem sed male accepit inobaudientiam hominem miseratus est, et retorsit inimicitiam per quam inimicum Deo facere voluit in ipsum inimicitarum auctorem, auferens quidem suam quae erat adversus hominem inimicitiam, retorquens autem illam et remittens illam in serpentem. Quemadmodum et Scriptura ait dixisse serpenti Deum: Et inimicitiam ponam inter te et inter mulierem, et inter semen tuum et inter semen mulieris; ipse tuum calcabit caput, et tu observabis ejus calcaneum. Et inimicitiam hanc Dominus in semetipsum recapitulavit, de muliere factus homo et calcans ejus caput, quemadmodum in eo qui ante hunc est liber ostendimus.*

この箇所からも明らかなように、神は人間に「罰の期間」を与えはしたが、文字どおり「人間を罰する」ための期間なのではなく、墮罪をした人間に対する「神の憐れみ」の大きさが示された期間であると考えられる。『異端反駁』第4巻37章1節には、創造時に「選択の力」を神から備えられた人間は、「正しく善を持つ者」となるように求められていた存在であることが記されている。

そして、この故に〔神は〕よい判断をすべての人に与えた。人間のうちには選択の力を置いた。——天使たちも理性的であるので——天使たちのうちにも〔置いた〕ように。事実、聞き従う者たちが、正しく善を持つ者となるためであった。与えたのは神であるが、守るのは彼ら自身の方であり、聞き従わなかった者たちは、善とともにないことが分かり、そして当然の罰を受け取るようになるのである。なぜなら、神は好意をもって善を与えた⁴¹⁸が、彼らはそれを慎重に重んじること、価値あるものと思うこともせず、卓越した慈愛を無視したからである。それ故、善を投げ捨て、まるで吐き出す者たちには、すべての者が、当然、神の正しい裁きへと陥るであろう⁴¹⁹。(下線筆者)

このように本来の人間は自らの判断で「善」を行う必要があった⁴²⁰。けれども、実際には不従順に陥り、墮罪をしてしまう。けれども、神は墮罪を一つの失敗として取り扱い、人間を教育していく。その教育をして得たことが『異端反駁』第4巻39章1節に記されて

⁴¹⁸ 『異端反駁』第3巻25章4節には次のように記されている。「それ故、すべての者たちに好意により自分の太陽を昇らせ、義人の上にも、不正な者たちの上にも雨を降らせる神は、同等にその好意を得させ、同様に、その与えられた地位に従って行動することなく、(神)の好意に反して、享樂と放縱を保ち続けている(者たち)、自らにこれほど慈悲深くしてくださった方をまだ冒瀆している者たちを裁くであろう。」
AH3.25.4 : Qui igitur solem suum oriri facit omnibus benigne Deus, et pluet super iustos et iniustos, iudicabit eos qui ex aequo benignitatem eius percipientes, non similiter secundum dignationem munerationis eius conuersati sunt, sed in deliciis et luxuriis uersati sunt aduersus beniuolentiam eius, adhuc et blasphemantes eum qui tanta beneficia in eos fecerit.

⁴¹⁹ AH4.37.1 : Et propter hoc consilium quidem bonum dat omnibus; posuit autem in homine potestatem electionis, quemadmodum et in angelis – etenim angeli rationabiles –, uti hi quidem qui obaudissent iuste bonum sint possidentes, datum quidem a Deo, sarvatum vero ab ipsis; qui autem non obaudierunt iuste non inueniuntur cum bono et meritam poenam percipient, quoniam Deus quidem debet benigne bonum, ipsi vero non custodierunt diligenter illud neque pretiosum arbitrati sunt, sed supereminentiam bonitatis contempserant. Abjicientes igitur bonum et quasi respuentes, merito omnes <in> justum iudicium incident Dei.

⁴²⁰ 『異端反駁』第4巻14章1節には、次のように記されている。「この故に、神は人々から仕えられることを求める。善き方、憐れみ深い方であるから、奉仕し続ける人々に、正しく行おうとして。神が何もしないのと同じ程度に、人間は、神との交わりを必要とするのである。神への奉仕を続け、これに留まること、これが人間の栄光である。」(AH4.14.1 : Propter hoc autem exquirat Deus ab hominibus seruitutem, ut quoniam est bonus et misericors beneficiat eis qui perseverant in seruitute ejus. In quantum enim Deus nullius indigens, in tantum homo indigent Dei communionem. Haec enim Gloria hominis, perseverare ac permanere in Dei seruitute.)

いる。

それ故、神が寛大さを示してくださったので、人間は従順の善と、不従順の悪を知り、そのため、心の目が、両方からの試みを受けるとき、判断を下して、よりよい方を選び、決して神の命令に対して、無気力や無視するものとならず、また、自分の生命を取り去ることが、すなわち、神に従わないことが悪であることを試みによって学び、いつか、それに触れることをせず、自分の生命を保護すること、〔すなわち〕神に従うことが善であると知り、十分な細心の注意をもって守るためであった。この故に、両方の知識を持つ二重の知覚を〔人間は〕持っている。〔それは〕よりよいものの選択を行うためであった⁴²¹。（下線筆者）

このように人間は、神からの教育により、再び、不従順に陥らないために「二重の知覚」が与えられたのである。それにより、「何が善であるか」を選び取ることができるようにされたのである。

これまでのところをまとめると次のようになる。あたかも幼児の状態として創造された人間は、騙されるのも容易かったので蛇に唆され墮罪をした。そのように不幸にも墮罪をした人間を神は憐れみ、「寛大さ」を持って人間を呪うことはしなかった。すべての呪いと敵意とは、蛇に向けられたのである。それでは墮罪を犯した人間に神は何の叱責ももたれなかったのかと言えば、そうではなかった。神は「寛大さ」を持ちつつ、人間に「罰の期間」を与えた。この目的は「神から呪われて、全く滅んでしまうことがないため」であり、また「神を軽んじないため」である。そして「罰の期間」を通して人間が再び不従順に陥らないために成長させるためであった。人間は墮罪の失敗により「二重の知覚」を得て、何が「善」であるかを学ぶことができた。そして、御子の受肉によって「罰の期間」は「再統合」され、人間は御子の受肉へと進んでいくのである。

4.2.5. 教育から回復へ——御子の受肉——

人間は墮罪したことにより、神から「罰の期間」を与えられたが、この「罰の期間」は、

⁴²¹ AH4.39.1 : Magnanimitatem igitur praestante Deo, cognovit homo et bonum obaudientiae et malum inobaudientiae, uti oculus mentis utrorumque accipiens experimentum electionem meliorum cum iudicio faciat, et nunquam segniter neque negligens praecepti fiat Dei ; et id quod aufert ab eo vitam, hoc est non obaudire Deo, experimento discens quoniam malum est, neque temptet quidem illud unquam, quod autem conservatorium vitae ejus est, obaudire Deo, sciens quoniam bonum est, cum omni intentione diligenter custodiat. Propter hoc et duplices habuit sensus utrorumque agnitionem habentes, ut electionem meliorum cum disciplina faciat.

旧約の時代までであり、御子の受肉に至って、新たな発展が生まれる。

この章では、新たな進展を生み出す御子の受肉が人間に何をもちたらずかに焦点を絞り、御子の受肉の出来事を考察する。そして、エイレナイオスにおける受肉の理解の一側面が、どのように牧会的な態度に影響を与えるかを見出したい⁴²²。

罪を犯した者の回復という視点から考えた時、御子の受肉と人間に与えられた神との類似性の回復の観点を抜きにして語ることはできない。人間は最初に創造された時、『異端反駁』5巻28章4節に記されている通り、神のかたちと類似性に従って造られた存在であった⁴²³。その箇所を確認したい。

人は初めに、神の両手によって、すなわち、御子と聖霊によって造られ、神のかたちと類似性に従って造られた⁴²⁴。

人間は神のかたちと類似性に従って造られたのであるが、創造の段階で完全な神のかたちと類似性を有していたわけではなかった。人間は善と悪の知識を得て成長し、完全な神のかたちと類似性を、将来に得ることが求められていた。『異端反駁』第4巻38章4節には、次のように記されている。

まず本性が現れ、後に死すべきものが不死性に、滅びるべきものが不滅性に勝利し、飲み込まれ、そして善と悪の知識を得て、神のかたちと類似性に従って人間となることになっていたのである⁴²⁵。

このように人間は神のかたちと類似性に従って造られたが、同時に、造られた最初の状態にあっては、あたかも幼児のような状態であり、蛇に唆されて墮罪をしたことは先に記した。この墮罪によって失ったものこそ、本来、将来において完全な形で得なければならなかった神との類似性に他ならない。神との類似性が失われたことについて『異端反駁』

⁴²² 御子の受肉はアナケファライオーシス（再統合）全体に関わる観念であるが、ここでは全体を取り合う使うことはせず、受肉と「類似性」の回復から新たにされる人間の成長に焦点を当てた。アナケファライオーシスの全体的な理解については鳥巢義文「アナケファライオーシス——エイレナイオスの救済論における意味検討——」『南山神学』第6号（1983年）、63-104を参照。

⁴²³ エイレナイオスが神のかたちと類似性による人間創造を取り扱っている背景には、グノーシス主義者による「かたち」と「類似性」を用いた人間創造の理解があり、これを論駁しようとしている。『異端反駁』第1巻5章5節を参照。また脚注53から55を参照。

⁴²⁴ AH5.28.4 : *plasmatus in initio homo per manus Dei, hoc est Filii et Spiritus, fit secundum imaginem et similitudinem Dei,*

⁴²⁵ AH4.38.4 : *Oportuerat autem primo naturam apparere, post deinde vinci, et absorbi mortale ab immortalitate et corruptibile ab incorruptibilitate, et fieri hominem secundum imaginem et similitudinem Dei, agnitione accepta boni et mali.*

第5巻16章2節には、次のように記されている。

かつて、事実、人は神のかたちに従って造られたと言われていたが、示されてはいなかった。人が神のかたちに従って造られた御言葉は、不可視であった。そのため、類似性も容易に失ってしまった⁴²⁶。

この類似性の喪失は、条件付きではあったが、人間に与えられていた「不死性」の喪失に他ならない。これにより、人間は一時的な生命のみを持つ存在となったのである⁴²⁷。受肉は、まさに墮罪によって神との類似性を失った人間に再び類似性を得ることができるように、かつて不可視であった御言葉である御子が人々に現れることによって、神の「かたち」を明らかにし、人間に神との類似性を取り戻させる働きがある。『異端反駁』第5巻16章2節には、次のように記されている。

しかし、神の御言葉が肉となったとき、〔2つの〕いずれも確かなものにした。すなわち、彼のかたちであったものになることで、真のかたちを明らかにし、また人間を目に見える御言葉によって、目に見えない父に似たものとするので、類似性をも強固にもと通りにしたのである⁴²⁸。

そして『異端反駁』第3巻18章1節を見ると、人間が神のかたちと類似性に従って創造されたことを取り戻すことが、人間の「救い」であると記されている。

彼が受肉し、人間となったとき、彼は人間の長い歴史を自らのうちに再統合した。集約〔した形〕で、私たちに救いを与えたのである。それは、私たちがアダムにおいて失ったもの、すなわち、神のかたちと類似性に従って〔造られた〕ものであること、これをキリスト・イエスにおいて取り戻すためである⁴²⁹。

⁴²⁶ AH5.16.2: In praeteritis enim temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur; adhuc enim invisibile erat Verbum, cujus secundum imaginem homo factus fuerat; propter hoc autem et similitudinem facile amisit.

⁴²⁷ 『異端反駁』第5巻12章2節では、「命の息」と「聖霊」を区別して、次のように記されている。「人間を心魂的にするのは生命の息で、これが1つ、他に人間を霊的に生かす生きた霊が存在する。」(AH5.12.2: Aliud enim est afflatus vitae, qui et animale efficit hominem, et aliud Spiritus vivificans, qui et spiritalem eum efficit.)

⁴²⁸ AH5.16.2: In praeteritis enim temporibus, dicebatur quidem secundum imaginem Dei factum esse hominem, non autem ostendebatur; adhuc enim invisibile erat Verbum, cujus secundum imaginem homo factus fuerat; propter hoc autem et similitudinem facile amisit. Quando autem caro Verbum Dei factum est, utraque confirmavit: et imaginem enim ostendit veram, ipse hoc fiens quod erat imago ejus, et similitudinem firmans restituit, consimilem faciens hominem invisibili Patri per visibile Verbum.

「神のかたち」と「類似性」は、第一に御言葉である御子のうちに存在していたが⁴³⁰、御子の受肉によって、人間はアダムにおいて喪失した「神のかたち」と「類似性」を再び取り戻すことが可能となった。けれども、この時点で、最終的な成長の完成に至ったのではない。人間は自身が「神のかたち」に従って創造されていたことを思い出し、完全な「類似性」を得るために、御子の受肉以後も成長し続けなければならない。

しかし、ここで重要なことは、旧約の時代まで与えられていた「譴責」による「罰の期間」の中を人間は引き続き生き、成長するのではなく、御子の受肉が到来したことにより、人間は新たに再出発することができるのである⁴³¹。この点に関して『証明』第32章をみたい。

それで、主は、この人間を再統合しようとしたとき、[アダム]が肉[なる人]となった、その[救済史の]営み[の経過]を再現した。[父なる]神の意思と知恵によって処女から生まれたのである。それは[主]もアダムという肉なる人の写しとなるため、そして[聖書の]初めに書かれている通り、人が神の「似像および似たもの」[創1:26]される[コロ3:10参照]ためであった⁴³²。

この箇所には「主は、この人間を再統合しようとしたとき」との記述がある。この部分が大貫隆は「主はこの人間（アダム）を今一度完成させるために」と翻訳している⁴³³。御子は人間に「神のかたち」を知らせ、またアダムが墮罪によって喪失した神との「類似性」を取り戻させ、人間を「今一度完成させる」ために受肉したのである。

4.2.6 実際に罪を犯した者への牧会的適応

墮罪をしたアダムとエバに対する神の取り扱いを、(1)から(6)まで分けてまとめてみよう。

⁴²⁹ AH3.18.1 : sed quand incarnatus et homo factus, longam hominum expositionem in seipso recapitulavit, in compendio nobis salutem praestans, ut quod perdideramus in Adam, id est secundum imaginem et similitudinem esse Dei, hoc in Christo Iesu reciperemus.

⁴³⁰ Iain M. Mackenzie, *Irenaeus's Demonstration of the Apostolic Preaching a theological commentary and translation*, 160.

⁴³¹ John Lawson, *The Biblical Theology of Saint Irenaeus*, 143.

⁴³² エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』、224頁。

⁴³³ 大貫隆『ロゴスとソフィア』、228頁。Behrは“recapitulating this man”と訳し、SmithとRobinson、そしてMackenzieは共に“afresh this man”としている。John Behr, *St Irenaeus of Lyons, On the Apostolic Preaching*, 61. J.P. Smith, *St. Irenaeus. Proof of the Apostolic Preaching*, 68. Iain M. Mackenzie, *Irenaeus's Demonstration of the Apostolic Preaching a theological commentary and translation*, 11. J.A. Robinson, *St Irenaeus, The Demonstration of the Apostolic Preaching*, London: S.P.C.K., 1920. 99.

そうすることで、実際の牧会において、どのように罪を犯した者に接するべきかを見ることが出来る。

(1). アダムとエバは蛇から「不死性」を理由に誘惑され墮罪をした。(2). 墮罪後のアダムはイチジクの葉を身につけることによって、悔い改めを神に示した⁴³⁴。(3). 神は悔い改めたアダムを憐れみ、毛皮を与えたのである。(4). 同時に、神は「罰の期間」をも彼らに与えた。この「罰の期間」が与えられた理由に注目すべきである。神が人間に「罰の期間」を与えたのは第一に「神から呪われて、全く滅んでしまうことがないため」であり、第二に「神を軽んじるようなことがないため」である。つまり、神は人間に「罰」を与えたと言うよりも、人間の回復のための期間を備えたと言えよう。(5). また神は人間の墮罪を失敗の一つとして扱い、続けて憐れみをかけ続ける。(6). 人間の側は、墮罪という失敗を通して「何が善であり、また悪であるか」を学び、さらに回復へと導かれる。それが「御子の受肉」である。御子の受肉により、人間はアダムが墮罪によって喪失した神との「類似性」を取り戻すことが可能となった。

以上のことから見えてくる牧会的適応を次のように言い換えることができる。6つの段階として記したい。(1). 何が罪を犯した信者にとって誘惑となるものであったかを的確に捉え、公の罪の告白と悔い改めに導くこと。(2). 悔い改めた信者に対して憐れみをかけ、その者が必要としているものを与えること。(3). 同時に「譴責」としての罰の期間を設けること。(4). 「罰の期間」の中で、実際に犯した罪が「失敗」であったことを伝え、その罪を通して教育へと導くこと。(5). 何が神に喜ばれる「善」であり、反対に何が「悪」であるか特に「善」を行うことへと教育する。(6). 御子の受肉によって、自分たちが完成へと至る道が開かれていることを教える。これらのプロセスを通じて、牧会者は実際に罪を犯した者を回復へと導くことが求められる。

5. まとめ

本章では、第一にエイレナイオスの司牧観を概観した。神は人間を、自立性を持つ存在として創造した。その目的は、人間が神の意志を行うこと、すなわち、善を行うことである。また、神は人間をあたかも幼児のような存在として造り、人間に神化への成長を与えた。この過程で、司牧者は信者を「使徒的権限」と「聖書」を用いて導くのである。本章

⁴³⁴ 『異端反駁』第1巻13章5節には、一人の執事の妻が魔術師に騙されて、心と体の両方に被害を受けた。その後の彼女の様子について、エイレナイオスは次のように記している。「彼女は、この魔術師から受けた汚れを泣き、また嘆き、罪を告白して時間の全てを費やした。」(AH1.13.5: *omne tempus in exomologesi consummauit, plangens et lamentans ob hanc quam passa est ab hoc mago corruptelam.*) このようにエイレナイオスは、罪の悔い改めが公になされることを主張している。

では、その過程を2つに区分した。一方は、洗礼志願者であり、他方は受洗した信者である。司牧者は洗礼志願者が「妬み、不和、不一致」を捨て去ることができるよう教育し、洗礼へと導く。そして信者には洗礼時に与えられた聖霊を保持すべく善を行うように「助言」を与える。

第二に、エイレナイオスの司牧観を踏まえつつ、エイレナイオス神学を現代の牧会に応用する新しい試みをした。牧会への応用として「信仰の受容の問題」と「実際に罪を犯した者への牧会」という2つの点を取り扱った。「信仰の受容」では、エイレナイオス神学から「弱さ」を通して「神の受容」が与えられることを確認し、「実際に罪を犯した者」へは、牧会的適応として6つの段階を考察した。

以上のように本章では、エイレナイオスの司牧観と現代への牧会への応用を試みた。その結果として、2世紀を生き、司牧をしたエイレナイオスの司牧観は現代の牧会者が洗礼志願者、信者を導くことに適応ができ、さらに、エイレナイオス神学は、決して過去のものではなく、現代の牧会における「牧会上の問題」の解決にも十分適応できることを明確に示すことができた。

結論

本論文では、2世紀の教父エイレナイオスを考察対象に据え、「エイレナイオスにおける神と人間の理解（第1部）」と「エイレナイオスの聖霊神学と牧会への応用（第2部）」の2部に分けて論じてきた。結論では、本研究において得られた知見と今後の研究課題をまとめたい。

第1部である「エイレナイオスにおける神と人間の理解」では、「神の両手」の思想、「人間の成長」、「神化」、「不滅性の回復」について論じた。これらを考察し、明確になった事柄について、以下にまとめる。

エイレナイオスにおける「神の両手」の思想は、彼独自の思想ではなく、源流はアンテイオケアのテオフィロスであると考えられる。本論文中でも述べたように、エイレナイオスはテオフィロスから受けた「神の両手」のモチーフに加えて『ソロモンの知恵』から「知恵」が「聖霊」であるという概念を得た。さらにエイレナイオスはテオフォロスが『アウトリュコス』第1章7節に引いた詩編33篇6節と、『アウトリュコス』第2章10節において「万物の創造」のために引用した3つの箴言の箇所を『異端反駁』4巻20章3節に引用し、「御父と永遠から共にいる知恵としての聖霊」という別の解釈をし、「知恵」を「聖霊」とする置き換えを行った。

エイレナイオスがこの置き換えをした目的として、グノーシス主義における「肉の軽視」の問題がある。グノーシス主義における人間の創造は、神の「かたち」に基づいて「物質的な人」が造られたとし、一方、神との「類似性」に基づいて、「心魂的な人」が造られたとした。これに対しエイレナイオスは、人間は「肉」と「魂」そして「霊」が備えられることによって「完全な人」となると主張する(AH5.6.1)。エイレナイオスは、グノーシス主義が「かたち」と「類似性」の2種類の人間が存在すると主張したことに反論を加えるべく、神の両手としての御子が「かたち」を、また、聖霊が「類似性」を与えたことを主張する。

また「神の両手」の思想を主張することで、グノーシス主義が考える「別の神」(AH3.19.3)の存在を否定する。さらに、父なる神と「神の両手」である御子と聖霊が、人間を創造したと語ることによって、創造は父なる神によるものであり、他の何かの助けを必要とした訳ではないことが強調されており、「神の優位性」が保持されている。

次いで、人間の成長と神化の思想であるが、これにはエイレナイオスの神観が深く関係している。まずエイレナイオスは神を「善き神」(bonus Deus)と呼ぶ。その神の特質として、「寛大さ」(magnanimitas)、「好意」(benignitas)、「助言」(consilium)を上げることができる。神はこれらの特質を持って、「自立性」を与えられた人間を成長へと導く。そ

の過程において、神は強制することなく、幼児のような状態として造られた人間自ら、何が「善」であり、また「悪」であるかを学びつつ、神に服従する道を選び、聖霊を受けることができるように成長することが求められる。その際、神は人間の成長を「寛大に」

(*magnanimitas*) 見守り、「好意」(*benignitas*) を持って善を与え、人間が神に従うことができるよう「助言」(*consilium*) を与えるのである。そして「神の両手」である御子と聖霊も、不断に人間の成長を見守るのである。

また人間の成長には、「神となる」(*dii facti sumus*) という神化の観点もある。人間は神の「かたち」と「類似性」に従って創造されたことにより、「神の子ら」としての本性が与えられた。それゆえ、人間は神に向かって神化の道を進むことが可能であった。けれども、あたかも幼児の状態として創造された人間は、墮罪し (AH4.38.1)、これにより人間は神との「類似性」を喪失するのである (AH5.16.2)。興味深いことは、エイレナイオスが「墮罪」を「教育」として捉えていることである。神が「墮罪」を通して人間に教育した内容とは、第1に、神に対して高慢にならないためであり (AH3.20.1)、第2に、死すべき存在である人間に、永遠の生命を与える神の偉大さを教えるためであった (AH3.20.2)。その一方で、人間が完全な神化へと至るためには、喪失した神との「類似性」を再び得なければならない。エイレナイオスは、御子の受肉を人間に再び「類似性」を与える出来事と捉えている (AH3.18.1)。人間は、受肉した御子を「見ること」で、自らが神のかたちに従って造られた存在であることを思い出すのである (AH5.16.2)。なぜなら、幼児の状態であった人間は、御言葉である御子を見ることができなかつたために、「類似性」を喪失したというのが、エイレナイオスの考える墮罪の理由であるからである (AH5.16.2)。そして、教会の時代にあつて、人間は神の養子とされ (AH3.6.1)、「不死性の保証」である聖霊を受ける (AH5.8.1)。この神化の過程は、御国に至り完成を迎える。それは、父なる神を「見ること」によって成し遂げられる (AH4.20.5)。

また不滅性の回復は、神と人間との「結合」と「一致」の必要がある。まず、御言葉の受肉によって、人間が御子と「結合」(*commixtus*) することで回復への道が与えられる (AH3.19.1、AH4.20.4)。この際、エイレナイオスの記す「形成物」(*plasma*) とは何か問題となる。そのため、『異端反駁』の以下の箇所を考察した。すなわち第4巻序4節、第4巻20章1節、第5巻1章3節、第5巻5章1節、第5巻6章1節、第5巻28章4節である。その結果、まずエイレナイオスが「形成物」(*plasma*) を指して語る場合、それは人間の「肉体」を指していると考えられる。けれども『異端反駁』第3巻17章1節には「完全な人とは、父の霊を受け取る魂と、神のかたちに従って作られた肉体」とあり、また『異端反駁』第3巻17章2節には、「私たちの身体は、〔洗礼の〕洗いによって、魂は霊によって、不滅性にまで至らせる一致を受けたのである」と記されているように、聖霊を

受けるのは「肉体」ではなく「魂」においてであることが分かる。

第2部である「エイレナイオスの聖霊神学と牧会への応用」では、まずエイレナイオスが、どのように聖霊の人間への臨在を考えていたのかを明らかにした。先行研究には「聖霊は信者にのみ臨在する」と「聖霊は全人類に臨在する」という二つの立場がある。これらの研究も踏まえ、筆者はエイレナイオスにおける「救済史」に基づき、人間創造、旧約の時代、御子の受肉、教会の時代に四区分し、エイレナイオスの聖霊理解を出来る限り簡潔に順序立て、エイレナイオスがどのように「人間への聖霊の臨在」を捉えていたかを構築した。結論として、聖霊は人間創造から旧約の時代にかけては「全人類」の側に「神の両手」として臨在していた。それが「終わりの時」である「御子の受肉」が転機となり、「神の両手」の片方である御子が「肉」を取り、もう片方である聖霊は、御子の「肉」のうちに内在する。それにより、「肉」は聖霊を内在させることに、また聖霊も「肉」のうちに内在することに慣れるのである。御子の受肉以降、聖霊の臨在は、人間への内在という仕方に変わる。そして、続く教会の時代において、その御子を通して示された神を「信じる者」つまり「信者」のうちに「宿る」(内在) ことになった。つまり、エイレナイオスが示す「聖霊の人間への臨在」ということの意味は、人間創造から旧約の時代にかけては「全人類に」臨在するということであり、「御子の受肉」以後から教会の時代においては「信者のみ」に宿る、すなわち内在するということであることが明らかになった。

続く、人間の内側から「助言」を与える聖霊の内在では、創造、旧約の時代、御子の受肉、教会の時代の順に、聖霊の働きを明らかにした。創造と旧約の時代においては、人間創造の時に共に存在した「神の両手」の働き、また預言者を通してという人間の外側からの聖霊の働きが主流であった。それに比べて、御子の受肉において重要なことは、イエスの受肉時と洗礼時に関連するエイレナイオスの記述には、どちらにも同様にイザヤ書 11 章 2 節からの引用がある点である。そして、その引用には「助言の霊」との言及があり、イエスが「助言を与える者」であったことが示されている。人々には御子の口を通して、「助言」が与えられた。教会の時代においても、人の洗礼時に与えられる聖霊はイザヤ書が伝えた「助言の聖霊」である。つまり人々には、イエスに注がれたのと同じ聖霊を受けることで、御子の口を通して語られていた「助言」を、自らに内在した聖霊を通して、内側から助言が与えられるということが明らかになるのである。

また、聖霊の内在は「父の意志」を行わせ、「分裂」、「不和」を引き起こす人々に「一致」を与える。パウロが語る「古い」人間 (AH3.20.3) は、善を行うことができない。むしろ、「肉的」な歩みをしている者たちの間には、「妬み」、「不和」、「不一致」がある (AH4.38.2)。聖霊が人間に内在していなければ人間は善を行うことはできない。

それでは聖霊を受けた者が、『異端反駁』第3巻 17 章 1 節に記されている「父の意志」

を行うとは一体どのようなことであろうか。「父の意志」とは「神へと生まれ変わらせる権限」を持つキリストの弟子たちが、人類に洗礼を授けていくことに他ならない。また聖霊を受けて「父の意志」を行うことは、神に従順なものとして生きることでもある。このことと『証明』第3章と『証明』第7章を合わせ読むと、洗礼は「神へと生まれ変わらせること」から「子とされること」まで発展していると考えられる。聖霊を受けた人間は、「肉」ににいるのではなく「霊」のうちにある。そのあり方は、「肉」と「霊」が一致することにより (AH5.9.1)、人間は霊のうちにある者とされる。人間は「肉的」な存在から「霊的」な存在となり (AH5.6.1)、父なる神を「アバ、父よ」と呼ぶことができるようになる (AH5.8.1)。『異端反駁』第3巻17章2節では、聖霊を受けた者たちの一致が語られている。聖霊の内在は、弟子たちに調和の一致を与え、分離した諸部族を一致させ、洗礼によってキリストと一致させる。また、サマリヤの女性に「生ける水」が与えられ、「この飲み物」が「聖霊」と記されている。また「永遠の生命にほとぼしる飲み物を自らの内に持つようになった」と記されている。つまり、聖霊の内在を受けた者は、「不滅性」を与えられたのである。

本論文の最終章では、司牧者として生きたエイレナイオスの神学を今日の牧会にどのように応用できるかを検討する新しい試みをした。この試みの土台には、エイレナイオスの救済史の区分がある。救済史を、創造、旧約の時代、御子の受肉、そして教会の時代と区分したとき、エイレナイオスが生きた2世紀も、今日の時代も、この救済史の区分を当てはめるならば、ともに教会の時代となるからである。そこで、教会の時代におけるエイレナイオスの司牧を考察し、次いで、現代の牧会への応用を試みた。エイレナイオスの司牧を考察するにあたり、洗礼を基軸として、洗礼志願者が洗礼を受けるまでの期間と洗礼を受けた信者の歩みの期間に区分し考察した。

その考察をするにあたり、まず教会の時代におけるエイレナイオスの司牧を記した。人間は神から自立性を与えられ、善をおこなうことを求められたが (AH4.37.1)、あたかも幼児の状態として造られた人間は、自らに与えられた自立性だけでは善を行うことができなかった。司牧者こそ、自立性を有する人間に「何が善であるか」を教える立場と言える。司牧者は「使徒的権限」 (AH3.prae, AH3.3.2, AH3.3.3) と「聖書」 (AH3.1.1) を用いて人々を導く。エイレナイオスは旧約聖書 (AH3.21.4) においても、もまた福音書 (AH3.11.8) においても「一つの霊」の働きがあったことを強調している。

洗礼志願者への司牧であるが、志願者は聖霊が働く教会 (AH3.24.1) で司牧を受ける。その際、司牧者は「妬み」、「不和」、「不一致」がなくなるように司牧する。なぜなら、「妬み」、「不和」、「不一致」があるならば、その者は「肉的」であり、聖霊を受けることができないからである (AH4.38.2)。洗礼志願者は聖書と教会に働く聖霊の働きによ

って洗礼へと導かれる。

洗礼を受けた信者には、聖霊が内在し、内側から善を行うための助言を与える。けれども、信者は「不死性の保証」と呼ばれる聖霊の一部が与えられたにすぎず (AH3.24.1)、まだ神化への成長過程にある (AH5.8.1)。ここに司牧者の必要性がある。洗礼志願者は、聖書と教会に働く聖霊の働きを受け、信者は、内在した聖霊と司牧者による聖書の言葉による励ましを受ける。洗礼志願者は、洗礼を受けていないため、聖霊を内在させてはいない。けれども、洗礼志願者は聖霊の働きに全く与っていないということではなく、教会と聖書に働く聖霊の働きに与っている。信者は、内在の聖霊からの働きを受け、また、洗礼志願者と同様に聖書を通して、聖霊の働きに与るのである。つまり、洗礼を受ける前も、そして後も、神の両手である「御言葉」と「聖霊」は共に司牧に参与しているのである。聖霊の内在を受けた信者は、なぜ司牧を受ける必要があるのかと問うならば、その答えは「聖霊を保持するため」である (AH4.37.4、AH5.9.3、『証明』42)。聖霊の保持のために、信者は「善」を行うことを求められる (AH4.20.4)。

次いで、現代の牧会への応用であるが、エイレナイオス神学を応用するに当たり、(1) 信仰の受容の問題について。すなわち、罪意識や自分の信仰は弱く神に受け入れられないと思ひ悩む者に対してどのように牧会するか、また (2) 実際に罪を犯した者をどのように牧会するかの2点とした。

エイレナイオス神学から抽出した要点は以下のとおりである。自分の信仰について悩む者、罪意識に苛まれている者は「神の寛大さ」(magnanimitas)のゆえに「受容」される (AH4.39.1)。自立性を与えられた人間は、信仰の成長が求められていた (AH3.20.2)。その成長過程で重要なことは「自分が死すべき、弱い者」であることを知ることがある (AH3.20.2)。墮罪をした際の人間は「誘惑され」、「恐れ」、「隠れ」、「恥ずかしく思った」 (AH3.23.5)。また神を「見[ようとし]ない人々」であり、「不安にかられていた人々」である (AH4.14.2)。人間はこれらの弱さを知ること、「神の寛大さ」(magnanimitas)を知るに至る。すなわち、自分を知り、神を知る。ここに信仰の受容が行われる。また神は「神を見えるもの」として示した (AH4.20.7)。それは、人間が弱さを通るような時でさえ、「存在をやめてしまうことのないため」である (AH4.20.7)。

次いで、罪を犯した者への牧会の考察のため、アダムとエバの墮罪を見た。「不死性」に至るよう創造された人間は (AH4.38.4)、蛇から「不死性」を与えるとの誘惑に会い、墮罪した (AH3.23.1、AH3.23.5)。人間は墮罪により、神との「類似性」を喪失した。アダムは墮罪後に「罪の自覚」が生じ、悔い改めへと進んだ (AH3.23.5)。また神はエバの告訴を蛇に移すため、墮罪の理由を尋ね、彼らには憐れみを与えた (AH3.23.5)。

神は人間に憐れみを与えた一方、「罰の期間」を与えた (AH3.23.1)。けれども、この

期間を全うするのは人間ではなく、御子が受肉によって終わらせたと考えることができる (AH3.23.7)。さらに、この「罰の期間」とは、人間が成長するための「譴責」の意味が強いと考えることができる。なぜなら、「罰の期間」が与えられた目的が、第一に、神から呪われて、全く滅んでしまうことがないためであり、第二に、神を軽んじるようなことがないためと記されているからである (AH3.23.3)。そのため、この期間は神が人間を教育する期間でもあった (AH3.23.1、AH4.37.7)。その教育とは、神は人間の墮罪も失敗の一つと捉え、神の憐れみを示し (AH4.40.3)、何が善であるか、また何が悪であるかの二重の知覚を与えたのである (AH4.39.1)。この神の教育は、御子の受肉によって新たな発展へと進む。最初に創造された人間は、神のかたちと神との類似性に従って造られた存在であった (AH5.28.4)。人間は、創造された段階で、完全な神のかたちと類似性を有していたわけではなかった。人間は成長し、善と悪の知識を得て、完全に神のかたちと類似性を得なければならなかった (AH4.38.4) が、墮罪し、神との類似性を喪失した (AH5.16.2)。これにより、人間は「不死性」を喪失し、一時的な生命のみを持つ存在となったのである (AH5.12.2)。このような状態の人間に御子の受肉がもたらしたのは、不可視であった御子が人々に現れることにより、神のかたちを明らかにし、人間に神との類似性を回復させたのである (AH5.16.2)。これこそ人間に与えられた救いに他ならない (AH3.18.2)。御子の受肉により、人間は自らが神のかたちに従って創造されたことを思い出し、御子の受肉以後も成長を続けるが、旧約の時代までに与えられた「譴責」による「罰の期間」の中での成長ではなく、御子の受肉以後は、人間は新たに再出発することができるのである (『証明』32)。つまり、御子は人間を「今一度完成させる」ために受肉したと結論づけることができるのである。

本論文中にも記したが、牧会者がその牧会において罪を犯した者を回復へと導くための6つの段階を確認のため記したい。(1). 何が罪を犯した信者にとって誘惑となるものであったかを的確に捉え、公の罪の告白と悔い改めに導くこと。(2). 悔い改めた信者に対して憐れみをかけ、その者が必要としているものを与えること。(3). 同時に「譴責」としての罰の期間を設けること。(4). 「罰の期間」の中で、実際に犯した罪が「失敗」であったことを伝え、その罪を通して教育へと導くこと。(5). 何が神に喜ばれる「善」であり、反対に何が「悪」であるかを論じ、特に「善」を行うことへと教育する。(6). 御子の受肉によって、自分たちが完成へと至る道が開かれていることを教える。これらのプロセスを通じて、牧会者は実際に罪を犯した者を回復へと導くことが求められる。

以上のように、エイレナイオスの描く神観は、「善き神」(bonus Deus) である。自立性を与えられ神化を辿る人間は、墮罪の「失敗」を犯した。けれども、神は「寛大さ」(magnanimitas)、「好意」(benignitas)、「助言」(consilium) を人間に与え、人間の成

長を支える。墮罪をした人間に「罰の期間」を与えたが、この期間は単なる「罰」ではなく、むしろ、人間が減ぶこと、神を軽んじることがないように憐れみと共に与えられた教育の期間であった。また、こればかりでなく、「神の両手」である「御子」と「聖霊」も不断に人間の成長を見守る。さらに御子の受肉によって、人間が「肉」の内に聖霊を内在することが可能になり、人間は内側からの「助言」を受け、人間はさらなる成長へと再出発する。その成長の過程において、「保証」である聖霊を受けた者は、「肉的」と言われる「妬み」、「不和」、「不一致」から、「霊的」な「一致」へと向かう。そして人間はいずれ「神を見て」、「肉体」と「魂」と「聖霊」から成る完全な人間へと導かれるのである。

この考察を通して見えたことは、確かに『異端反駁』は、グノーシス主義反駁のために著された書物であるが、その記述の中に、人間を愛し、大切に扱う「父なる神」と、その神と共に働く「神の両手」としての「御子」と「聖霊」の姿があることである。本論文で取り扱った一つの事柄をあげるならば、父なる神も人間に「助言」(consilium)を与え、旧約の時代では、預言者を通して人間に「助言」を与えた。御子もまた「不思議な助言者」であり、聖霊もまた「助言の霊」として、人間の成長を支えるのである。このように見ると、父なる神と「神の両手」として表されていた三位一体の神の働きが、人間を愛し、大切に扱うことの中にも表れているとすることができるであろう。また、三位一体の神が、人間を支えることを語るエイレナイオス神学は、司牧者であったエイレナイオスの「司牧観」にも影響を与えたと言えるのではないだろうか。そこで、本論文においては、エイレナイオス神学の今日の牧会への応用として(1)信仰の受容の問題について。すなわち、罪意識や自分の信仰は弱く神に受け入れられないと思悩む者に対して(2)実際に罪を犯した者をどのように牧会するかという2つの事柄を取り扱うことを試みたが、さらに様々な牧会的な事柄にエイレナイオスの神学を応用させることを、今後の課題としたい。

参考文献

1.1 テキスト

エイレナイオス

Rousseau, A. and Doutreleau, L. *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre I*, SC 263-4 (Paris: Cerf, 1979).

Rousseau, A. and Doutreleau, L. *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre □*, SC 293-4 (Paris: Cerf, 1982).

Rousseau, A. and Doutreleau, L. *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre □*, SC 210-11 (Paris: Cerf, 1974).

Rousseau, A., Hemmerdinger, B., Doutreleau, L. and Mercier, C., *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre □*, SC 100, 2 vols. (Paris: Cerf, 1965).

Rousseau, A., Hemmerdinger, B., Doutreleau, L. and Mercier, C., *Irénée de Lyon: Contre les hérésies, Livre □*, SC 152-3 (Paris: Cerf, 1969).

テオフィロス

Theophilus Antiochenus Episcopus, *Ad Autolycum*, □, 18 (Migne : PG 6).

マリウス・メルカトール

Marius Mercator, *Commonitorium Super Nomine Caelestii* (ACO I /5, 65-70).

1.2 テキスト (英訳)

Saint Irenaeus of Lyons, *Against Heresies*, The complete English translation from the First Volume of The Ante Nicene Fathers, edited by Alexander Roberts, D.D. & James Donaldson, LL.D. and with occasional notes by A. Cleveland Coxe, D.D., Ex Fontibus Co, 2010.

St. Irenaeus of Lyons, *Against the Heresies Book I*, Dominic J. Unger and John J. Dillon (eds.), ACW., 55, New York, 1992.

St Irenaeus, *The Demonstration of the Apostolic Preaching*, tr. J.A. Robinson, London: S.P.C.K., 1920.

St Irenaeus of Lyons, *On the Apostolic Preaching*, tr. John Behr, New York: St. Vladimir's seminary Press, 1997.

Mackenzie, Iain M., *Irenaeus's Demonstration of the Apostolic Preaching a theological commentary and translation*, Ashgate Publishing Company, 2002.

St. Irenaeus. *Proof of the Apostolic Preaching*, ACW 16 tr. & nt. J.P. Smith, New York: Newman Press, 1952.

1.3 テキスト (邦語)

『「異端反駁」第3巻』小林稔訳、『キリスト教教父著作集3/I』(教文館、1999年)。

『「異端反駁」第4巻』小林稔訳、『キリスト教教父著作集3/II』(教文館、2000年)。

『使徒たちの使信の説明』小林稔／小林玲子訳『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』(平凡社、1995年)。

1.4 辞書

A Latin Dictionary, Founded on Andrews' Editon of Freund's Latin Dictionary, Revised, Enlarged, and in Great Part Rewritten by Charlton T. Lewis, and Charles Short, Oxford at the Clarendon Press, 1956.

R. Laird Harris, Editor, Gleason L. Archer, Jr., Associate Editor, Bruce K. Waltke, Associate Editor, *Theological Wordbook of the Old Testament Volume 2*, Moody Press, Chicago, 1981.

The New International Dictionary of New Testament Theology, Zondervan, 1967.

Theological Dictionary of the Old Testamant vol.III, Edited by G. Johannes Botterweck and Helmer Ringgren, Translators: John T. Willis and Geoffrey W. Bromiley, David E. Green, 1975.

2.1 参考文献 (欧文)

Behr, John, *Irenaeus of Lyons Identifying Christianity*, Oxford University Press, 2013.

Behr, John, *Asceticism and Anthropology in Irenaeus and Clement*, Oxford University Press, 2000

Blackwell, Ben C., *Christosis : Pauline Soteriology in Light of Deification in Irenaeus and Cyril of Alexandria*, Mohr Siebeck, 2011.

Briggman, Anthony, *The Holy Spirit as the Unction of Christ in Irenaeus*, Jarnal of Theological Studies, NS, Vol. 61, Pt 1, April 2010.

Briggman, Anthony, *Irenaeus of Lyons and the Theology of the Holy Spirit*, Oxford University Press, 2012.

Bounds, Christopher T., “ *Competing Doctrines of Perfection: The Primary Issue in Irenaeus' Refutation of Gnosticism* ” , Studia Patristica XLV, 2010.

Carl, Mosser, “ *The Earliest Patraistic Interpretations of Psalm 82, Jewish Antecedents, and the Origin of Christian Deification* ” , Journal of Theological Studies, 2005.

Daniélou, J., *A History of early Christian doctrine before the Council of Nicaea, vol.2: Gospel message and Hellenistic culture*, London/Philadelphia 1973.

G.M. Purves, James, *The Spirit and the Imago Dei : Reviewing the Anthropology of*

- Irenaeus of Lyons*, The Evangelical Quarterly 68, 1996.
- Hitchcock, Montgomery, *Irenaeus of Lugdunum, : A study of his teaching*, Cambridge : at the University Press, 1914.
- Houssiau, Albert, *La Christologie de Saint Irénée*, Universitas Catholica Lovaniensis Dissertationes, 3. I ; Louvain: Publications Universitaires; Gembloux: J. Duculot, 1955.
- Joppich, Godehard, *Salus Carnis: eine Untersuchung in der Theologie des hl. Irenaus von Lyon*, Munsterschwarzacher Studien, 1, Munsterschwarzach: Vier-Turme-Verlag, 1965.
- Klebba, Ernst , *Die Anthropologie des hl. Irenaeus, eine dogmengeschichtliche Studie*, Munster i. W. 1894.
- Lashier, Jackson, *Irenaeus on the Trinity*, Supplement to Vigiliae Christianae Volume 127, Brill Leiden Boston, 2014.
- Lawson, John, *The Biblical Theology of Saint Irenaeus*, London: Epworth Press, 1948.
- McDonnell, Kilian, *The Baptism of Jesus in the Jordan : The Trinitarian and Cosmic Order of Salvation* (Collegeville, MN : Liturgical Press, 1996.
- Minns, Denis, *Irenaeus An Introduction*, T&T clark, 2010.
- Orbe, Antonio, *La unción del Verbo* (Estudios Valentinianos, 3; Analecta Gregoriana, 113; Roma: Libreria editrice dell' Università Gregoriana, 1961).
- Osborn, Eric, *Irenaeus of Lyons*, Cambridge, 2001.
- Phillip Schaff, *The Ante-Nicene Fathers Volume 2*, translation of The Rev. Alexander Roberts, D.D., and James Donaldson, LL.D., editors, 1988.
- Purves, James G. M., “ *The Spirit and the Imago Dei : Reviewing the Anthropology of Irenaeus of Lyons*” , The Evangelical Quarterly 68, 1996.
- Quasten, Johannes, *Patrology*. vol. I , Utrecht: Spectrum; Westminster, MD: Newman Press, 1950.
- Robinson, J. Armitage, *Note on the Armenian Version of Irenaeus ADV. HAERESSES IV, V*, Journal of Theological Studies 32, 1932.
- Russell, Norman, *The Doctrine of Deification in the Greek Patristic Tradition*, Oxford, 2004.
- Smith, Daniel A. , *Irenaeus and the Baptism of Jesus*, Theological Studies, 1997.
- Tiessen, Terrance L., *Irenaeus on the Salvation of the Unevangelized*, The Scarecrow Press, 1993.
- Wingren, Gustaf, *Man and the Incarnation. A Study in the Biblical Theology of Irenaeus* (translated by Ross Mackenzie), Wipf and Stock Publishers, 1959.

William J. Deane, *The Book of Wisdom the Greek text, the Latin Vulgate and the Authorised English Version with an Introduction, Critical Apparatus and a Commentary*, 1881.

2.2 参考文献（邦語）

- 荒井献・大貫隆・小林稔訳『ナグ・ハマディ文書 I 救済神話』（岩波書店、1997年）。
- 荒井献[編]『使徒教父文書』（講談社文芸文庫、1998年）。
- アンティオケアのテオフィロス『アウトリュコスに送る』今井和正訳、『中世思想原典集成 1 初期ギリシア教父』（平凡社、1995年）。
- ウィルケン, R. ルイス『古代キリスト教思想の精神』（教文館、2014年）。
- エウセビオス『教会史（上）』秦剛平訳、（講談社学術文庫、2010年）。
- 大貫隆『ロゴスとソフィア ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』（教文館、2001年）。
- 大貫隆『グノーシスの神話』（講談社学術文庫、2014年）。
- 大庭貴宣「アウグスティヌスのペラギウス主義反駁説教——説教 294 と 348A の翻訳と注解——」『南山神学別冊（第 27 号）』、2012 年、147-199 頁。
- カンペンハウゼン『古代キリスト教思想家ギリシア教父』三小田敏雄訳（新教出版社、1963年）。
- 工藤信夫『牧会者と心の援助 牧会事例研究』（いのちのことば社、1993年）。
- ケリー, J.N.D.『初期キリスト教教理史<上>使徒教父からニカイア公会議まで』津田謙治（一麦出版社、2010年）。
- 小高毅編『原典 古代キリスト教思想史-1 初期キリスト教思想家-』（教文館、1999年）。
- コンガール・イヴ『わたしは聖霊を信じる第三巻』小高毅訳（サンパウロ、1996年）。
- ゴンザレス、フスト『キリスト教思想史 I キリスト教の成立からカルケドン公会議まで』石田学訳（新教出版社、2010年）。
- 佐久間勤編著『神の知恵と信仰——現代に生きる信仰者のための視点——』（サンパウロ、2005年）。
- 塩谷惇子「エイレナイオスにおける人間の創造」『清泉女子大学人文科学研究so紀要』、1987年、37-53頁。
- 塩屋惇子「エイレナイオスにおける人間の創造（その二）」『清泉女子大学人文科学研究so紀要』、1988年、123-140頁。
- 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承 B・ボットの批判版による初訳』土屋吉正訳（オリエンス宗教研so所、1983年）。

園部不二夫「イレネウス研究」園部不二夫記念事業委員会編集『園部不二夫著作集第三巻
初代教会史論考』（キリスト新聞社、1980年）。

デンツィンガー・H『カトリック教会文書資料集』（エンデルレ書店、1974年）。

鳥巢義文「アナケファライオーシス——エイレナイオスの救済論における意味検討——」『南
山神学』第6号（1983年）、63-104頁。

鳥巢義文「神の救済史的啓示 —エイレナイオス『使徒的宣教の証明』を中心にして—」『南
山神学』第23号（1999年）79-112頁。

鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』（南山大学教材版、2004年）。

津田謙治『マルキオン思想の多元論的構造—プトレマイオスおよびヌメニオスの思想との比較
において』（一麦出版社、2013年）。

ブルトマン、ルドルフ『新約聖書神学 I』川端純四郎訳（新教出版社、1963年）。

ブロックス、N.『古代教会史』関川泰寛訳（教文館、1999年）。

マクニール、J. T.、『キリスト教教会の歴史』吉田信夫訳（日本基督教団出版局、1987年）。

マルクス、H.J.「われらを悪より救い給え—東方神学から見直された原罪論—（その2）」『ア
カデミア（第36号）』、（1982年）、1-29頁。

マルクス、ハンス ユーゲン・「悪魔の権限——アウグスティヌスの贖罪論の一側面——」『南
山神学（第29号）』、2006年、1-43頁。

ネメシエギ、ペトロ「教父時代の Pneumatologia の代表的一例としてのエイレナイオスの聖
霊論」『日本の神学（24）』（1985年）、128-137頁。

ロースキィ、V.『キリスト教東方の神秘思想』宮本久雄訳（勁草書房、1986年）。